千葉県文化財センター調査報告第267集

佐倉市六拾部遺跡

―佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ―

平成6年10月

千葉県土地開発公社

財団法人 千葉県文化財センター

佐倉市六拾部遺跡

ろく じゅう ぶ

―佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ―

平成6年10月

千葉県土地開発公社

財団法人 千葉県文化財センター

序　　文

千葉県北部に位置する佐倉市は、市の北側にある印旛沼とそこに流れ込む鹿島川やその支流の高崎川などの河川がもたらした豊かな水と肥沃な土地に恵まれて、古くから人々の生活が営まれ、旧石器時代から歴史時代に至る数多くの遺跡が知られています。

一方、現在の佐倉市は新東京国際空港に近く、また東関東自動車道などをはじめとする道路網の整備により、首都東京や臨海工業地帯との交通アクセスが良いなどの地理的・経済的な好条件を備えております。このため、千葉県が推進してまいりました内陸工業団地建設計画に基づき、すでに完成している第一・第二工業団地に続いて、千葉県土地開発公社によって第三工業団地の建設が計画されました。工事に先立って事業予定地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、千葉県教育委員会と千葉県土地開発公社、佐倉市教育委員会等関係諸機関との間で慎重に協議を重ねた結果、古墳と一部の遺跡については公園、緑地等として現状のまま保存されることとなりましたが、事業計画上変更できない箇所については発掘調査を実施して記録保存の措置を講ずることになりました。発掘調査は受託契約に基づいて当文化財センターが担当し、昭和50年度と昭和54年度から昭和60年度にかけて実施いたしました。

このたび、昭和59年度に発掘調査を実施した六拾部遺跡の整理作業が終了し、報告書を刊行する運びとなりました。六拾部遺跡は奈良時代から平安時代に至る集落を中心とする遺跡で、竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの遺構が発見され、「白井寺」と墨で書かれた土器や焼き物の塔（瓦塔）などの古代仏教に関係した遺物も出土しています。これらはすでに報告書が刊行されている近接の腰巻遺跡や南広遺跡などとともに、当時の人々の生活や集落の変遷、及び当地域における仏教思想の受容のあり方などを知る上で貴重な資料といえましょう。本書が学術資料としてはもとより文化財の保護と理解のために広く活用されることを願って止みません。

終わりに千葉県教育委員会、千葉県土地開発公社、佐倉市教育委員会をはじめとする関係諸機関の皆様の御指導と御協力に厚く御礼申し上げるとともに、発掘調査から本書の刊行に至るまで御協力をいただいた調査補助員の皆様に心から感謝いたします。

平成 6 年10月

（財）千葉県文化財センター
理事長　奥　山　　浩

凡　　例

1．本書は千葉県佐倉市大作（おおさく）2丁目（旧地番佐倉市宮本（みやもと）字六拾部（ろくじゅうぶ）26番地ほか）に所在する六拾部遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は佐倉第三工業団地建設に先立ち、千葉県土地開発公社の委託を受けて千葉県教育委員会の指導のもとに財団法人千葉県文化財センターが実施した。本調査面積は10,700㎡である。

3．調査で使用した遺跡のコード番号は212-022である。

4．現地の調査は昭和59（1984）年度に実施した。調査の期間は昭和59（1984）年10月1日～昭和60（1985）年3月31日である。調査組織及び担当職員は下記のとおりである。

組織　　調査部長　鈴木道之助、部長補佐　岡川宏道

担当職員　班長　矢戸三男

調査研究員　田村　隆、蔀　淳一

5．整理作業は昭和62（1987）年度、平成2（1990）年度、平成4（1992）年度の3年次にわたって下記の組織及び担当職員で実施した。

平成2年度　組織　　調査部長　堀部昭夫、部長補佐　阪田正一、班長　谷　旬

担当職員　主任技師　山口典子

平成4年度　組織　　調査部長　天野　努、部長補佐　佐久間豊、班長　上野純司

担当職員　主任技師　森本和男、金丸　誠、山口典子、萩原恭一

技師　四柳　隆

6．執筆作業の分担は第2章第1節・第4節1を四柳が、それ以外を金丸が担当した。

7．土器容量の計測、算出方法については、小川貴司氏に御教示をいただき、森本和男がソフトを作成し、エリアラインメーターとパソコンを用いて実測図から計測した。

8．瓦塔や集落における仏教思想の受容のあり方などについては、国士館大学講師須田勉氏に御指導・御教示をいただいた。

9．墨書土器の解読にあたり、国立歴史民俗博物館教授平川南氏に御指導・御教示をいただいた。

10．第1図で使用した地形図は国土地理院発行の50,000分の1地形図「佐倉」「成田」「千葉」である。

11．発掘調査から本書の作成にいたるまで、千葉県土地開発公社、千葉県教育庁生涯学習部文化課、佐倉市教育委員会の関係各位をはじめ多くの方々の御指導と御協力をいただき、深く感謝の意を表したい。

目　　次

序　文

凡　例

第１章　序　章……1

　第１節　調査にいたる経緯と経過……1

　第２節　遺跡の位置と環境……1

　第３節　調査および整理方法……7

　第４節　遺跡の概要……10

第２章　遺構と遺物……11

　第１節　縄文時代……11

　第２節　歴史時代……13

　　１．竪穴住居跡……13

　　２．掘立柱建物跡……125

　　３．土坑……133

　　４．土器集中地点……136

　第３節　そのほかの遺構……141

　第４節　遺構外出土の遺物……143

　　１．縄文時代……143

　　２．歴史時代……164

第３章　調査成果のまとめ……167

　第１節　歴史時代の出土遺物の検討……167

　第２節　集落の変遷……181

報告書抄録……212

挿 図 目 次

第 1 図　六拾部遺跡の位置とその周辺の遺跡 …… 2
第 2 図　六拾部遺跡周辺の地形および遺構配置図 …… 5
第 3 図　凡例 …… 7
第 4 図　遺跡調査範囲・グリッド呼称・トレンチ配置図 …… 8
第 5 図　六拾部遺跡周辺の地形及び遺構配置図 …… 9
第 6 図　竪穴住居跡033 …… 11
第 7 図　土坑044及び出土遺物 …… 12
第 8 図　竪穴住居跡002・003・004 …… 14
第 9 図　竪穴住居跡005・006 …… 16
第 10 図　竪穴住居跡007 …… 17
第 11 図　竪穴住居跡008・009 …… 19
第 12 図　竪穴住居跡010 …… 21
第 13 図　竪穴住居跡011・012 …… 23
第 14 図　竪穴住居跡013 …… 24
第 15 図　竪穴住居跡014 …… 25
第 16 図　竪穴住居跡015 …… 27
第 17 図　竪穴住居跡016・017 …… 28
第 18 図　竪穴住居跡018 …… 29
第 19 図　竪穴住居跡019・020 …… 31
第 20 図　竪穴住居跡021 …… 33
第 21 図　竪穴住居跡022 …… 34
第 22 図　竪穴住居跡023・024 …… 36
第 23 図　竪穴住居跡025・026 …… 37
第 24 図　竪穴住居跡027 …… 39
第 25 図　竪穴住居跡028 …… 40
第 26 図　竪穴住居跡029・030 …… 42
第 27 図　竪穴住居跡031A・031B …… 44
第 28 図　竪穴住居跡031B遺物出土状況 …… 45
第 29 図　竪穴住居跡032・034・036・037 …… 47
第 30 図　竪穴住居跡038・039 …… 50

第 31 図　竪穴住居跡040・041 ……52
第 32 図　竪穴住居跡045・048A・048B ……54
第 33 図　竪穴住居跡049・057 ……56
第 34 図　竪穴住居跡062・064 ……58
第 35 図　竪穴住居跡065・069 ……59
第 36 図　竪穴住居跡070・071 ……61
第 37 図　竪穴住居跡072・073 ……63
第 38 図　竪穴住居跡099A・099B ……65
第 39 図　竪穴住居跡002・003・004出土遺物……68
第 40 図　竪穴住居跡005・006・007出土遺物……70
第 41 図　竪穴住居跡008・009出土遺物 ……73
第 42 図　竪穴住居跡009・010出土遺物 ……75
第 43 図　竪穴住居跡010・011・012出土遺物……76
第 44 図　竪穴住居跡013出土遺物(1) ……78
第 45 図　竪穴住居跡013出土遺物(2) ……79
第 46 図　竪穴住居跡014出土遺物……80
第 47 図　竪穴住居跡015出土遺物……82
第 48 図　竪穴住居跡016・017・018出土遺物……84
第 49 図　竪穴住居跡019出土遺物……86
第 50 図　竪穴住居跡019・020・021・022出土遺物 ……87
第 51 図　竪穴住居跡023・024・025・026出土遺物 ……91
第 52 図　竪穴住居跡026・027出土遺物 ……93
第 53 図　竪穴住居跡027出土遺物……94
第 54 図　竪穴住居跡028・029出土遺物 ……96
第 55 図　竪穴住居跡030・031A・031B出土遺物(1) ……98
第 56 図　竪穴住居跡031B出土遺物(2) ……100
第 57 図　竪穴住居跡031B出土遺物(3) ……101
第 58 図　竪穴住居跡031B出土遺物(4) ……103
第 59 図　竪穴住居跡031B出土遺物(5) ……104
第 60 図　竪穴住居跡032出土遺物 ……106
第 61 図　竪穴住居跡036・037・038出土遺物 ……109
第 62 図　竪穴住居跡038・039出土遺物……111
第 63 図　竪穴住居跡040・041出土遺物……113

第 64 図　竪穴住居跡045・048A出土遺物……115
第 65 図　竪穴住居跡049・057出土遺物……118
第 66 図　竪穴住居跡062・064出土遺物……120
第 67 図　竪穴住居跡065・069・070出土遺物……122
第 68 図　竪穴住居跡071・073・099A出土遺物……124
第 69 図　掘立柱建物跡042・043……126
第 70 図　掘立柱建物跡050A・050B……127
第 71 図　掘立柱建物跡051・052……129
第 72 図　掘立柱建物跡054・056・060……130
第 73 図　掘立柱建物跡061・068……131
第 74 図　掘立柱建物跡043出土遺物……132
第 75 図　土坑053・067・074……134
第 76 図　土坑053・067・074出土遺物……136
第 77 図　土器集中地点001……137
第 78 図　土器集中地点035……138
第 79 図　土器集中地点001・035出土遺物……140
第 80 図　土坑046・058・059・066……142
第 81 図　遺構外出土遺物（縄文土器 1）……144
第 82 図　遺構外出土遺物（縄文土器 2）……146
第 83 図　遺構外出土遺物（縄文土器 3）……148
第 84 図　遺構外出土遺物（縄文土器 4）……150
第 85 図　遺構外出土遺物（縄文土器 5）……152
第 86 図　遺構外出土遺物（縄文土器 6）……153
第 87 図　遺構外出土遺物（縄文土器 7）……155
第 88 図　遺構外出土遺物（縄文土器 8）……156
第 89 図　遺構外出土遺物（縄文時代土製品）……157
第 90 図　遺構外出土遺物（石器 1）……159
第 91 図　遺構外出土遺物（石器 2）……162
第 92 図　遺構外出土遺物（石器 3）……163
第 93 図　遺構外出土遺物（歴史時代）……165
第 94 図　土器変遷図（1）－六拾部Ⅰ期－……168
第 95 図　土器変遷図（2）－六拾部Ⅱ期（1）－……169
第 96 図　土器変遷図（3）－六拾部Ⅱ期（2）－……170

第 97 図　土器変遷図（4）－六拾部III期（1）－……172
第 98 図　土器変遷図（5）－六拾部III期（2）－……173
第 99 図　土器変遷図（6）－六拾部III期（3）－……174
第100図　土器変遷図（7）－六拾部IV期（1）－……176
第101図　土器変遷図（8）－六拾部IV期（2）－……177
第102図　土器変遷図（9）－六拾部Ｖ期（1）－……178
第103図　土器変遷図（10）－六拾部Ｖ期（2）－……179
第104図　集落変遷図（1）－六拾部Ｉ期－ ……182
第105図　集落変遷図（2）－六拾部II期－ ……183
第106図　集落変遷図（3）－六拾部III期－ ……185
第107図　集落変遷図（4）－六拾部IV期－ ……187
第108図　集落変遷図（5）－六拾部Ｖ期－ ……188

表　目　次

第１表　遺構外出土石器観察表 ……161
第２表　文字資料一覧 ……191
第３表　竪穴住居跡計測表 ……192
第４表　掘立柱建物跡計測表 ……194
第５表　土器観察表 ……196
第６表　出土土器破片資料一覧（竪穴住居跡） ……205
第７表　出土土器破片資料一覧（そのほかの遺構・遺構外） ……210

図　版　目　次

図版１　六拾部遺跡周辺の航空写真
図版２　六拾部遺跡航空写真（南西から）
図版３　１．遺跡遠景（南から）　２．竪穴住居跡033　３．土坑044
図版４　１．竪穴住居跡002　２．竪穴住居跡003　３．竪穴住居跡004
図版５　１．竪穴住居跡005　２．竪穴住居跡006　３．竪穴住居跡007
図版６　１．竪穴住居跡008　２．竪穴住居跡009　３．竪穴住居跡010
図版７　１．竪穴住居跡011　２．竪穴住居跡012　３．竪穴住居跡013
図版８　１．竪穴住居跡014　２．竪穴住居跡015　３．竪穴住居跡016
図版９　１．竪穴住居跡017　２．竪穴住居跡018　３．竪穴住居跡019
図版10　１．竪穴住居跡020　２．竪穴住居跡021　３．竪穴住居跡022
図版11　１．竪穴住居跡023　２．竪穴住居跡024　３．竪穴住居跡025
図版12　１．竪穴住居跡026　２．竪穴住居跡027　３．竪穴住居跡028
図版13　１．竪穴住居跡029　２．竪穴住居跡030　３．竪穴住居跡031A・B
図版14　１．竪穴住居跡031B遺物出土状況　２．竪穴住居跡032　３．竪穴住居跡036
図版15　１．竪穴住居跡037　２．竪穴住居跡038　３．竪穴住居跡039
図版16　１．竪穴住居跡040　２．竪穴住居跡041　３．竪穴住居跡045
図版17　１．竪穴住居跡048A　２．竪穴住居跡048B　３．竪穴住居跡049
図版18　１．竪穴住居跡057　２．竪穴住居跡062　３．竪穴住居跡064
図版19　１．竪穴住居跡065　２．竪穴住居跡069　３．竪穴住居跡070・072
図版20　１．竪穴住居跡071　２．竪穴住居跡073　３．竪穴住居跡099A・B
図版21　１．掘立柱建物跡042　２．掘立柱建物跡043　３．掘立柱建物跡050A・B

図版22　1．掘立柱建物跡051　2．掘立柱建物跡052　3．掘立柱建物跡054
図版23　1．掘立柱建物跡056　2．掘立柱建物跡060　3．掘立柱建物跡061
図版24　1．掘立柱建物跡068　2．土坑067
図版25　1．土坑067遺物出土状態　2．土坑074　3．土坑066
図版26　1．竪穴住居跡015出土遺物集合　2．竪穴住居跡019出土遺物集合
図版27　1．竪穴住居跡013出土遺物集合　2．竪穴住居跡027出土遺物集合
　　3．竪穴住居跡039出土遺物集合　4．竪穴住居跡031B出土遺物集合
図版28　1．竪穴住居跡032出土遺物集合　2．竪穴住居跡041出土遺物集合
　　3．竪穴住居跡048出土遺物集合　4．竪穴住居跡049出土遺物集合
図版29　竪穴住居跡002・003・004出土遺物
図版30　竪穴住居跡004・005・006・009出土遺物
図版31　竪穴住居跡010・011出土遺物
図版32　竪穴住居跡013出土遺物
図版33　竪穴住居跡014出土遺物
図版34　竪穴住居跡015・016出土遺物
図版35　竪穴住居跡017・018・019出土遺物
図版36　竪穴住居跡019・020・022出土遺物
図版37　竪穴住居跡023・024・025・026出土遺物
図版38　竪穴住居跡026・027出土遺物
図版39　竪穴住居跡027・028・029・030出土遺物
図版40　竪穴住居跡031A・031B出土遺物
図版41　竪穴住居跡031B出土遺物
図版42　竪穴住居跡031B出土遺物
図版43　竪穴住居跡031B出土遺物
図版44　竪穴住居跡032・036・土器集中地点035出土遺物
図版45　竪穴住居跡037・038出土遺物
図版46　竪穴住居跡038・039出土遺物
図版47　竪穴住居跡039・040・041出土遺物
図版48　竪穴住居跡048A出土遺物
図版49　竪穴住居跡048A・049出土遺物
図版50　竪穴住居跡049・062・064・土坑053出土遺物
図版51　竪穴住居跡064出土遺物
図版52　竪穴住居跡065・070・土坑067出土遺物

図版53　竪穴住居跡071・073・099A・土坑074・遺構外出土遺物
図版54　瓦　塔
図版55　鉄製品（1）
図版56　鉄製品（2）
図版57　鉄製品（3）
図版58　玉類・石製紡錘車・砥石
図版59　遺構外出土縄文土器（1）
図版60　遺構外出土縄文土器（2）
図版61　遺構外出土縄文土器（3）
図版62　遺構外出土縄文土器（4）
図版63　土坑044出土遺物・遺構外出土土製品・石器（1）
図版64　遺構外出土石器（2）

第1章　序　　章

第1節　調査にいたる経緯と経過

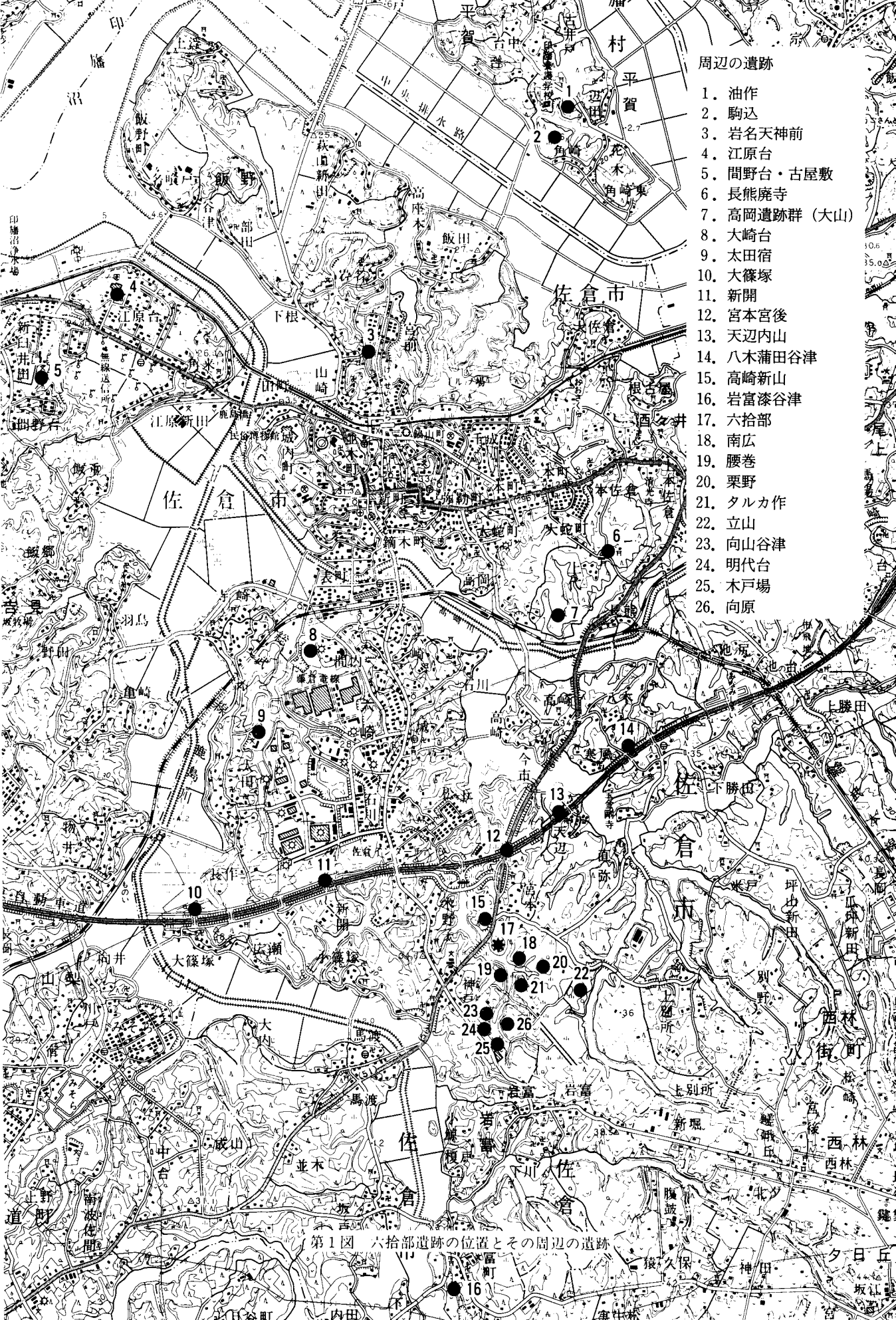
六拾部遺跡の発掘調査は、千葉県土地開発公社による佐倉第三工業団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の一環として実施された。佐倉第三工業団地建設に先立って、千葉県教育委員会は事業予定地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、千葉県土地開発公社、佐倉市教育委員会と慎重に協議を重ねた結果、できるかぎり公園用地として現状保存に努める一方、保存の困難なものについては発掘調査による記録保存の措置を講じることになった。発掘調査は千葉県教育委員会の指導のもとに（財）千葉県文化財センターが実施することになった。

発掘調査は昭和50（1975）年度の星谷津遺跡の調査に始まり、その後一時中断したものの、昭和54（1979）年度から昭和60（1985）年度まで継続して行われた。六拾部遺跡の発掘調査は昭和59（1984）年度に実施され、まず、昭和59年10月1日から同年11月30日までの期間で確認調査を実施し、引き続き同年12月1日から昭和60（1985）年3月30日までの期間で本調査を実施した。

整理作業も発掘調査と並行して実施し、昭和53（1978）年度に刊行した『佐倉市星谷津遺跡』を第1冊目とし、現在までに平成4（1992）年度に刊行した『佐倉市南広遺跡』までで、14遺跡について10冊の発掘調査報告書にまとめ、刊行している。六拾部遺跡の整理作業は昭和62（1987）年度に基礎整理を行い、平成2（1990）年度と平成4（1992）年度に実施した。

第2節　遺跡の位置と環境（第1・2図、図版1）

六拾部遺跡は佐倉市大作2丁目（旧地番佐倉市宮本字六拾部26番地ほか）にあり、佐倉第三工業団地内では最も北寄りで、国道51号に接した位置にある。遺跡は下総台地と呼ばれる広大な台地上にあり、遺跡から約7kmほど北西に県内最大の湖沼である印旛沼がある。佐倉第三工業団地内の遺跡群は、この印旛沼に注ぐ鹿島川や高崎川およびその支流によって開析された台地上にある。遺跡群の南西約1kmには鹿島川によって幅広く開析された谷が広がり、東側は高崎川に合流する支流によって開析されている。本遺跡群はこの2つの支流に挟まれ、さらに、池向遺跡や向原遺跡周辺を谷頭とする小支流によって、樹枝状に開析された谷に面した台地上にある。この小支流は北西方向に向かって流れた後、六拾部遺跡を過ぎた所で北に向きを変えて、遺跡群の東側を流れる支流と合流する。本遺跡のある台地は南側に突き出た雨垂れ状の形をしているが、現在は削平され、旧状をとどめていない。遺跡の標高は35m前後で、現在の谷面との比高は約20mである。なお、台地の北西側は古い時期に削平されている。



第１図　六拾部遺跡の位置とその周辺の遺跡

印旛沼に面した地域や鹿島川および高崎川の下流域には大規模な集落遺跡の存在が知られており、報告書などにより、その内容が明らかになっているものも数多くある。印旛沼に面した地域では、印旛沼の南岸の台地上に、縄文時代から歴史時代にわたる江原台遺跡があり、その南西には間野台・古屋敷遺跡がある。印旛沼の北岸には、沼に向かって北から突き出るように延びる台地上に、古墳時代後期の集落を中心とする駒込遺跡や古墳時代から歴史時代にわたる油作遺跡などに代表される平賀遺跡群がある。鹿島川流域には、印旛沼に近接して、弥生時代中期の再葬墓を検出した遺跡として著名な岩名天神前遺跡がある。鹿島川と高崎川の合流によって形成された広大な谷に面した台地上には、弥生時代から古墳時代前期にかけての大規模な集落を検出した大崎台遺跡があり、その南には古墳時代から歴史時代までの集落を検出した太田宿遺跡がある。高崎川の流域では、本遺跡群から発する小支流が合流する、高崎川の北岸の台地上に、古墳時代から歴史時代までの大規模な集落を検出した大山遺跡を中心とした高岡遺跡群がある。また、その北東には8世紀前半の創建と考えられる長熊廃寺があり、須恵質の瓦塔部材や「高罡寺」と墨書されている土師器杯などが出土しており、本遺跡との関わりが少なからず考えられる遺跡である。このように、印旛沼に面した台地上や鹿島川および高崎川の下流域は、弥生時代から歴史時代にわたる大規模な集落が営まれており、印旛沼の西方にある手賀沼とともに、弥生時代には「印旛・手賀沼式」と呼ばれる一群の土器や、古墳時代後期にあっては「常総型」の甕などに代表されるような特徴的な文化圏を形成していたと思われる。

本遺跡群に近接した地域については、主に歴史時代の遺構を検出した遺跡を中心にみていきたい。鹿島川の中流域には、古墳時代から歴史時代までの集落遺跡である岩富漆谷津遺跡があり、歴史時代の竪穴住居跡42軒、掘立柱建物跡7棟を検出している。鹿島川に小さく突き出した台地上にある佐倉市大篠塚遺跡は古墳時代前期から歴史時代までの複合遺跡で、歴史時代の竪穴住居跡21軒を検出している。その東にある宮本宮後遺跡は本遺跡群と同じ支流域にあり、（財）印旛郡市文化財センターによって調査されたB地区で竪穴住居跡2軒と掘立柱建物跡1棟を検出している。ここではこのほかに、7世紀中葉以降に属すると思われる竪穴住居跡も検出している。宮本宮後遺跡の北西にあたる高崎川の支流の南岸の台地上に天辺内山遺跡があり、狭い調査範囲内から竪穴住居跡10軒を検出している。この竪穴住居跡からは羽口片が出土しており、古くから鍛冶関連遺跡としても知られている。天辺内山遺跡の対岸にある八木蒲田谷津遺跡では竪穴住居跡8軒を検出している。六拾部遺跡の北にある高崎新山遺跡は、六拾部遺跡と狭い尾根で結ばれた台地上にあり、古墳時代後期末から歴史時代にかけての竪穴住居跡を65軒検出している。六拾部遺跡の集落が営まれた時期と同じであり、きわめて関わりの強い遺跡といえる。また、同一台地上の北側部分については佐倉市教育委員会によってすでに発掘調査が行われ、竪穴住居跡19軒、掘立柱建物跡4棟を検出しており、今回報告する遺構とともに、集落を形成していたことは明らかである。

佐倉第三工業団地内の遺跡のうち、歴史時代の遺構を検出した遺跡とその概略は次のとおりである。なお、歴史時代に属すると思われる墳墓については、古墳時代のものとの関連性が強く、出土遺物から明らかに歴史時代のものと思われるもの以外はとりあげていない。

南広遺跡　六拾部遺跡の谷津を挟んだ東側の台地上にあり、竪穴住居跡45軒、掘立柱建物跡6棟、柵列2列、土坑3基を検出している。調査範囲は台地の南側部分であり、当該期の遺構は台地の北側にも存在していると考えられる。

栗野遺跡　南広遺跡と谷津を挟んだ東側の台地上で、竪穴住居跡6軒を検出した。これらは台地南側の縁辺部にあり、8世紀初頭と考えられる土坑墓も検出している。

立山遺跡　栗野遺跡の東側で、六拾部遺跡や栗野遺跡の南側にある小支谷の谷頭が延びている。竪穴住居跡6軒、掘立柱建物跡5棟を検出している。遺構は本遺跡群の東側を開析する高崎川の支流に向かって突き出た台地上にある。また、これらのほかに方形周溝も検出している。

タルカ作遺跡　南広遺跡の谷を挟んだ南側の台地上にあり、竪穴住居跡2軒を検出している。竪穴住居跡はそれぞれ北側と南西側の台地縁辺部にある。

向原遺跡　タルカ作遺跡の南側にある広い台地上にあり、竪穴住居跡2軒を検出している。2軒の竪穴住居跡は別々に明代台遺跡、腰巻遺跡と谷を挟んで向き合うように、台地の縁辺部にある。これらのほかに方形周溝も検出している。

向山谷津遺跡　向原遺跡の谷を挟んだ南西側の台地上にあり、竪穴住居跡1軒、土坑3基、溝1条を検出している。調査範囲は台地縁辺部で、この台地は谷が小さく入り込んで細かく分断されているが、大きくは腰巻遺跡のある台地と同一と考えられる。

明代台遺跡A地点　向山谷津遺跡の小さな谷を挟んだ東側の台地上にあり、竪穴住居跡2軒、溝2条を検出している。2軒の竪穴住居跡は規模を変えずに建て替えが行われている。

木戸場遺跡B地点　向原遺跡の谷を挟んだ南側の台地上にあり、竪穴住居跡2軒を検出している。竪穴住居跡は台地の南側半分の地域で検出したものであり、それに続く現在佐倉第三工業団地外周の緑地帯となっている地域に、6軒の竪穴住居跡の存在を確認している。

腰巻遺跡　小支流の合流地点を挟んで北に六拾部遺跡と南広遺跡、東にタルカ作遺跡を臨む台地上にあり、竪穴住居跡23軒、掘立柱建物跡1棟、溝6条を検出している。竪穴住居跡は東側の谷に面した台地縁辺部および傾斜面中にあり、7世紀中葉以降の時期の属すると思われるものも含んでいる。

以上みてきたように、本遺跡群では、東側の池向遺跡や星谷津遺跡には歴史時代に属する竪穴住居跡などの遺構はなく、立山遺跡や栗野遺跡、明代台遺跡、木戸場遺跡、向山谷津遺跡ではその数は少なく、集落としての存続期間は短かったものと思われる。それに対して、六拾部遺跡、南広遺跡、腰巻遺跡は集落としての存続期間が長く、先にみた高崎新山遺跡などとともに、その集落の消長について密接に関連し合った遺跡群であったと思われる。

第２図　六拾部遺跡周辺の地形および遺構配置図

第3節　調査および整理方法

佐倉第三工業団地予定地内の遺跡の発掘は、昭和54年度に50×50mの方眼大グリッドを設定し、それを基準に調査を行ってきた。この大グリッドには、国家座標に基づく南北に走るX軸に1～35までの数字、東西に走るY軸にイ～ケまでの片仮名を付けた。六拾部遺跡は工業団地予定地内北西部に位置し、X軸では3～7、Y軸ではチ～ルの範囲に属している(第4図)。この大グリッド内を10×10mの中グリッドに分け、さらに中グリッドを2×2mの小グリッドに分割した。それぞれの大グリッドと中グリッドには、25の下位グリッドが含まれる。この方眼グリッドを基準にして、遺構の測量、地形測量、遺構配置図の作成等を行った。

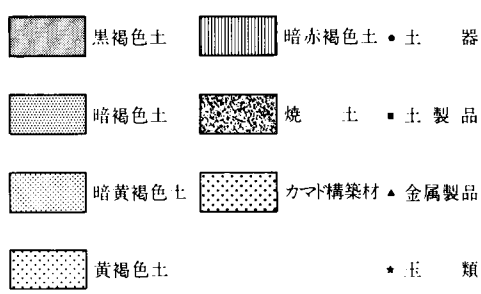
上層の確認調査は、対象面積10,700m²の範囲に対して、台地中央から斜面に向けて幅2mの長いトレンチを扇状に15本設定して行った。本調査は確認調査の結果に基づき、対象面積の全域について実施した。下層の確認調査は、上層の確認調査と並行して行い、2×2mのグリッドを42か所設定して行った。その内の1か所から剝片1点が出土しただけであり、本調査は実施しなかった(第4図)。遺構番号は遺構の種類に関係なく通し番号となっており、調査時に001から検出順に付け、整理作業においてもそのまま使用した。

整理作業にあたり、各遺構のデータおよび各種の遺物データについては、パソコンを使用してデータベースを構築し、今回も竪穴住居跡と掘立柱建物跡は計測表（第3・4表)、土器は土器観察表（第5表）として提示した。土器の実測は空間座標測定装置（ベクトロン）を使用して行った。その方法については、すでに中永谷遺跡の報告書中で詳しく述べられているので、それを参照していただきたい。

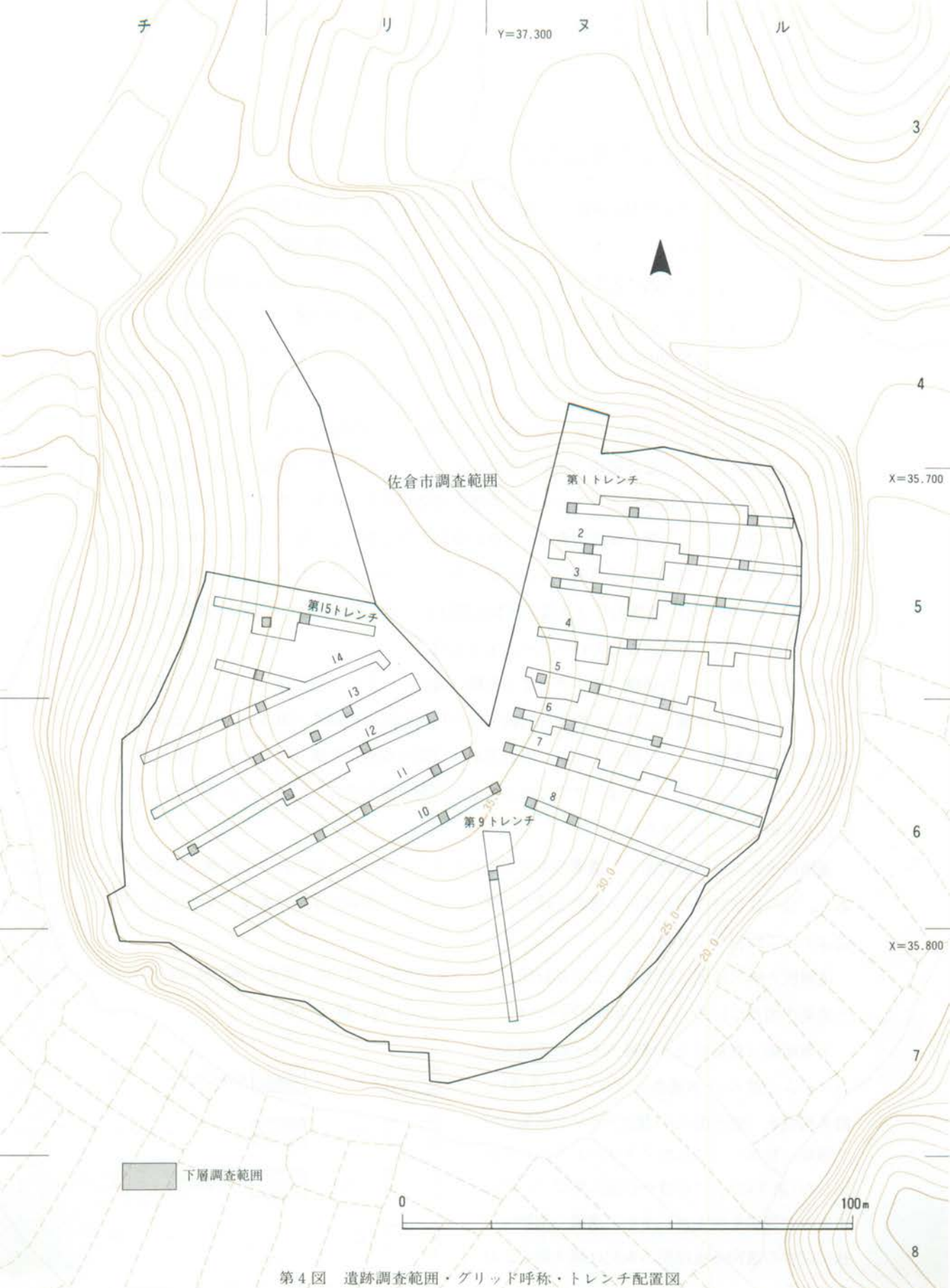
遺構の平面規模は確認面で、遺構の中央で交わるように設定した軸の長さで計測したものである。竪穴住居跡の床面積は、壁の下端で計測し、カマドや貯蔵穴などは考慮しなかった。方位はすべて西回りで計測した。

遺構図の縮尺は竪穴住居跡・土坑は1/80、カマド・土坑044は1/40、掘立柱建物跡は1/100、土器集中地点は1/200で、土層断面図・エレベーション図も同じ縮尺である。

土層断面は黒褐色土・暗褐色土・暗黄褐色土（ローム土混入)・黄褐色土（ローム土主体)・暗赤褐色土（焼土混入)・焼土・カマド構築材の7種類に整理し、これをスクリーントーンで区別した(第3図)。このほかの混入物については本文中で説明を加えた。また、遺構の遺物出土状況図中の遺物の種類別の表記は第3図のとおりである。



第3図　凡　例



第4図　遺跡調査範囲・グリッド呼称・トレンチ配置図

第５図　六拾部遺跡周辺の地形及び遺構配置図

遺物の実測図の縮尺は土器類1/4、玉類・金属製品1/2、縄文土器拓影図1/3、石器類は基本的には2/3としたが、一部1/2としたものがあり、それらについては挿図中に明記した。なお、挿図番号は遺物の種類に関係なく遺構ごとに通し番号とし、出土状況図の番号、図版番号と一致させた。

第4節　遺跡の概要

先土器時代の遺物としては、第12トレンチの最も谷に近い位置に設定したグリッドからと、竪穴住居跡065の埋土中から剝片が各1点出土した。前者は傾斜面からの単独出土、後者は混入品であることから遺構外出土遺物として取り扱うことにした（第90図 149・150)。

縄文時代の遺構は竪穴住居跡と土坑各1基が検出できただけで、包含層は確認できなかった。

弥生時代・古墳時代の遺構・遺物は検出できなかった。

歴史時代の遺構は、竪穴住居跡54軒、掘立柱建物跡11棟、土坑3基、土器集中地点2か所が検出できた。これらの遺構からは瓦塔などの本遺跡の性格を特徴づけるような遺物が出土している。また、同一台地上の北側の佐倉市教育委員会によって発掘調査が実施された地域では、歴史時代の竪穴住居跡19軒、掘立柱建物跡4棟、土坑2基を検出している。

これらのほかに、時期不明の土坑4基と土坑群1か所を検出した（第5図)。

主要参考文献

『東関東自動車道(千葉－成田線)関係埋蔵文化財発掘調査報告書』「佐倉市大篠塚遺跡」・「佐倉市新開遺跡」　千葉県文化財保護協会　1970
『平賀』平賀遺跡群発掘調査報告書　平賀遺跡群発掘調査会　1980
『パイプライン』「佐倉市八木蒲田谷津遺跡」・「佐倉市天辺内山遺跡」　(財) 千葉県文化財センター　1981
『岩富漆谷津・太田宿』　佐倉市教育委員会　1983
『佐倉市立山遺跡』　(財) 千葉県文化財センター　1983
『千葉県埋蔵文化財分布地図（1)－東葛飾・印旛地区－』　(財) 千葉県文化財センター　1985
『佐倉市タルカ作遺跡』　(財) 千葉県文化財センター　1985
『佐倉市長熊廃寺跡確認調査報告』　千葉県教育委員会　1986
『六拾部遺跡発掘調査報告書』　佐倉市教育委員会　1986
『佐倉市向山谷津・明代台・木戸場・古内遺跡』　(財) 千葉県文化財センター　1987
『佐倉市腰巻遺跡』　(財) 千葉県文化財センター　1987
『千葉県佐倉市　高崎新山遺跡発掘調査報告書』　(財) 印旛郡市文化財センター　1987
『佐倉市向原遺跡』　(財) 千葉県文化財センター　1989
『千原台ニュータウン　Ⅳ　中永谷遺跡』　(財) 千葉県文化財センター　1991
『佐倉市栗野Ⅰ・Ⅱ遺跡』　(財) 千葉県文化財センター　1991
『千葉県佐倉市　宮本宮後遺跡Ｂ地区　発掘調査報告書』　印旛郡市文化財センター　1992
『佐倉市南広遺跡』　(財) 千葉県文化財センター　1993

第２章　遺構と遺物

第１節　縄文時代

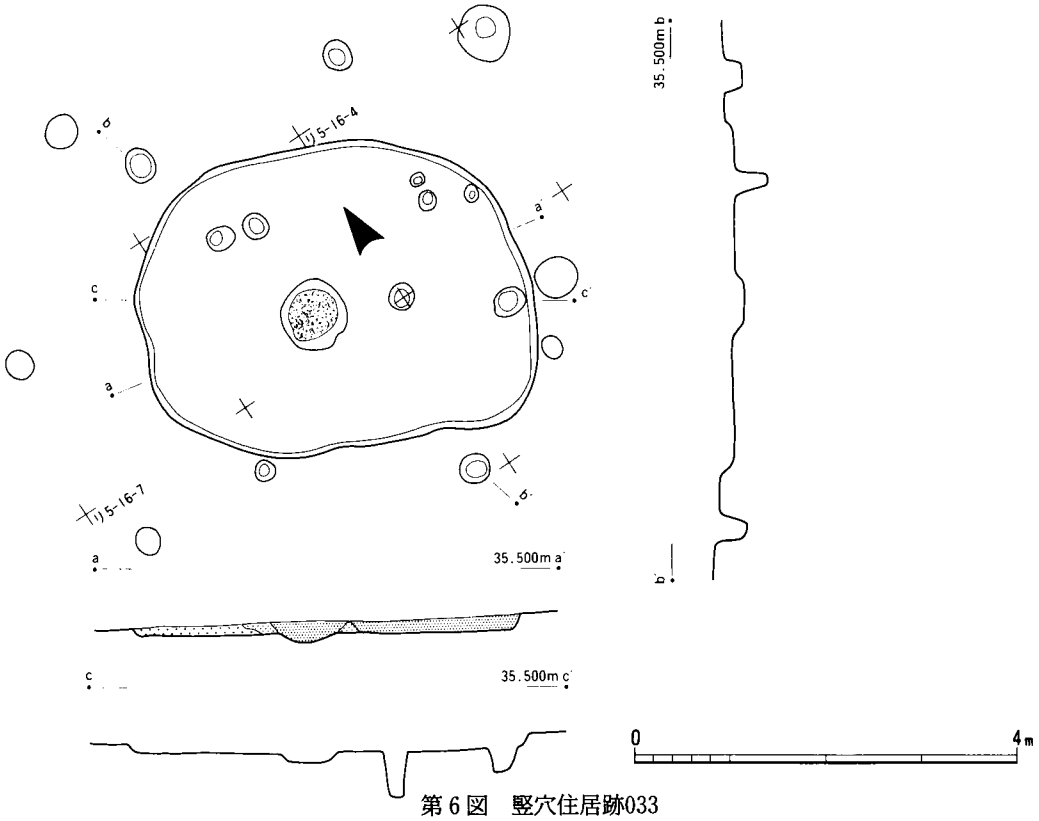
今回の調査で確認した縄文時代の遺構は竪穴住居跡１軒、土坑１基にとどまる。このうち土坑044は出土遺物から明らかに縄文時代のものといえるが、竪穴住居跡033については遺物がほとんど含まれておらず、形態的特徴から縄文時代の所産と推定したものである。

昭和63年の佐倉市教育委員会による調査でも、第２号土坑と報告されたものが陥穴である可能性があるものの、明らかに縄文時代の所産である遺構は検出されていない。遺物もごく少量出土したのみで、その事実が記されるにとどまっている。

竪穴住居跡033（第６図、図版３）

リ５－11～16グリッド。西側斜面肩部の微傾斜地に立地する。長径4.05m、短径3.12mの不整隅丸長方形で、長軸方向を主軸とするとＮ－45°－Ｗである。深さは15cm程である。

住居中央のやや西寄りには径70cmの円形の炉があり、火床面はやや被熱赤化している。炉の周囲には深さ30～50cm程のピットが７基掘り込まれているが、東側と北側に偏っており規則性



第６図　竪穴住居跡033

はみられない。住居跡の周囲にある大小10基のピットも当跡に伴うものかどうかわからない。

遺物としてはわずかに早期撚糸文系土器と沈線文系土器の細片が各1点出土したのみである。なお当跡のあるリ5－16グリッドからは加曽利B式土器の破片が5点出土した。

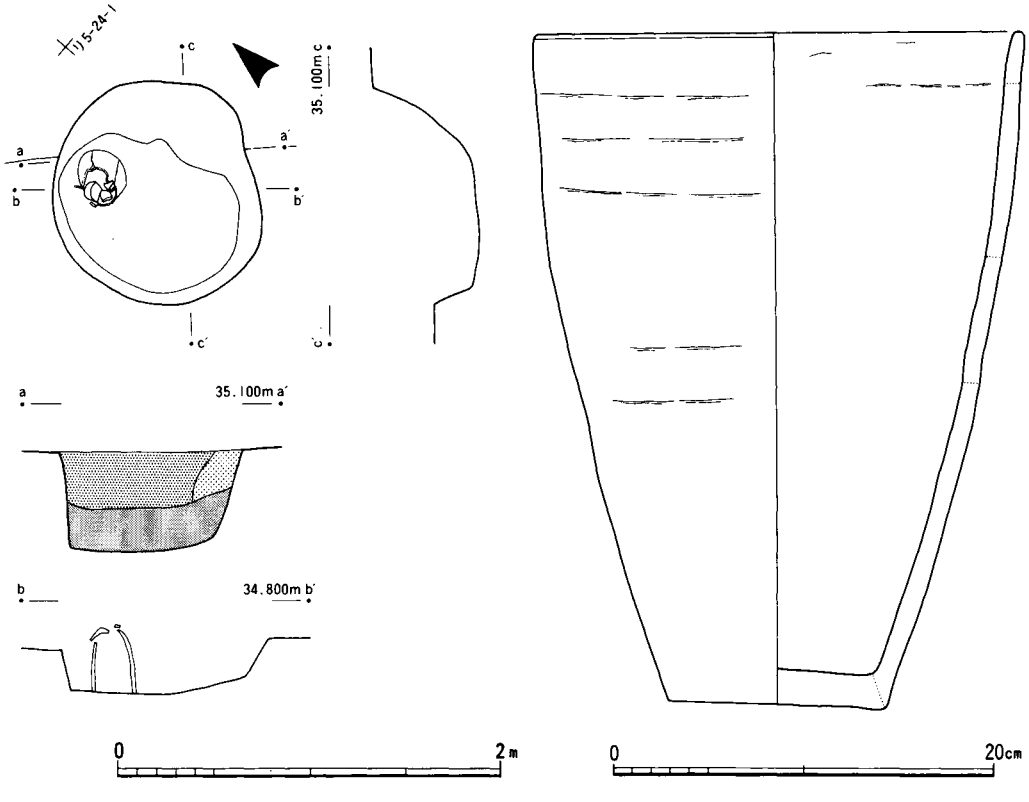
土坑044（第7図、図版3・63）

竪穴住居跡033の東南東約25m、リ5－23～24グリッドにまたがって所在する。下層確認グリッドを30cm程掘り下げた段階で検出した。

平面は径1.00～1.15mの不整円形、壁は比較的急角度で断面は略台形を呈する。深さは約50cmである。土坑内を満たす埋土の上層は色調的に暗褐色土と茶褐色土に分かれるが、この両層は比較的均質である。下層の黒褐色土は色調的にも質的にも上層とはかなり異なる。

出土遺物としては平面図にも示した伏甕状に出土した深鉢1点が挙げられるのみである。この深鉢は口径26.0cm、底径12.5cm、器高34.2cmで、わずかに内湾しながら直線的に開く器形を呈する。文様は施されず、内外面とも一部輪積痕が残っているのみである。

埋土や遺物出土の状況から当跡は墓壙であると思われる。土器のみからは時期がわからないが、こうした出土状況は前期後半から中期初頭にかけて類例が知られている。この点に鑑みると中期初頭の五領ケ台式期ではないかと思われる。埋葬用に作られた特別な土器であろうか。



第7図　土坑044及び出土遺物

第２節　歴史時代

歴史時代の遺構は、竪穴住居跡54軒、掘立柱建物跡11棟、土坑３基、土器集中地点２か所を検出することができた。竪穴住居跡はその立地する位置から、台地のやや西よりの平坦地、台地東側から南側にかけての縁辺部、北東側の一段低いテラス上、東側の斜面中と南側の斜面中の５か所に大きく分けることができる。掘立柱建物跡は南西側の斜面中に作られている１棟を除いて、いずれも南側の平坦地および縁辺部ある。これらのうち３棟を除いて竪穴住居跡とは重複していない。

なお、竪穴住居跡の柱穴については、カマドを起点に時計まわりにＰ１～Ｐ４と呼称することとする。

１．竪穴住居跡

(1)遺構

竪穴住居跡002（第８図、図版４）　（遺物66Ｐ）

台地北東側の谷に面し、標高33.5m前後の、台地中央部より一段低いテラス状の平坦地（ヌ５－８・９グリッド）にある。形状は四隅がやや丸みをもつ正方形で、規模は小規模である。

住居の掘方はハードローム層上面まで掘り込まれ、ローム粒・ロームブロック・暗褐色土・焼土粒などが混入した土による貼床が施されている。床面はカマド前面から中央部にかけて硬くなっている。柱穴・貯蔵穴・壁溝は検出できなかった。カマドは北西壁の中央に作られ、両袖を検出したが、天井部は遺存していなかった。しかし、崩落によるものと思われる土層がみられたことから、竪穴住居が埋没する過程で崩壊したものと考えられる。袖内壁には焼土化した部分はみられず、火床部も検出できなかった。煙道部は壁を台形に掘り込み、立ち上がり角度は約47度の傾斜をもつ。埋土は全体的にローム粒やロームブロックが含まれている。

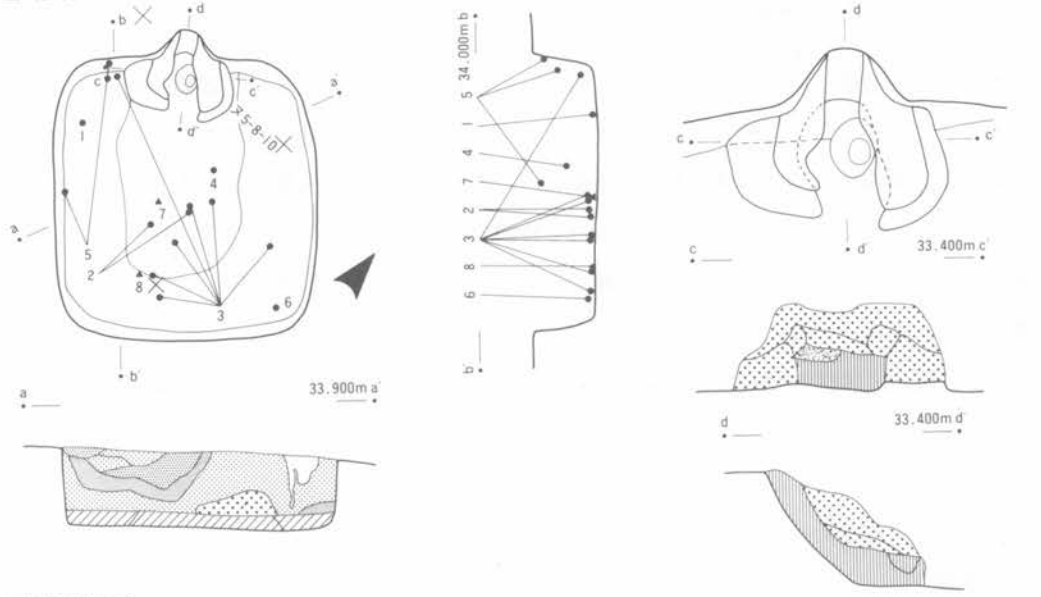
遺物の出土状況は埋土中のものが多いが、図示できたものは床面に近いものである。カマド周辺からは特にめだった遺物はない。７・８の鉄製品は埋土中からの出土である。

竪穴住居跡003（第８図、図版４）　（遺物66Ｐ）

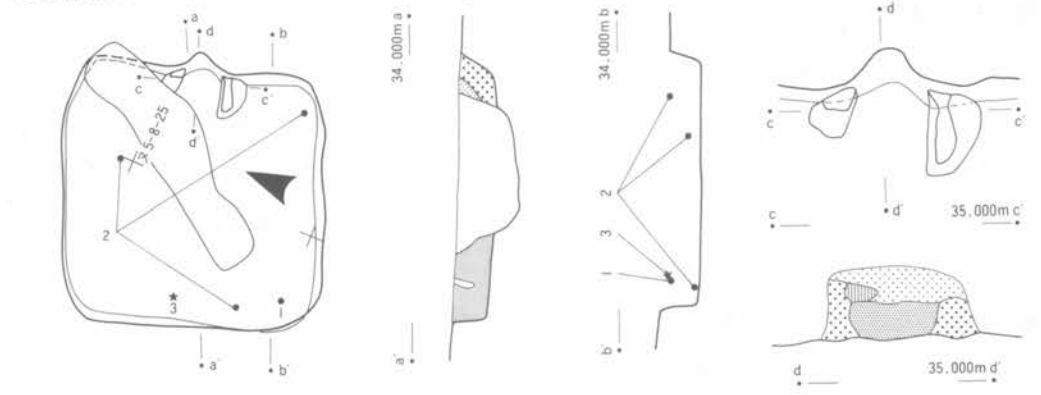
竪穴住居跡002と同じテラス上で、南約２ｍの位置にある（ヌ５－８グリッド）。北東隅から中央にかけて、床面まで達する攪乱を受けている。形状は四隅がやや丸みをもつ正方形で、規模は小規模である。

住居の掘方はハードローム層上面まで掘り込まれ、その面を床面にしている。柱穴・貯蔵穴・壁溝は検出できなかった。カマドは東壁の中央に作られ、両袖を検出できたが、攪乱により左袖の一部を破壊されていた。袖内壁には焼土化した部分はみられず、火床部も検出できなかっ

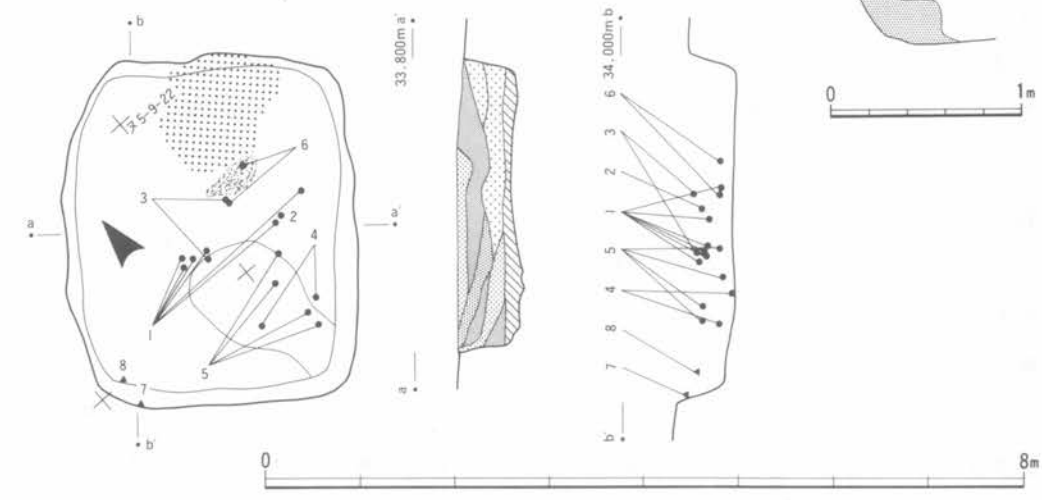
竪穴住居跡002



竪穴住居跡003



竪穴住居跡004



第8図　竪穴住居跡002・003・004

た。煙道部は壁を三角形に掘り込み、立ち上がり角度は約60度の傾斜をもつ。埋土は黒褐色土を主体とし、ローム粒や焼土粒を含んでいる。

遺物は攪乱を受けていることも一因と考えられるが、出土点数は少ない。出土状況は埋土中のものが多く、住居の廃絶後に投棄されたものと考えられる。

竪穴住居跡004（第８図、図版４）　（遺物67Ｐ）

竪穴住居跡003と同じテラス上で、東約１ｍの位置にある（ヌ５－９グリッド）。形状はカマドの中心を通る軸方向が長い長方形で、四隅はやや丸みをもち、規模は小規模である。

住居の掘方はハードローム層まで掘り込まれ、暗黄褐色土による貼床が施される。床面は南隅から中央にかけて硬くなっている。柱穴・貯蔵穴・壁溝は検出できなかった。カマドは北東壁の中央に作られているが、遺存状態が著しく悪く、構築材と思われる砂を含む粘土の範囲を検出できただけである。また、火床部も検出できなかった。煙道部の掘り込みはほとんどみられない。埋土は、下部にみられる黄褐色土中は比較的大きいロームブロックを含んでいる。

遺物の出土状況は埋土上層からのものが多く、床面に密着するようなものは皆無で、いずれも住居の廃絶後に投棄されたものと考えられる。

竪穴住居跡005（第９図、図版５）　（遺物67Ｐ）

竪穴住居跡004と同じテラス上で、南東約２ｍの位置にある（ヌ５－14グリッド）。形状はカマドの中心を通る軸方向がやや長い長方形で、四隅はやや角をもち、規模は小規模である。南東壁から中央にかけて、床面まで達する攪乱を受けている。

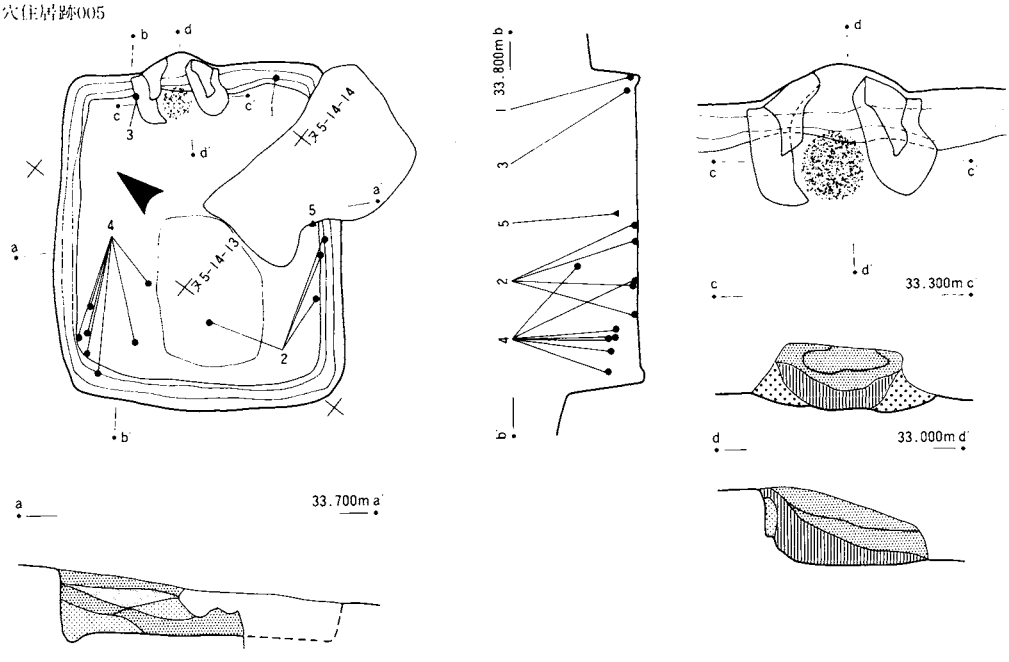
住居の掘方はハードローム層まで掘り込まれ、その面を床面にし、カマドの対壁から中央にかけて硬くなっている。壁溝は全周し、カマドの下にもみられる。柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。カマドは北東壁の中央に作られ、遺存状態はあまりよくないが、両袖を検出した。焼土の堆積はさほど多くないが、火床部の底面は堅くなっている。煙道部は浅い擂り鉢状に掘り込まれ、立ち上がり角度は約60度の傾斜をもつ。埋土は全体的にロームブロックを混入している。

遺物の出土点数は少なく、床面に接しているものがわずかにみられるほかは上層からの出土である。

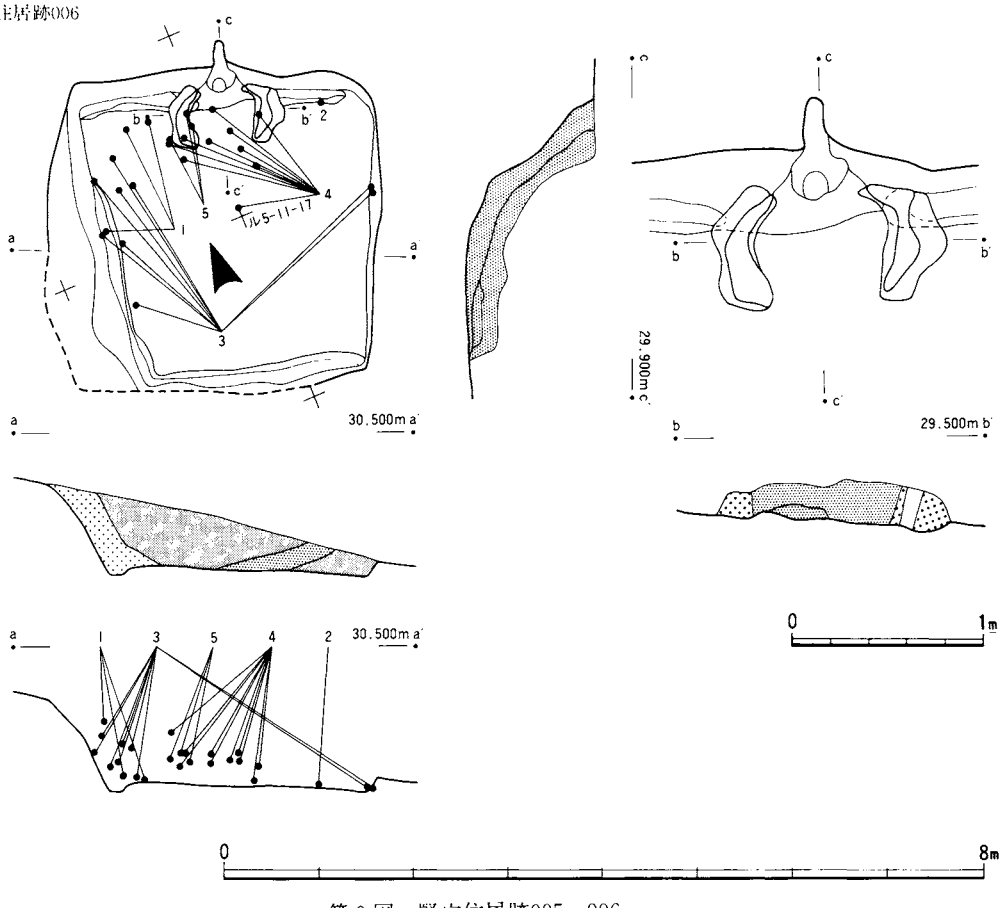
竪穴住居跡006（第９図、図版５）　（遺物69Ｐ）

竪穴住居跡005の東約13ｍの位置にある（ヌ５－６・11、ル５－６・11グリッド）。005などがあるテラスより低く、標高は30ｍ前後である。南西隅付近は木の根などによる攪乱を受け、壁の上場の検出が難しかった。壁の下場での形状は南側が狭くなる台形で、規模は小規模である。

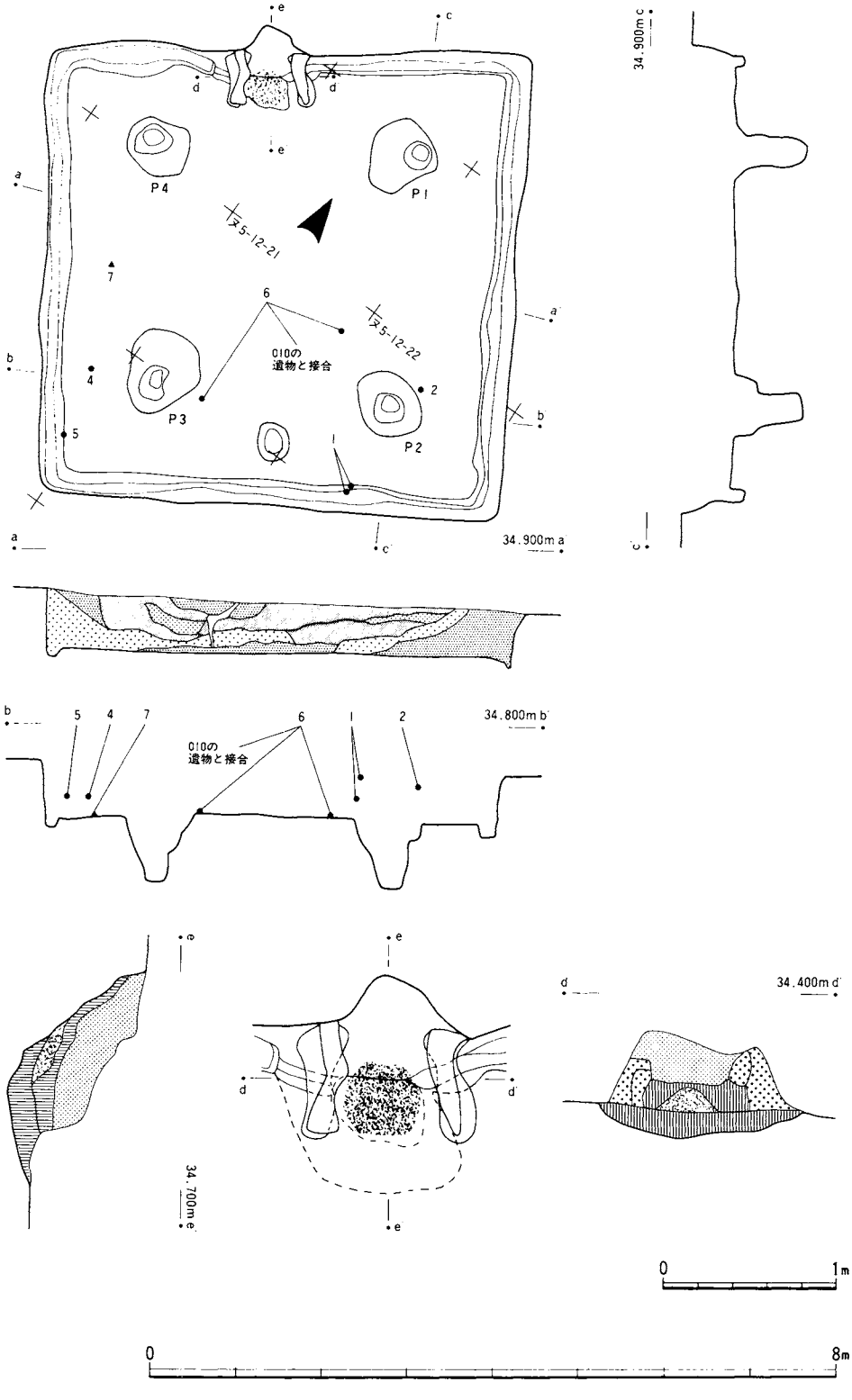
竪穴住居跡005



竪穴住居跡006



第9図　竪穴住居跡005・006



第10図　竪穴住居跡007

住居の掘方は傾斜地であるために、下末吉ローム層まで掘り込まれ、その面を床面にしているが、南隅付近は谷に厚く堆積した黒褐色土を床面としている。壁溝は谷側の壁以外にあり、カマドの下にはみられない。柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。カマドは北東壁の中央に作られ、右袖に一部攪乱を受けているが、両袖を検出した。火床部は検出できなかった。煙道部は壁を幅10cm、長さ30cmほど掘り込み、立ち上がり角度は約53度の傾斜をもつ。埋土は黒褐色土がほとんどであるが、ローム粒や焼土粒を含んでいる。

遺物の出土点数は少なく、埋土中のものが多い。

竪穴住居跡007（第10図、図版５）　（遺物69Ｐ）

台地北東側の谷に面し、竪穴住居跡003などがあるテラスより上の縁辺部にある（ヌ５－11・12グリッド）。標高は34.8m前後である。形状は正方形で、四隅ともほぼ直角である。規模は大きい部類にはいる。

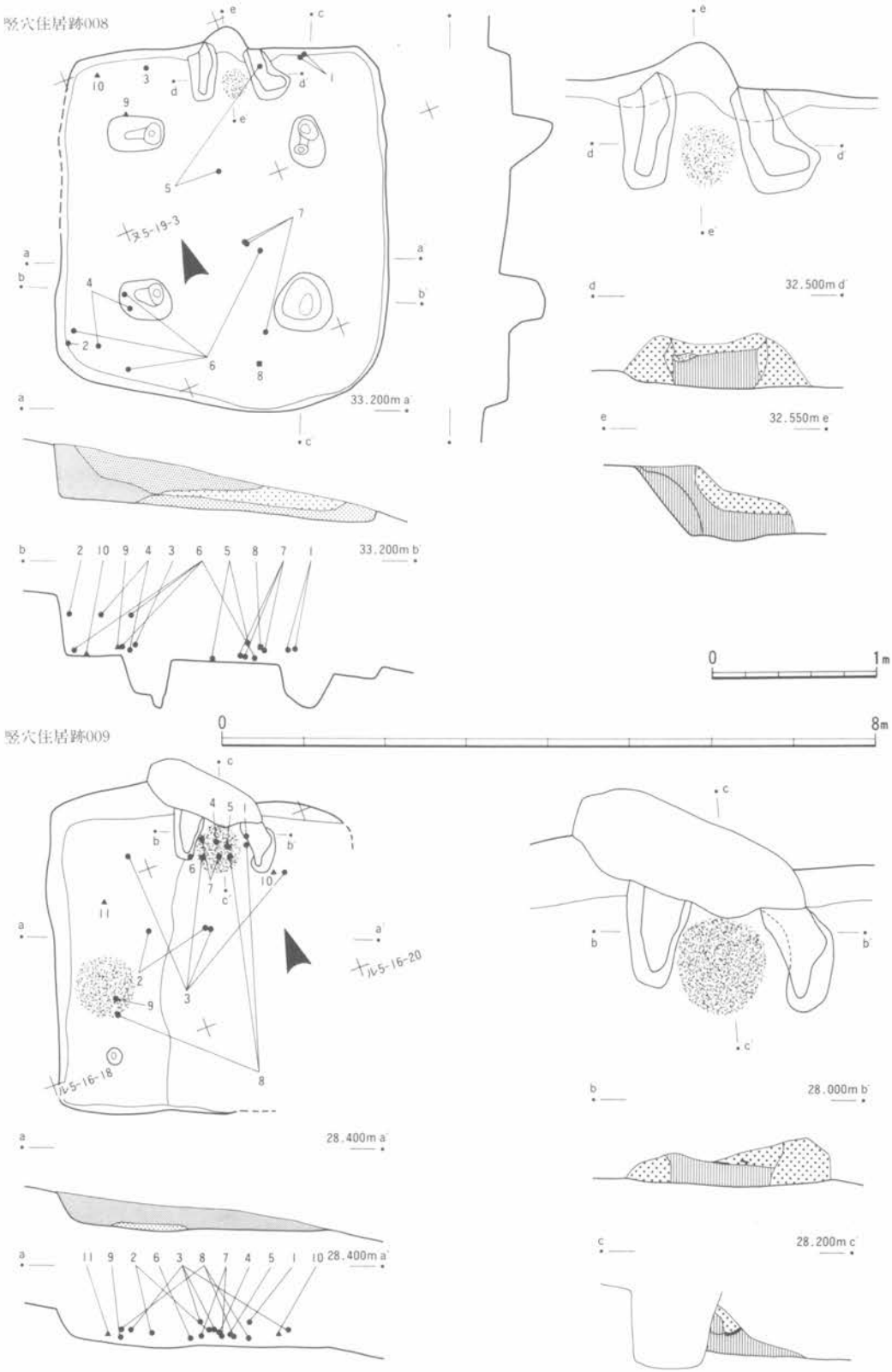
住居の掘方はソフトローム層とハードローム層の境付近まで掘り込まれ、その面を床面にしている。壁溝は全周し、カマドの下にはみられない。柱穴は４本検出し、いずれも対角線上よりいくぶん壁によった位置に掘り込まれている。Ｐ２とＰ３の中間で壁によった位置に出入口ピットを検出した。長径45cm、短径38cm、深さ25cmである。貯蔵穴は検出できなかった。カマドは北西壁のほぼ中央に作られ、両袖と火床部を検出した。火床部の下には広い範囲で、厚さ10～15cmほどの焼土粒などを含む暗赤褐色土がみられる。煙道部は壁を三角形に掘り込み、立ち上がり角度は約55度の傾斜をもつ。埋土は下層には黄褐色土を主体とする土層が、上層は暗褐色土や黒褐色土がみられ、全体にローム粒を含んでいる。

遺物の出土点数は少なく、埋土中のものが多い。６の土師器甕は破片であるが床面から出土し、本住居跡の南に位置する竪穴住居跡010の埋土中から出土した遺物と接合している。３の土師器杯は埋土中からの出土である。

竪穴住居跡008（第11図、図版６）　（遺物71Ｐ）

竪穴住居跡005と同じテラス上で、南約２ｍの位置にある（ヌ５－14・19グリッド）。西壁の一部は攪乱を受け壁の上場を検出できなかった。形状は西壁の長さが短い台形で、南東隅は丸みをもつ。規模は中規模である。

住居の掘方はハードローム層上面まで掘り込まれ、その面を床面にしているが、特に硬いところはみられない。柱穴は４本検出し、ほぼ対角線上に掘り込まれている。壁溝・貯蔵穴は検出できなかった。カマドは北東壁の中央に作られ、両袖と火床部を検出した。袖の内壁には焼土化した部分もみられる。煙道部は壁を三角形に掘り込み、立ち上がり角度は約52度の傾斜をもつ。埋土は全体に焼土粒を含んでいる。



第11図　竪穴住居跡008・009

遺物の出土点数は少なく、埋土中のものが多く、投棄されたものが多いと考えられる。

竪穴住居跡009（第11図、図版６）　（遺物71Ｐ）

台地東側の斜面中で、竪穴住居跡006の南東約５ｍの位置にある（ル５－16グリッド）。標高は29.5m前後である。谷側の壁は検出できなかった。カマドの煙道部付近には床面まで達する攪乱を受けている。形状は正方形で、規模も中規模と思われる。

住居の掘方は山側は下末吉ローム層まで、中央から谷側にかけては谷に厚く堆積する黒褐色土まで掘り込まれ、その面を床面にしている。壁溝・柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。南東隅に径10cm、深さ43cmの小ピットを検出したが、性格は不明である。カマドは北東壁の中央に作られているが、遺存状態が悪く、両袖の一部と火床部を検出しただけである。埋土はローム粒と焼土粒を含んだ黒褐色土がほとんどである。

遺物出土点数は少なく、ほとんどが埋土中である。カマド付近から出土している土師器杯などはカマドの崩壊土中あるいは上部であり、原位置を保ったものではない。

竪穴住居跡010（第12図、図版６）　（遺物72Ｐ）

台地北東側の縁辺部で、竪穴住居跡007の南東約５ｍの位置にある（ヌ５－11･17グリッド）。標高は34.5m前後である。形状はカマドの中心を通る軸に直行する軸方向がわずかに長い長方形で、規模は中規模である。

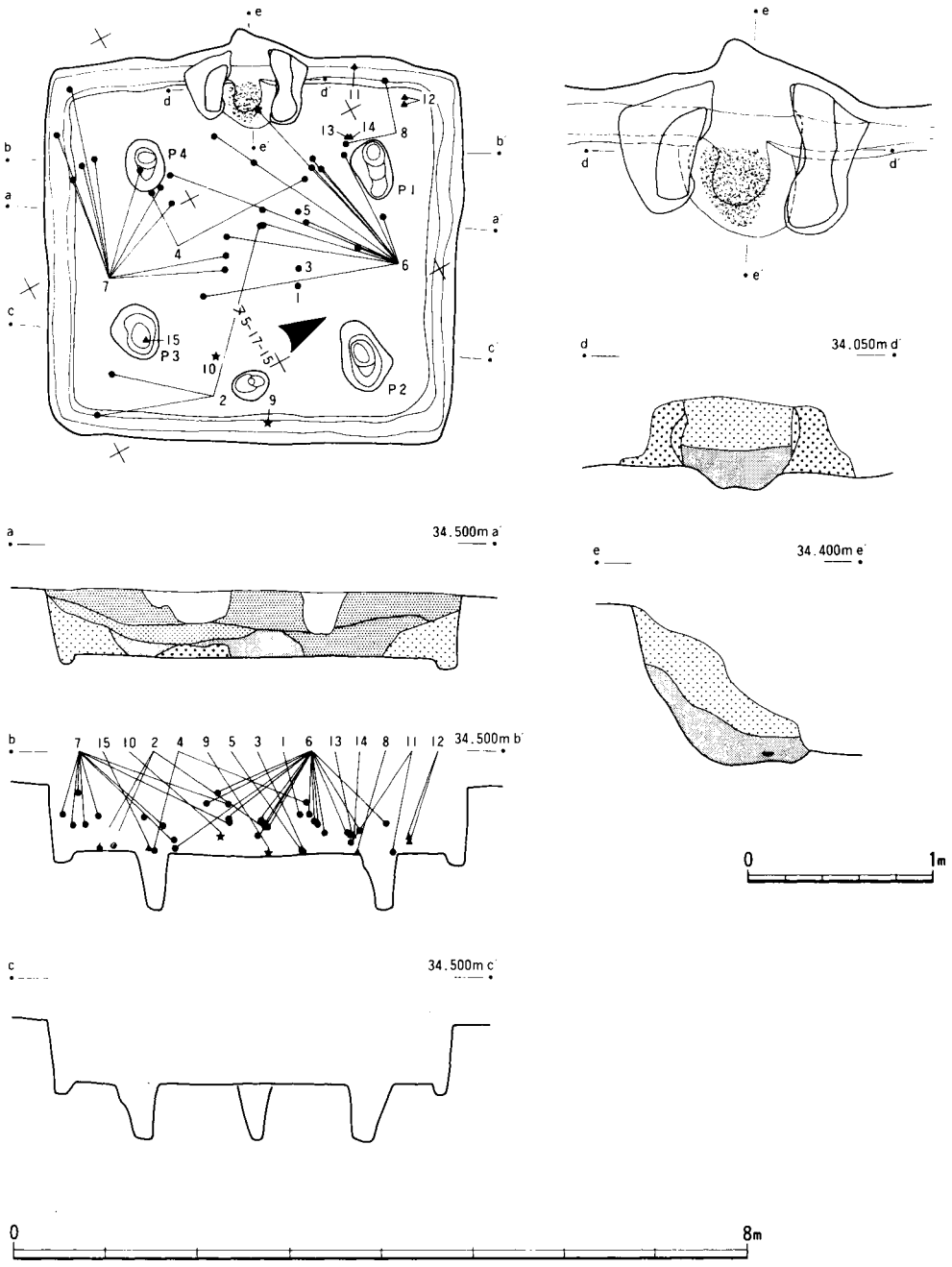
住居の掘方はハードローム層まで掘り込まれ、その面を床面にしている。壁溝は全周し、カマドの下にもみられる。柱穴は４本検出し、対角線上のやや隅によった位置に掘り込まれている。Ｐ２とＰ３の中間の壁によった位置に出入口ピットを検出した。長径40cm、短径30cm、深さは深いところで55cmである。貯蔵穴は検出できなかった。カマドは北西壁の中央に作られ、両袖と火床部を検出した。両袖の内壁には焼土化した部分がみられる。煙道部は壁を三角形に掘り込み、立ち上がり角度は約65度の傾斜をもつ。埋土は壁ぎわに黄褐色土がみられ、中央から上層にかけては、ロームブロックやローム粒を含む暗褐色土が堆積する。

遺物の出土状態は埋土中で、飛び散った状態のものが多く、床面に近い３の土師器杯や５の土師器甕などは中央にみられることから、投棄されたものと考えられる。

竪穴住居跡011（第13図、図版７）　（遺物74Ｐ）

台地東側の縁辺部で、竪穴住居跡010の南東約５ｍの位置にある（ヌ５－18・23グリッド）。標高は34m前後である。中央に床面まで達する攪乱を受けている。形状は正方形で、規模は中規模である。

住居の掘方はハードローム層まで掘り込まれ、その面を床面にしている。壁溝は全周するが、



第12図　竪穴住居跡010

カマドの両袖の手前で途切れている。柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。カマドは北西壁の中央に作られ、両袖と火床部を検出した。両袖の内壁には焼土化した部分がみられる。煙道部は壁を台形に掘り込み、立ち上がり角度は約63度の傾斜をもつ。埋土は黄褐色土が主体である。

遺物の出土点数は少なく、カマド周辺に多くみられるが、いずれも埋土中であり、投棄されたものと考えられる。

竪穴住居跡012（第13図、図版７）　（遺物74Ｐ）

台地東側の斜面中で、竪穴住居跡009の南約２ｍの位置にある（ル５－16・21グリッド）。標高は29m前後である。谷側の床面および壁は検出できなかった。規模は中規模と思われる。

床面はローム粒・焼土粒を多量に含む黄褐色粘質土である。壁溝・柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。カマドは南東隅で、西側壁に対しては直角に作られている。両袖を検出したが、左側の袖の遺存状態は悪い。火床部は検出できなかった。袖の内壁や煙道部の一部には焼土化した部分がみられる。煙道部は壁を三角形に掘り込み、立ち上がり角度は約68度の傾斜をもつ。埋土は暗褐色土で、全体にローム粒や焼土粒を含んでいる。

遺物の出土点数は非常に少ない。カマドの中から支脚が横転した状態で出土している。

竪穴住居跡013（第14図、図版７）　（遺物74Ｐ）

台地東側の縁辺部で、竪穴住居跡010の南約６ｍの位置にある（ヌ５－22・ヌ６－２グリッド）。標高は34.5m前後である。形状はほぼ正方形で、規模は大規模な部類にはいる。

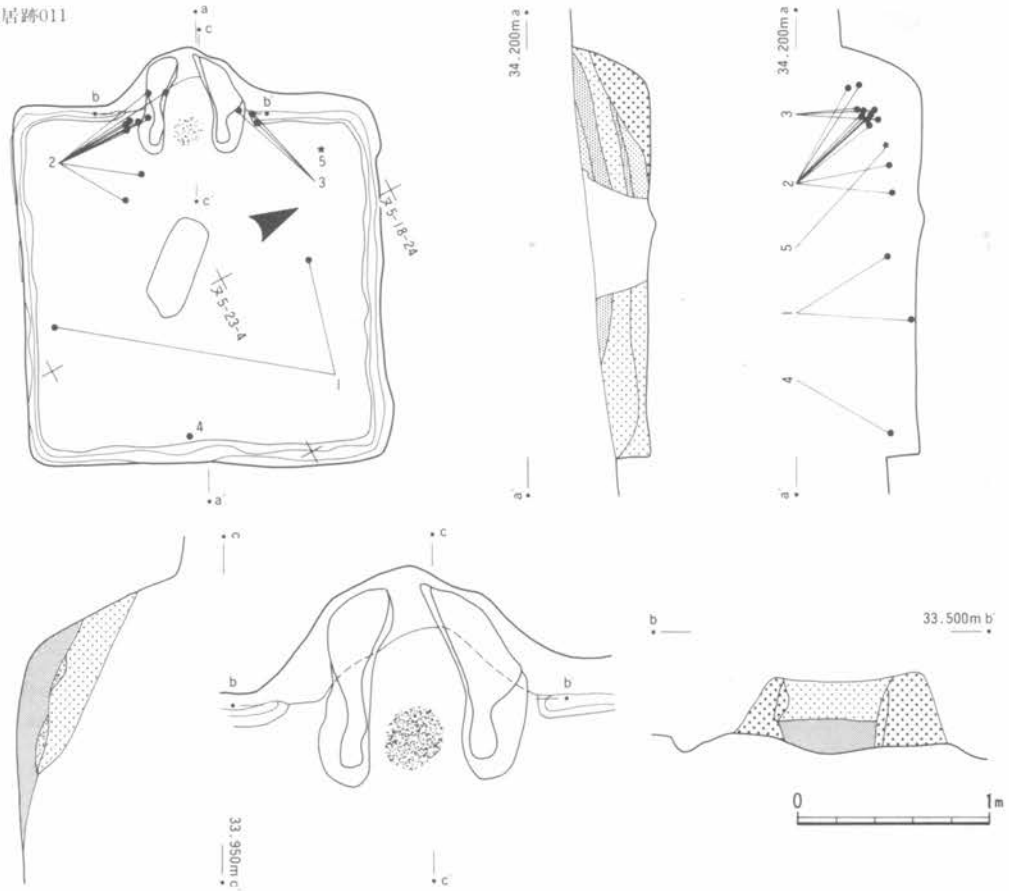
住居の掘方はハードローム層まで掘り込まれ、ロームブロックと褐色土の混合土による貼床が施される。壁溝は全周するが、カマドの下にはみられない。柱穴は４本検出し、対角線上のやや壁によった位置に掘り込まれている。Ｐ３の掘方の形はひさご形をしているが、抜き取りによるものか、建て替えによるものなのかは明らかではない。Ｐ２とＰ３の中間の壁よりの位置に出入口ピットを検出した。上場の長径75cm、短径60cm、深さは深いところで32cmである。貯蔵穴は検出できなかった。カマドは西壁の中央に作られ、両袖と火床部を検出できたが、右側の袖の遺存状態はよくない。煙道部は壁を三角形に掘り込み、立ち上がり角度は約64度の傾斜をもつ。埋土は最上部に黒褐色土がレンズ状に堆積するが、中層から下層にかけては暗黄褐色土が多くみられ、遺物の出土状況などからも中層以下は人為的に埋め戻されたと考えられる。

遺物の出土点数は比較的多く、出土状況は全体に広く飛び散ったような状態である。出土層位も各層にわたり、投棄されたものが多い。14の土師器杯は右袖の中から出土している。

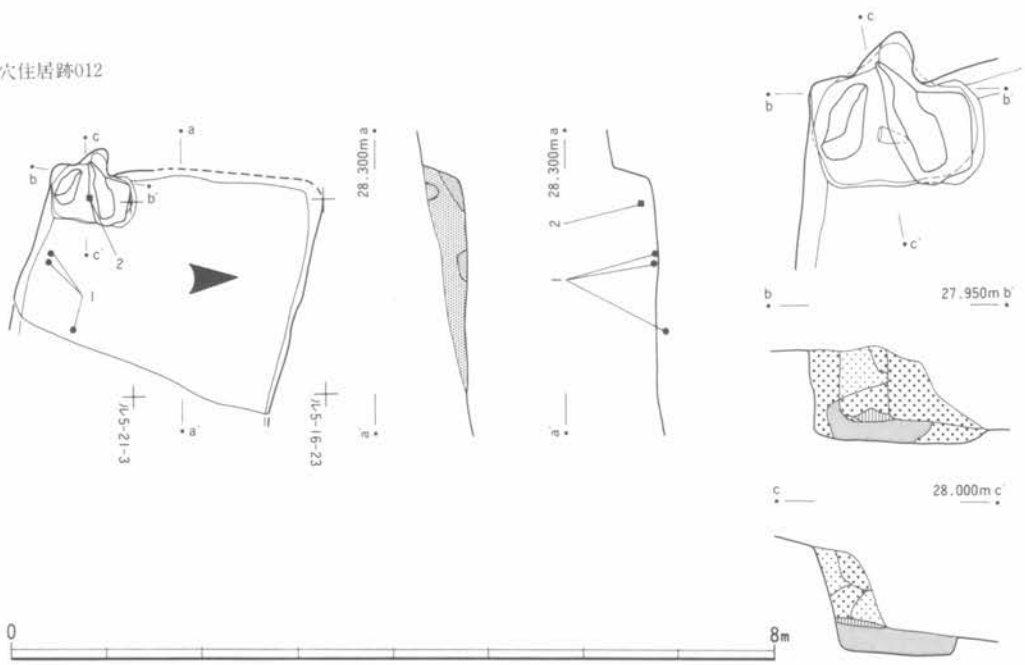
竪穴住居跡014（第15図、図版８）　（遺物77Ｐ）

台地東側の谷によった平坦地で、竪穴住居跡013の西約５ｍにある（ヌ５－21・ヌ６－１グリ

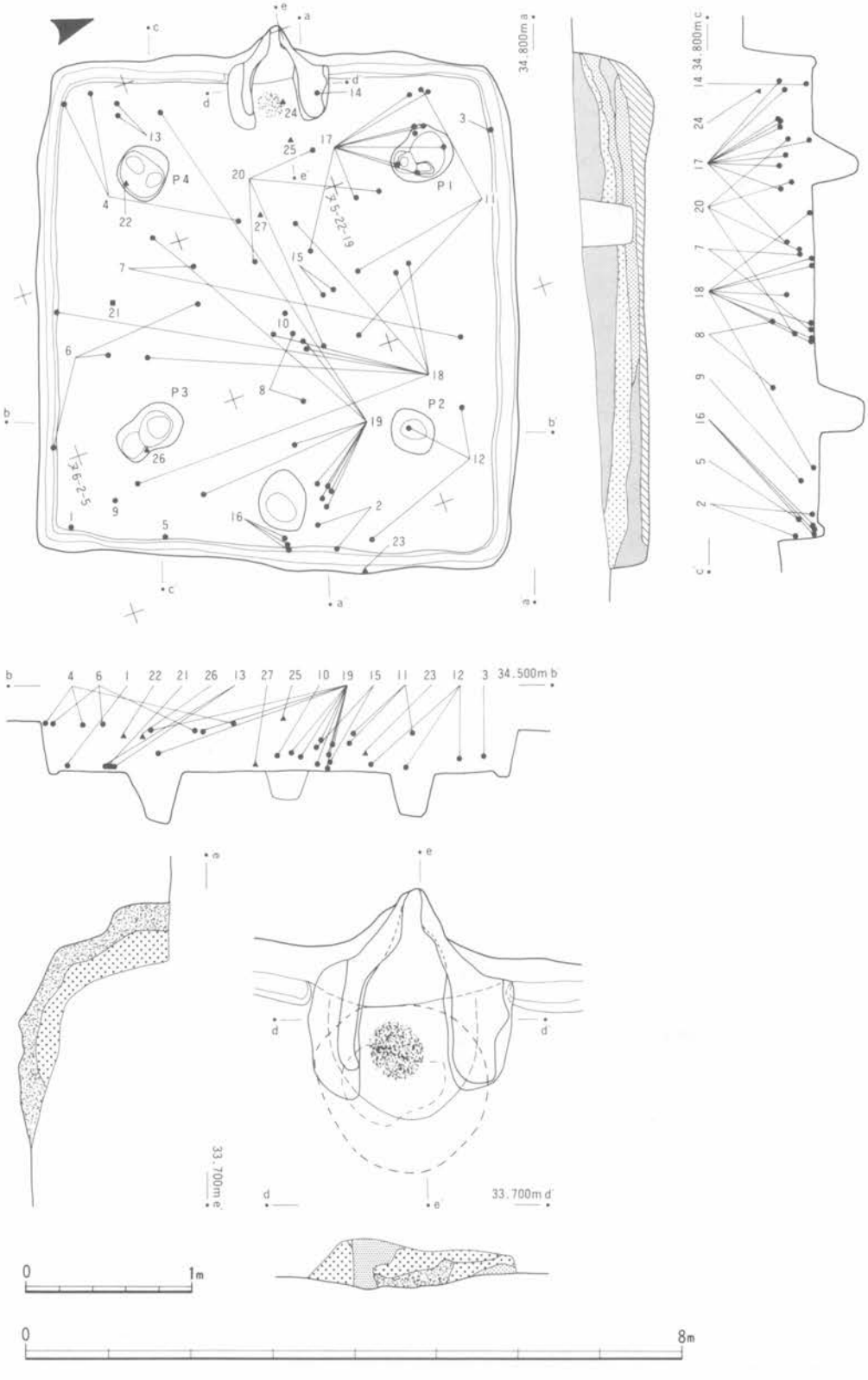
竪穴住居跡011



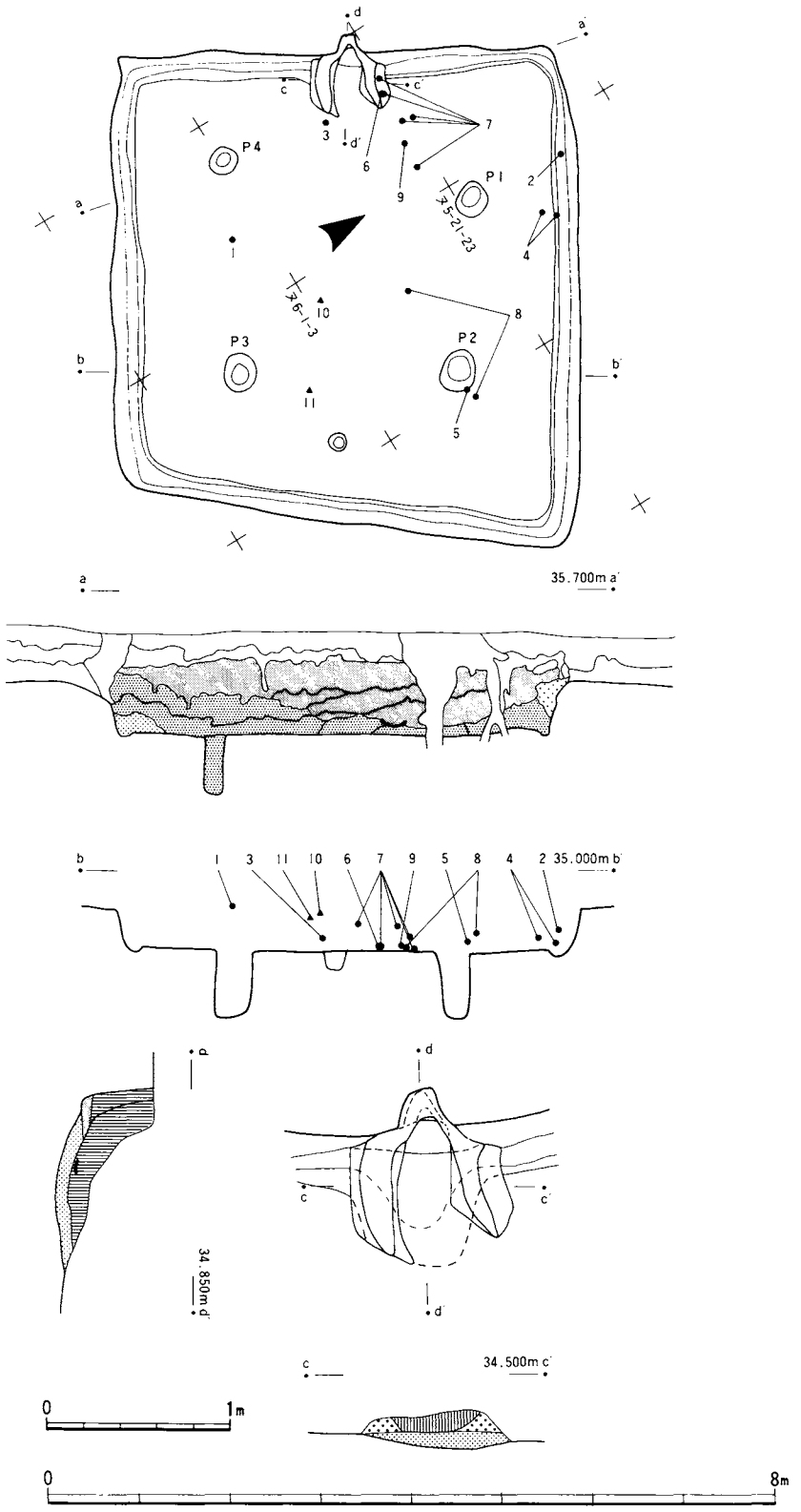
竪穴住居跡012



第13図　竪穴住居跡011・012



第14図　竪穴住居跡013



第15図　竪穴住居跡014

ッド)。標高は35.2m前後である。形状は北東壁が長い台形で、規模は中規模である。

住居の掘方はハードローム層が約20cm掘り込まれ、その面を床面にしている。壁溝は全周し、カマドの下にはみられないが、カマド基底部の掘り込みとつながる。柱穴は4本検出し、P3とP4は対角線上に掘り込まれているが、P1とP2は対角線上より互いによった位置に掘り込まれている。P2とP3の中間の壁によった位置に出入口ピットを検出した。径約20cm、深さは深いところで19cmの小さなピットである。貯蔵穴は検出できなかった。カマドは北西壁のほぼ中央に作られ、両袖を検出したが、遺存状態はあまりよくなく、火床部は検出できなかった。カマド基底部は浅く掘り込まれ、ロームブロック・ローム粒・暗黄褐色土などによって埋め戻されている。煙道部は壁を小さく三角形に掘り込み、立ち上がり角度は約76度の傾斜をもつ。埋土は黒褐色土と暗褐色土が多くみられるが、いずれもローム粒を含んでいる。

遺物の出土点数は少なく、床面上からのものはない。カマド周辺から3の土師器鉢や6・7の土師器甕が出土したが、これらも床面より高い位置で、カマドの袖の遺存状態があまりよくないことなどから、投棄されたものと考えられる。

竪穴住居跡015（第16図、図版8）　　（遺物79P）

台地東側の縁辺部で、竪穴住居跡013の南西約2mの位置にある（ヌ6－2グリッド)。標高は35m前後である。形状はほぼ正方形で、規模は中規模である。

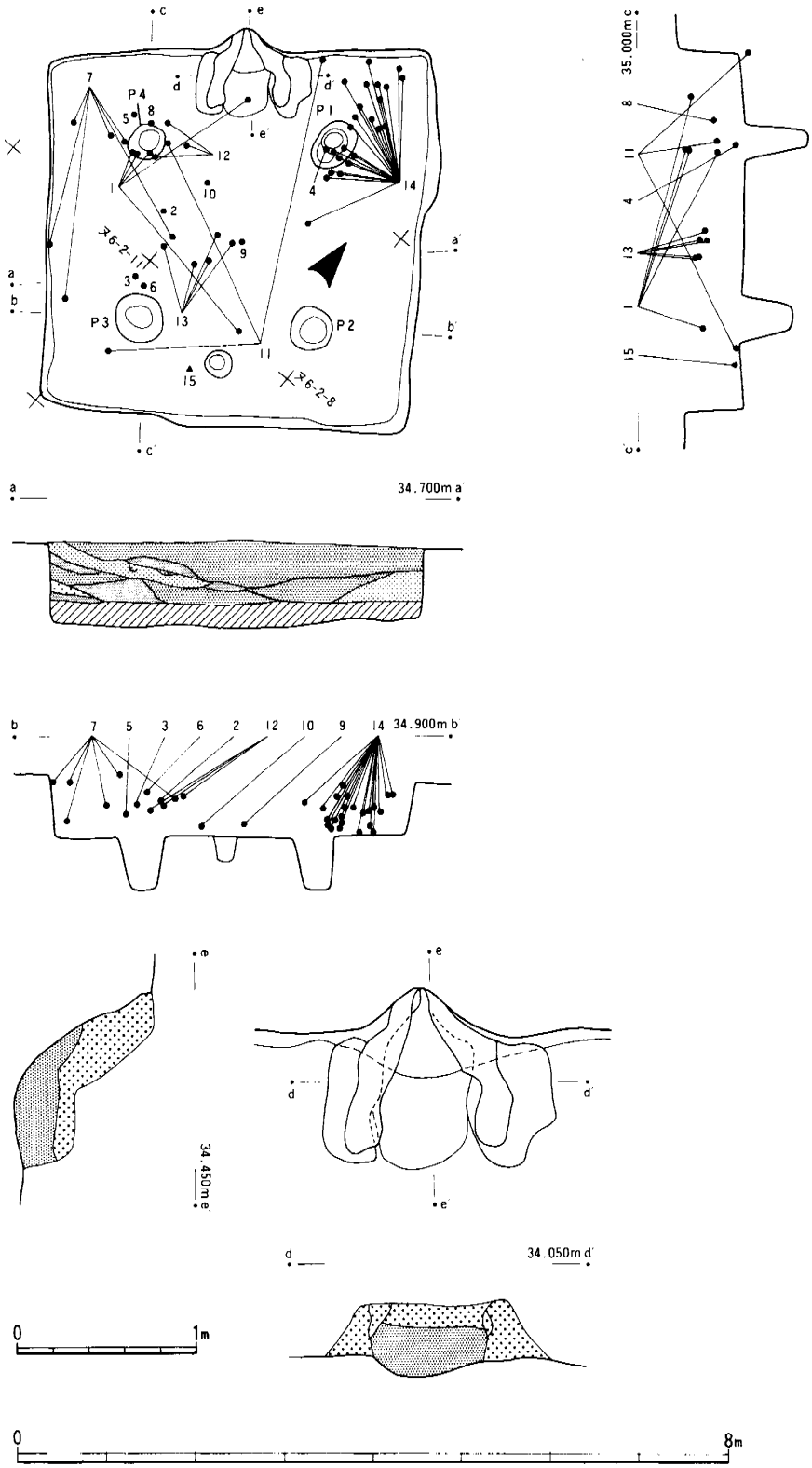
住居の掘方はハードローム層まで掘り込まれ、ロームブロック・焼土粒・黄褐色土などによる貼床が、ほかの竪穴住居跡に比べて厚く施される。壁溝は検出できなかった。柱穴は4本検出し、P4を除いて対角線上に掘り込まれている。P2とP3の中間の壁によった位置に出入口ピットを検出した。径30cm、深さが深いところで23cmである。貯蔵穴は検出できなかった。カマドは北西壁の中央に作られ、両袖を検出したが、火床部は検出できなかった。遺存している両袖の内壁の上部には焼土化した部分がみられる。煙道部は壁を三角形に掘り込み、立ち上がり角度は約56度の傾斜をもつ。埋土は下層から中層にかけて黒褐色土や黄褐色土などが交互に堆積し、上層は黒褐色土である。いずれの層もローム粒や焼土粒を含んでいる。

遺物は床面上から出土したものは少なく、接合関係からは広く飛び散った状態がみられる。投棄されたものが多いと考えられる。

竪穴住居跡016（第17図、図版8）　　（遺物81P）

台地東側の斜面中で、竪穴住居跡015の南東約24mの位置にある（ヌ6－9グリッド)。標高は30.5m前後である。東西両壁の一部と南側の床面および壁は検出できなかった。形状は不明で、規模は小規模と思われる。

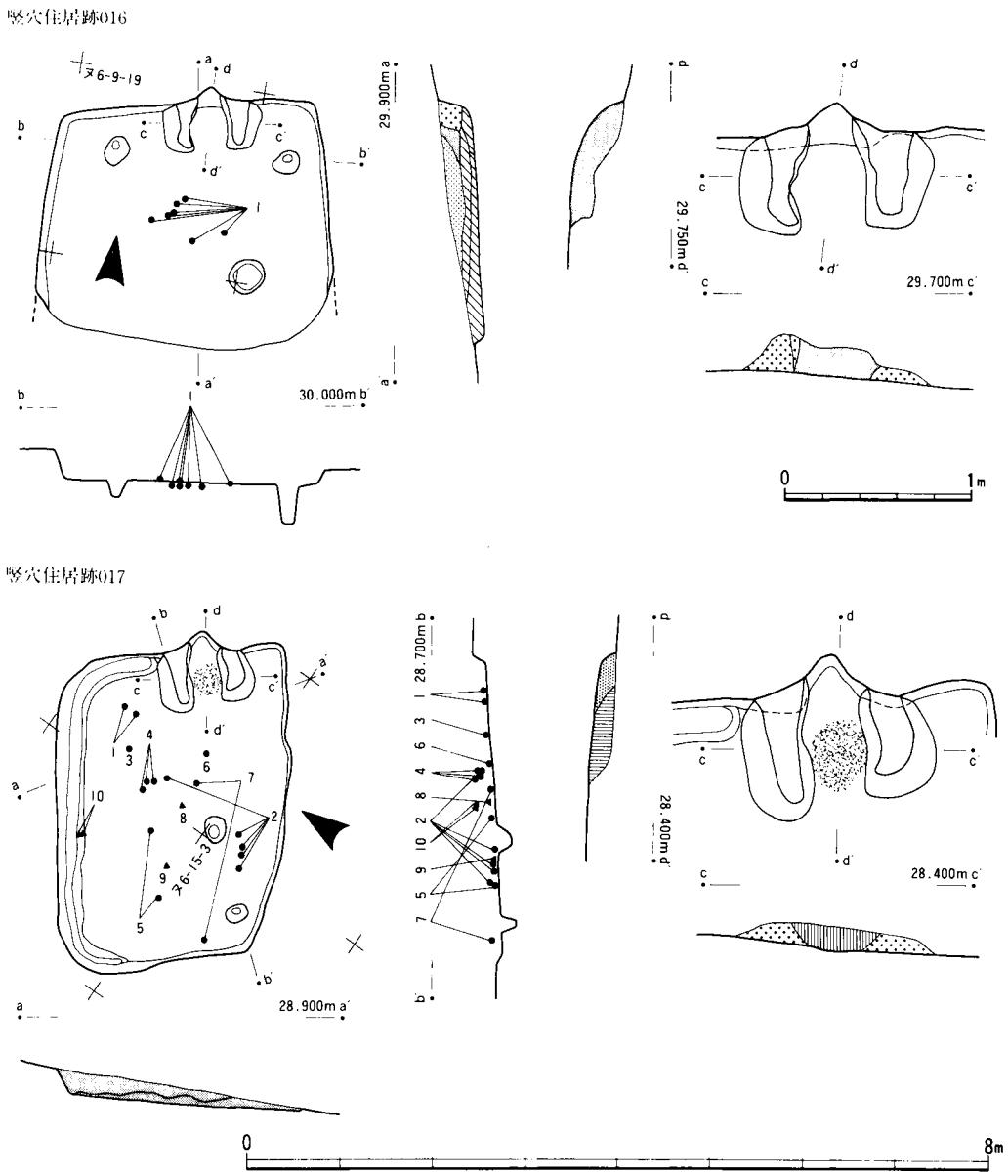
住居の掘方は台地側は一部下末吉ローム層まで掘り込まれているが、谷側は黒色土中で、白



第16図　竪穴住居跡015

色粘土粒と黒褐色土による貼床が施される。柱穴は3本検出したが、南側の1本は柱穴としてよいかやや疑問が残る。壁溝・貯蔵穴は検出できなかった。カマドは北壁の中央よりやや東によった位置に作られ、両袖を検出したが、右袖の遺存状態はやや悪い。火床部は検出できなかった。左袖の内壁の一部に焼土化した部分がみられる。煙道部は壁を三角形にわずかに掘り込み、立ち上がり角度は約39度の傾斜をもつ。埋土は焼土粒やローム粒を含む暗褐色土である。

遺物の出土点数は少なく、図示できた1の土師器甕はつぶれたような状態で出土したが、本住居跡の廃棄にともなって投棄されたものと考えられる。

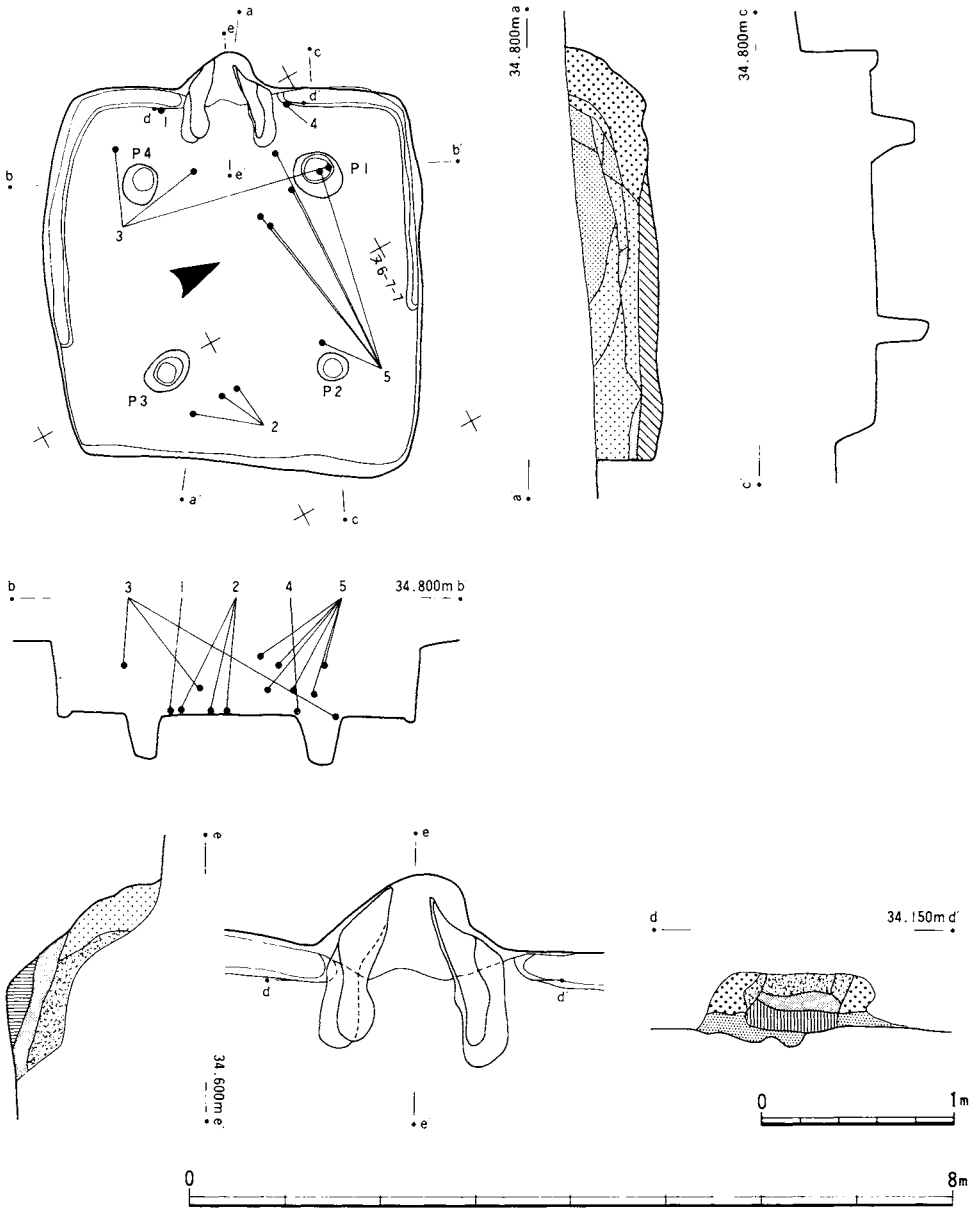


第17図　竪穴住居跡016・017

竪穴住居跡017（第17図、図版９）　　（遺物81Ｐ）

竪穴住居跡016と同じ斜面中で、016の東約５ｍの、さらに谷によった位置にある（ヌ６－10・15グリッド）。標高は29.5m前後である。形状はカマドの中心を通る軸方向が長い長方形で、規模は小規模である。

住居の掘方は台地側は下末吉ローム層まで掘り込まれるが、谷側はわずかにソフトローム層に達しているだけで、その面を床面にしている。壁溝は台地側にだけみられ、カマドの下にもみられない。柱穴は検出できなかったが、中央と南隅に小ピットを検出した。中央のピットは



第18図　竪穴住居跡018

径24～30cm、深さ18cmで、南側のピットは径17～25cm、深さ18cmである。カマドは北東壁のほぼ中央に作られ、両袖と火床部を検出した。しかし、火床部はそれほど明確なものではなく、袖の内壁にも焼土化した部分はほとんどみられない。埋土はいずれの層もローム粒や焼土粒を含み、下層は白色の粘土粒を含んでいる。

遺物の出土点数は少ないが、床面に接しているものや、わずかに床面より高い位置から出土したものなどがみられる。しかし、破片資料がほとんどであることから投棄されたものと考えられる。

竪穴住居跡018（第18図、図版９）　（遺物83Ｐ）

台地南東側の縁辺部で、竪穴住居跡015の南約５ｍの位置にある（ヌ６－７グリッド）。標高は34.7m前後である。形状はほぼ正方形で、規模は中規模である。

住居の掘方はハードローム層まで掘り込まれ、ローム粒・ロームブロック・黄褐色土などの混合土による貼床が施される。壁溝はカマドのある壁とその両側の壁の中央付近までで、カマドの下にはみられない。柱穴は４本検出し、Ｐ４を除きわずかに対角線上をはずれる位置に掘り込まれている。貯蔵穴は検出できなかった。カマドは北西壁の中央に作られ、両袖を検出したが、火床部は検出できなかった。両袖の内壁には焼土化した部分がみられ、それに続くように天井部の崩壊土と思われる焼土化したカマド構築材がみられた。基底部にはローム粒を含む暗褐色土がみられ、その上に袖が作られたものと思われる。煙道部は壁を三角形に掘り込み、立ち上がり角度は約58度の傾斜をもつ。埋土はローム粒やロームブロックを含んだ黄褐色土が大部分を占めており、遺物の出土点数が少ないことなどとともに、人為的に比較的短時間のうちに埋め戻されたと思われる。

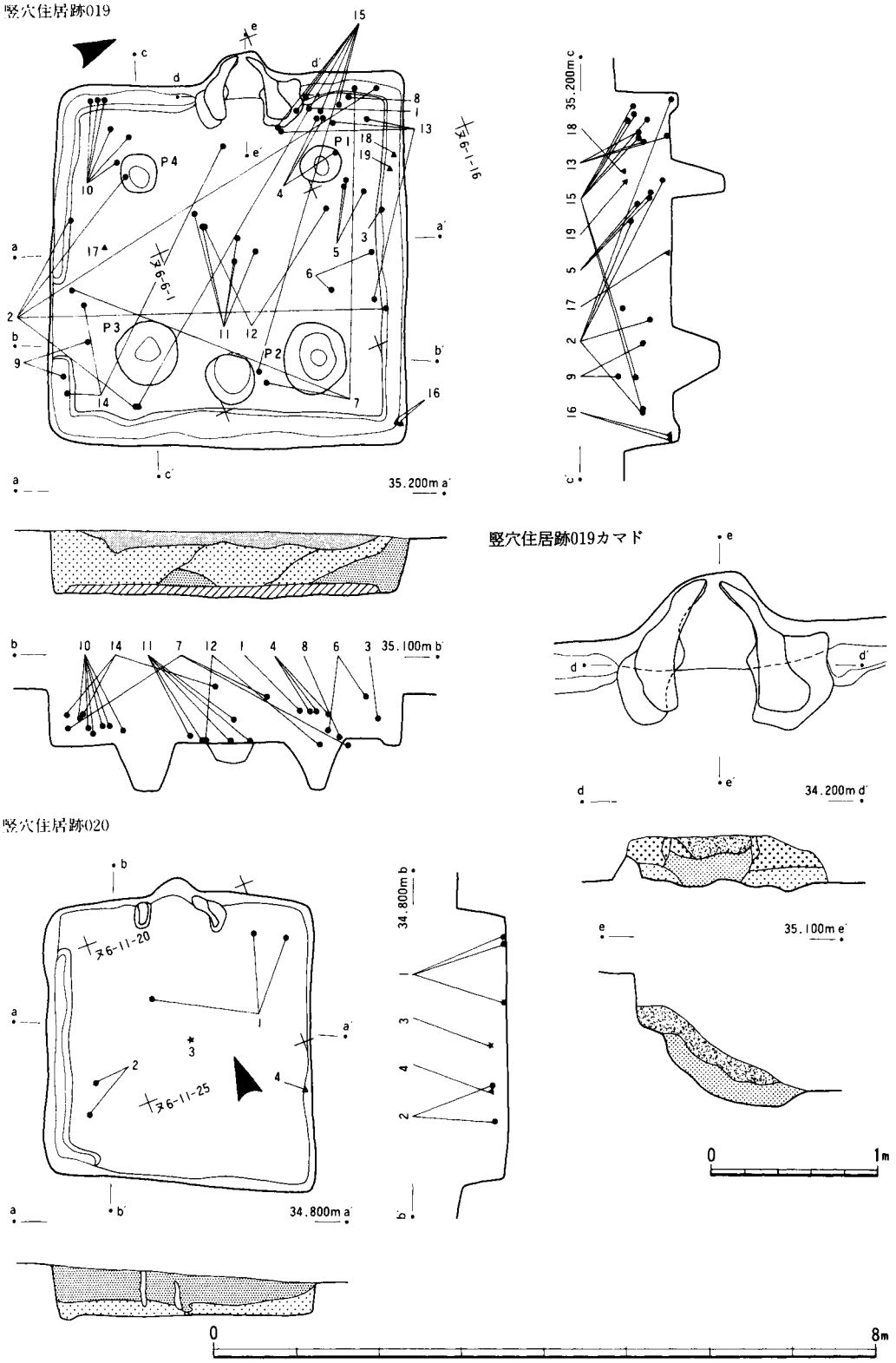
遺物の出土点数は非常に少なく、カマドの袖付近から出土した１の須恵器杯と４の土師器鉢は床面より高い位置から出土しているので、決して本来の位置を保っていたものではないと考えられる。

竪穴住居跡019（第19図、図版９）　（遺物83Ｐ）

台地南東側の縁辺部に多少よった台地平坦地で、竪穴住居跡018の北西約８ｍの位置にある（チ６－５・10、ヌ６－１・６グリッド）。標高は35.3m前後である。形状は正方形で、規模は中規模である。

住居の掘方はハードローム層まで掘り込まれ、ロームブロックを含んだ暗黄褐色土による貼床が施される。壁溝は南側の壁の一部で途切れるほかは全周するが、カマドの下にはみられない。柱穴は４本検出し、いずれも対角線上に掘り込まれている。掘方の径は比較的大きい。Ｐ２とＰ３の中間の壁溝に接するような位置に出入口ピットを検出した。径60cm、深さは深いと

竪穴住居跡019



竪穴住居跡020

第19図　竪穴住居跡019・020

ころで20cmである。壁方向から多少斜めに掘り込まれている。貯蔵穴は検出できなかった。カマドは北西壁の中央に作られ、両袖を検出したが、火床部は検出できなかった。基底部には貼床の土層に類似したロームブロックを含んだ黄褐色土がみられ、左袖はローム層を掘り残している。両袖の内壁の上の方に焼土化した部分がみられる。煙道部は三角形に壁を掘り込み、立ち上がり角度は約58度の傾斜をもつ。埋土はロームブロックや焼土粒を含んだ黄褐色土が厚く堆積している。

遺物の出土点数は比較的多い。8の土師器鉢は完形で床面とほぼ同じ高さから正立した状態で出土している。そのほかの遺物は埋土中のものが大部分で、床面近くから出土したものも飛び散ったような状態であることから、投棄されたものと考えられる。

竪穴住居跡020（第19図、図版10）　（遺物85P）

台地南東側の縁辺部で、竪穴住居跡018の南約10mの位置にある（ヌ6－11グリッド）。標高は34.5m前後である。カマド対壁は一部攪乱を受けている。形状はカマドの中心を通る軸方向がやや長い長方形で、南隅が若干突き出ている。規模は小規模である。

住居の掘方はハードローム層上面まで掘り込まれ、その面を床面にしている。壁溝は北西壁から西隅にかけてみられる。柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。カマドは北東壁の中央に作られ、両袖を検出したが、遺存状態は悪く、火床部は検出できなかった。カマドの前面に広い範囲にわたってカマド構築材の崩壊土がみられたことから、住居を廃絶した際にある程度カマドを壊した可能性が考えられる。煙道部はわずかに壁を掘り込み、立ち上がり角度は約63度の傾斜をもつ。埋土は下層にローム粒を多く含む黄褐色土が比較的均一な厚さで堆積し、その上に暗褐色土が堆積している。

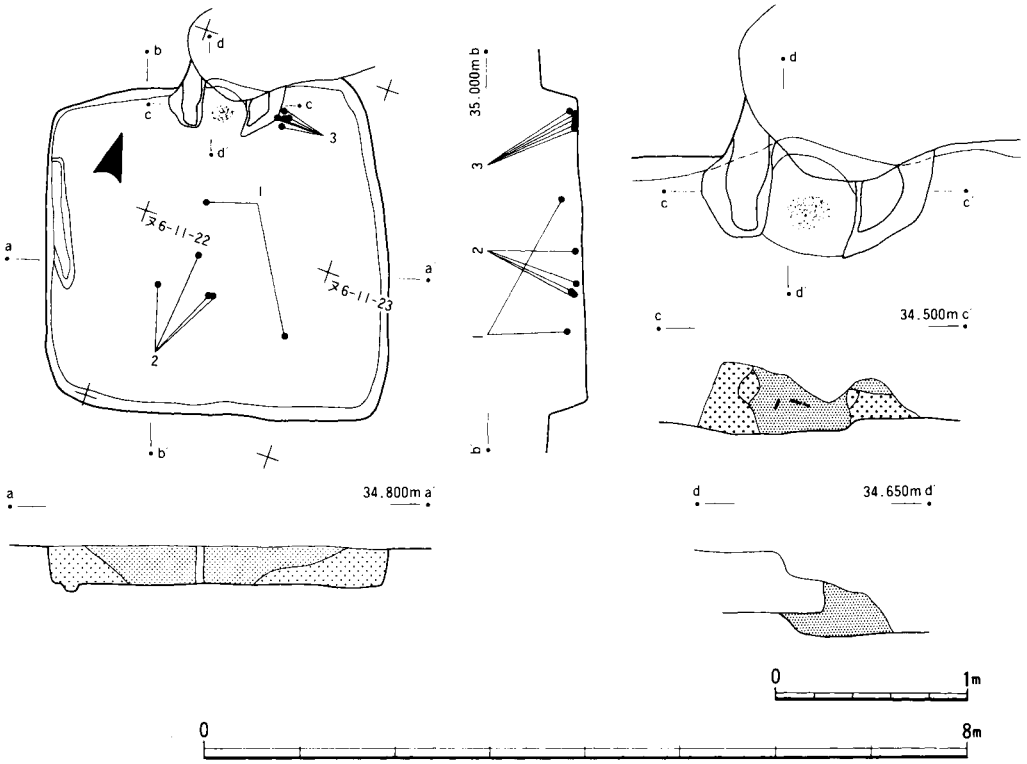
遺物の出土点数は少なく、下層の黄褐色土から出土したものが多い。

竪穴住居跡021（第20図、図版10）　（遺物88P）

台地南東側の縁辺部で、竪穴住居跡020の西約2mの位置にある（ヌ6－11グリッド）。標高は34.8m前後である。カマド煙道部は床面まで達する攪乱を受けている。形状は南西壁の長さが短い台形で、規模は小規模である。

住居の掘方はハードローム層上面まで掘り込まれ、その面を床面にしている。床面は特に硬くなっている部分もみられい。壁溝は西壁の一部にみられるだけである。柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。カマドは北西壁の中央に作られ、左袖と右袖の一部および火床部を検出した。袖の内壁には焼土化した部分がみられる。埋土はローム粒を含む黄褐色土が主体である。

遺物の出土点数は少なく、図示できたものも破片資料である。

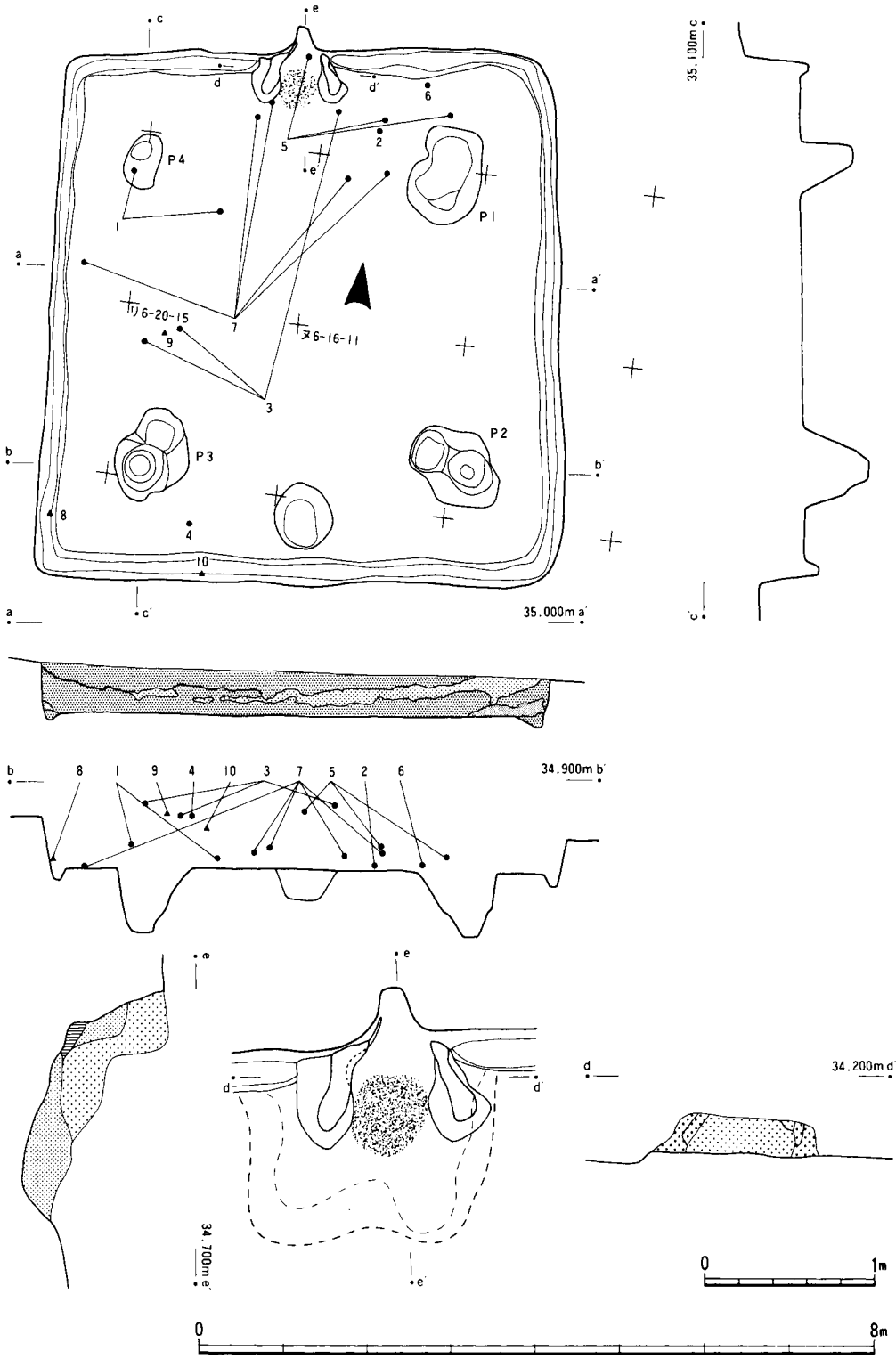


第20図　竪穴住居跡021

竪穴住居跡022（第21図、図版10）　（遺物88P）

台地南東側の縁辺部で、竪穴住居跡021の南西約1mの位置にある（リ6－20・ヌ6－16グリッド）。標高は34.5m前後である。形状はカマドのある壁の長さが短い台形で、規模は大規模な部類にはいる。

住居の掘方はハードローム層まで掘り込まれる。壁溝は全周するが、カマドの下にはみられない。柱穴は4本検出し、ほぼ対角線上に掘り込まれている。P4を除いて柱穴の掘方が、対角線上に長いひさご形をしており、いずれも外側の方が深くなっている。住居跡の形状が台形をしていることと、P4だけ掘方がひさご形でないことなどから、P4を起点にして柱の建て替えによる住居の拡張が行われた可能性がある。P2とP3の中間の壁よりに出入口ピットを検出した。長径76cm、短径68cm、深さは深いところで42cmである。貯蔵穴は検出できなかった。カマドは北壁の中央に作られ、両袖と火床部を検出した。しかし、両袖の遺存状態はあまりよくない。両袖の内壁には焼土化した部分がみられる。カマドの基底部は全体に掘りくぼめ、その部分を焼土化したカマドの構築材やロームブロックなどが混在する黄褐色土で埋め戻している。煙道部は壁を幅20cm、長さ30cmほど掘り込み、立ち上がり角度は約67度の傾斜をもつ。埋土は全体にローム粒を含むが、中層に黄褐色土を挟むようにして上下に暗褐色土が堆積する。



第21図　竪穴住居跡022

遺物は埋土中から出土したものが多く、投棄されたものが多いと思われる。

竪穴住居跡023（第22図、図版11）　（遺物89P）

台地南東側の平坦地で、竪穴住居跡022の北約5mの位置にある（リ6－15グリッド）。標高は35.2m前後である。形状は東西方向にわずかに長いが、ほぼ正方形といってよい。規模は中規模である。

住居の掘方はソフトローム層まで掘り込まれ、その面を床面にしている。比較的掘り込みの浅い住居跡である。壁溝は検出できなかった。柱穴は4本検出し、ほぼ対角線上に掘り込まれている。P4の掘方がカマドのある壁にほぼ平行するひさご形であるが、柱の抜き取り痕跡であるのか、柱の建て替えによるものなのかは明かではない。P2とP3の中間の壁よりの位置に出入口ピットを検出した。長径30cm、短径20cm、深さは深いところで22cmである。貯蔵穴は検出できなかった。カマドは北壁の中央に作られ、両袖と火床部を検出したが、両袖の遺存状態はあまりよくない。煙道部は壁を半円形に掘り込み、立ち上がり角度は約40度の傾斜をもつ。埋土は部分的に黄褐色土がみられるが、ローム粒を含む暗褐色土がおもに堆積している。

遺物の出土点数はあまり多くなく、埋土中からのものが多い。カマドの火床部の位置から、底部から胴部の中ほどまでの土師器甕が、正立した状態で出土している。

竪穴住居跡024（第22図、図版11）　（遺物89P）

台地南側の平坦地で、竪穴住居跡023の南東約2mの位置にある（リ6－20グリッド）。標高は023とほぼ同じ35.2m前後である。形状は東西方向がやや長いが、ほぼ正方形といえる。規模は小規模である。カマドの大部分と北西隅に掘立柱建物跡043の柱穴掘方による破壊を受ける。

住居の掘方はソフトローム層まで掘り込まれ、その面を床面にしている。壁溝・貯蔵穴は検出できなかった。柱穴は4本検出し、いずれもやや対角線上からはずれる位置に掘り込まれている。カマドは北壁の中央に作られ、両袖と火床部の一部を検出したが、両袖の遺存状態は悪い。埋土はわずかに暗褐色土がみられるが、おもにロームブロックを含む黄褐色土が堆積している。

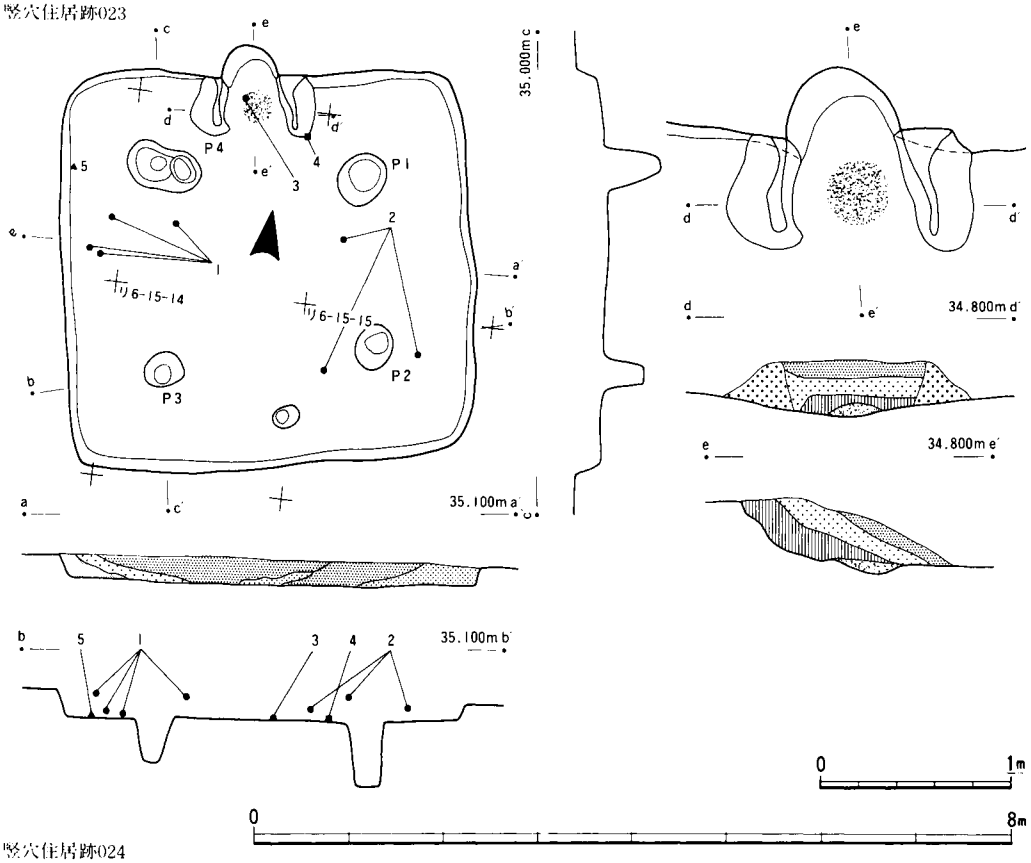
遺物の出土点数は少なく、埋土の上層から出土したものが多い。

竪穴住居跡025（第23図、図版11）　（遺物89P）

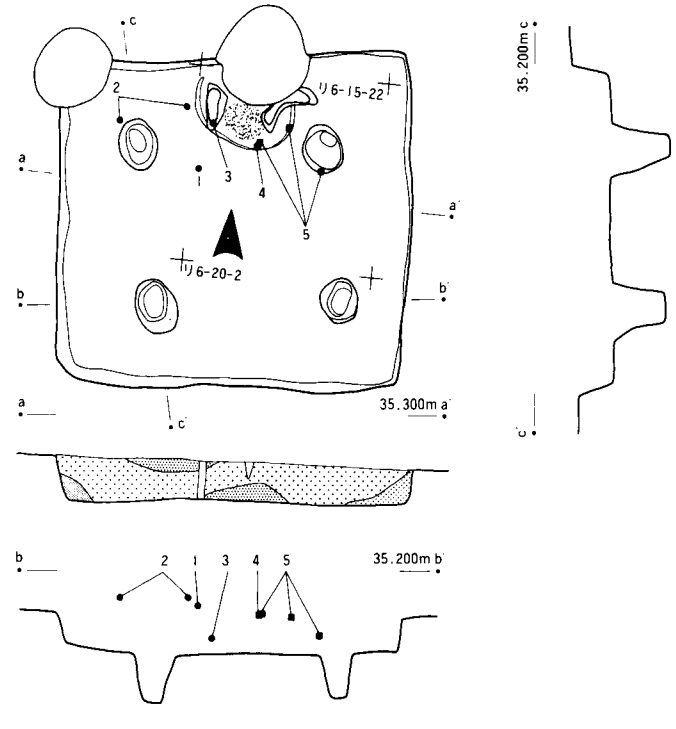
台地南側の平坦地で、竪穴住居跡024の北約6mの位置にある（リ6－14グリッド）。標高は35.5m前後である。形状はカマドの中心を通る軸方向がやや長い長方形で、各隅は丸みをもつ。規模は小規模である。

住居の掘方はソフトローム層まで掘り込まれ、その面を床面にしている。かなり掘り込みの

竪穴住居跡023

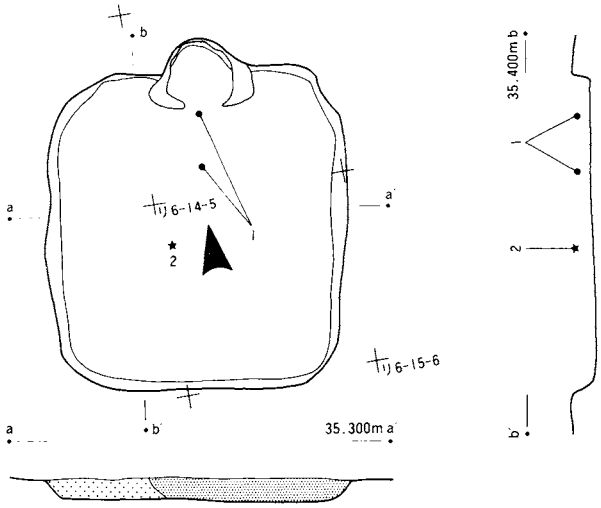


竪穴住居跡024

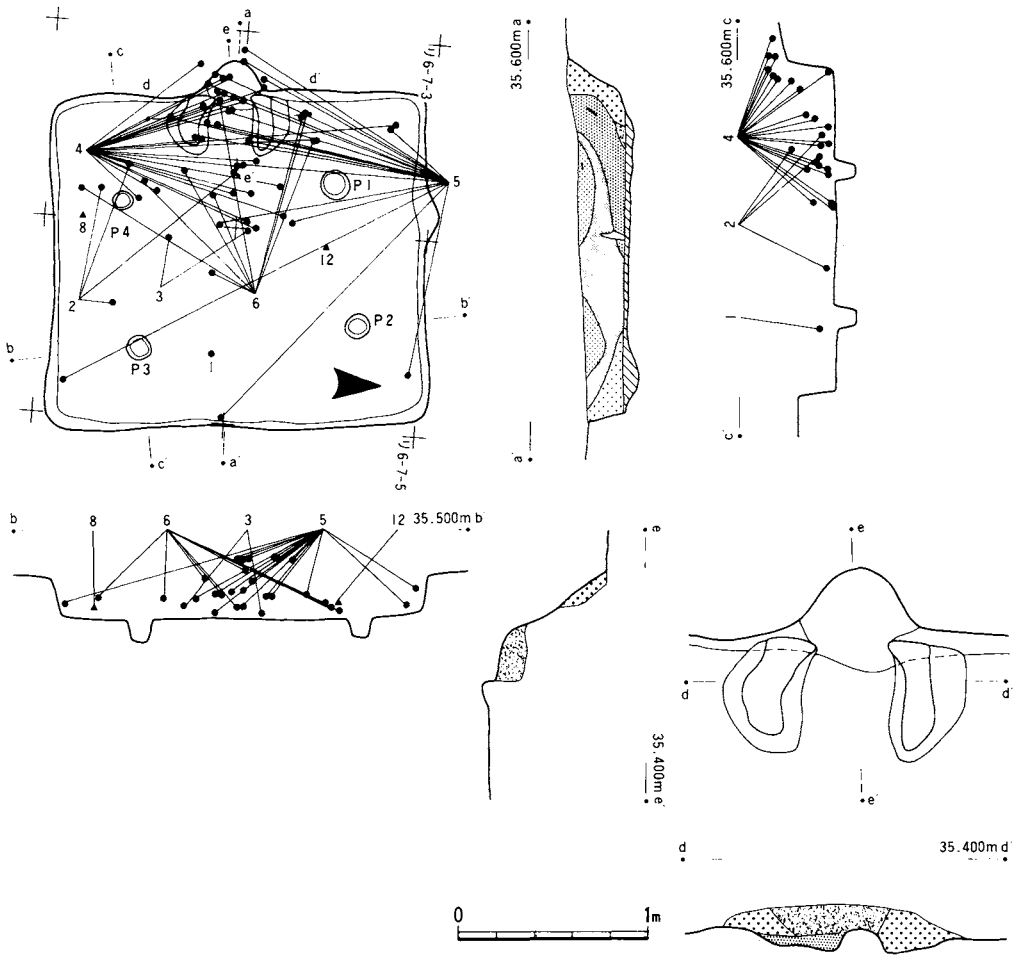


第22図　竪穴住居跡023・024

竪穴住居跡025



竪穴住居跡026



第23図　竪穴住居跡025・026

浅い住居跡である。壁溝・柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。カマドは北壁の中央に作られ、両袖を検出したが、遺存状態は悪い。火床部は検出できなかった。煙道部は壁を半円形に掘り込み、立ち上がり角度は約44度の傾斜をもつ。埋土は黄褐色土と暗褐色土が堆積するが、いずれもローム粒を含む。

遺物の出土点数は少なく、埋土中からの出土である。カマドの前面から1の土師器甕がまとまって出土したが、これも床面より高い位置であり、投棄されたものと思われる。

竪穴住居跡026（第23図、図版12）　（遺物89P）

台地南西側の平坦地で、竪穴住居跡025の北西約20mの位置にある（リ6－7グリッド）。標高は35.7m前後である。形状はカマドの中心を通る軸に直行する軸方向が長い長方形で、規模は中規模である。

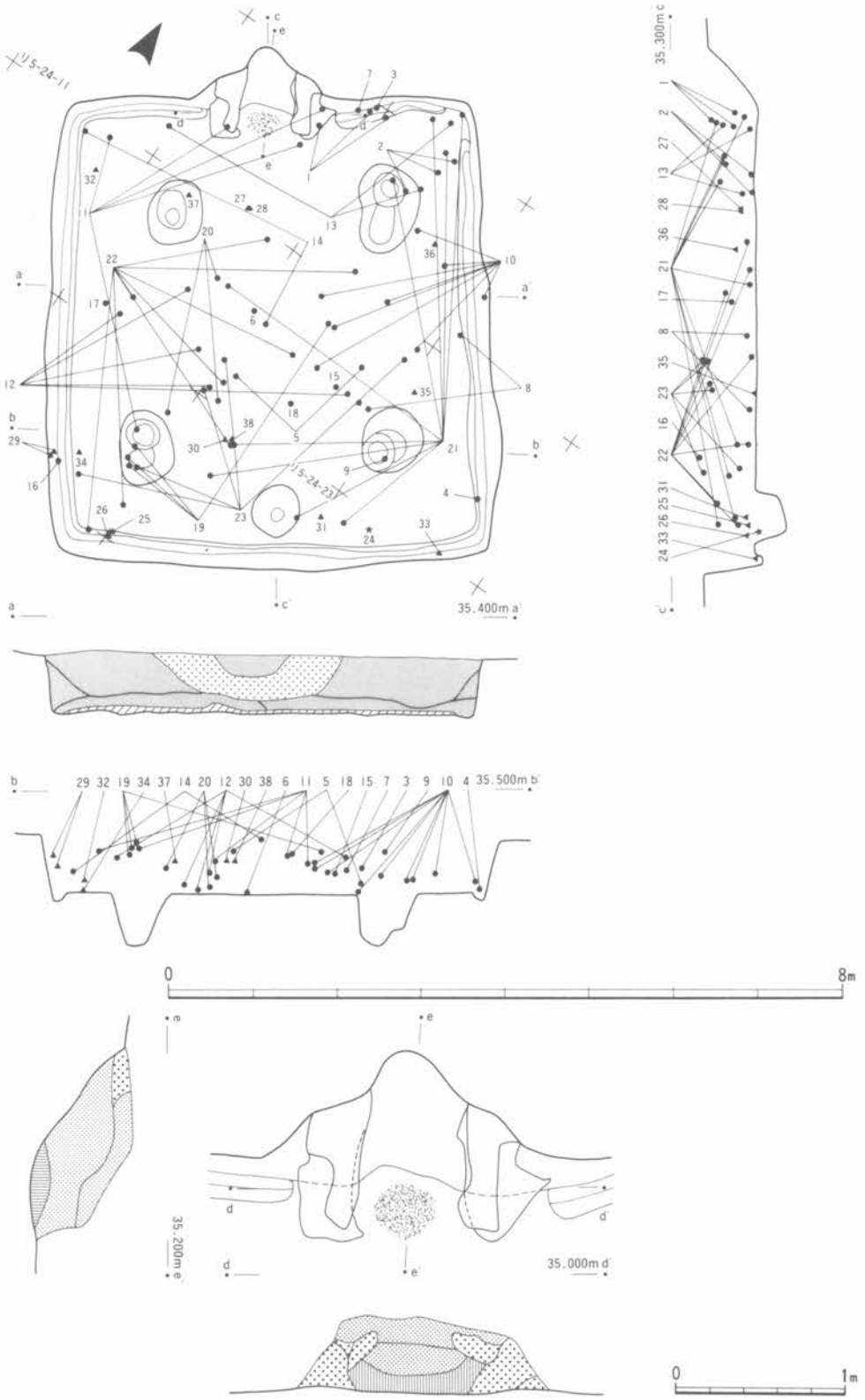
住居の掘方はソフトローム層とハードローム層との境付近まで掘り込まれ、2～15cmほどの厚さで貼床が施されている。壁溝・貯蔵穴は検出できなかった。柱穴は4本検出し、P1とP3は対角線上に掘り込まれている。北壁のわずかな掘り込みについては性格不明である。カマドは西壁の中央に作られ、両袖を検出したが、遺存状態は悪く、火床部は検出できなかった。煙道部は壁を半円形に掘り込み、立ち上がり角度は約60度の傾斜をもつ。煙道部の上の方には構築材がみられ、立ち上がりの角度を調節したものと思われる。埋土はローム粒を含む暗褐色土や黒褐色土が堆積し、カマドの周辺にはカマドの崩壊土の混入がみられる。

遺物の出土点数はあまり多くないが、カマド周辺から中央部にかけて多くみられる。しかし、これらは破片が広く飛び散り、接合資料は中央部の遺物ほど床面に近いなど、明らかに投棄されたものと思われる。

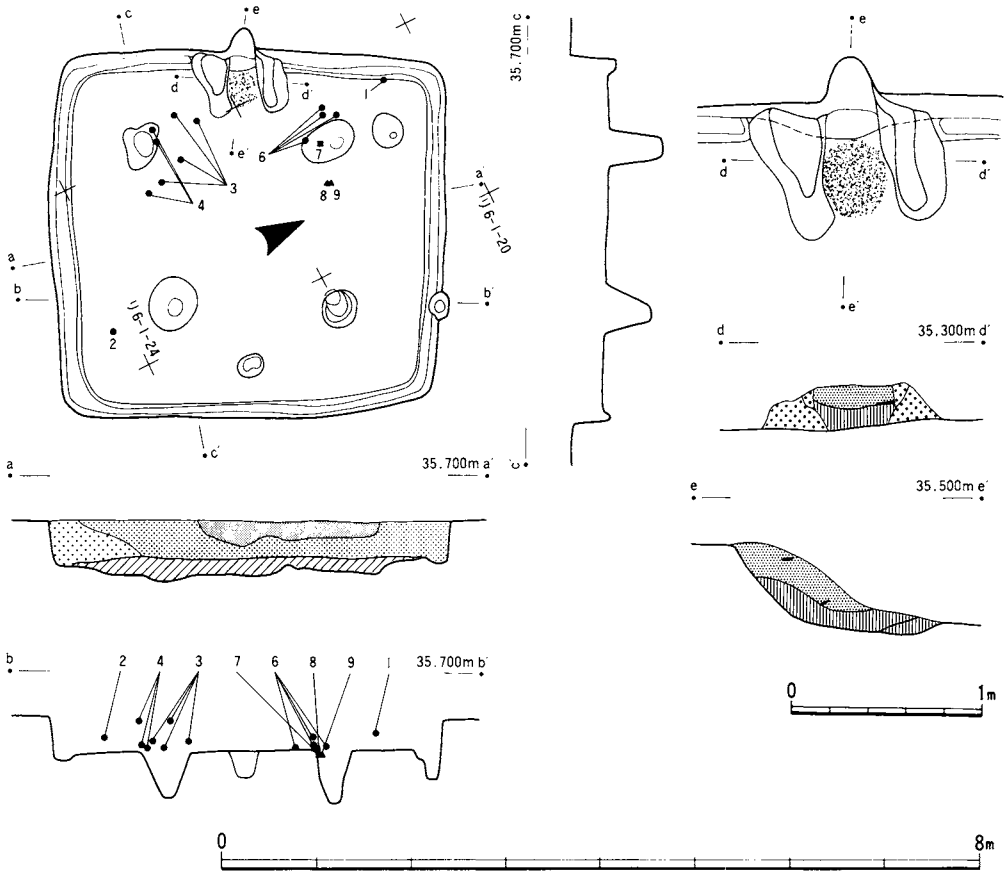
竪穴住居跡027（第24図、図版12）　（遺物90P）

台地のほぼ中央の平坦地で、竪穴住居跡028の北東約18mの位置にある（リ5－24グリッド）。標高は竪穴住居跡026とほぼ同じ35.7m前後である。形状は正方形で、規模は大規模である。

住居の掘方はハードローム層まで掘り込まれ、ロームブロックと黒褐色土の混合土層による貼床が施される。壁溝は全周するが、カマドの下にはみられない。柱穴は4本検出し、いずれもほぼ対角線上に掘り込まれている。また、P1からP3の掘方には柱の抜き取り痕跡と思われる掘り込みがみられる。P2とP3の中間の壁寄りに出入口ピットを検出した。径58cm前後、深さは深いところで37cmである。貯蔵穴は検出できなかった。カマドは北西壁の中央に作られ、両袖と天井部のごく一部と火床部を検出した。煙道部は壁を三角形に掘り込み、立ち上がり角度は約43度の傾斜をもつ。埋土は黒褐色土を主体とするが、中央部に黄褐色土の堆積がみられる。



第24図　竪穴住居跡027



第25図　竪穴住居跡028

遺物の出土点数は比較的多いが、特に集中しているようなところはみられず、埋土中からのものが多い。接合関係からは広い範囲で飛び散っていることがわかり、大部分の遺物が投棄されたものと思われる。

竪穴住居跡028（第25図、図版12）　（遺物92Ｐ）

台地南西側の平坦地で、竪穴住居跡026の北西約５ｍの位置にある（リ６－１グリッド）。標高は35.8m前後である。形状はカマドの中心を通る軸に直行する軸方向が長い長方形で、規模は中規模である。

住居の掘方はハードローム層上面まで掘り込まれ、ロームブロックや焼土ブロックを含んだ暗褐色土による貼床が施される。掘方は中央部が深く掘り込まれている。壁溝は全周するが、カマドの下にはみられない。柱穴は４本検出し、Ｐ１を除いて対角線上に掘り込まれている。Ｐ２とＰ３の中間の壁寄りに出入口ピットを検出した。長径28cm、短径22cm、深さは深いところで25cmである。カマド右側の北隅に規模の小さい貯蔵穴を検出した。北東壁にみられる小ピ

ットは本住居跡に伴うものではなく、性格は不明である。カマドは北西壁の中央に作られ、両袖と火床部を検出した。両袖の内壁には焼土化した部分がみられる。煙道部は壁をU字形に掘り込み、立ち上がり角度は約48度の傾斜をもつ。埋土は南側に黄褐色土の堆積がみられるほかは、暗褐色土の上に黒褐色土が堆積する。

遺物の出土点数はそれほど多くないが、カマドの周辺にやや集中している。破片資料が多く、完形に復元できたものもないことから、投棄されたものと思われる。5の土師器甕は埋土中からの出土である。

竪穴住居跡029（第26図、図版13）　（遺物95P）

台地西側の平坦地で、竪穴住居跡028の北西約8mの位置にある（リ5－22グリッド）。標高は028とほぼ同じ35.8m前後である。形状はほぼ正方形で、規模は中規模である。本住居跡はほぼ同じ規模で建て替えが行われており、新しい住居跡を029A、古い住居跡を029Bとした。

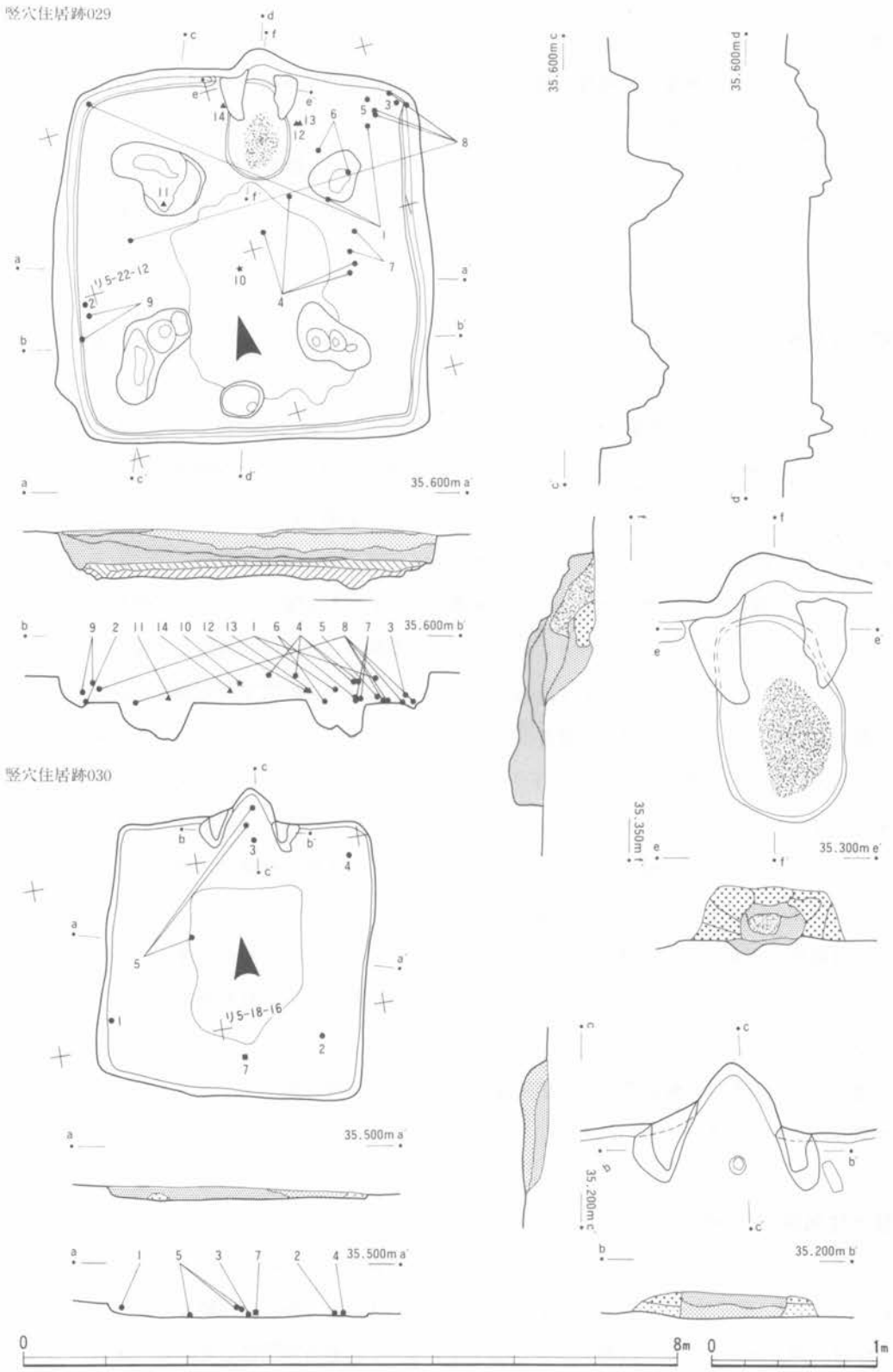
住居の掘方はハードローム層の上面まで掘り込まれ、029Bではロームブロックを主体とした貼床が、029Aではロームブロックやローム粒を含んだ黒褐色土による貼床が施される。床面は柱穴の内側の範囲が特に硬くなっている。壁溝はカマドのある壁の、カマド右側を除いてみられる。また、カマドの下にもみられない。柱穴は4本検出し、ほぼ対角線上に掘り込まれる。住居の建て替えにともなって、P1を起点にして、そのほかの柱穴を対角線上の隅よりの位置に掘り直している。柱穴の掘方の深さは、いずれも029Aの方が深い。P2とP3の中間の壁よりに出入口ピットを検出した。出入口ピットは掘り直されてはいない。長径54cm、短径42cm、深さは深いところで28cmである。カマドは北壁のほぼ中央に作られ、両袖と天井部の一部を検出した。また、あまり明瞭ではないが火床部も検出した。両袖の内壁には焼土化した部分がみられる。火床部の下には、カマドの基底部を構成していたと考えられる焼土ブロックを多く含んだ黒褐色土がみられる。煙道部は壁を三角形に掘り込み、立ち上がり角度は約39度の傾斜をもつ。埋土は暗褐色土が主体的であるが、暗黄褐色土の直下にみられる暗褐色土はやや黒色味が強い。

遺物の出土点数は比較的多いが、破片資料が大部分で、特に集中するところはみられない。投棄されたものが多いと思われる。

竪穴住居跡030（第26図、図版13）　（遺物97P）

台地中央よりわずかに西によった平坦地で、竪穴住居跡029の北東約6mの位置にある（リ5－18グリッド）。標高は029と同じ35.8m前後である。形状は正方形で、規模は小規模である。

住居の掘方はソフトローム層上面まで掘り込まれ、その面を床面にしている。床面の中央は硬くなっている。掘り込みが非常に浅い住居跡である。壁溝・柱穴・貯蔵穴は検出できなかっ



第26図　竪穴住居跡029・030

た。カマドは北壁の中央に作られ、両袖を検出したが、住居跡の掘り込みが浅いため、遺存状態は悪い。火床部は検出できなかったが、左袖の一部に内壁の焼土化した部分がみられる。煙道部は壁を三角形に掘り込み、立ち上がり角度は約46度の傾斜をもつ。埋土は黒褐色土と暗褐色土が主体であるが、炭化物片や焼土粒を含んでいる。また、床面に接して比較的大きな炭化材が出土しているが、床面には特に被熱し、焼土化したような状況はみられない。

遺物は比較的少ないが、住居跡の掘り込みが浅いことが影響していると思われる。3の土師器鉢はカマドの火床部と思われる位置から、底面に接し倒立した状態で出土した。カマドの廃絶にともなうものと思われる。そのほか図示したものは床面に接して出土したものが多く、本住居跡の廃絶にともなって廃棄されたものと思われる。

竪穴住居跡031A（第27図、図版13）　（遺物97P）

台地西側の平坦地で、竪穴住居跡030の西約2mの位置にある（リ5－17グリッド）。竪穴住居跡031Bと北東隅付近で重複し、本住居跡が古い。標高は35.8m前後である。形状は正方形で、規模は中規模である。

住居の掘方はハードローム層の上面まで掘り込まれ、ロームブロック・ローム粒などを含んだ黄褐色土による貼床が施される。壁溝は全周するが、カマドの下にはみられない。柱穴は4本検出し、いずれもほぼ対角線上に掘り込まれている。カマドの右袖脇に円形で規模の小さい貯蔵穴を検出した。カマドは北東壁の中央よりやや東に寄った位置に作られている。031Bを構築する際に袖や天井部が破壊されているが、両袖の一部と火床部を検出した。煙道部は壁を三角形に掘り込み、立ち上がり角度は約51度の傾斜をもつ。埋土は全体にローム粒や焼土粒を含んだ暗褐色土が堆積している。

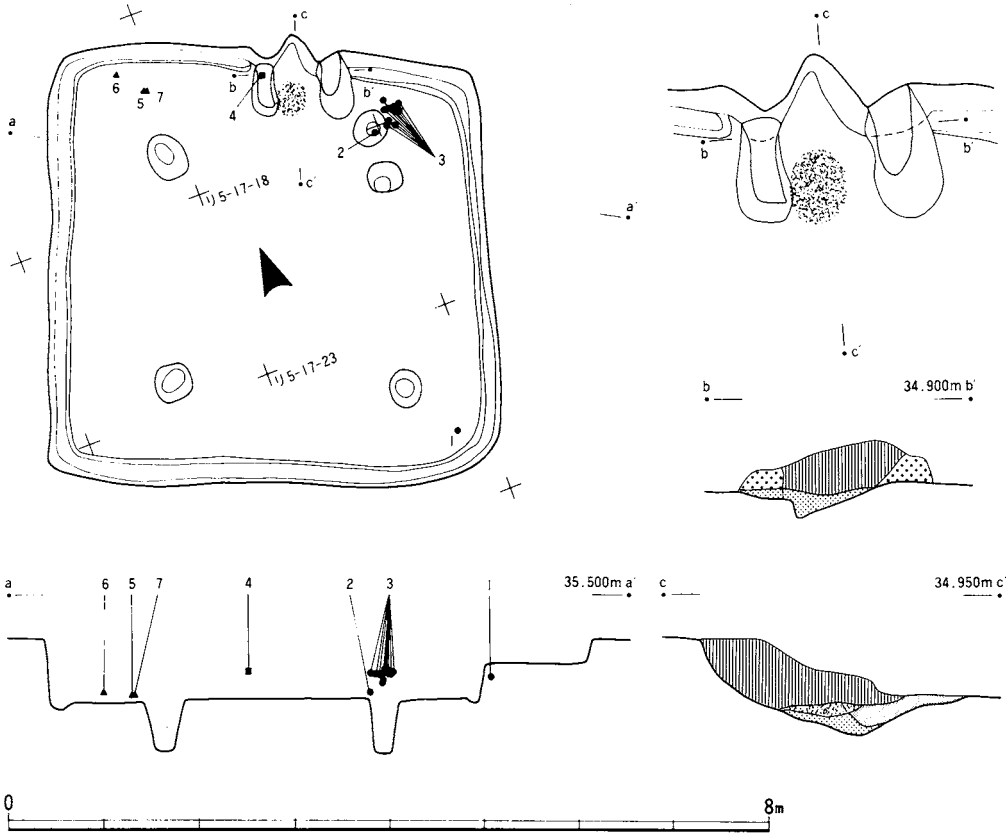
遺物の出土点数は少なく、図示できたものも床面よりやや高い位置から出土しており、投棄されたものが多いと思われる。

竪穴住居跡031B（第27・28図、図版13・14）　（遺物97P）

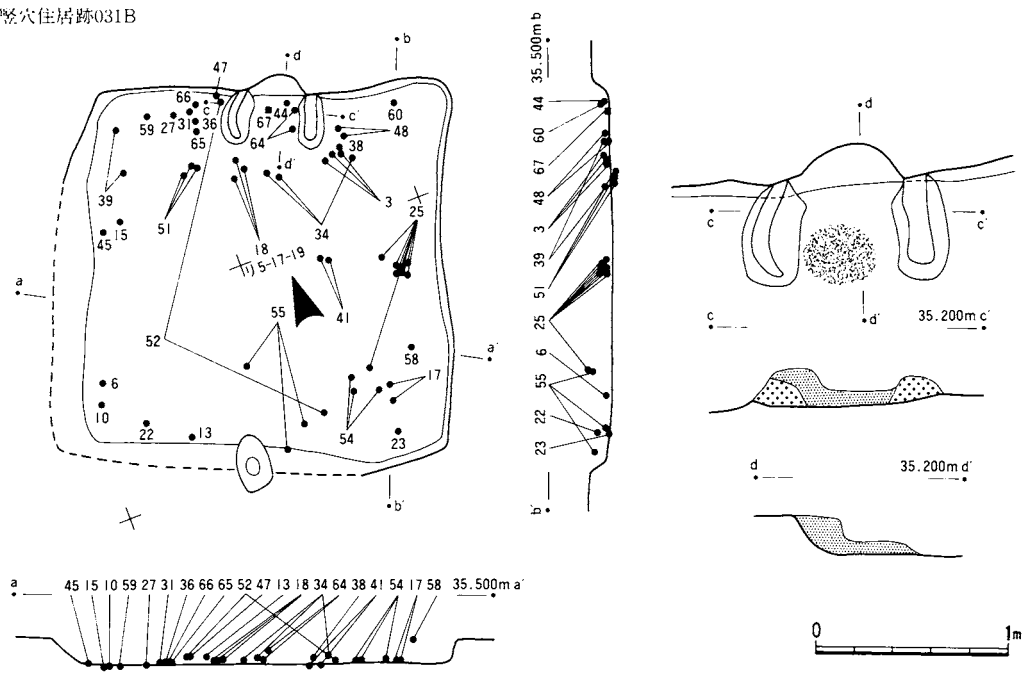
竪穴住居跡031Aとほぼ同じ位置にある。西側の大部分が031Aと重複し、本住居跡の方が新しいが、掘り込みが浅いため、重複した部分の壁を検出することができなかった。形状はやや不整な方形で、規模は中規模である。

住居の掘方はソフトローム層までしか掘り込まれておらず、白色粘土を含んだ黄褐色土による貼床が施される。壁溝・柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。南西壁のほぼ中央で、壁を半分ほど掘り込む位置に出入口ピットを検出した。形状は楕円形で、長径58cm、短径40cm、深さは深いところで31cmである。カマドは北東壁のほぼ中央に作られているが、掘り込みが浅いために遺存状態はあまりよくない。両袖の一部と火床部を検出した。煙道部は壁を鍋底状に掘り込

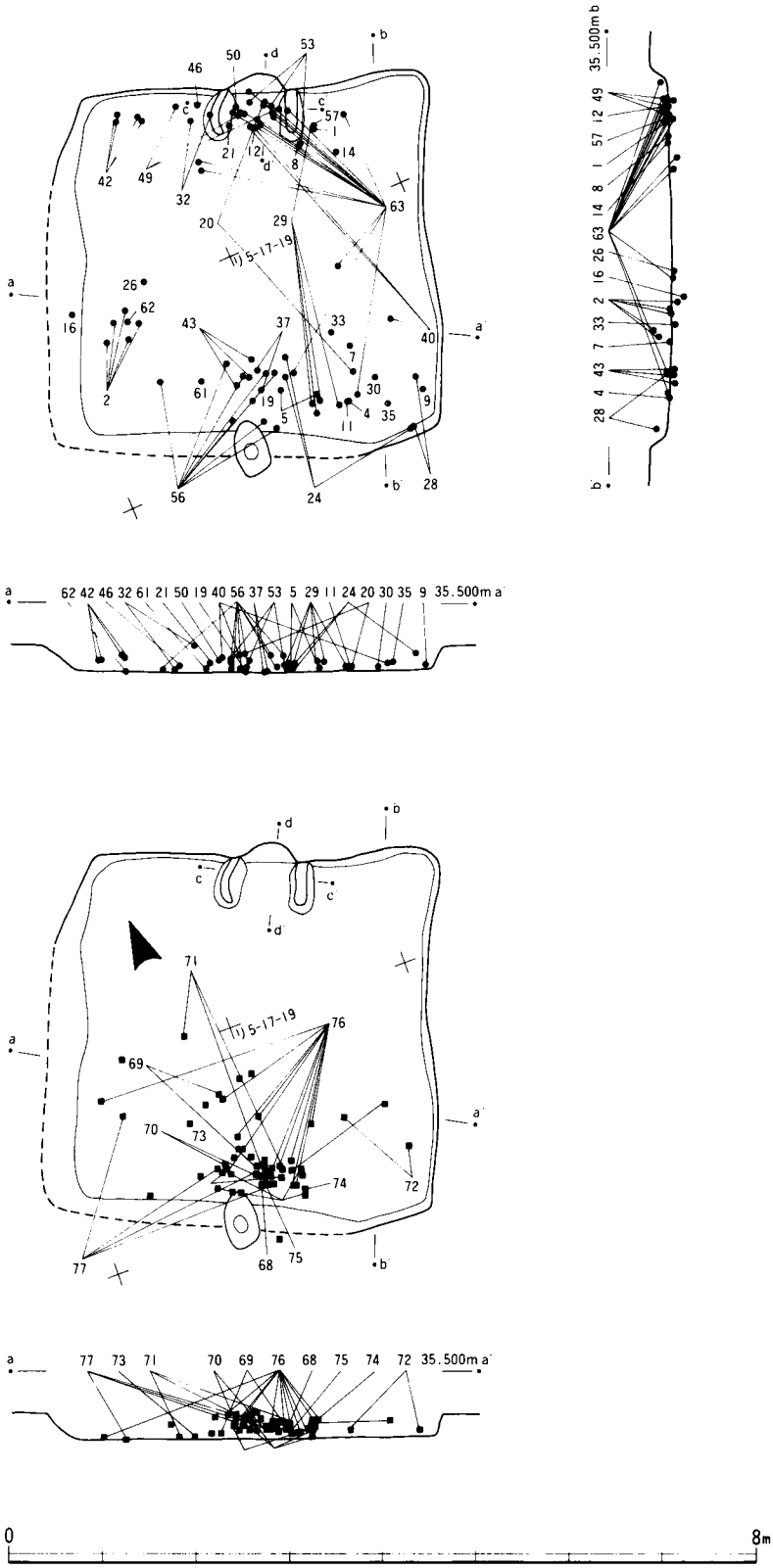
竪穴住居跡031A



竪穴住居跡031B



第27図　竪穴住居跡031A・031B



第28図　竪穴住居跡031Ｂ遺物出土状況

み、立ち上がり角度は約50度の傾斜をもつ。埋土は壁の周辺にローム粒や焼土粒を含む暗黄褐色土がみられるほかは、ローム粒・焼土粒・褐色土などを含む暗褐色土が堆積する。

遺物の出土点数は比較的多く、図示できた遺物数は最も多い。出土状況はカマドの周辺と、その対壁の周辺が多い。完形に近いものや破片が飛び散ったものなどがあり、床面付近ものやや高い位置から出土したものなどがみられる。瓦塔の破片がカマドの対壁の周辺に多い以外は、器種による出土位置の偏りはみられない。カマド内から出土した遺物も、特に人為的な状態がみられるものはない。これらの遺物は、ほとんどが本住居跡を廃絶した際にかなり短時間の内に投棄されたものと思われる。

竪穴住居跡032（第29図、図版14）　（遺物105Ｐ）

台地西側の平坦地で、竪穴住居跡030の北約２ｍの位置にある（リ５－12グリッド）。北壁はすでに台地が削平されており、検出できなかった。標高は35.8m前後である。形状は北側が削平されているが、検出できた限りでは南北方向が長い長方形になるものと思われる。規模は小規模と思われる。

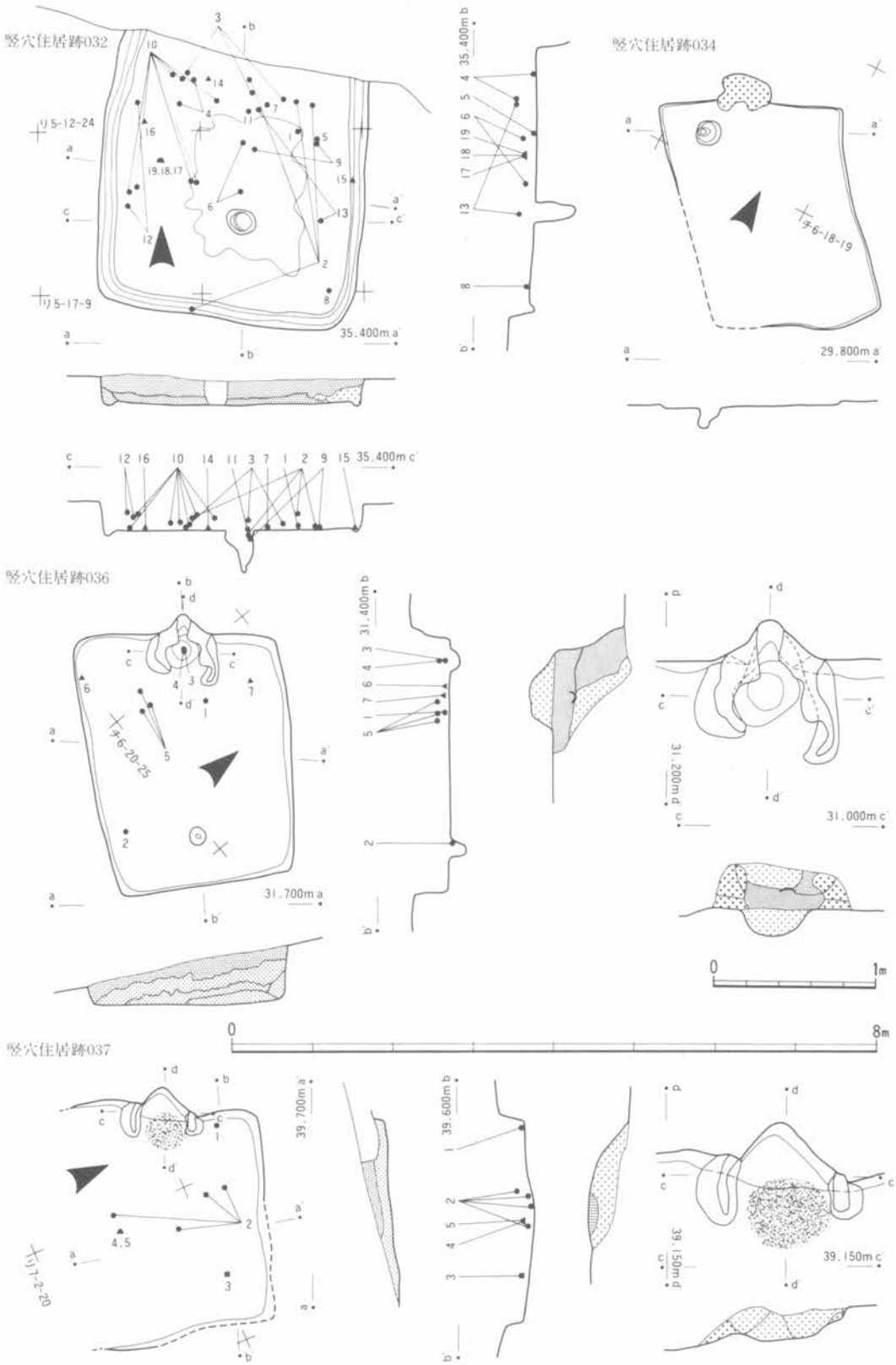
住居の掘方はソフトローム層まで掘り込まれ、その面を床面としている。床面の中央付近は硬くなっている。壁溝は検出できた範囲では全周している。柱穴は検出できなかった。カマドと貯蔵穴は住居跡の北側がすでに削平されているので、その有無については不明である。南壁よりの位置に長径42cm、短径32cmで、深さは深いところで53cmのピットを検出した。埋土は上層にローム粒を含む暗褐色土が厚く堆積するが、下層には炭化材や少量の焼土粒を含む黒褐色土が堆積している。炭化材のいくつかは中央から放射状にみられ、屋根材の樽木の形状を思わせるものがある。それが火災によるものか焼却によるものかは不明である。

遺物出土点数はそれほど多くないが、図示できたものは多い。出土状況はほとんどが下層からであるが、床面に密着しているもの（１の須恵器杯、５の土師器杯、７の土師器鉢、８の土師器甕、14の石製紡錘車、16の鎌）と炭化材の上から出土しているものがみられる。

竪穴住居跡034（第29図）

台地南西側の斜面中で、竪穴住居跡028の南西約36mの位置にある（チ６－18グリッド）。標高は29.5m前後である。住居跡の南側の床面と壁は検出できなかった。形状はカマドの中心を通る軸方向が長い長方形で、規模は小規模である。

住居の掘方は白色粘土層まで掘り込まれているが、検出面からの掘り込みは非常に浅い。壁溝・柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。カマドの左側に径32cm、深さが深いところで20cmのピットを検出したが、やや斜めに掘り込まれており性格は不明である。カマドは北西壁のほぼ中央部に作られているが、遺存状態がきわめて悪く、わずかに構築材の範囲を検出したにとどま



第29図　竪穴住居跡032・034・036・037

る。埋土は粘性の強い暗黄褐色土が堆積している。

遺物は微細な土器破片がわずかにみられた程度である。

竪穴住居跡036（第29図、図版14）　（遺物107P）

台地南西側の斜面中で、竪穴住居跡034の東約17mの位置にある（チ6－20グリッド）。標高は32m前後である。形状はカマドの中心を通る軸方向が長い長方形で、規模は小規模である。

住居の掘方は下末吉ローム層まで掘り込まれ、斜面中に作られた住居跡としては深く掘り込まれている。貼床は施されておらず、特に硬い部分もみられない。壁溝・柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。カマドの対壁にあたる南東壁寄りの中央に長径23cm、短径20cm、深さ27cmの出入口ピットを検出した。カマドは北西壁の中央に作られ、両袖を検出した。火床部は検出できなかった。両袖の内壁の一部には焼土化した部分がみられる。煙道部は壁を三角形に掘り込み、立ち上がり角度は約71度の傾斜をもつ。埋土は下層から中層にかけてローム粒を多く含む暗黄褐色土が厚く堆積し、その上に暗褐色土が覆っている。

遺物の出土点数はそれほど多くないが、カマドの前面を中心にして床面近くから出土している。土師器鉢の3・4は重って倒立した状態でカマド内から出土している。

竪穴住居跡037（第29図、図版15）　（遺物107P）

台地南側の斜面中で、竪穴住居跡036の南東約25mの位置にある（リ7－2グリッド）。標高は29.5m前後である。斜面の下側にあたる南側は、壁および床面の一部を検出できなかった。北および北東壁の一部は攪乱を受けており、壁の上場を検出できなかった。形状は正方形になるものと思われ、規模は小規模である。

床面には白色および淡褐色の粘土が混在しているのが観察できた。壁溝・柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。カマドは北西壁のほぼ中央に作られている。遺存状態は悪く、カマド構築材はあまり明確ではなかったが、両袖の一部と火床部を検出した。煙道部は壁を三角形に掘り込み、立ち上がり角度は約41度の傾斜をもつ。埋土は下層は粘性をおび、焼土粒を含んでいる。

遺物の出土点数は少ないが、比較的床面に近い位置から出土したものが多い。1の土師器杯は完形でほぼ床面に接しているが、傾斜した状態で出土しているので、本住居が廃絶されてからかなり早い時期に転げ落ちた可能性も考えられる。

竪穴住居跡038（第30図、図版15）　（遺物108P）

台地南側の縁辺部で、竪穴住居跡037の北東約20m、竪穴住居跡039・065に近接した位置にある（リ6－19グリッド）。標高は34.7m前後である。形状は正方形で、南側の壁がわずかに張っている。規模は小規模である。

住居の掘方はハードローム層まで掘り込まれ、その面を床面にしている。掘り込みが比較的深い住居跡である。壁溝は全周する。柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。カマドは東壁の中央に作られているが、遺存状態がきわめて悪く、構築材の散布範囲のみを検出しただけである。埋土は黄褐色土が主体で、中間に黒褐色土が挟まれるように堆積している。

遺物の出土点数はあまり多くなく、住居内全体に飛び散った状態で出土している。また、床面に接しているものは少なく、本住居跡がある程度埋まってから投棄されたと思われるものが多い。11の須恵器甕は土坑067出土の遺物と接合している。

竪穴住居跡039（第30図、図版15）　（遺物110Ｐ）

竪穴住居跡038とほぼ同じ台地縁辺部で、038の西側0.2～0.3mの位置にある（リ６－18グリッド）。標高も同じ34.7m前後である。形状は南壁が長い台形で、規模は中規模である。

住居の掘方はハードローム層まで掘り込まれ、その面を床面にしている。壁溝はカマドの下を除いて全周している。柱穴は４本検出し、いずれも対角線上の壁に寄った位置に掘り込まれている。貯蔵穴は検出できなかった。Ｐ２とＰ３の中間のわずかに壁に寄った位置に出入口ピットを検出した。長径26cm、短径22cm、深さは深いところで32cmである。カマドは西壁の中央に作られ、両袖と火床部を検出した。両袖の内壁には焼土化した部分がみられる。カマドの基底部は円形に掘り込まれ、ロームブロックや焼土粒を含んだ黄褐色土で埋め戻されている。煙道部は壁を三角形に掘り込み、立ち上がり角度は約55度の傾斜をもつ。埋土は壁際に黄褐色土がみられるほかは黒褐色土が堆積している。

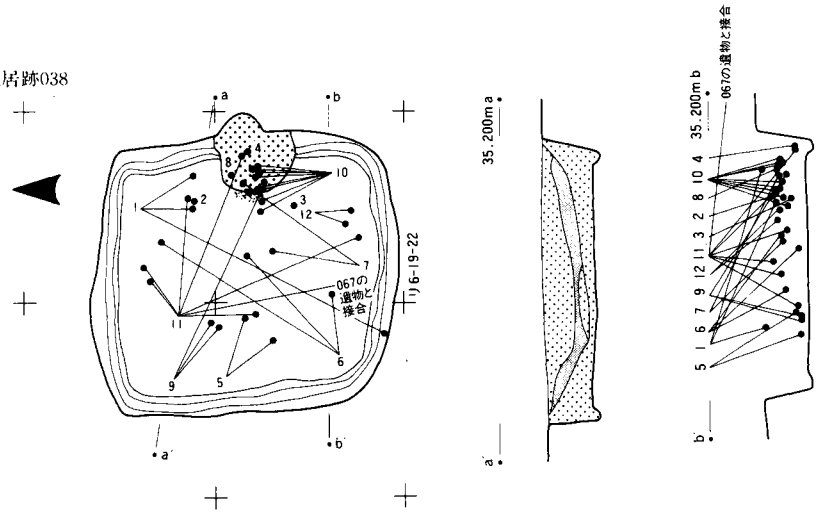
遺物の出土点数はそれほど多くなく、床面よりかなり高い位置で、飛び散った状態のものが多く、大部分のものは、本住居跡がある程度埋まった後から投棄されたものと思われる。そのなかで、７・８の須恵器蓋はカマドのそばで床面に接し、９の土師器甕はカマドの中から倒立した状態で出土している。

竪穴住居跡040（第31図、図版16）　（遺物110Ｐ）

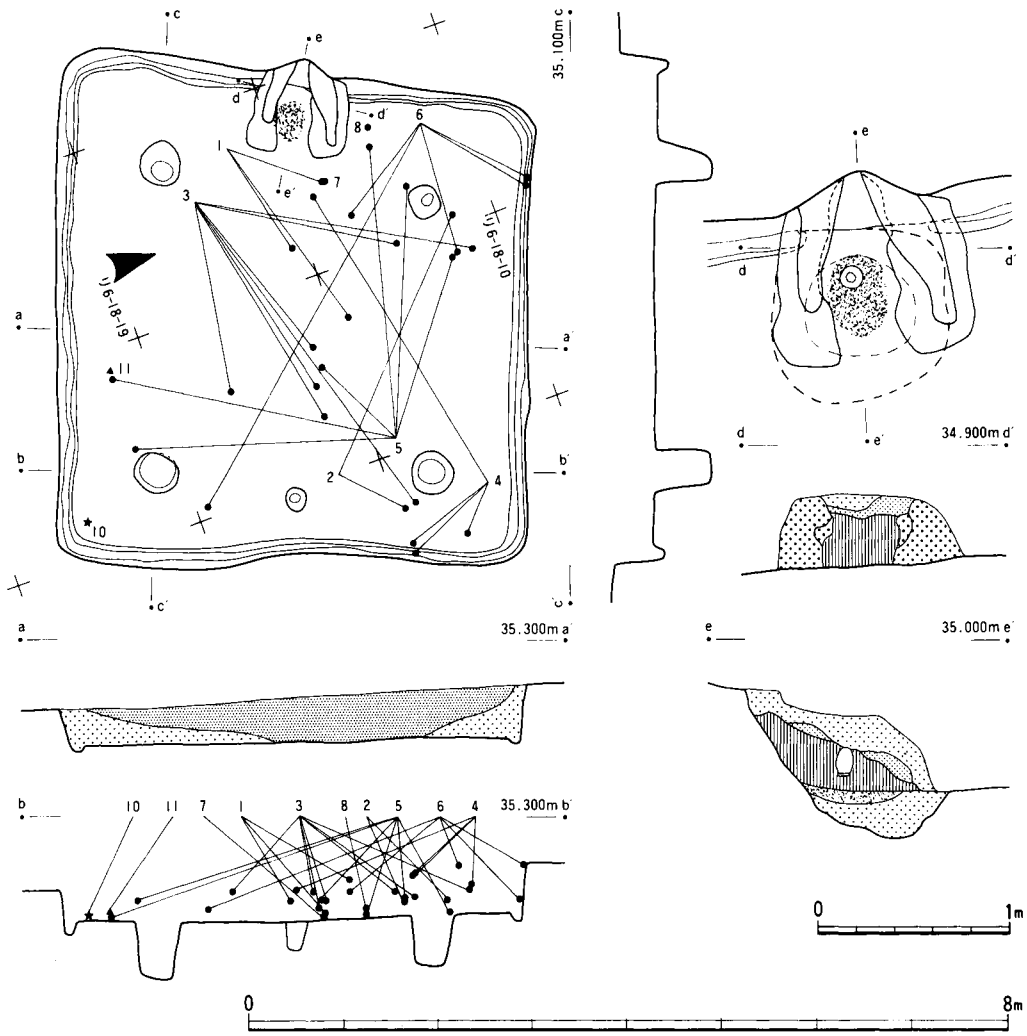
台地南東側の斜面中で、竪穴住居跡022の南東約35mの位置にある（ヌ７－４グリッド）。標高は25.5m前後である。斜面の下側にあたる南東側は、壁および床面の一部を検出できなかった。形状は不明であるが、規模は中規模になると思われる。南側の部分は床面まで達する攪乱を受けている。

住居の掘方は白色の粘土層まで掘り込まれ、その面を床面にしている。壁溝は検出できた範囲内では、カマドの下とカマド右側を除いてみられる。柱穴は４本検出し、いずれも対角線上のかなり壁によった位置に掘り込まれている。貯蔵穴は検出できなかった。カマドは北東壁のほぼ中央と思われる位置に作られ、遺存状態はあまりよくないが、両袖と火床部を検出した。

竪穴住居跡038



竪穴住居跡039



第30図　竪穴住居跡038・039

煙道部は壁を小さく三角形に掘り込み、立ち上がり角度は約55度の傾斜をもつ。埋土は上層ほど粘性が強く、全体的に炭化物粒や焼土粒を含んでいる。

遺物の出土点数は少ないが、床面に接して出土しているものが多い。1の土師器杯は完形で、P1の底面の近くから出土していることから、柱を抜き取ってすぐ、柱穴の中に人為的に入れられたと思われる。4の鎌は刃を上に向けて、壁によりかかった状態で出土している。

竪穴住居跡041（第31図、図版16）　（遺物112P）

台地南東側の斜面中で、竪穴住居跡040の北東約5mの位置に、並ぶようにある（ヌ6－25グリッド）。標高は040と同じ25.5m前後である。斜面の下側にあたる南東側は、壁および床面の一部を検出できなかった。形状は不明であるが、規模は中規模になるものと思われる。

住居の掘方は白色の粘土層まで掘り込まれ、その面を床面にしている。壁溝は040と同様に検出できた範囲内では、カマドの下とカマドより右側を除いてみられる。柱穴は4本検出し、ほぼ対角線上の壁によった位置に掘り込まれている。このほかに4つのピットを検出したが、いずれも性格は不明である。これらの周辺から出土している遺物の様相から、あるいは本住居跡より後に掘り込まれた可能性も考えられる。貯蔵穴は検出できなかった。カマドは北東壁のほぼ中央と思われる位置に作られ、遺存状態はあまりよくないが、両袖を検出した。火床部は検出できず、両袖の内壁にも焼土化した部分はみられない。基底部には浅いくぼみがみられる。煙道部は壁をわずかに三角形に掘り込み、立ち上がり角度は約35度の傾斜をもつ。埋土は暗褐色土が主体となっているが、中間には暗黄褐色土が堆積している。壁ぎわの明褐色土は壁の崩壊によるものと思われる。

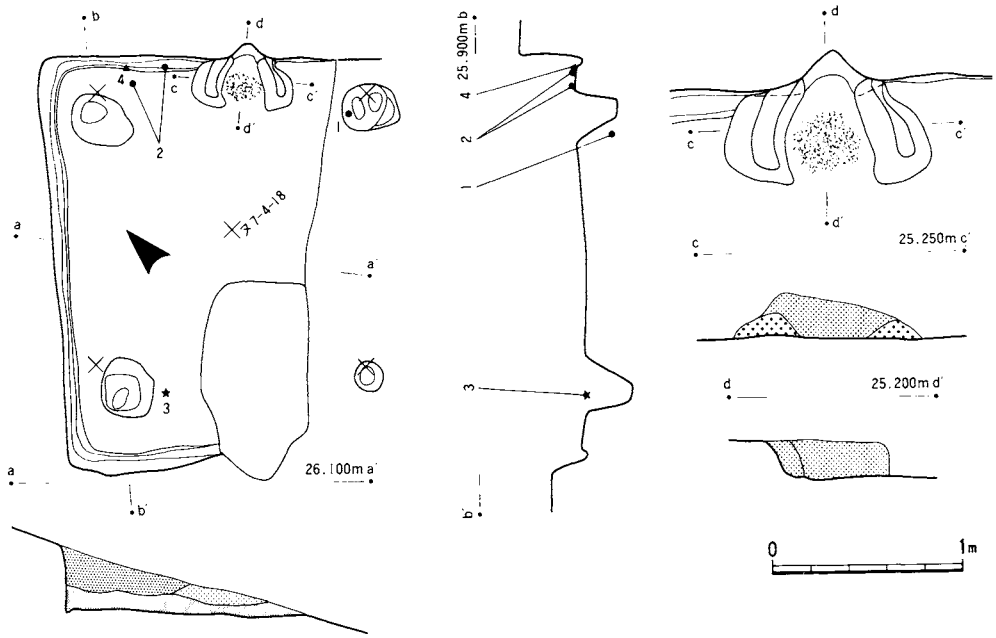
遺物の出土点数はあまり多くないが、P3の北東にあるピットの周辺に遺物が集中している。これらの遺物はカマドの左側の壁際から出土している1の須恵器杯に比べて時期的に新しい様相がみられる。

竪穴住居跡045（第32図、図版16）　（遺物112P）

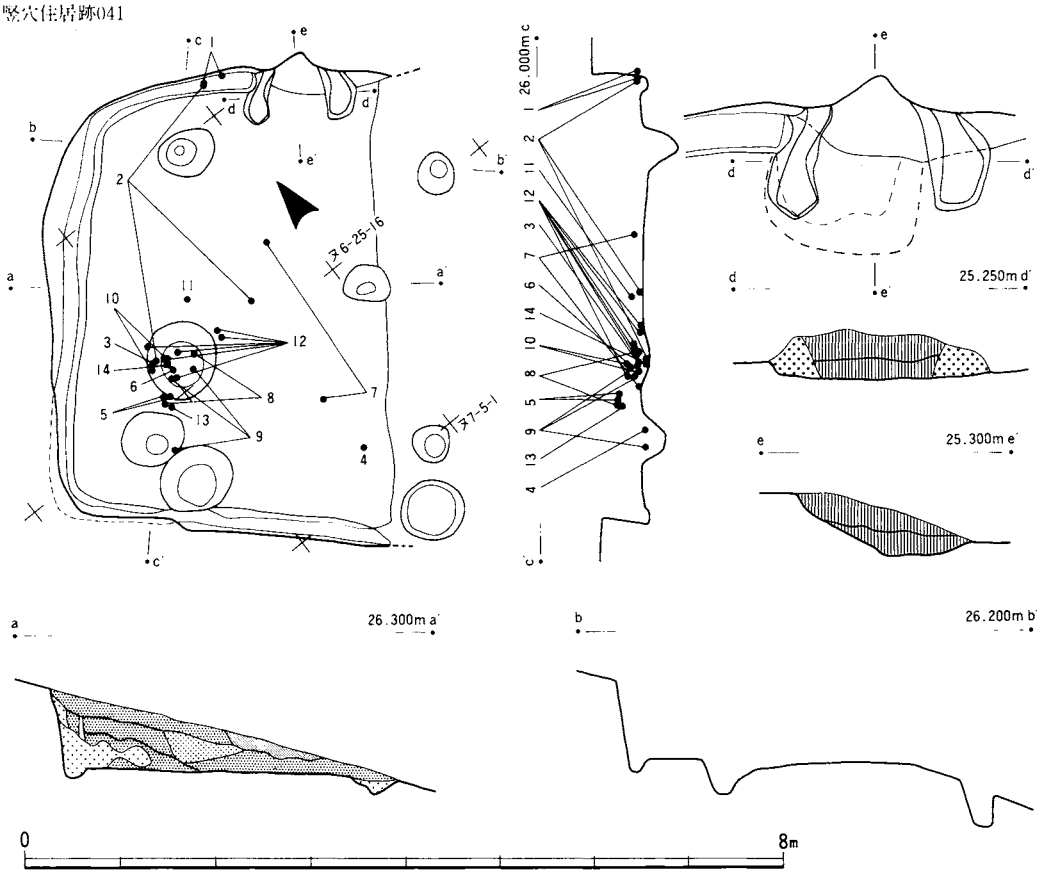
台地東側の斜面中で、本遺跡の中で最も東側の位置にある（ル6－1・6グリッド）。標高は28.5m前後である。形状は方形で、南東隅が張り出している。規模は中規模である。

住居の掘方は白色の粘土層まで掘り込まれ、その面を床面にしている。壁溝は南西隅周辺にみられるだけである。柱穴は4本検出したが、いずれも対角線上からはややはずれた位置に掘り込まれている。柱穴の掘方の径は小さく、深さも浅いものである。P2とP3の中間のわずかに壁に寄った位置に出入口ピットを検出した。径20cm、深さは深いところで16cmである。このほかに南壁によった位置に小さなピットを3つ検出した。カマドは西壁の中央に作られ、両袖と火床部を検出した。袖の内壁には一部焼土化した部分がみられる。煙道部は壁をわずかに

竪穴住居跡040



竪穴住居跡041



第31図　竪穴住居跡040・041

三角形に掘り込み、立ち上がり角度は約48度の傾斜をもつ。埋土は暗黄褐色土を中心とし、全体に粘性が強い。

遺物は床面より高い位置から出土したものが多く、本住居跡は遺物集中地点001の範囲と重なることから、本住居跡に伴う遺物は少ないと思われる。

竪穴住居跡048A（第32図、図版17）　（遺物114Ｐ）

台地南東側の縁辺部で、竪穴住居跡021の南東約４ｍの位置にある（ヌ６－16•17グリッド）。標高は34.4m前後である。竪穴住居跡048Bと重複し、本住居跡の方が新しい。形状は方形で、規模は小規模である。

床面は、大部分が048Bと重複しているために、048Bの埋土中に作られている。壁溝・柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。カマドは東壁のほぼ中央に作られ、両袖を検出した。火床部や袖の内壁の焼土化した部分は明確には検出できなかった。煙道部は壁をわずかに三角形に掘り込み、立ち上がり角度は約52度の傾斜をもつ。埋土は明褐色土とロームブロックを含んだ暗褐色土が大きなブロック状に堆積していることから、人為的に埋め戻されたと思われる。

遺物の出土点数はそれほど多くないが、完形品やそれに近いものが多く出土している。しかし、床面より高い位置のものや、接合資料では破片の比高がかなりみられることなどから、本住居跡の廃絶に伴って投棄されたものと思われる。

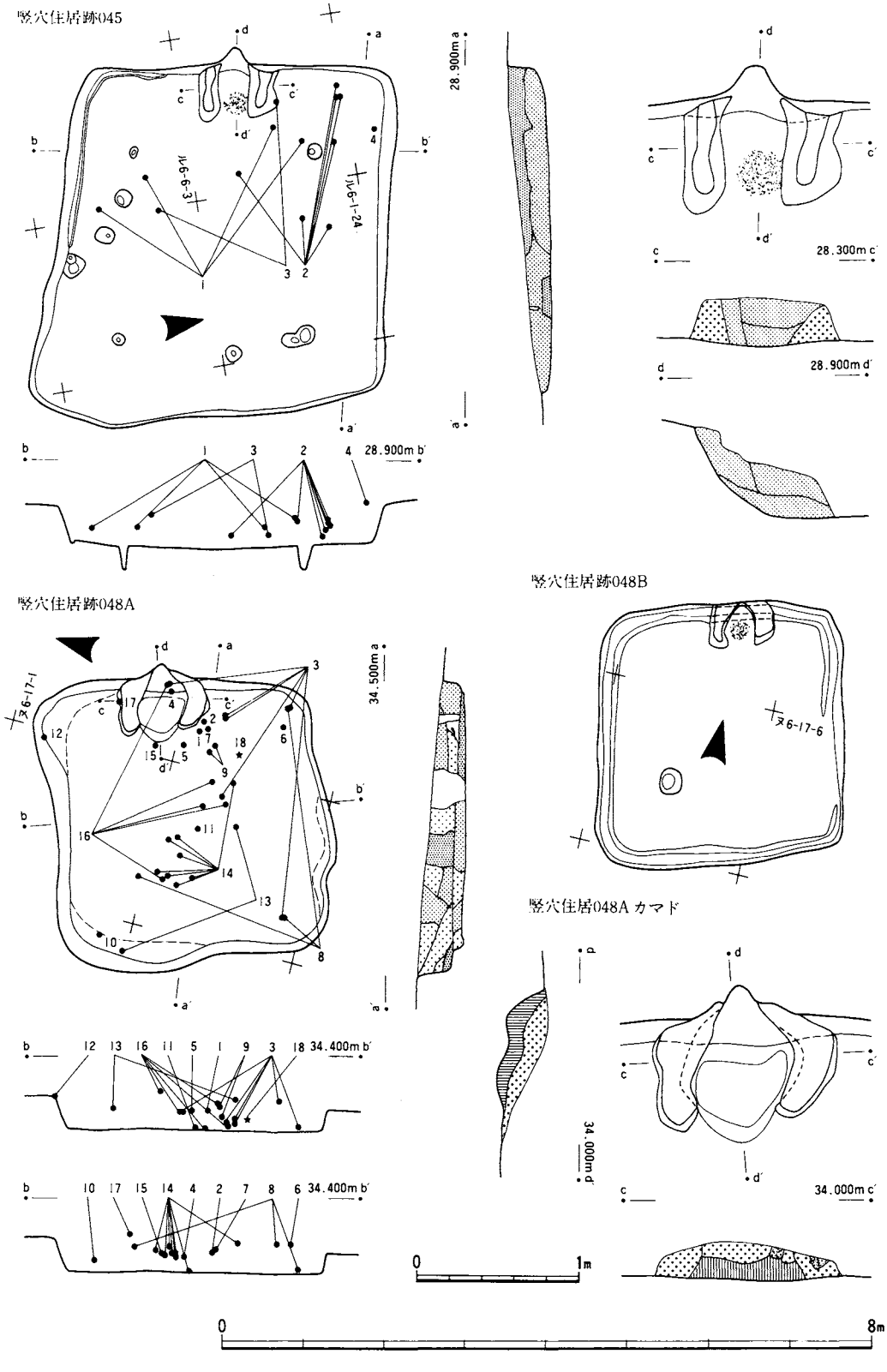
竪穴住居跡048B（第32図、図版17）

竪穴住居跡048Aの中にすべて納まる位置にある。形状は方形で、規模は小規模である。

住居の掘方はハードローム層中まで掘り込まれ、その面を床面にしている。壁溝は東壁の中央を除いてみられ、カマドの下にもみられる。柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。南西隅に小ピットを１つ検出した。径約30cm、深さは深いところで11cmである。カマドは北壁のわずかに東によった位置に作られ、048Aを作るさいに大部分が壊されていたが、両袖の痕跡と火床部を検出した。埋土はロームブロックを多く含む暗黄褐色土や明褐色土がみられる。048Aと本住居跡の床面の比高が10cm程度しかないことから、048Aを作るさいに貼床として埋め戻された土層と思われる。

遺物はわずかに11点と極めて少なく、048Aの14と16の土師器甕と接合する破片が各１点ずつ出土している。

本住居跡と重複する048Aとの関係は、東壁と南壁が共通すること、床面の比高が10cm前後と小さく、本住居跡を埋めて貼床を作っていることなどから、本住居跡から048Aへの拡張と考えるのが妥当と思われる。



第32図　竪穴住居跡045・048A・048B

竪穴住居跡049（第33図、図版17）　（遺物116Ｐ）

台地東側の縁辺部で、竪穴住居跡018の南東約３ｍの位置にある（ヌ６－７グリッド）。標高は34.3m前後である。形状はカマドの中心を通る軸方向が長い長方形で、カマドのある壁の長さがその対壁の長さに比べてやや長い。規模は小規模である。

住居の掘方はハードローム層上面まで掘り込まれ、その面を床面にしている。壁溝は検出できなかった。柱穴は４本検出したが、径10～18cm、深さが深いところで２～16cmと非常に小さなものである。Ｐ２とＰ３の中間の壁寄りの位置に出入口ピットを検出した。径10cm、深さは深いところで２cmである。カマドの右側に貯蔵穴を検出した。このほかに小ピットを２つ検出したが、性格は不明である。カマドは南西壁のほぼ中央に作られているが、遺存状態が悪く、左側の袖の一部を検出しただけである。火床部は検出できなかった。袖の内壁の一部に焼土化した部分がみられる。煙道部は壁を大きく半円形に掘り込み、立ち上がり角度は約53度の傾斜をもつ。埋土は全体にローム粒や小ロームブロックを含む。

遺物の出土点数は少ないが、完形品やそれに近いものが多い。完形品やそれに近いものは土師器杯で、床面に近いか若干高い位置から出土している。カマドの中から出土している10の土師器鉢、11の須恵器甕、12の土師器甕はいずれも破片で出土している。このようなカマド内からの出土状態は偶然ではなく、人為的に投棄されたものと思われる。

竪穴住居跡057（第33図、図版18）　（遺物117Ｐ）

台地南東側の斜面中で、竪穴住居跡041から北西に７ｍほど台地によった位置にある（ヌ６－19･24グリッド）。標高は28.5m前後である。斜面の下にあたる南東側は壁および床面を検出できなかった。形状は柱穴の位置から方形になるものと思われる。規模は中規模である。

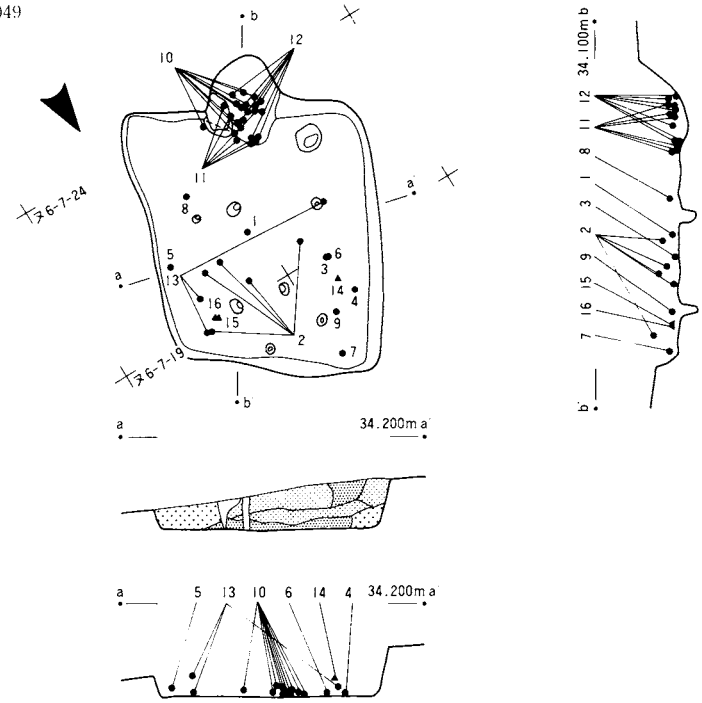
床面は掘方の面をそのまま床面にしている。壁溝は検出できた範囲内では全周し、カマドの下にもみられるが、右袖の下でわずかに途切れる部分がある。柱穴は４本検出し、Ｐ１とＰ２の掘方の形がひさご形をしているが、これが柱の抜き取り痕跡であるかどうかは不明である。貯蔵穴は検出できなかった。カマドは北西壁のほぼ中央に作られ、両袖と火床部を検出した。煙道部は壁をわずかに掘り込み、立ち上がり角度は約65度の傾斜をもつ。埋土は全体的にわずかながらではあるが粘性をもつ。

遺物の出土点数は少なく、図示できたものも少ない。１の土師器杯はカマドの右袖の中から出土していることから、カマドの補強材として使われた可能性がある。

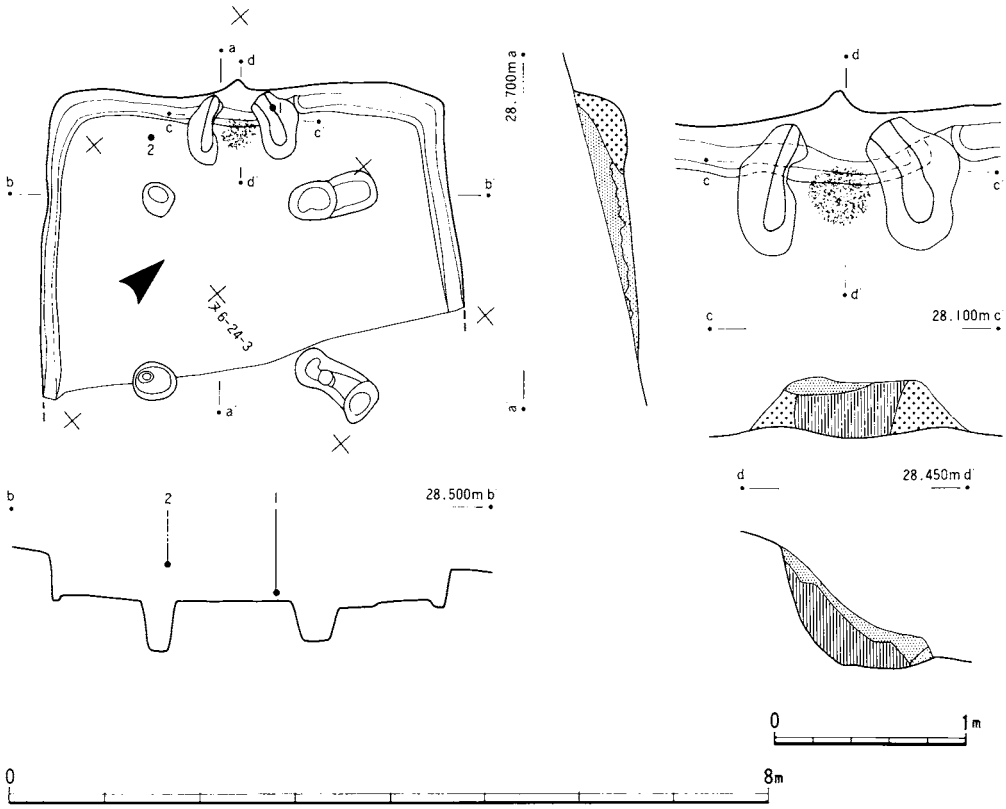
竪穴住居跡062（第34図、図版18）　（遺物117Ｐ）

台地北東側の縁辺部で、竪穴住居跡007と010に近接した位置にある（ヌ５－12グリッド）。標高は34.5m前後である。カマド煙道部とカマドの対壁に一部床面まで達する攪乱を受けてい

竪穴住居跡049



竪穴住居跡057



第33図　竪穴住居跡049・057

る。形状はカマドの中心を通る軸方向がやや長い長方形で、規模は小規模である。

住居の掘方はハードローム層上面まで掘り込まれ、その面を床面にしている。壁溝は全周しているが、カマドの下にはみられない。柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。カマドは北西壁のやや東に寄った位置に作られ、両袖と火床部を検出した。埋土は黒褐色土を主体としているが、ローム粒やロームブロックを含みやや明るい層とそうでない層とが交互に堆積している。

遺物の出土点数は少なく、図示できた土師器杯も破片が広く飛び散った状態であり、投棄されたものと思われる。

竪穴住居跡064（第34図、図版18）　（遺物117P）

台地南側の縁辺部で、竪穴住居跡022に隣接した位置にある（リ6－20グリッド）。標高は34.5m前後である。形状は方形であるが、カマドのある隅がほかに比べて張り出し方が弱い。規模は小規模である。

住居の掘方はハードローム層上面まで掘り込まれ、そのままその面を床面にしている。壁溝・柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。カマドは北東隅に作られ、両袖と火床部を検出した。煙道部の奥壁に焼土化した部分がみられる。煙道部は壁をわずかに三角形に掘り込み、立ち上がり角度は約38度の傾斜をもつ。埋土はロームブロックやローム粒を多量に含む暗黄褐色土が主体である。中間に黄褐色土の堆積がみられることから、ある程度人為的に埋め戻された可能性がある。

遺物の出土点数はあまり多くないが、図示できた遺物は比較的多い。床面に接しているものが多いが、大部分のものが破片の状態である。そのなかで8の須恵器甕は遺物集中地点035の遺物と接合している。

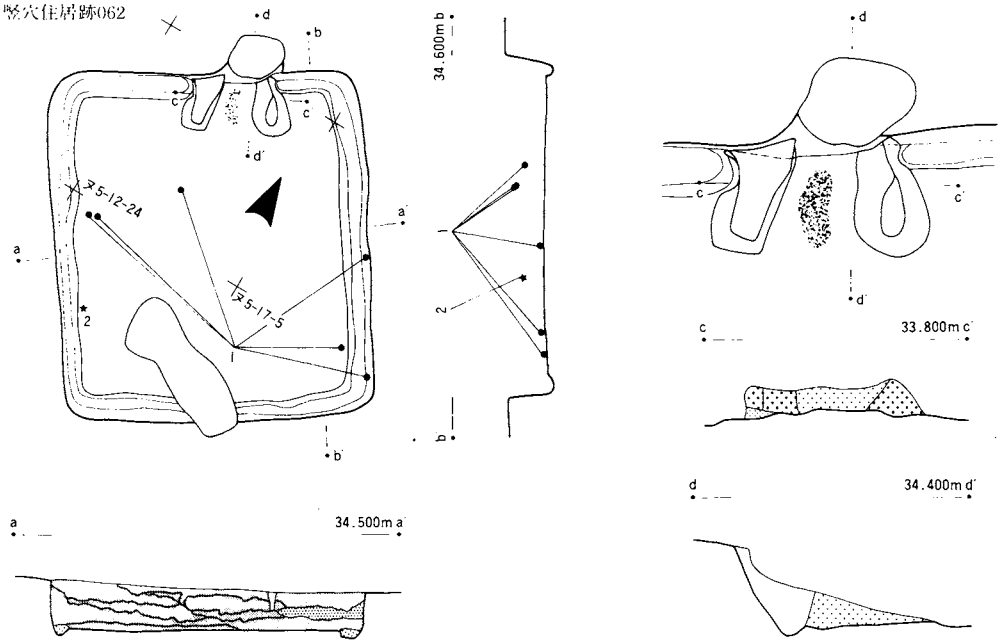
竪穴住居跡065（第35図、図版19）　（遺物119P）

台地南側の縁辺部で、竪穴住居跡038・039のすぐ南の位置にある（リ6－18・23グリッド）。標高は34.3m前後である。形状は方形であるが、カマドの対壁の長さがやや短い。規模は小規模である。

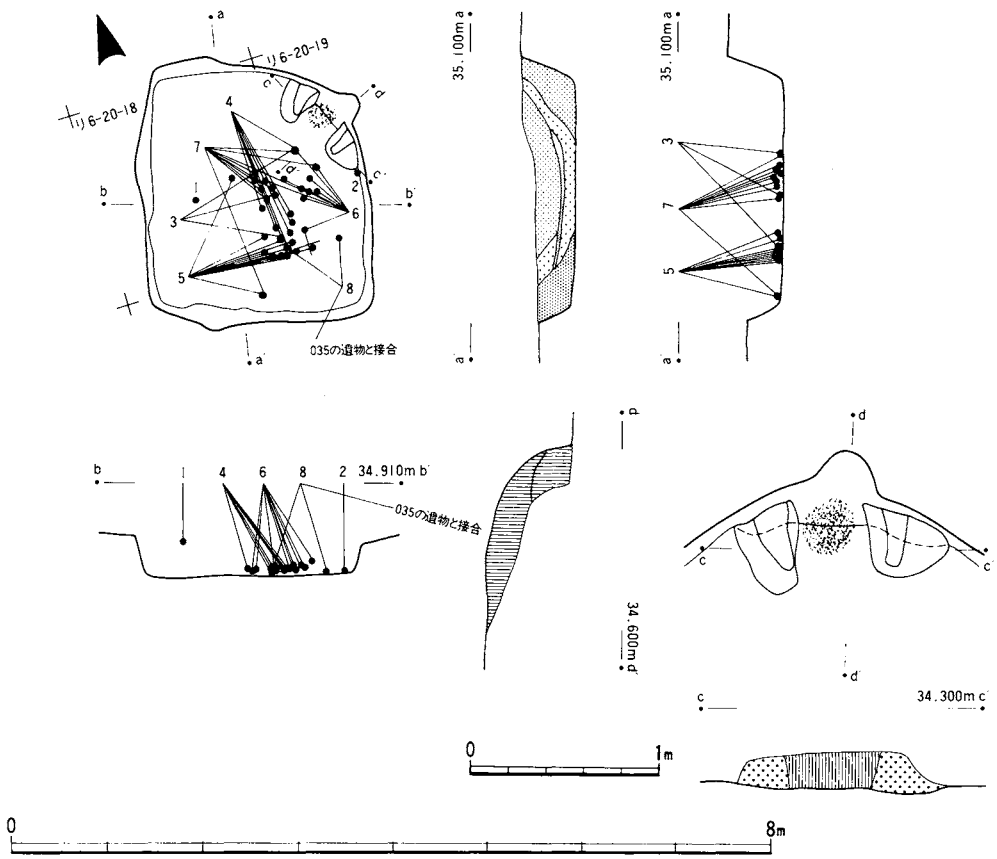
住居の掘方はハードローム層上面まで掘り込まれ、その面を床面にしている。壁溝・柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。カマドは北東壁のやや東によった位置に作られ、両袖を検出した。火床部は検出できなかった。袖の内壁には焼土化した部分はみられない。煙道部は壁を三角形に掘り込み、立ち上がり角度は約62度の傾斜をもつ。埋土は全体にローム粒を含み、下層には焼土粒を多量に含む暗赤褐色土が堆積している。

遺物の出土点数は少なく、南西側の床面から2の土師器甑が破砕されたような状態で出土している。

竪穴住居跡062

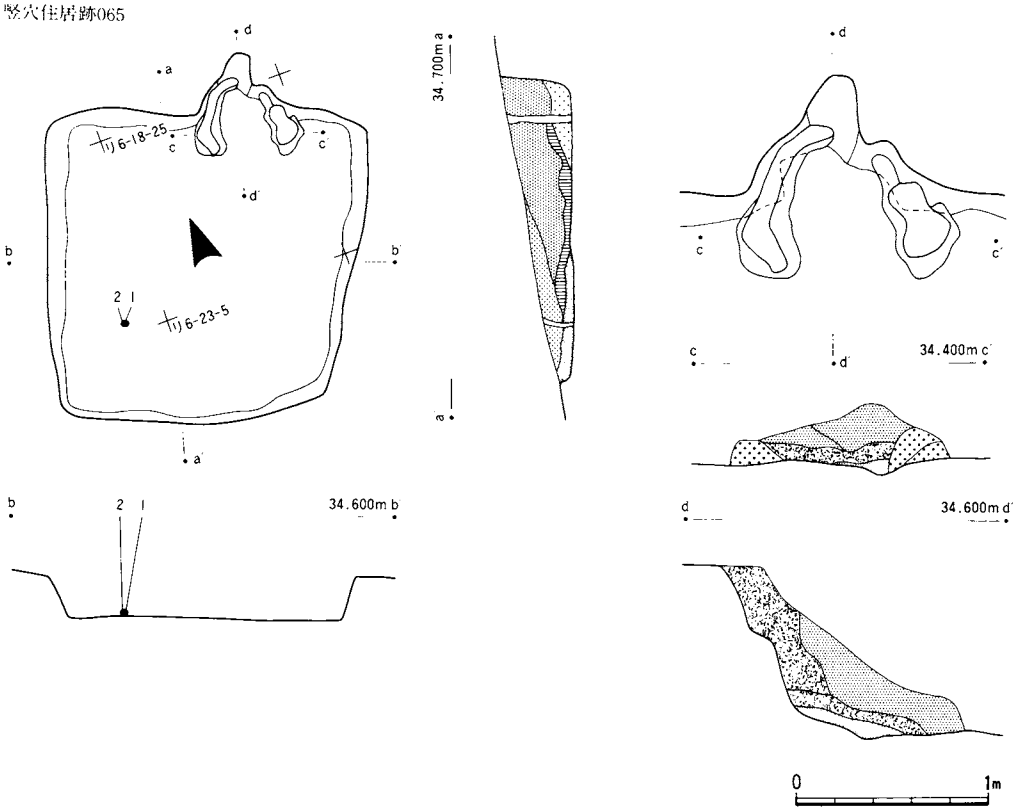


竪穴住居跡064

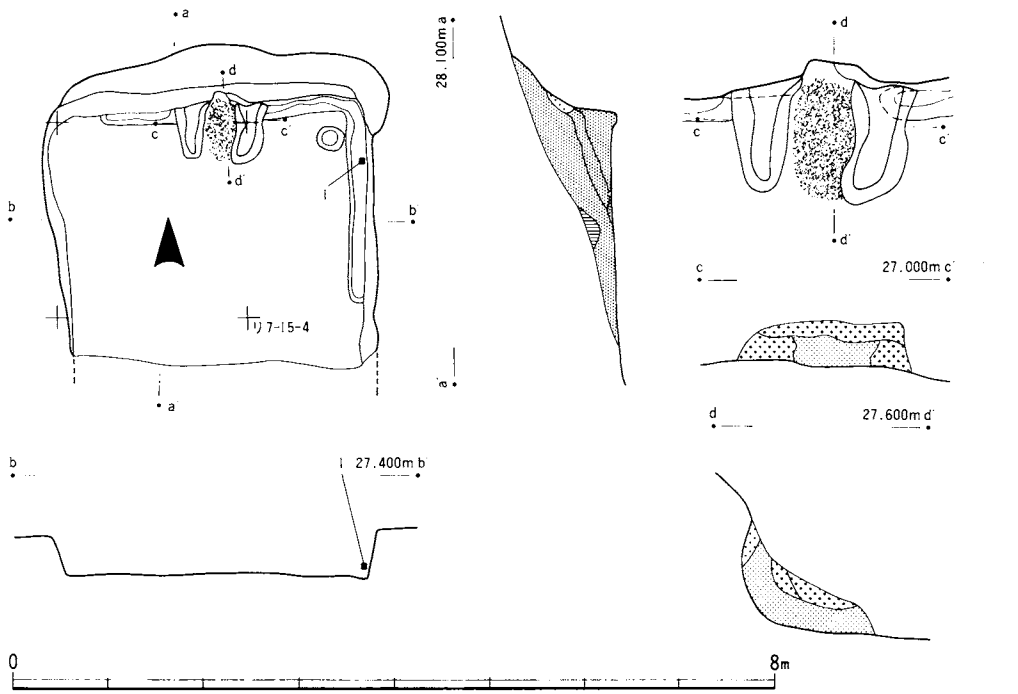


第34図　竪穴住居跡062・064

竪穴住居跡065



竪穴住居跡069



第35図　竪穴住居跡065・069

竪穴住居跡069（第35図、図版19）　（遺物119Ｐ）

台地南側の斜面中で、竪穴住居跡070～073とともに本遺跡の中で最も南にある一群を形成している（リ７－10･15グリッド）。この一群の中では最も高い位置にある。標高は27.5m前後である。斜面の下にあたる南側は壁および床面を検出できなかった。形状は方形になるものと思われ、規模は小規模である。カマドのある北壁の上部には、奥行き40cmほどの長さのテラス状の傾斜面がみられる。

住居の掘方は淡黄色粘土層まで掘り込まれ、その面を床面にしている。壁溝はカマドのある北壁と東壁の一部にみられるが、カマドの下にはみられない。柱穴は検出できなかった。貯蔵穴はカマドの右側の隅に小規模なものがある。カマドは北壁の中央に作られ、両袖と火床部を検出した。煙道部は壁をわずかに台形に掘り込み、立ち上がり角度は約72度の傾斜をもつ。埋土は暗褐色土が主体で、全体に焼土粒を含んでいる。

遺物の出土点数は極めて少なく、図示できたものも１の土製支脚のみである。

竪穴住居跡070（第36図、図版19）　（遺物119Ｐ）

台地南側の斜面中で、この一群の中では最も西側の位置にある（リ７－14グリッド）。標高は25.0m前後である。斜面の下にあたる南側は壁および床面を検出できなかった。また、南側は近世の炭窯による攪乱を受けている。南西側で竪穴住居跡072と重複しているが、新旧関係は不明である。形状は不明で、規模は小規模になるものと思われる。カマドのある北壁の上部には、奥行き1.16mほどの長さのテラス状の傾斜面がみられる。

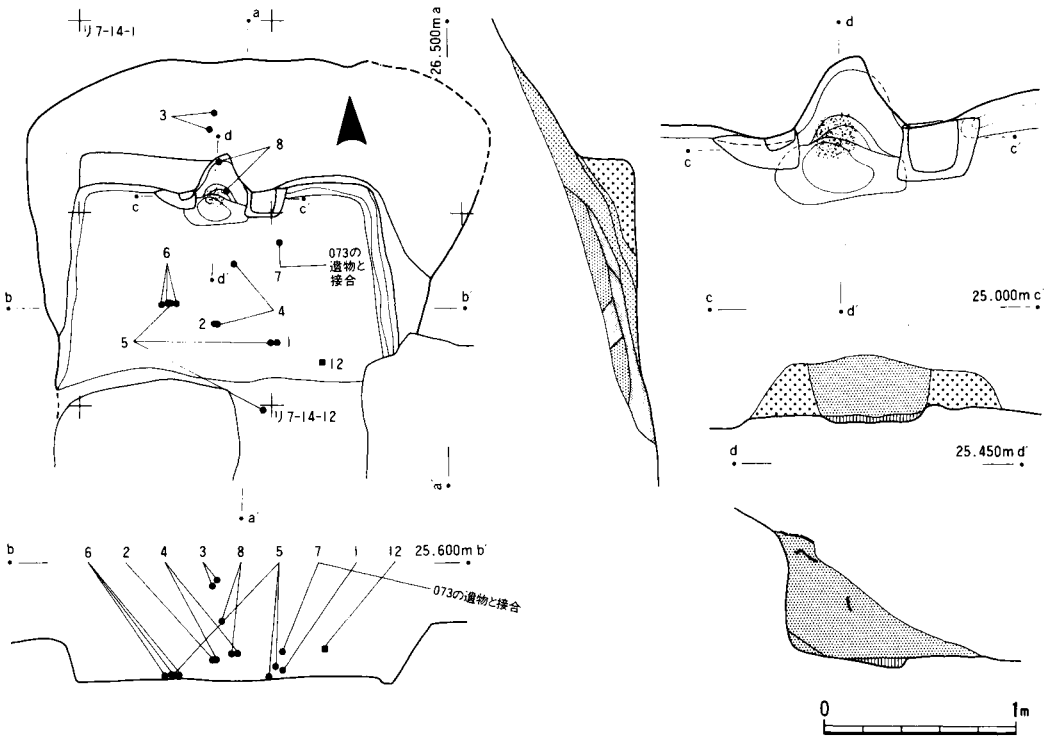
住居の掘方は淡黄色粘土層まで掘り込まれ、その面を床面にしている。壁溝はカマドの右袖から東壁にみられるが、カマドの下にはみられない。柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。カマドは北壁の中央に作られ、遺存状態はよくないが、両袖と火床部を検出した。袖の内壁と煙道部の奥壁には焼土化した部分がみられる。煙道部は壁を三角形に掘り込み、立ち上がり角度は約83度の傾斜をもつ。埋土は黒褐色土と暗褐色土が交互に堆積しているが、全体に焼土粒を含み、粘性が強い。

遺物の出土点数はそれほど多くないが、床面に接している遺物が比較的多い。８の土師器甕は煙道部の補強材とは異なると思われるが、カマドを覆うような状態で出土している。７の須恵器長頸壺の底部は竪穴住居跡073出土の遺物と接合している。９の土師器甕と11の瓦塔部材は埋土中からの出土である。

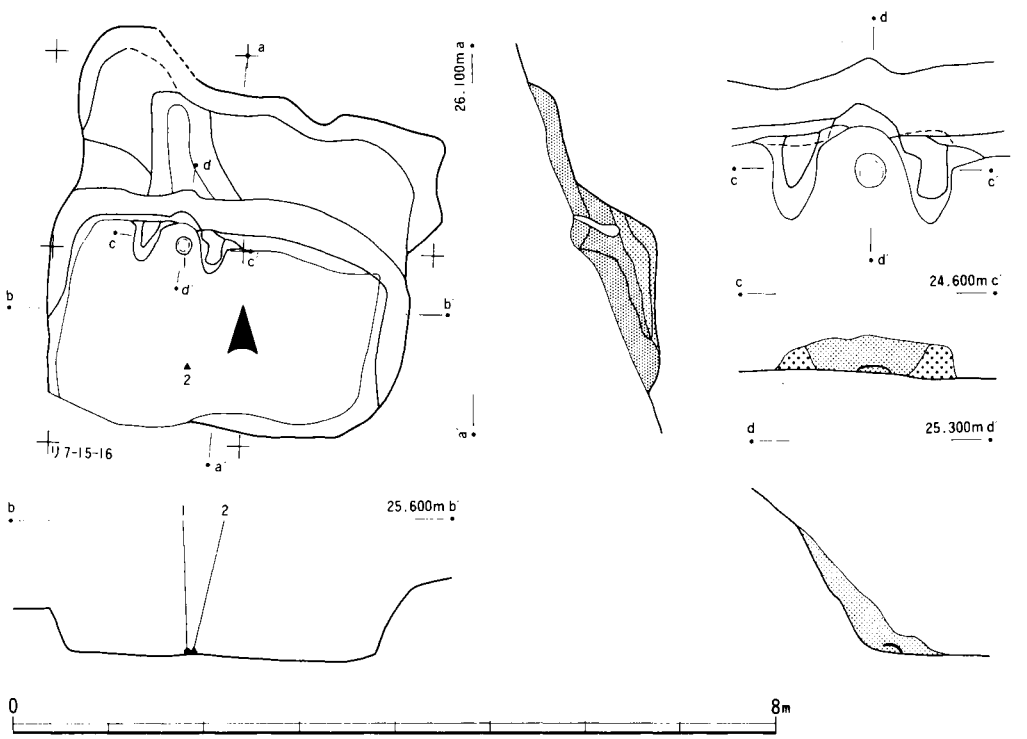
竪穴住居跡071（第36図、図版20）　（遺物121Ｐ）

台地南側の斜面中で、竪穴住居跡069の南西約３ｍの位置にある（リ７－15グリッド）。標高は25.0m前後である。斜面の下にあたる南壁の一部を検出できなかった。形状は東西方向が長

竪穴住居跡070



竪穴住居跡071



第36図　竪穴住居跡070・071

い長方形で、規模は小規模である。カマドのある北壁の上部には、奥行き0.98～1.68mほどの長さのテラス状の傾斜面がみられる。

住居の掘方は淡黄色粘土層まで掘り込まれ、その面を床面にしている。壁溝・柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。カマドは北壁のやや西側の位置に作られ、遺存状態はあまりよくなかったが、両袖を検出した。火床部は検出できなかった。袖の内壁には焼土化した部分はみられない。煙道部は壁をわずかに三角形に掘り込み、立ち上がり角度は約55度の傾斜をもつ。埋土は下層から中層にかけて暗黄褐色土が、上層には暗褐色土が堆積しているが、全体に焼土粒を含み、粘性が強い。

遺物の出土点数は極めて少ない。1の土師器杯はカマドの底面に伏せた状態で出土している。意図的にカマドの中に置かれたものと思われる。

竪穴住居跡072（第37図、図版19）

台地南側の斜面中で、竪穴住居跡070の東側の位置にあり、一部が重複している（リ7－14グリッド）。標高は25.0m前後である。斜面の下にあたる南側半分ほどは壁および床面を検出できなかった。形状は不明で、規模は小規模になるものと思われる。

住居の掘方は淡黄色粘土層まで掘り込まれ、その面を床面にしている。壁溝はカマドの左壁から北壁の全部と西壁の一部にみられるが、カマドの下にはみられない。柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。カマドの左隅に小ピットを検出した。長径24cm、短径22cm、深さは深いところで6cmであり、貯蔵穴と考えるには小さすぎるように思われる。カマドは東壁の中央付近に作られ、遺存状態は悪いが、両袖を検出した。火床部は検出できなかった。煙道部は壁をわずかに掘り込んでいると思われる。埋土は下層に黒褐色土がみられるほかは暗褐色土が堆積している。全体に焼土粒と炭化物粒を含み、粘性をもつ。

遺物の出土点数は極めて少なく、図示できる遺物はなかった。

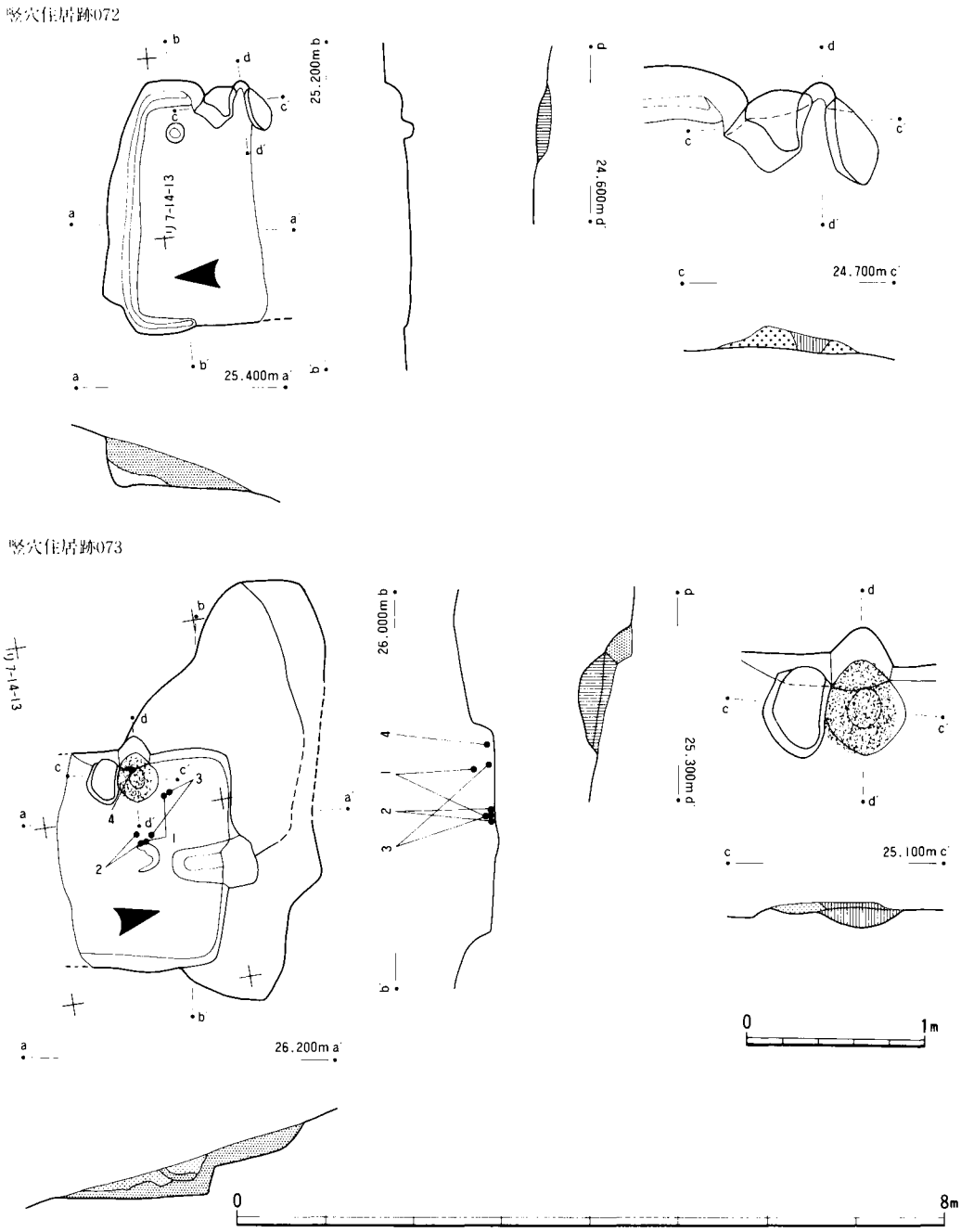
竪穴住居跡073（第37図、図版20）　（遺物121P）

台地南側の斜面中で、竪穴住居跡072の北側に隣接した位置にある（リ7－14グリッド）。標高は35.5m前後である。斜面の下にあたる南側は壁および床面を検出できなかった。形状は方形になるものと思われ、規模は小規模である。北壁の上部には、奥行き90cm、幅4.60mにわたるテラス状の傾斜面がみられる。

住居の掘方は淡黄色粘土層まで掘り込まれ、その面を床面にしている。壁溝・柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。カマドは作り替えが行われている。新カマドは西壁の中央に作られ、遺存状態が悪く、わずかに左袖の範囲と火床部を検出しただけである。煙道部は壁をわずかに三角形に掘り込み、立ち上がり角度は約47度の傾斜をもつ。旧カマドは北壁の中央に作られ、煙

道部の掘方と火床部のくぼみを検出した。これらの中に焼土化したカマドの構築材の破片がみられた。旧カマドの前面に三日月状の浅いくぼみがみられるが、性格は不明である。埋土は暗褐色土の上に暗黄褐色土が堆積し、全体に焼土粒と炭化物粒を含み、粘性をもつ。

遺物の出土点数は少なく、カマドおよびその周辺に3・4の須恵器甕の破片が比較的まとまって出土している。



第37図　竪穴住居跡072・073

竪穴住居跡099A（第38図、図版20）　　（遺物123Ｐ）

台地東側の斜面中で、竪穴住居跡017の北東約２ｍの位置にある（ヌ６－10・ル６－６グリッド）。標高は29.4m前後である。竪穴住居跡099Bと重複し、本住居跡の方が古い。斜面の下にあたる東側は壁を検出できなかった。099Bは本住居跡よりも小さいが、大部分が重複しているので、床面の大部分が壊されている。形状はカマドの中心を通る軸方向が長い長方形になるものと思われる。規模は中規模である。

住居の掘方は白色粘土層まで掘り込まれ、その面を床面にしている。壁溝は東側を除いてみられるが、カマドの下にはみられない。柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。カマドの対壁によった中央に出入口ピットを検出した。検出面（099Bの床面）での長径20cm、短径18cm、深さは深いところで16cmである。このほかに、カマドの右隅に小ピットを２つ検出した。隅に近いものが長径18cm、短径13cm、深さ５cm、もう１つが長径20cm、短径18cm、深さ８cmで、性格は不明である。カマドは北壁の中央に作られ、両袖と火床部を検出した。煙道部は壁をわずかに三角形に掘り込み、立ち上がり角度は約40度の傾斜をもつ。

遺物の出土点数は少なく、いずれも床面より高い位置から出土していることから、投棄されたものと思われる。

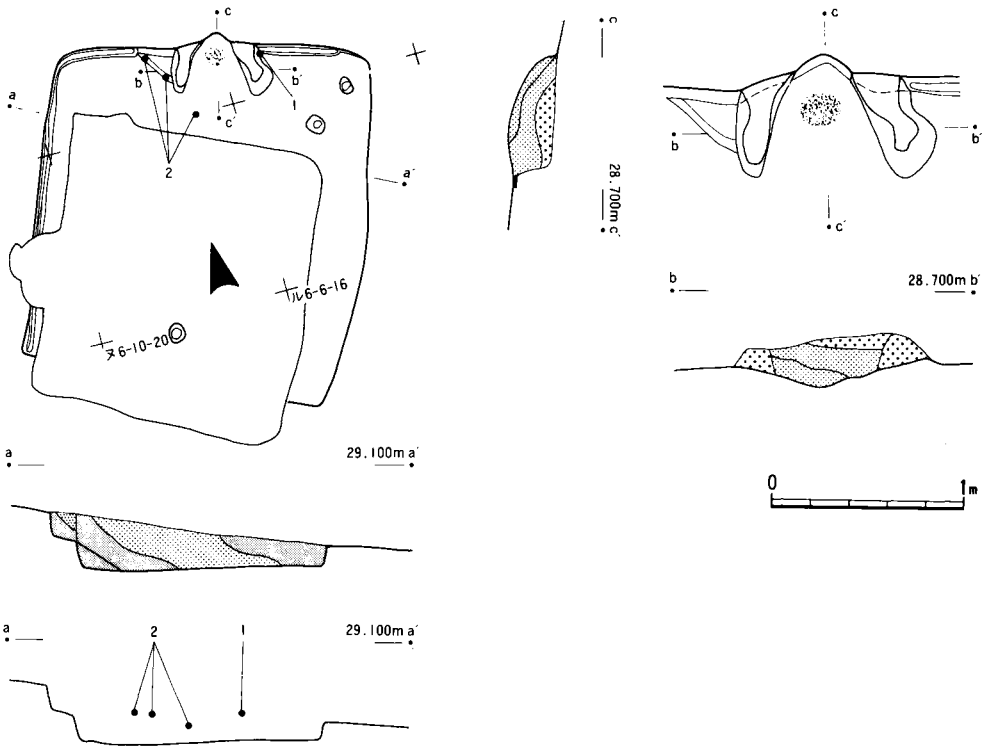
竪穴住居跡099B（第38図、図版20）

竪穴住居跡099Aにほぼ重なり、わずかに南にずれた位置にある（ヌ６－10・ル６－６グリッド）。標高は29.4m前後である。形状は方形であるが、カマドの中心を通る軸に直行する軸方向がわずかに長い。規模は小規模である。

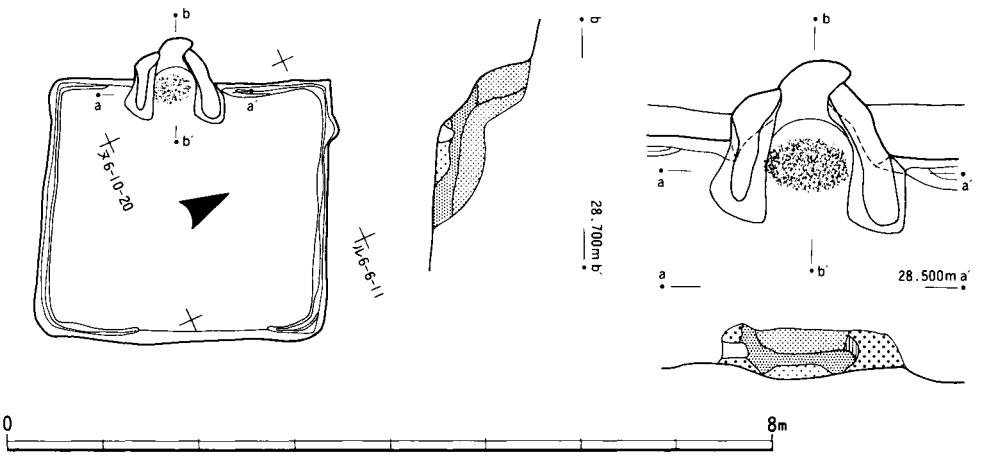
住居の掘方は白色粘土層まで掘り込まれ、その面を床面にしている。壁溝はカマドの対壁にあたる東側の中央を除いてみられる。カマドの下にはみられない。柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。カマドは南西壁のわずかに南によった位置に作られ、両袖と火床部を検出した。袖の内壁の一部には焼土化した部分がみられる。煙道部は壁を台形に掘り込み、立ち上がり角度は約52度の傾斜をもつ。埋土は黒褐色土に挟まれるように暗黄褐色土が厚く堆積している。全体に焼土粒を含み、粘性をもつ。

遺物の出土はまったくない。

竪穴住居跡099A



竪穴住居跡099B



第38図　竪穴住居跡099A・099B

遺物

歴史時代の遺構から出土した遺物は、土師器や須恵器のほかに、鉄製品、土製品、瓦塔部材などがある。土師器は杯と甕が主体で271点、須恵器は杯が主体で126点の、合計397点が図示できた。図示できなかった資料の総数は11,733点で、重量比でも土師器が全体の80%あまりを占めている（第5・6表)。比較的まとまって遺物が出土しているのは竪穴住居跡013・019・027・031・038・048A・049などであるが、そのなかでも031Bの土師器杯と土師器杯蓋の出土点数は注目すべきものである。また、瓦塔は竪穴住居跡031B・070、土坑067から出土しているが、031B出土のものが土師質で、070と067出土のものが須恵質である。両者は質の違いとともに、形状も異なり、明らかに時期差のあるものである。

竪穴住居跡002（第39図、図版29・55）　［土器観察表196P］

須恵器杯3点、土師器杯1点、土師器甕2点、鉄製品2点が図示できた。図示できなかった資料の総数は259点で、重量比で土師器が約75%を占める。杯では須恵器と土師器の差はあまりないが、土師器甕では在地型の甕と「常総型」の甕で後者がやや上回っている。

1～3は須恵器杯で、常陸産と思われる。1は底部外面に手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。2は底部外面は回転ヘラ切り後、回転ヘラ削り調整が施される。体部外面は下端部に回転ヘラ削り調整が施される。3は外面のロクロ痕が比較的明瞭である。底部外面は回転ヘラ切り後、手持ちヘラ削り調整が施される。

4は土師器杯である。底部外面は全面に手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下半部に手持ちヘラ削り調整が施される。

5・6は土師器甕で、小形の甕である。5の口唇部はわずかにつまみ上がる。外面の底部から胴部最大径の部分までが火熱を受け赤くなっている。胴部外面と底部外面はヘラ削りが施され、口縁部内外面と胴部内面はナデが施される。6は底部から胴部の一部しか遺存していないが、5と同様に外面が赤くなり、内外面の一部に煤の付着がみられる。

7・8は鉄製品である。7は刀子で、両関である。先端部は欠損している。全体に方向不定な植物繊維が銹で付着しているが、図示した面の裏側の関から刃部中央にかけては、刃と平行な方向に木質が銹によって付着している。また、茎端部には巻物がわずかに遺存している。遺存長115.0㎜、重さ6.89g、刃部は遺存長59.0㎜、幅10.5㎜、厚さ2.5㎜、茎部は遺存長56.0㎜、幅6.0㎜、厚さ3.0㎜を測る。8は鎌で、刃部のみであるが、古い段階での欠損と思われる。欠損の状態はタガネ等で切断したか、あるいは手で折り切ったような状態である。遺存長51.0㎜、幅23.5㎜、厚さ15.0㎜、重さ6.27gを測る。

竪穴住居跡003（第39図、図版29・58）　［土器観察表196P］

須恵器杯・土師器甕・石製勾玉各1点が図示できた。図示できなかった資料は総数で40点と少ない。破片資料でも杯は少なく、土師器甕が大部分を占めている。

1は須恵器杯で、常陸産と思われる。内面はロクロ痕が明瞭である。底部外面は回転ヘラ切り後、回転ヘラ削り調整が施される。体部外面は下端部に回転ヘラ削り調整が施される。

2は土師器甕で、口唇部はわずかにつまみ上がる。胴部外面はヘラ削りで、胴部内面はヘラナデが、口縁部内外面はナデが施される。器面は火熱を受けて脆くなり、剝離している部分もみられる。

3は勾玉で、石材は光沢のある乳白色をした流紋岩である。長さ23.5㎜、断面径0.85㎜、最大孔径0.25㎜、最小孔径0.15㎜、重さ3.34gを測る。

竪穴住居跡004（第39図、図版29・30・55）　［土器観察表196P］

須恵器杯3点、須恵器高台付き杯・土師器鉢・須恵器甕各1点、鉄製品3点が図示できた。図示できなかった資料の総数は105点と少ない。図示できた遺物は須恵器の方が多いが、破片資料では土師器が大多数を占めている。

1～3は須恵器杯で、2・3は常陸産と思われる。1は口縁部の形状がややゆがみ、軟質な印象を受ける。口縁部から体部内面の一部に煤が付着する。底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下半部に手持ちヘラ削り調整が施される。2は小振りの杯で、底部外面は回転ヘラ切り後、手持ちヘラ削り調整が施される。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。3は大振りの杯で、底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。

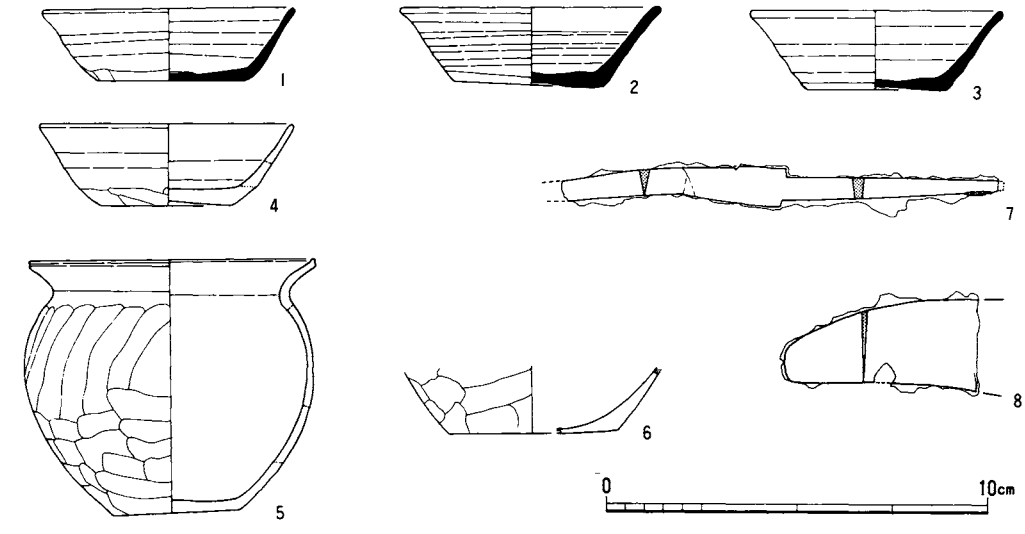
4は須恵器高台付き杯で、底部と高台部のみが遺存している。「くすべ焼成」の須恵器で、常陸産と思われる。底部外面は回転ヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は遺存している範囲すべてに回転ヘラ削り調整が施され、高台部はナデが施される。

5は土師器鉢で、体部外面の上部は輪積み痕がみられ、特に調整は施されていない。体部外面の下半部はヘラ削りが、体部内面はヘラナデが、口縁部内外面はナデが施される。

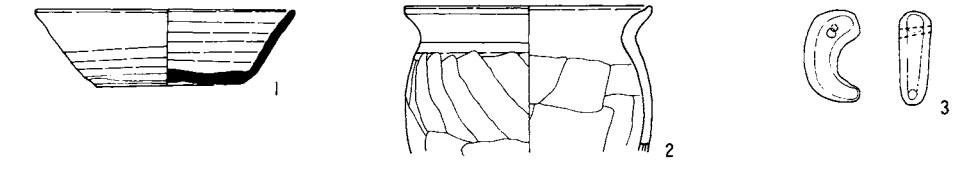
6は須恵器甕で、常陸産と思われる。胴部外面は斜め方向の叩き後、粗いナデが施される。下半部は手持ちヘラ削り調整が施される。胴部内面には指頭によるオサエ痕が残り、下端部から底部内面はナデが施される。

7～9は鉄製品で、性格は不明である。7・8は接合しないが同一個体と思われる。7の右側の欠損部は古く、タガネで切断したような状態である。遺存長36.0㎜、幅21.0㎜、厚さ1.0㎜、重さ5.16gを測る。8は遺存長20.0㎜、幅23.0㎜、厚さ1.0㎜、重さ1.94gを測る。9は鋳造品で、周囲はすべて欠損している。遺存長54.5㎜、遺存幅44.0㎜、重さ28.65gを測る。

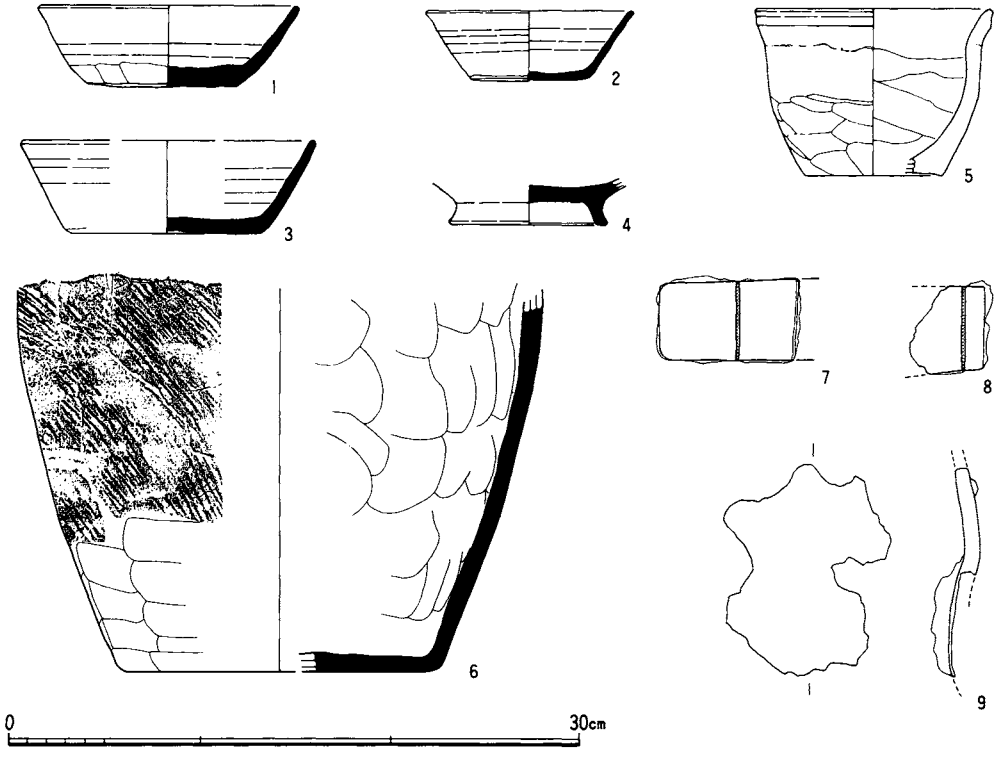
竪穴住居跡002



竪穴住居跡003



竪穴住居跡004



第39図　竪穴住居跡002・003・004出土遺物

竪穴住居跡005（第40図、図版30・55）　［土器観察表196Ｐ］

須恵器杯１点、土師器杯２点、土師器甕１点、鉄製品１点が図示できた。図示できかなった資料の総数は80点と少なく、重量比では土師器が91％を占める。

１は須恵器杯で、常陸産と思われる。底部中央には焼成後に内外面両方から開けられたと思われる孔がある。体部外面と底部内面はロクロ痕が明瞭である。内外面に火襷痕がみられる。底部外面は一定方向への手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。

２・３は土師器杯である。いずれも非ロクロの土師器で、口縁部はわずかに外反し、底部は丸底である。２は内外面ともにヘラ磨き後、黒色処理が施される。３は内外面ともにヘラ磨き後、外面に赤彩が施されるが、遺存状態は悪い。

４は土師器甕で、口縁部は外反気味につまみ上がる。胴部外面はヘラ削り後、ヘラナデが施される。

５は円盤状の鉄製品であるが、性格は不明である。遺存状態はよく、銹膨れしておらず重量感がある。表面の一部に緑青が付着しているが、外部からのものではなく本体の成分によるものと思われる。径48.0㎜、厚さ2.0㎜、重さ24.50ｇを測る。

竪穴住居跡006（第40図、図版30）　［土器観察表196Ｐ］

須恵器杯３点、土師器甕２点が図示できた。図示できなかった資料の総数は112点である。重量比では土師器甕が大部分を占めているが、「常総型」の甕はまったくみられない。

１～３は須恵器杯で、２・３は常陸産と思われる。１は口縁部から体部上半にかけて器壁が厚くなっている。底部外面は回転ヘラ切り後、回転ヘラ削り調整が施される。体部外面は下半部に回転ヘラ削り調整が施される。２は内面のロクロ痕が明瞭である。底部外面は回転ヘラ切り後、一定方向への手持ちヘラ削り調整が施される。体部外面は下半部に手持ちヘラ削り調整が施される。３は１・２に比べて焼成がよい。底部外面は回転ヘラ切り後、回転ヘラ削り調整が施される。体部外面は下端部に回転ヘラ削り調整が施される。

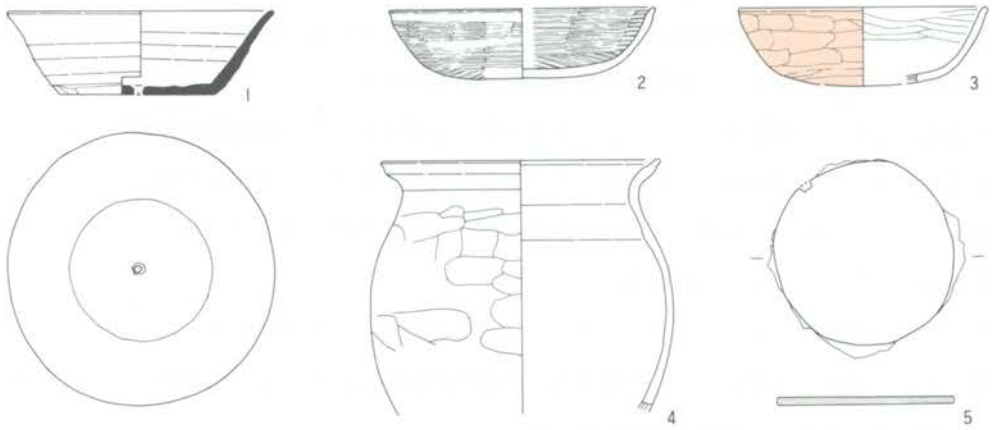
４・５は土師器甕で、同一個体と思われる。いずれも火熱を受け、４は外面の器壁が荒れている。５は外面の一部に煤が付着する。

竪穴住居跡007（第40図、図版55）　［土器観察表196Ｐ］

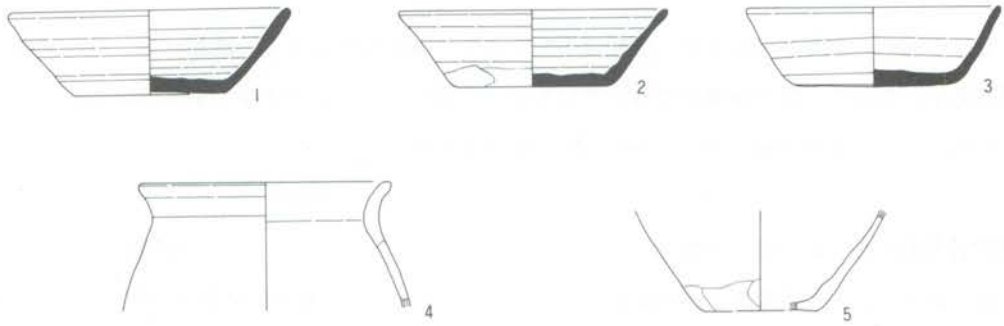
須恵器杯２点、土師器杯・須恵器長頸壺・須恵器甕・土師器甕・鉄製品各１点が図示できた。図示できなかった資料の総数は215点で、重量比では土師器甕が大部分を占める。

１・２は須恵器杯で、常陸産と思われる。１に比べて２の方が焼成はよい。１は底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部にヘラ削り調整

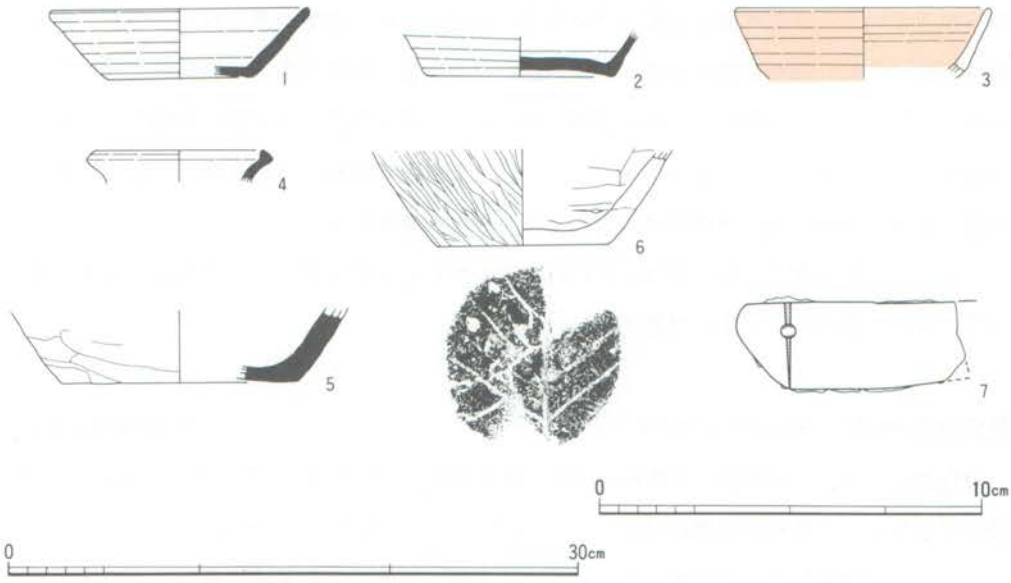
竪穴住居跡005



竪穴住居跡006



竪穴住居跡007



第40図　竪穴住居跡005・006・007出土遺物

が施されるが、回転か手持ちかは不明瞭である。2は底部は上げ底で、底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は無調整である。

3は土師器杯で、内外面に赤彩が施される。

4は須恵器長頸壺で、口縁部外面と頸部内面には自然釉がみられる。

5は須恵器甕で、常陸産と思われる。内面の色調は灰色であるが、外面が黒色であり、「くすべ焼成」の須恵器と思われる。

6は土師器甕で、「常総型」の甕である。底部には木葉痕がみられる。

7は穂摘具である。右側の欠損部は古いものである。遺存長60.0㎜、幅2.2㎜、厚さ1.5㎜、重さ7.84gを測る。

竪穴住居跡008（第41図、図版55）　［土器観察表196P］

須恵器杯1点、須恵器甕2点、土師器甕4点、土製支脚1点、鉄製品2点が図示できた。図示できなかった資料の総数は59点と少ない。重量比では土師器がわずかに上回る程度である。

1は須恵器杯で、常陸産と思われる。色調は口縁部外面が青灰色で、それ以外は灰色である。底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は無調整である。

2・3は須恵器甕で、3は常陸産と思われる。2は小破片であるが焼成はきわめてよい。口唇部に自然釉がみられる。3は胴部外面は叩き後、下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。内面は指頭によるオサエ痕がみられ、下端部から底部にかけてナデが施される。

4～7は土師器甕である。胴部外面はいずれも縦方向のヘラ削りが施される。4・5には一部火熱を受け、赤くなった部分がみられる。6・7は接合しないが同一個体と思われる。

8は土製支脚で、頭部のみが遺存している。火熱を受け、全体に脆くなっている。

9・10は鉄製品である。9は鏃で、三角形式になるものと思われる。刃部右側の欠損部は古く、断面が銹化している。頸部と茎部の境は緩やかに「ハ」の字状に広がっている。全体の遺存長92.0㎜、重さ15.65g、刃部は遺存長47.0㎜、幅9.0㎜、厚さ2.0㎜、頸部は推定長65.5㎜、幅9.0㎜、厚さ4.0㎜、茎部は遺存長5.5㎜、幅4.8㎜、厚さ3.0㎜を測る。10は棒状品で、接合しないが同一個体である。遺存長は上が46.0㎜、下が104.0㎜、幅7.0㎜、厚さ4.0㎜、重さ17.60gを測る。

竪穴住居跡009（第41・42図、図版30・55）　［土器観察表196P］

土師器杯3点、土師器高台付き皿1点、須恵器甕2点、須恵器甑1点、土師器甕2点、鉄製品・銅製品各1点が図示できた。図示できなかった資料の総数は156点で、重量比では須恵器が58％を占め、その大部分が甕である。土師器甕では「常総型」の甕はまったくみられない。

1～3は土師器杯である。1は口縁部から体部の外面の一部に輪積み痕がみられる。底部外面は回転糸切り後、周縁部に手持ちヘラ削り調整が施される。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。2は底部外面は一定方向への手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。3は底部外面は回転糸切り後、周縁部の大部分に手持ちヘラ削り調整が施される。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。

4は土師器高台付き皿である。高台は低く、外面の体部との境は窪めることによって作り出されている。内面はやや粗いヘラ磨きが施される。底部外面は回転ヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。

5・6は須恵器甕で、5は還元炎焼成になりきれない須恵器、6は「くすべ焼成」の須恵器である。5は7の須恵器甑と焼成・胎土がよく似ている。

7は須恵器甑で、5と同じく還元炎焼成になりきれない須恵器である。胴部外面は縦方向の叩き後、一部ナデが施される。内面は指頭によるオサエ後、ナデが施される。

8・9は土師器甕である。8は器壁が薄く、よく焼き締まった感じの甕である。胴部外面は縦方向の丁寧なヘラ削りが施される。胴部内面にはオサエ痕のような緩やかな凹凸がみられ、その後ナデが施されている。9は小形の甕で、口縁部はわずかにつまみ上がる。8と同様に器壁は薄い。胴部は内外面ともオサエ痕のような緩やかな凹凸がみられ、外面は縦方向のヘラナデが部分的に施される。

10は鉄製品で、刀の双脚の足金物である。表面の一部に緑青がみられることから、銅装されていた可能性がある。長さ45.0㎜、幅19.5㎜で、輪の幅は4.0㎜、厚さ6.0㎜を測る。上部の中央付近に釣り金物がつく。長さ5.0㎜、幅4.0㎜、厚さ6.5㎜を測るが、銹が著しく全体の形状はよくわからない。全体の重さは19.50ｇを測る。11は青銅製の耳環である。横外径19.5㎜、縦外径18.0㎜、横内径11.5㎜、縦内径11.0㎜、幅4.0㎜、厚さ5.0㎜、重さ5.3ｇを測る。

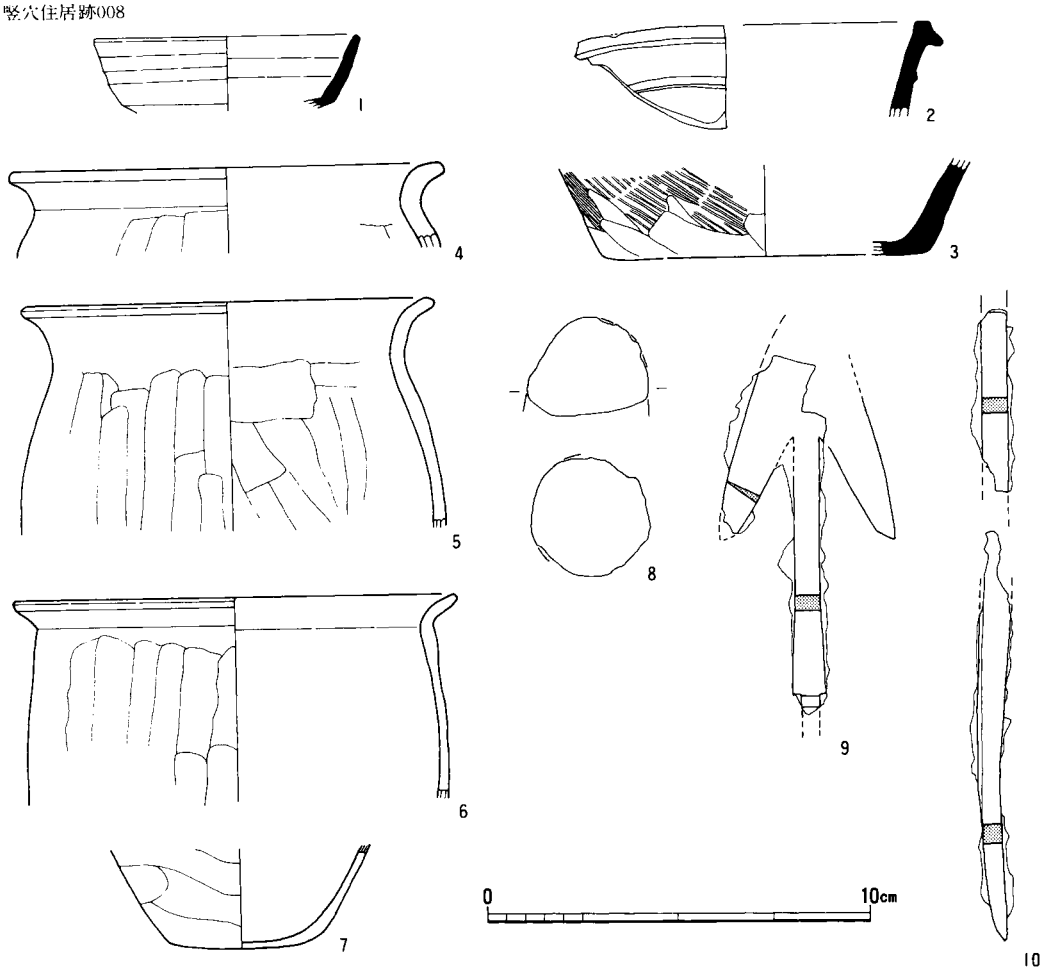
竪穴住居跡010（第42・43図、図版31・55・58）　［土器観察表197Ｐ］

須恵器杯1点、土師器杯2点、土師器甕4点、紡錘車1点、砥石2点、鉄製品5点が図示できた。図示できなかった資料の総数は502点である。重量比では土師器が90％近くを占め、その大部分が甕である。

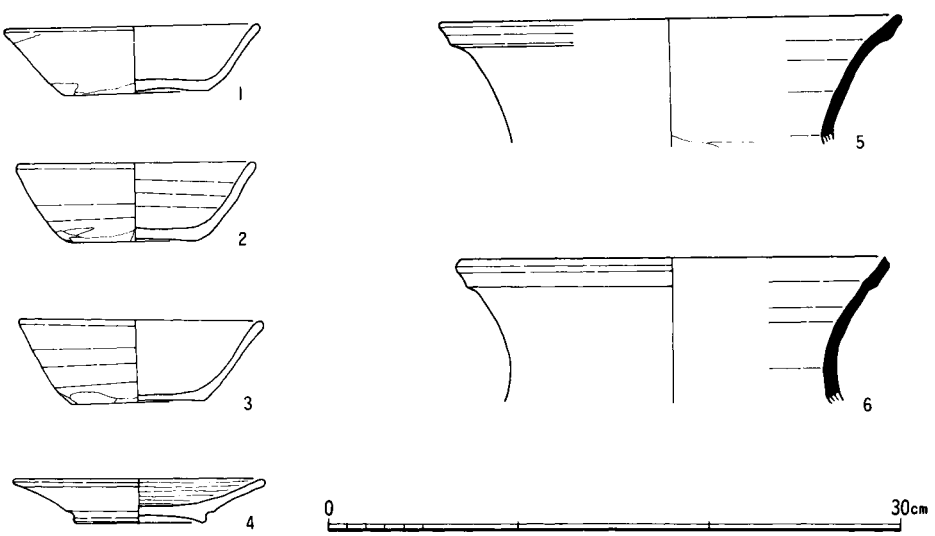
1は須恵器杯で、常陸産と思われる。底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は無調整である。

2・3は土師器杯である。2は非ロクロの土師器で、丸底である。内外面ともヘラ磨き後、黒色処理が施されるが、遺存状態はあまりよくない。3は全体にゆがみがみられる。底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は無調整で、内面はヘ

竪穴住居跡008



竪穴住居跡009



第41図　竪穴住居跡008・009出土遺物

ラ磨き後、内外面に赤彩が施される。

4～7は土師器甕である。4・5は「常総型」の甕で、口縁部がつまみ上がるが、5はやや外反気味である。6は小形の甕である。7は底部外面にもヘラ削り痕がみられる。

8は紡輪で、常陸産と思われる須恵器杯の底部を転用している。外径の端部は凹凸がみられるが、摩滅している。外径56.0㎜、内径8.0㎜、厚さ7.5㎜を測る。

9・10は砥石で、よく使い込まれている。石材はいずれも凝灰岩質である。

11～15は鉄製品である。11は緩やかな曲線をもつ曲刃鎌である。刃を下、基部を右側にして置いた場合、基部を手前に折り曲げる。全長185.0㎜、幅43.5㎜、厚さ2.0㎜、重さ86.41ｇを測る。12は鉋で、茎部の欠損部は古いものである。遺存長64.0㎜、重さ2.80ｇ、刃部は幅9.0㎜、厚さ2.0㎜、茎部は幅3.0㎜、厚さ2.5㎜を測る。13～15は刀子である。接合はしないが同一個体と思われる。13は刃部の先端部分で、手前に折れ曲がっている。15は刃部から茎部にかけてで、両関である。13は遺存長37.0㎜、重さ4.51ｇ、刃部幅21.0㎜、厚さ3.0㎜、14は遺存長35.0㎜、重さ4.49ｇ、15は遺存長18.0㎜、重さ2.74ｇ、茎部の遺存長8.0㎜、幅8.0㎜、厚さ2.0㎜を測る。

竪穴住居跡011（第43図、図版31・58）　［土器観察表197Ｐ］

土師器甕4点、砥石1点が図示できた。図示できなかった資料の総数は50点と少なく、土師器甕がほとんどを占める。

1～4は土師器甕である。1は胴部外面は縦方向のヘラ削り後、横方向のヘラナデが施される。2は「常総型」の甕で、口縁部はつまみ上がらずに、強く外反する。3は小形の甕で、口縁部から頸部にかけて、内外面に輪積み痕がみられる。胴部外面の下半部と内面の中位に煤が付着する。4は外面に焼土が付着する。

5は砥石で、図の上の部分は欠損している。そのほかの面は使用されている。石材は硬質の砂岩である。

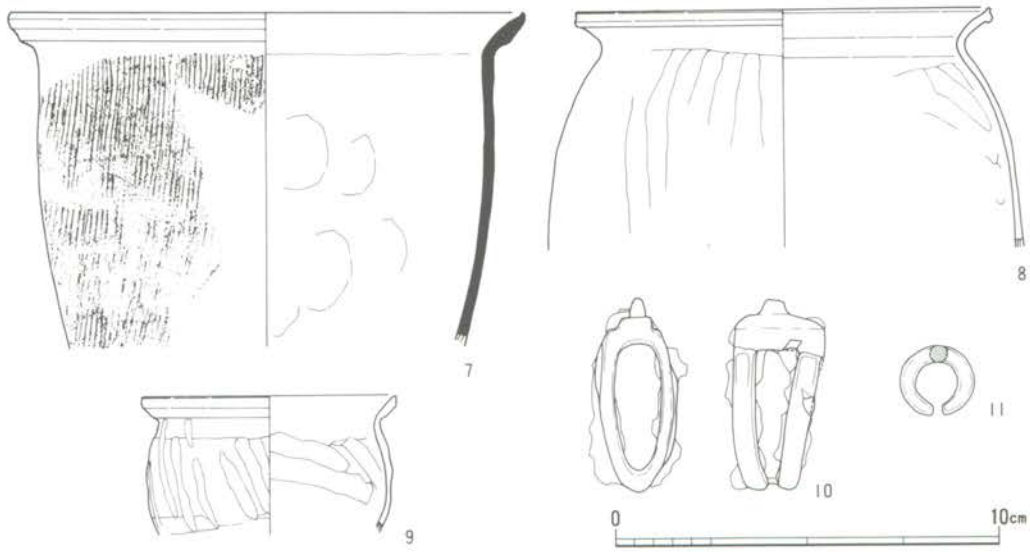
竪穴住居跡012（第43図）　［土器観察表197Ｐ］

土師器杯・土製支脚各1点が図示できた。図示できなかった資料の総数はわずかに2点で、非常に少ない。

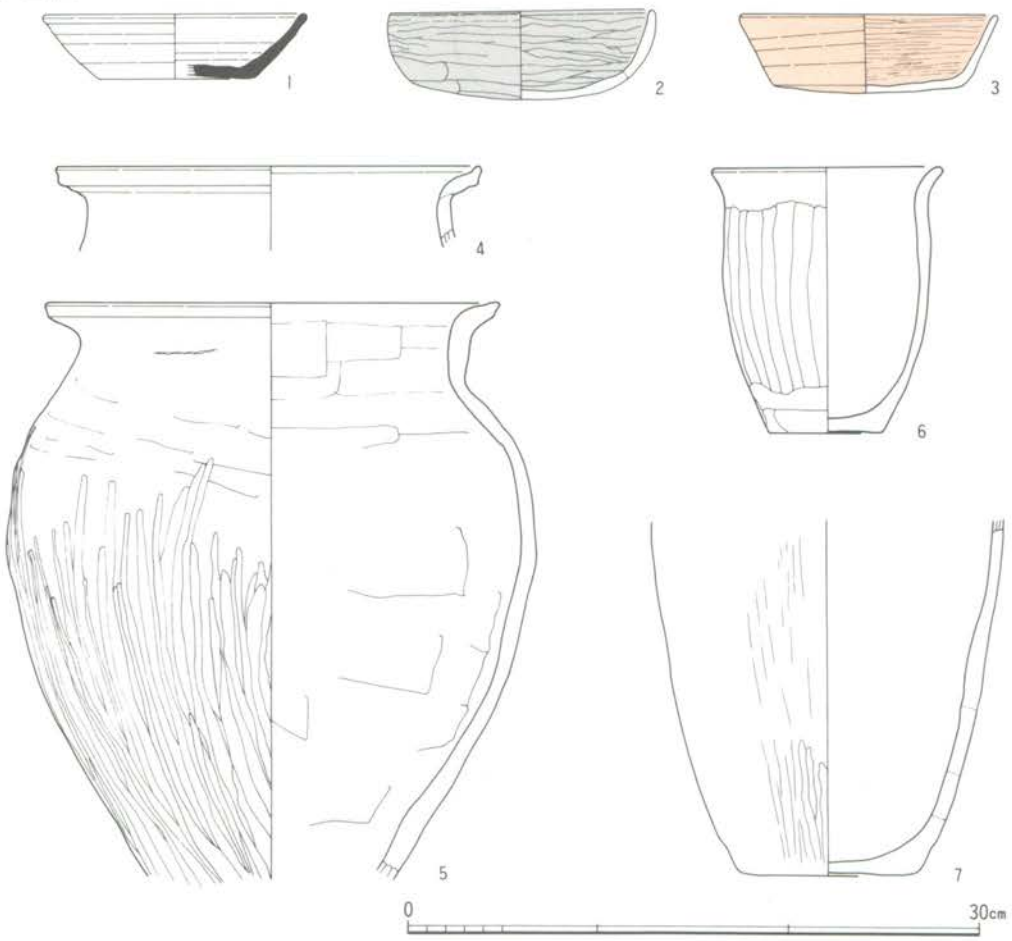
1は非ロクロの土師器杯で、丸底である。口縁部外面と内面のすべてにヘラ磨きが施され、底部外面はヘラ削りである。内外面に黒色処理が施され、光沢をもっている。

2は土製支脚で、頭部が遺存している。表面は火熱を受けている。遺存長137.0㎜、頭部径35.0㎜を測る。

竪穴住居跡009

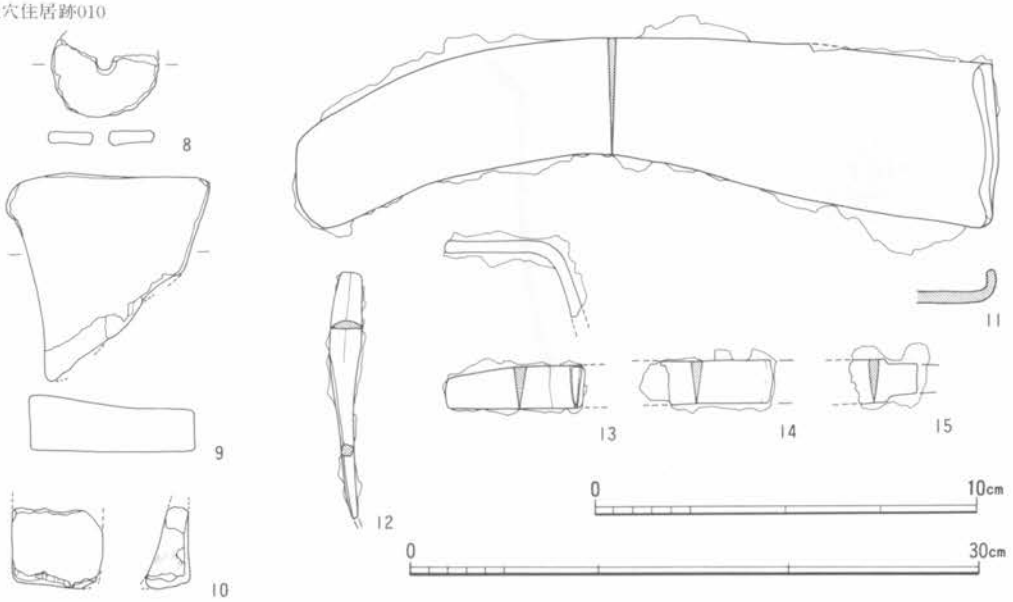


竪穴住居跡010

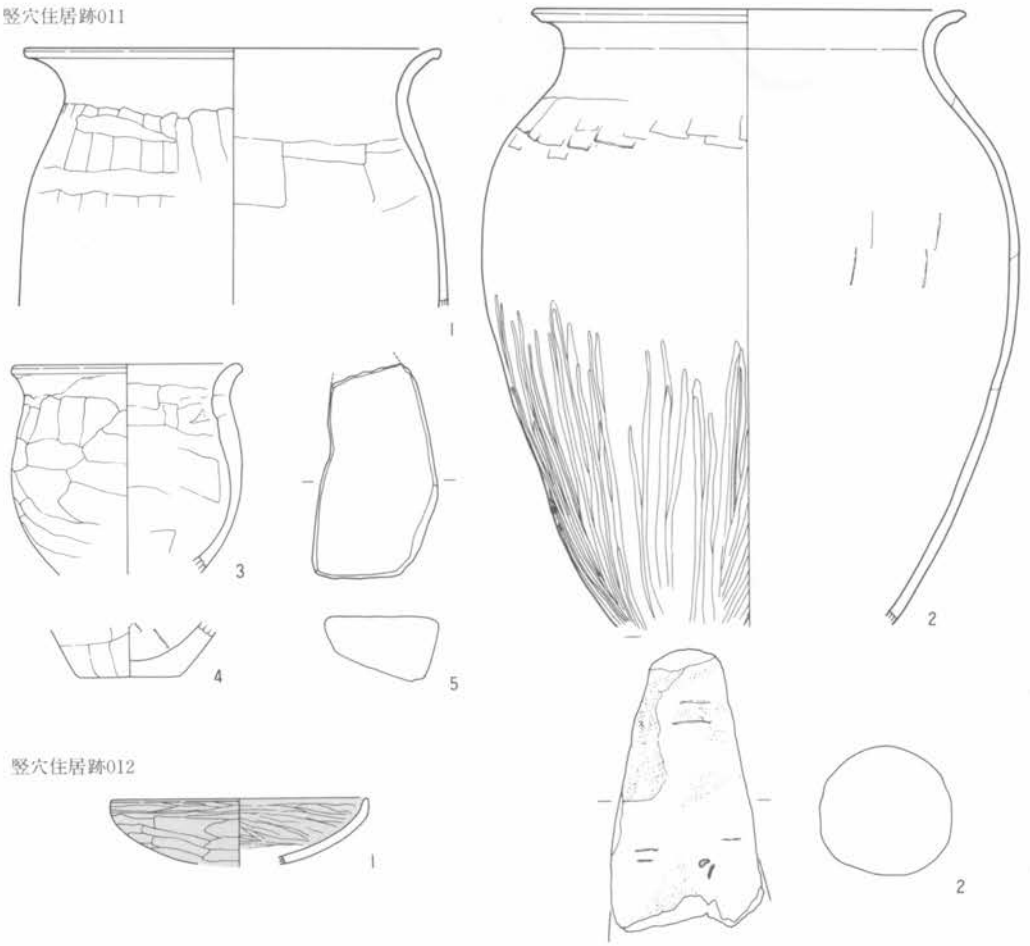


第42図　竪穴住居跡009・010出土遺物

竪穴住居跡010



竪穴住居跡011



竪穴住居跡012

第43図　竪穴住居跡010・011・012出土遺物

竪穴住居跡013（第44・45図、図版32・55・58）　［土器観察表197Ｐ］

須恵器杯９点、土師器杯５点、土師器壺・土師器鉢各１点、土師器甕４点、土製品１点、鉄製品６点が図示できた。図示できなかった資料の総数は1,396点である。重量比では土師器が約87％を占め、土師器甕では「常総型」の甕の割合の方が多い。

１～９は須恵器杯で、すべて常陸産と思われる。色調は９が青灰色であるほかは灰色である。６～８はほかの杯に比べて胎土中に含まれる石英粒が少なく、焼成もややあまく、軟質である。底部外面は２は回転ヘラ削り調整で、８を除いたそのほかは手持ちヘラ削り調整が施される。切り離し技法は２・３が回転ヘラ切りで、そのほかは不明である。体部外面は下端部が摩滅していて不明瞭なものが多く、明かなものとしては３・５は無調整で、９は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。

10～14は非ロクロの土師器杯である。10は平底で、そのほかは丸底である。内面はいずれもよくヘラ磨きされるが、11はやや粗い。10は内外面に赤彩が施され、11は内外面に黒色処理が施されるが、遺存状態はよくない。14は内外面ともに器面がやや荒れ、器表面が剝離している部分がみられる。13・14は底部外面に「石田」と墨書されている。

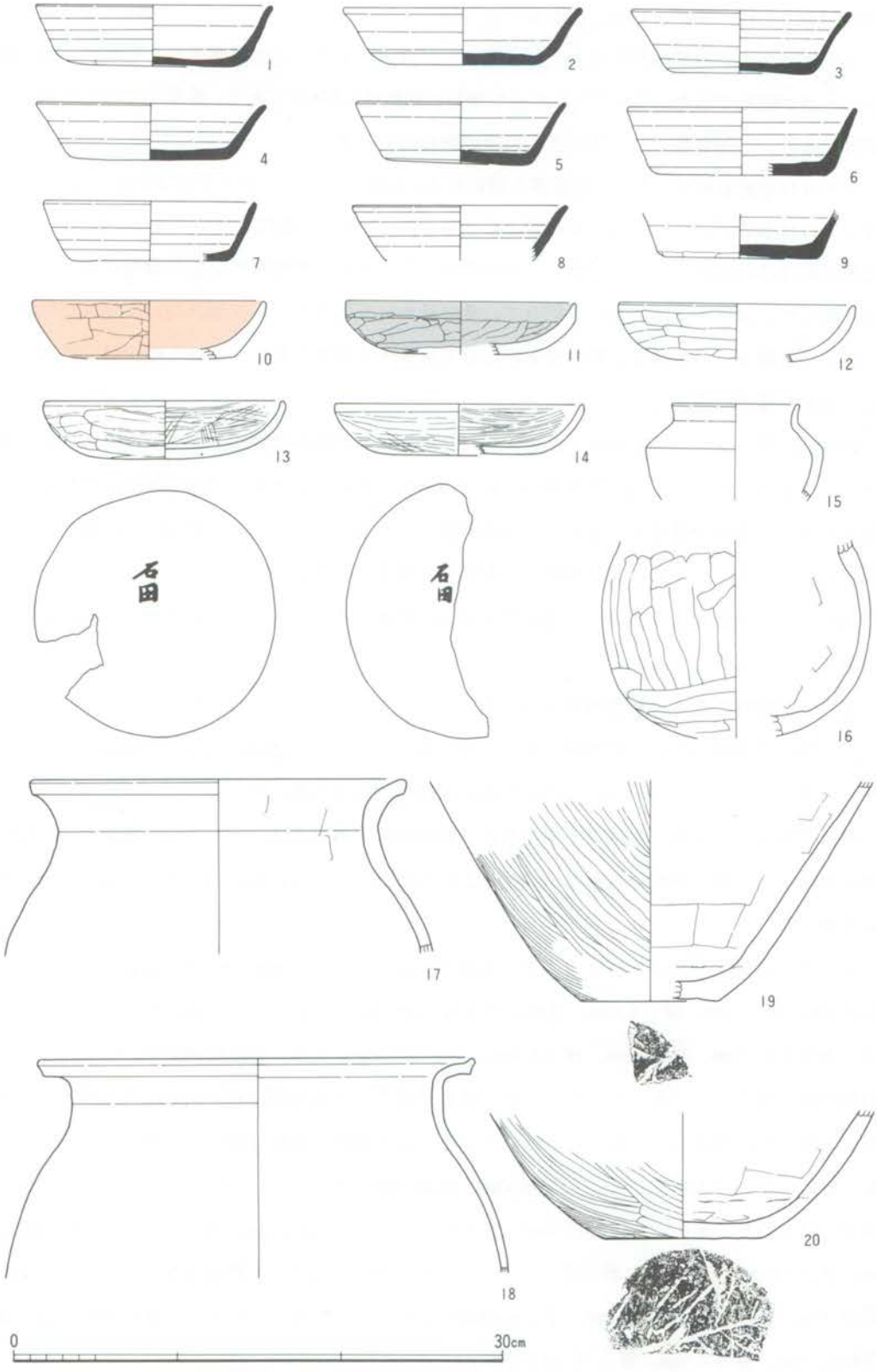
15は小形の土師器壺であるが、遺存度は低い。調整は不明であるが、内外面ともに器表面は平滑に仕上げられている。

16は土師器鉢である。胴部外面はヘラ削りで、内面はヘラナデが施される。

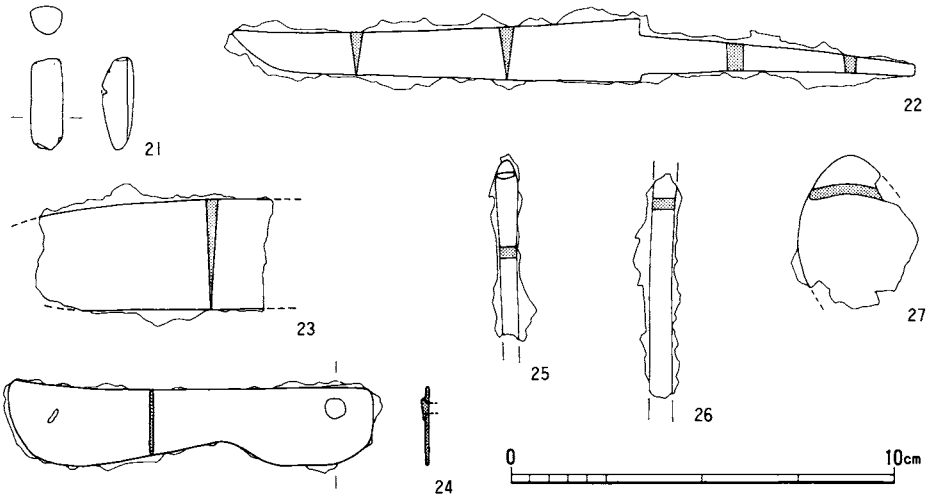
17～20は「常総型」の土師器甕である。17は18に比べて、口縁部の外反と口唇部のつまみ上がりの度合いが弱い。19・20には底部外面に木葉痕がみられる。

21は土製品であるが、性格は不明である。器面は軽く磨かれている。色調は橙褐色で、胎土中にはほとんど混入物がみられない。焼成はややあまい。長さ14.5㎜、径7.0～8.5㎜、重さ1.20ｇを測る。

22～27は鉄製品である。22は刀子で、両関である。全長180.5㎜、重さ28.29ｇ、刃部は長さ108.0㎜、幅17.0㎜、厚さ4.0㎜、茎部は長さ72.5㎜、幅10.0㎜、厚さ4.2㎜を測る。23は鎌である。遺存長62.0㎜、幅29.0㎜、厚さ3.0㎜、重さ22.15ｇを測る。24は穂摘具で、中央よりやや右側が使い減りしている。左右両方の孔に鉄釘が残り、図の左側は釘の頭の部分が折れているが、右側は釘の頭を左から右に折り曲げている。図の裏側の鉄釘は両方とも根元から折れている。鉄釘の断面は方形である。長さ95.0㎜、幅20.0㎜、厚さ1.0㎜、重さ11.82ｇを測る。25は鏃で、両丸造りである。遺存長47.0㎜、重さ3.08ｇ、刃部は幅6.5㎜、厚さ2.0㎜、茎部は幅4.5㎜、厚さ3.0㎜を測る。26は棒状品で、上下両方の欠損部分は古い。断面は長方形である。遺存長58.0㎜、幅6.0㎜、厚さ3.0㎜、重さ5.28ｇを測る。27は性格不明である。遺存長40.0㎜、遺存幅32.0㎜、厚さ3.0㎜、重さ11.19ｇを測る。



第44図　竪穴住居跡013出土遺物(1)



第45図　竪穴住居跡013出土遺物(2)

竪穴住居跡014（第46図、図版33・56）　［土器観察表197P］

須恵器杯・土師器杯・土師器鉢・須恵器長頸壺・須恵器杯蓋各1点、土師器甕4点、鉄製品2点が図示できた。図示できなかった資料の総数は182点で、重量比で土師器が88%を占めている。破片資料の中には「常総型」の甕もみられる。

1は須恵器杯で、常陸産と思われるが、雲母粒や石英粒の混入の度合いは比較的少ない。底部外面は回転ヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は無調整である。

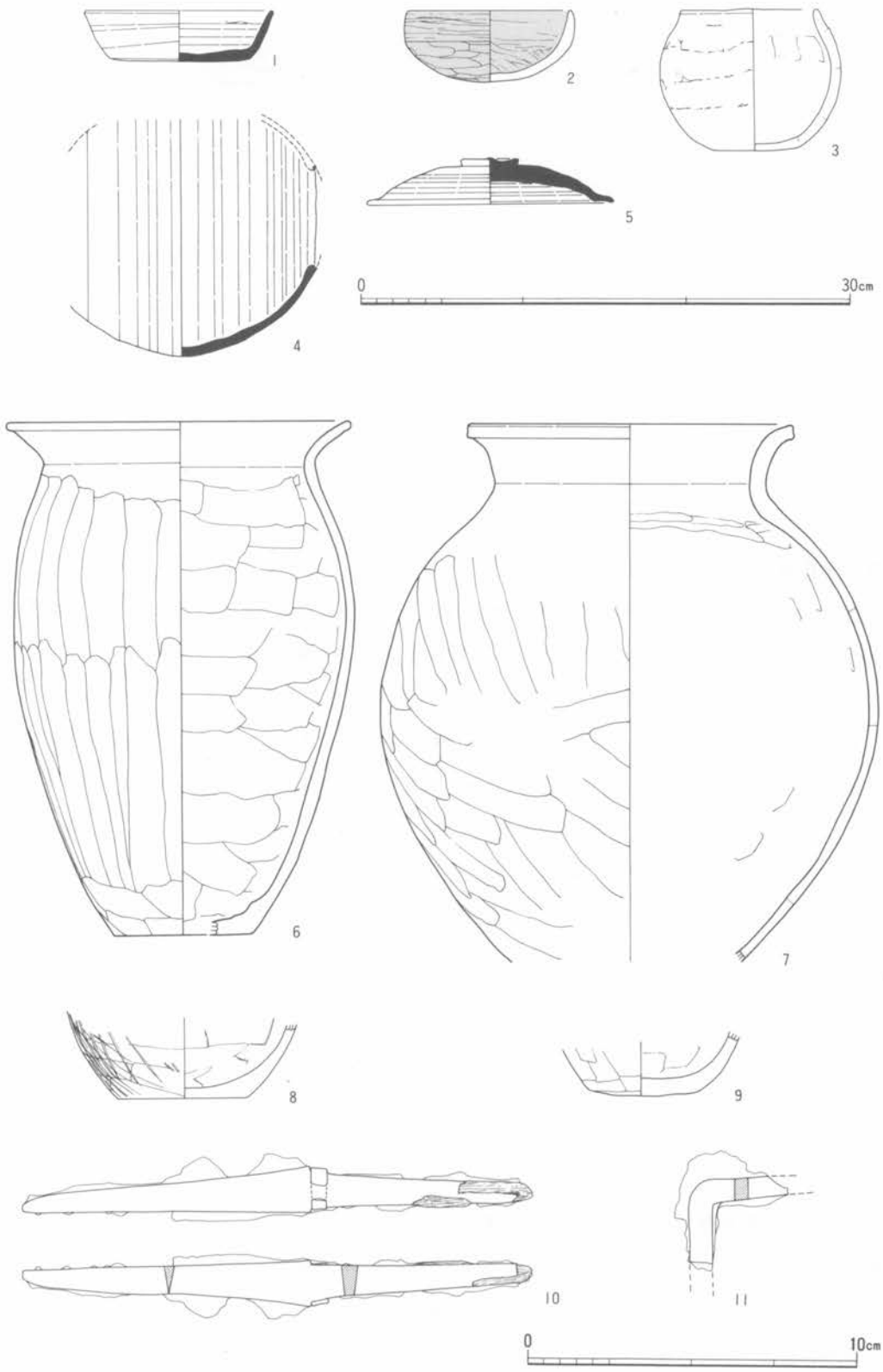
2は非ロクロの土師器杯である。体部外面はヘラ削り後、ヘラ磨きが施される。口縁部内外面と体部内面はナデ後、ヘラ磨きが施される。内外面に黒色処理が施されるが、外面の遺存状態がよくない。

3は土師器鉢である。器面は内外面ともに火熱を受け、荒れている。胴部外面には輪積み痕がみられる。

4はフラスコ形の須恵器長頸壺である。図の左側に回転ヘラ削り調整痕がみられる。内外面の一部に自然釉がみられる。

5は須恵器杯蓋で、常陸産と思われる。胎土中に石英粒は比較的多くみられるが、雲母粒はほとんど含んでいない。天井部外面は回転ヘラ削り調整が施される。

6～9は土師器甕である。6は長胴の甕で、胴部外面はヘラ削り、内面はヘラナデが施される。胴部外面の一部に煤が付着する。7は球形の胴部をもつ甕で、胴部外面はヘラ削り後、ヘラナデが施され、器面は全体的に平滑である。胴部外面の一部に煤が付着する。8は7と同様に胴部外面はヘラ削り後、ヘラナデが施されるが、一部にヘラ磨きも施される。器面は平滑である。9は火熱を受け、器面は荒れている。



第46図　竪穴住居跡014出土遺物

10・11は鉄製品である。10は刀子で、両関である。茎部に一部木質が遺存する。また、片面には鉏の一部が遺存する。長さ156.0㎜、重さ18.55ｇ、刃部は長さ87.0㎜、幅14.0㎜、厚さ3.0㎜、茎部は長さ49.0㎜、幅11.0㎜、厚さ5.0㎜を測る。11は閂金具と思われる。胴部遺存長30.0㎜、脚部遺存長20.0㎜、幅6.5㎜、厚さ4.0㎜、重さ9.75ｇを測る。

竪穴住居跡015（第47図、図版34・56）　［土器観察表197Ｐ］

須恵器杯６点、土師器杯１点、須恵器長頸壺１点、須恵器甑２点、土師器甕４点、鉄製品１点が図示できた。図示できなかった資料の総数は397点で、重量比で土師器が87％を占める。杯は須恵器の方が多く、土師器甕は「常総型」の甕とそれ以外のものが半々くらいの割合である。

１～６は須恵器杯である。３・４は常陸産と思われる。１・５・６は色調が青灰色で、焼成もよく、硬く焼き締まっている。２は胎土中に乳白色のやや大粒の粘土粒を含んでいる。１・２は底部外面は回転ヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に回転ヘラ削り調整が施される。３～６は底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。３・４は体部外面の下端部に手持ちヘラ削り調整が施されるが、５・６は無調整である。４の底部外面には現存しない文字が墨書されている。

７は非ロクロの土師器杯である。底部は丸底である。体部から底部の外面はヘラ削り後、ヘラ磨きが施される。内面はヘラ磨きされるが、底部内面は斜格子状のヘラ磨きが施される。

８は須恵器長頸壺である。内面に自然釉がかかりざらついている。

９・10は須恵器甑で、同一個体と思われる。胴部外面は斜め方向の叩き後、下端部はヘラ削り調整が施される。内面はナデである。焼成はあまりよくなく、軟質である。

11～14は土師器甕で、14は「常総型」の甕である。11・12は小形の甕で、11の口唇部はつまみ上がる。14の底部外面には木葉痕が残る。

15は刀子で、両関である。茎部全体に薄く木質が付着する。また、鉏が一部遺存している。長さ238.0㎜、重さ39.26ｇ、刃部は長さ143.0㎜、幅20.0㎜、厚さ3.0㎜、茎部は長さ94.5㎜、幅16.0㎜、厚さ4.0㎜を測る。

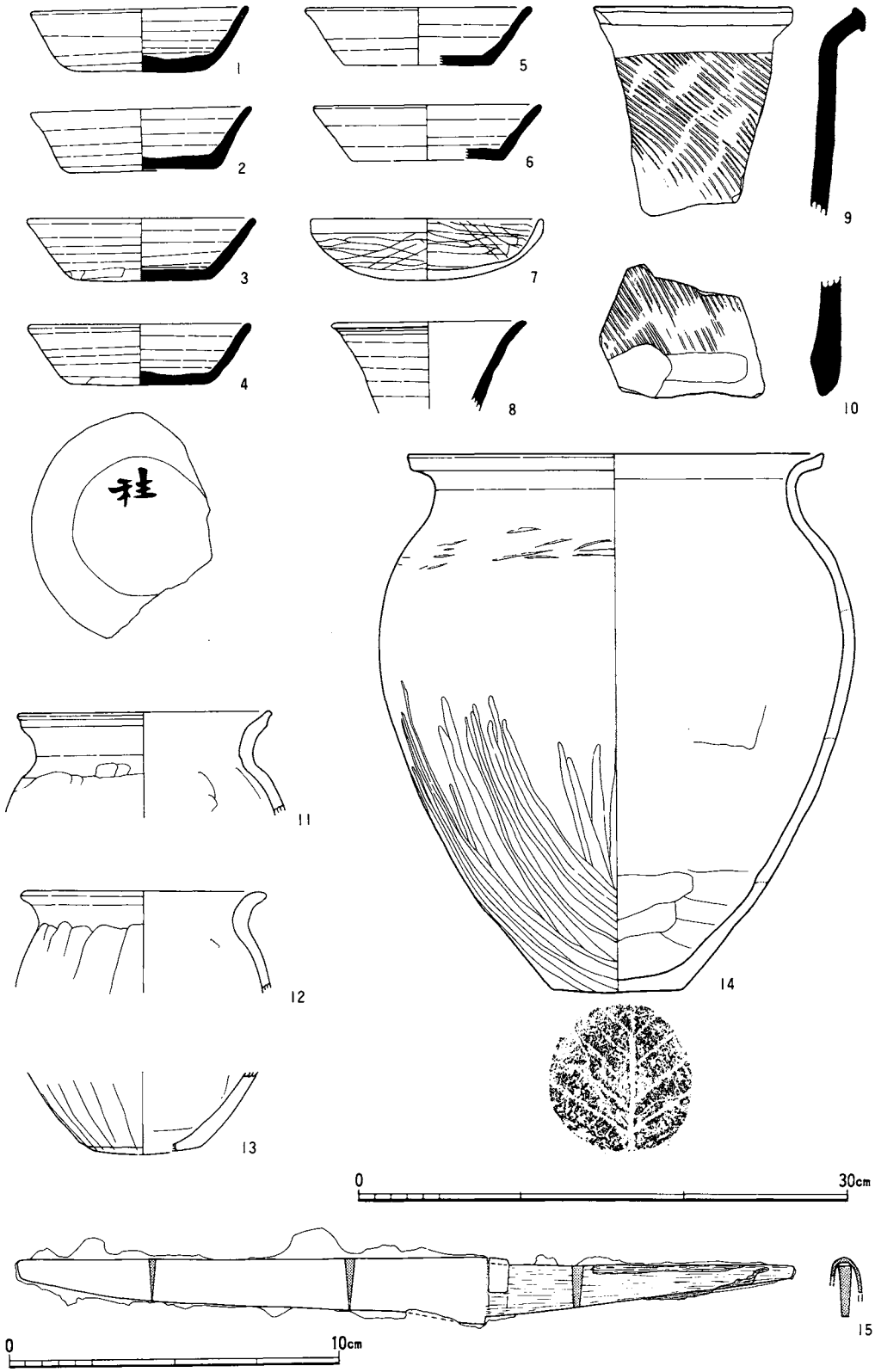
竪穴住居跡016（第48図、図版34）　［土器観察表198Ｐ］

土師器甕１点のみが図示できた。図示できなかった資料の総数はわずかに22点である。

１は土師器甕である。胴部外面はヘラ削りが施される。外面は火熱を受け、器面が荒れる。

竪穴住居跡017（第48図、図版35・56）　［土器観察表198Ｐ］

須恵器杯・土師器杯・土師器皿各１点、土師器甕４点、鉄製品３点が図示できた。図示できなかった資料の総数は225点である。重量比で土師器が約92％を占め、土師器甕では「常総型」



第47図　竪穴住居跡015出土遺物

の甕の割合が多い。

1は須恵器杯で、常陸産と思われる。底部外面は回転ヘラ切り後、手持ちヘラ削り調整が施される。体部は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。

2は非ロクロの土師器杯である。体部が深く、底部は小さな平底である。器面は内外面ともにややざらつく。

3は非ロクロの土師器皿で、内外面に赤彩が施される。外面の器面は荒れ、赤彩の遺存状態は悪い。

4～7は土師器甕で、4～6は「常総型」の甕である。器面がいずれも火熱を受け、荒れている。

8～10は刀子で、いずれも両関である。8は刃部先端部を欠損し、関の部分は銹膨れのため推定である。遺存長221.0㎜、重さ29.25ｇ、刃部は遺存長125.0㎜、幅17.0㎜、厚さ3.0㎜、茎部は長さ96.0㎜、幅11.5㎜、厚さ3.0㎜を測る。9は刃部先端部を欠損するが、鉋が遺存する。遺存長152.0㎜、重さ21.68ｇ、刃部は遺存長91.0㎜、幅12.5㎜、厚さ3.0㎜、茎部は長さ61.0㎜、幅8.0㎜、厚さ3.0㎜を測る。10は完形である。長さ153.5㎜、重さ13.34ｇ、刃部は長さ85.0㎜、幅13.0㎜、厚さ3.0㎜、茎部は長さ68.5㎜、幅8.5㎜、厚さ3.5㎜を測る。

竪穴住居跡018（第48図、図版35）　［土器観察表198Ｐ］

須恵器杯3点、土師器鉢・土師器甕各1点が図示できた。図示できなかった資料の総数は87点である。重量比では土師器が約76％を占めるが、土師器甕には「常総型」の甕はまったくみられない。

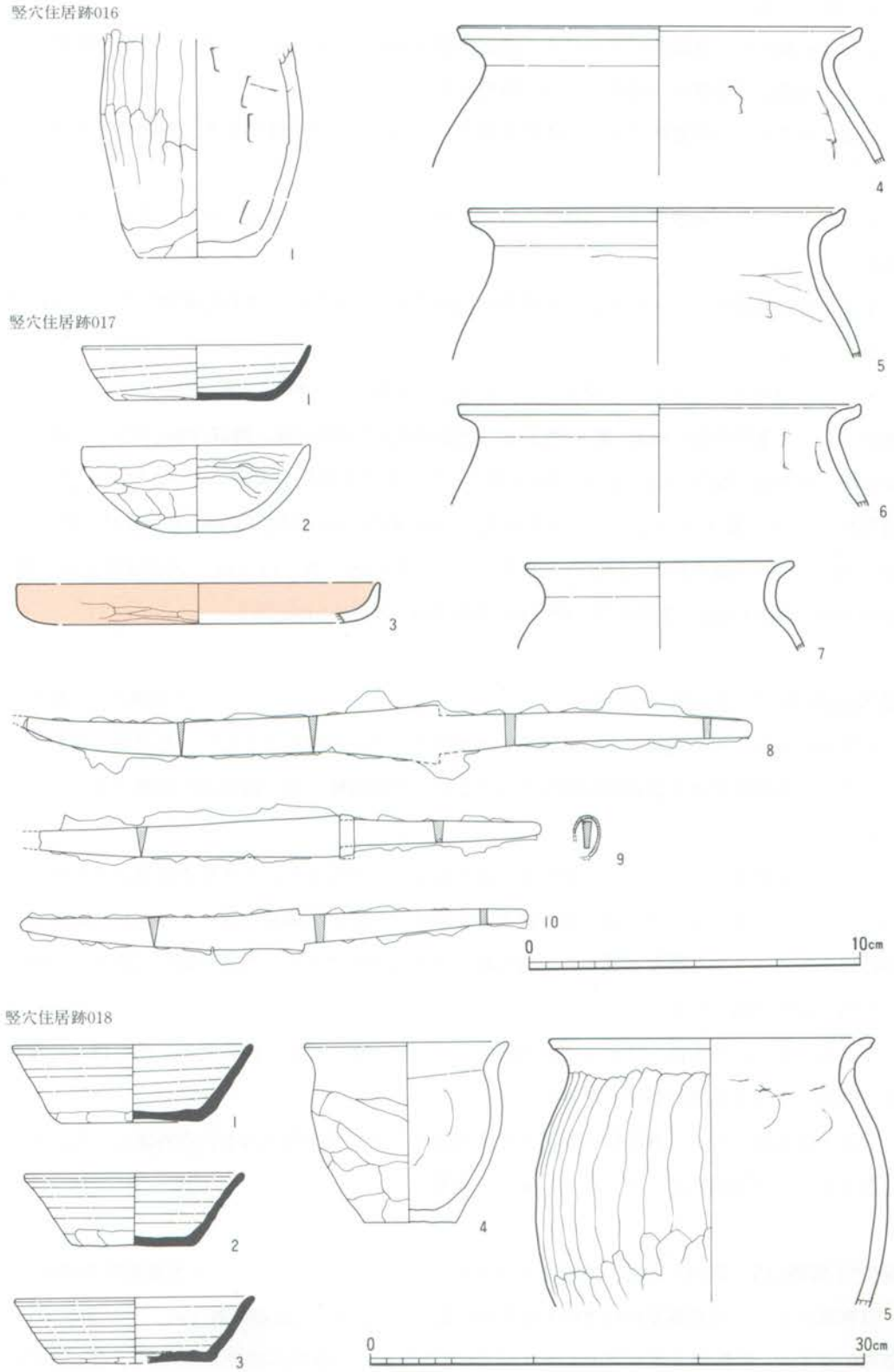
1～3は須恵器杯で、1・2は常陸産と思われる。1は胎土中に石英粒を多量に含むが、2は少ない。3は焼成がよく、硬く焼き締まっており、外面に火襷痕がみられる。いずれも底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。

4は鉢である。外面はヘラ削りで、内面はヘラナデが施される。内外面の一部に煤が付着する。外面の器面は火熱を受け、荒れている。

5は土師器甕である。外面はヘラ削りで、内面はヘラナデが施される。内外面の一部に煤が付着する。口唇部端部はつままれて、尖っている。

竪穴住居跡019（第49・50図、図版35・36・56）　［土器観察表198Ｐ］

須恵器杯4点、須恵器高台付き杯・須恵器杯蓋・土師器杯・土師器鉢各1点、土師器甕6点、須恵器甕1点、鉄製品4点が図示できた。図示できなかった資料の総数は507点で、重量比では土師器が84％を占める。破片資料では須恵器杯が土師器杯を上回っている。土師器甕では「常



第48図　竪穴住居跡016・017・018出土遺物

総型」の甕以外の甕の割合が高い。

1～4は須恵器杯で、いずれも常陸産と思われる。1・2は口縁部から体部上半の外面に、比較的細かいロクロ痕がみられる。4を除いて胎土中に含まれる雲母粒や石英粒は少ない。1は底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。2は底部外面は回転ヘラ切り後、手持ちヘラ削り調整が施され、さらにヘラナデが行われている。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。3は内外面に火襷痕がみられる。底部外面は回転ヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下半部に回転ヘラ削り調整が施される。底部外面に焼成前の「－」状の浅いヘラ記号がみられる。4は色調が薄い灰色で、やや軟質である。底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。

5は須恵器高台付き杯で、常陸産と思われる。高台部は欠損し、断面が摩耗していることから、欠損した後は杯として使用されていたものと思われる。色調や質感は須恵器杯4に近似している。底部外面は全体に摩耗しているので、調整は不明である。

6は須恵器杯蓋で、常陸産と思われる。胎土中に含まれる雲母粒や石英粒は少なく、外面に火襷痕がみられる。天井部外面は回転ヘラ削り調整が施される。

7は土師器杯である。内面はヘラ磨きが施される。底部外面も含めて内外面に赤彩が施される。内面と外面の一部に煤が付着する。底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。

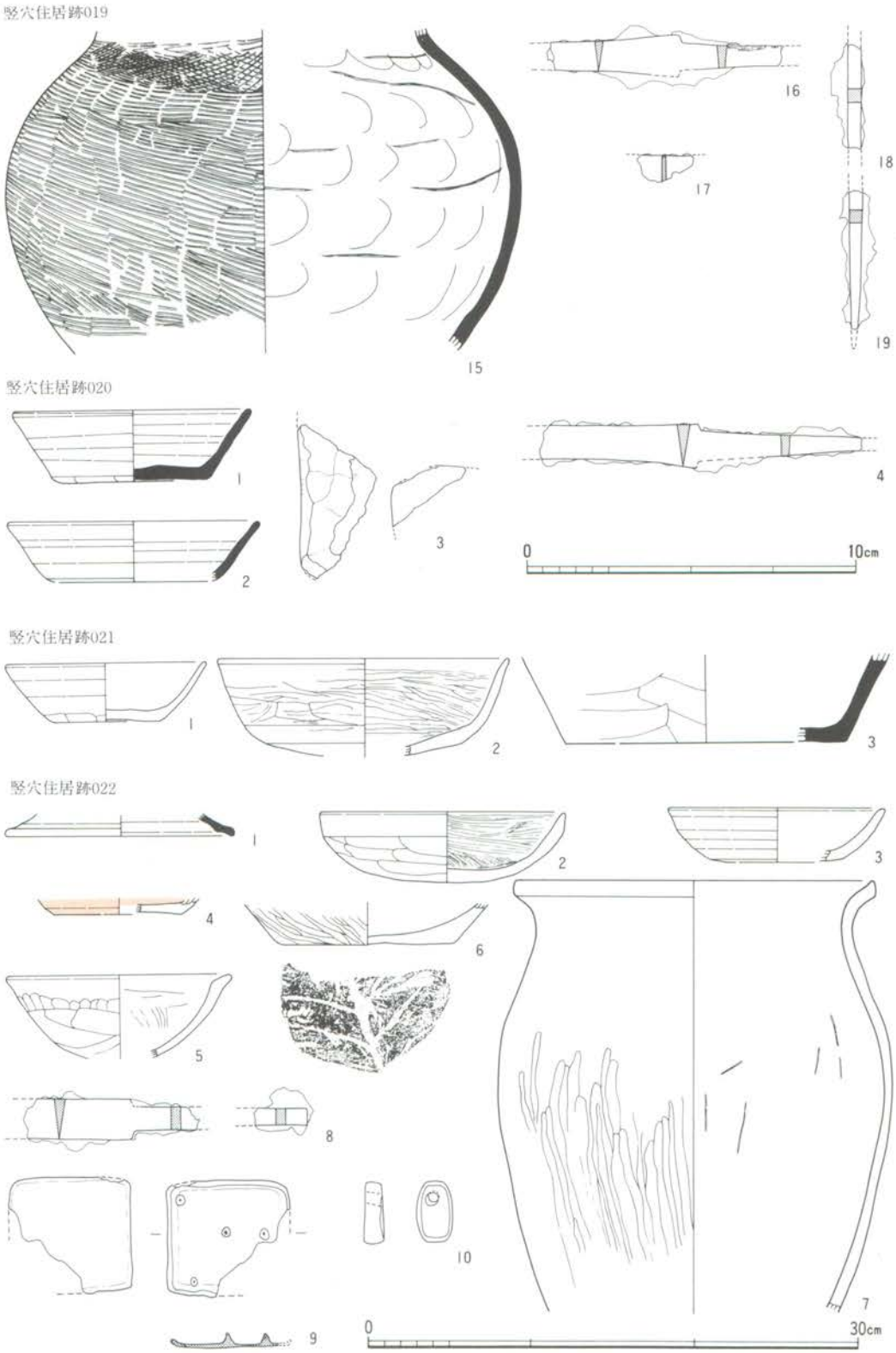
8は土師器鉢である。胴部外面はヘラ削りで、内面はヘラナデが施される。底部外面はヘラ削りが施されるが、木葉痕が残る。

9～14は土師器甕で、11～14は「常総型」の甕である。9は口唇部端部がわずかに窪んでいる。11は胴部内面に輪積み痕がみられ、胴部外面には煤が付着する。13・14は底部外面に木葉痕がみられる。

15は須恵器甕である。胴部外面は横方向の叩きで、肩部分は斜格子状に施される。内面は指頭によるオサエで、輪積み痕が残る。

16～19は鉄製品である。16は刀子で、両関である。茎部の一部に木質が残る。刃部の関付近は錆が著しく、推定である。遺存長72.0㎜、重さ6.15ｇ、刃部は遺存長41.0㎜、幅13.0㎜、厚さ2.5㎜、茎部は遺存長31.0㎜、幅8.0㎜、厚さ3.0㎜を測る。17は性格不明である。遺存長17.5㎜、遺存幅8.0㎜、厚さ1.5㎜、重さ0.59ｇを測る。18・19は棒状品で、接合しないが同一個体である。18は遺存長31.5㎜、重さ2.54ｇ、幅4.0㎜、厚さ4.0㎜、19は遺存長41.5㎜、重さ2.25ｇ、幅4.0㎜、厚さ4.0㎜を測る。

第49図　竪穴住居跡019出土遺物



第50図　竪穴住居跡019・020・021・022出土遺物

竪穴住居跡020（第50図、図版36・56・58）　［土器観察表198Ｐ］

須恵器杯２点、砥石・鉄製品各１点が図示できた。図示できなかった資料の総数はわずか25点である。

１・２は須恵器杯で、いずれも常陸産と思われる。２は１に比べて胎土中に含まれる石英粒が少ない。１は底部外面は回転ヘラ切り後、手持ちヘラ削り調整が施される。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。２は体部外面は回転ヘラ削り調整が施される。

３は砥石で、石材は砂岩質である。

４は刀子で、両関である。刃部側の関の周辺は銹膨れのため推定である。遺存長99.0㎜、重さ8.69ｇ、刃部は遺存長49.0㎜、幅13.5㎜、厚さ4.0㎜、茎部は遺存長50.0㎜、幅8.5㎜、厚さ3.0㎜を測る。

竪穴住居跡021（第50図）　［土器観察表198Ｐ］

土師器杯２点、須恵器甕１点が図示できた。図示できなかった資料の総数は191点で、重量比で須恵器が約54％と土師器をわずかに上回っている。須恵器は甕が大部分である。

１・２は土師器杯である。１は小振りの杯で、底部外面は回転糸切り後、手持ちヘラ削り調整が施される。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。２は大振りの杯で、内外面ともにヘラ磨きで、内面は黒色処理が施される。

３は須恵器甕で、還元炎焼成になりきれない須恵器である。胴部下端部のみの遺存で、ヘラ削り調整が施されるが、わずかに叩き痕がみられる。胴部内面は指頭によるオサエ後、ナデが施される。

竪穴住居跡022（第50図、図版36・56・58）　［土器観察表198Ｐ］

須恵器杯蓋１点、土師器杯３点、土師器鉢１点、土師器甕２点、鉄製品・青銅製品・石製品各１点が図示できた。図示できなかった資料の総数は446点で、重量比で土師器が約89％を占める。土師器甕は重量比で「常総型」の甕の占める割合がやや高い。

１は須恵器杯蓋で、常陸産と思われる。

２～４は土師器杯である。２は非ロクロの土師器で、丸底である。体部外面は器面が平滑であるので、ヘラ削り後、やや粗いヘラ磨きが施されているものと思われる。内面はヘラ磨きが施される。底部外面は火熱を受け、器面が荒れる。体部内外面の一部が黒色であり、器面が磨かれていることから、内外面ともに黒色処理が施されていた可能性がある。３は体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。４は内外面に赤彩が施される。底部外面は静止糸切り後、手持ちヘラ削り調整が施される。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。

５は土師器鉢である。外面は器面がやや荒れるが、一部に煤が付着する。内面はヘラ磨きが

施される。

6・7は土師器甕で、「常総型」の甕である。7は胴部外面の下半部に火熱を受け、赤くなっている部分があり、内面には煤状の付着物がみられる。6は底部外面に木葉痕がみられる。

8は刀子で、両関である。図の右側の茎部は接合しないが同一個体である。峰側の関付近は銹膨れのため推定である。遺存長は図の左側は54.0㎜、右側は16.5㎜、重さは合計で7.17g、刃部は遺存長34.5㎜、幅12.0㎜、厚さ3.0㎜、茎部は遺存長19.5㎜、幅7.0㎜、厚さ3.0㎜を測る。

9は青銅製の帯金具で、鉈尾と思われる。長方形で、帯留めの突起が4か所みられる。端部は緩やかにせり上がる。長さ37.0㎜、幅35.0㎜、厚さ1.0㎜、重さ5.63gを測る。

10は滑石製の垂飾品である。形状は楕円形で、上の方に径3.5㎜の孔が開けられている。色調は黒灰色で、光沢をもつ。長さ18.5㎜、幅10.5㎜、厚さ6.0㎜、重さ2.37gを測る。

竪穴住居跡023（第51図、図版37・56）　［土器観察表199P］

須恵器杯1点、土師器甕2点、土製支脚・鉄製品各1点が図示できた。図示できなかった資料の総数は82点で、重量比で土師器が約90％を占める。

1は須恵器杯で、常陸産と思われる。外面に火襷痕がみられる。底部外面は回転ヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端に回転ヘラ削り調整が施される。

2・3は土師器甕である。1は肩部外面に輪積み痕がみられる。3は器壁の薄い甕で、胴部外面はヘラ削りで、内面はヘラナデが施される。

4は土製支脚で、頭部が遺存する。全体的に火熱を受け、器面が荒れている。

5は刀子で、刃部のみが遺存する。遺存長50.0㎜、幅10.0㎜、厚さ3.0㎜、重さ4.08gを測る。

竪穴住居跡024（第51図、図版37）　［土器観察表199P］

須恵器杯2点、土師器甕1点、土製支脚2点が図示できた。図示できなかった資料の総数はわずか19点である。

1・2は須恵器杯である。1は常陸産と思われるが、胎土中に含まれる雲母粒や石英粒は少ない。底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。底部外面には焼成後に施された「由」あるいは「甲」を意味すると思われる線刻がみられる。2は小振りの杯である。底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に回転ヘラ削り調整が施される。底部外面に「｜」状の線刻がみられる。

3は土師器甕である。胴部外面はヘラ削りで、内面はヘラナデが施される。胴部外面には煤が付着する。

4・5は土製支脚である。いずれも頭部が遺存するが、火熱を受け、器面は荒れている。

竪穴住居跡025（第51図、図版37・58）　［土器観察表199P］

土師器甕・石製品各1点が図示できた。図示できなかった資料の総数は39点で、須恵器は1点も出土していない。

1は土師器甕である。口唇部はつまみ上がる。胴部外面はヘラ削りが施される。

2は石製の玉で、未製品と思われる。石材は滑石で、側面・上下面ともに丁寧に研磨されている。径17.5㎜、厚さ14.5㎜、重さ7.51gを測る。

竪穴住居跡026（第51・52図、図版37・38・56）　［土器観察表199P］

須恵器杯蓋・土師器杯各1点、土師器甕4点、鉄製品2点が図示できた。図示できなかった資料の総数は93点で、重量比で土師器が87％を占める。

1は須恵器杯蓋である。胎土中に白色の微粒石を多量に含む。外面に火襷痕がみられる。天井部外面は回転ヘラ削り調整が施される。

2は非ロクロの土師器杯で、丸底である。内外面ともにヘラ磨きされ、赤彩が施されるが、遺存状態は悪い。

3～6は土師器甕である。3は小形の甕で、器壁は薄い。外面はヘラ削りで、内面はナデが施される。4～6は「常総型」の甕である。いずれも火熱を受け、器面が赤くなっている部分や煤の付着がみられる。4・5は底部外面に木葉痕がみられる。

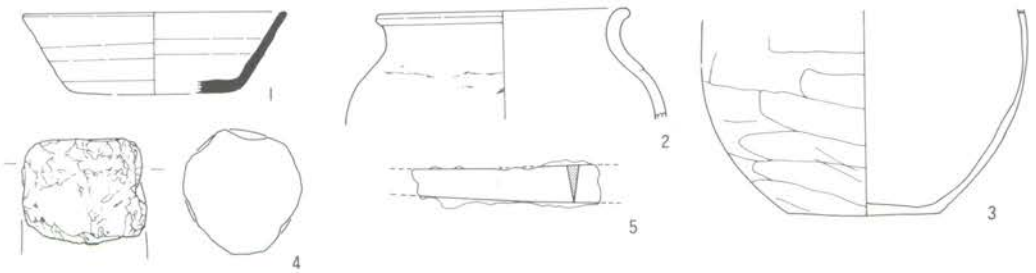
7・8は鉄製品である。7は刀子で、両関である。茎部の欠損は古い。遺存長58.5㎜、重さ6.03g、刃部は遺存長46.0㎜、幅14.0㎜、厚さ3.0㎜、茎部は遺存長12.5㎜、幅8.0㎜、厚さ3.0㎜を測る。8は鏃で、刃部は銹膨れのため推定である。遺存長83.0㎜、頸部は幅8.0㎜、厚さ3.0㎜、茎部は幅4.0㎜、厚さ4.0㎜、重さ8.72gを測る。

竪穴住居跡027（第52・53図、図版38・39・56・58）　［土器観察表199P］

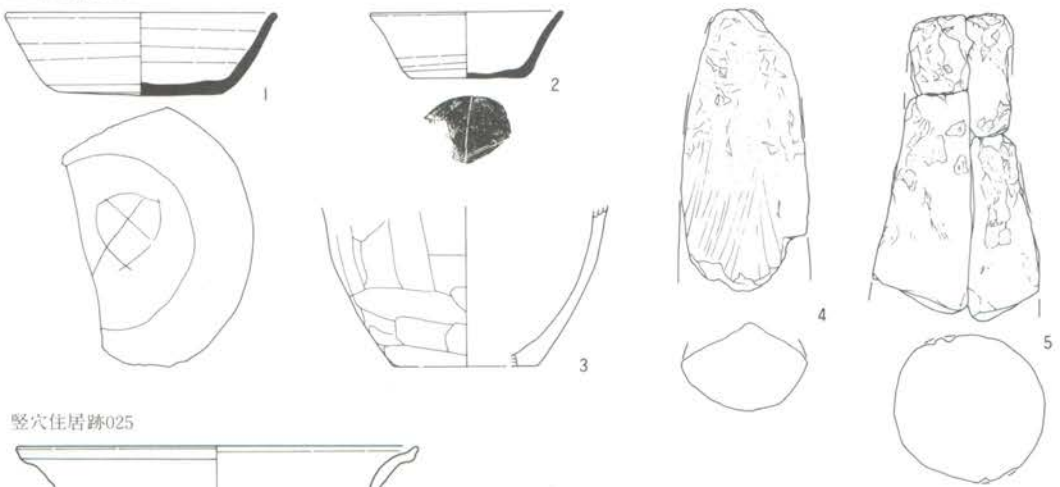
須恵器杯13点、須恵器高台付き杯1点、須恵器杯蓋2点、土師器杯2点、土師器甕4点、須恵器甕1点、砥石1点、鉄製品14点が図示できた。鉄製品の出土数および種類が最も多い竪穴住居跡である。図示できなかった資料の総数は1,673点で、重量比で土師器が85％を占める。土師器は甕が大部分で、「常総型」の甕とそれ以外が半々くらいの割合で出土している。

1～13は須恵器杯である。1・2は色調が青灰色で、硬く焼き締まっている。また、胎土中に白色の微粒石を含むなど、きわめてよく似た特徴をもつ。いずれも底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は、1は下端部に手持ちヘラ削り調整が施され、2は無調整である。3～13は常陸産と思われる。3～5・7・9は色調が薄い灰色で、やや軟質である。底部外面は、10は回転ヘラ削り調整で、そのほかは手持ちヘラ削り調整が施される。切り離し技法はいずれも不明である。体部外面は、3・4・7・8は下端部に手

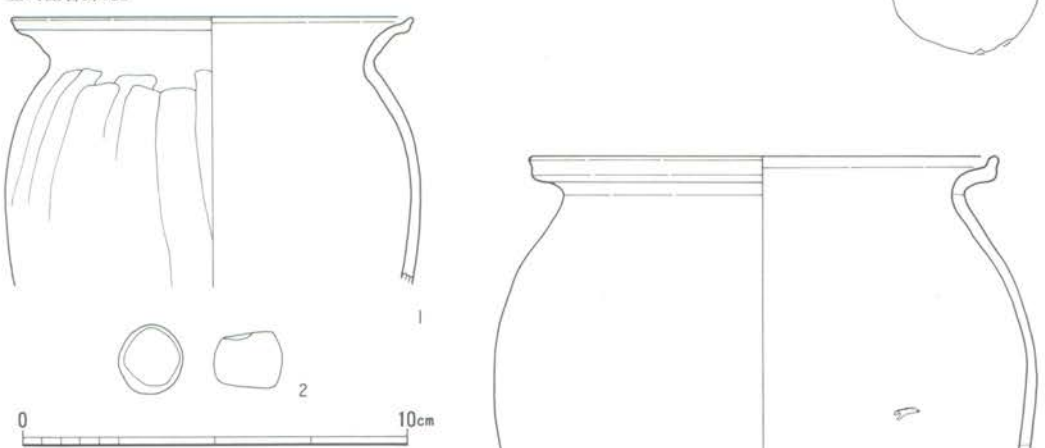
竪穴住居跡023



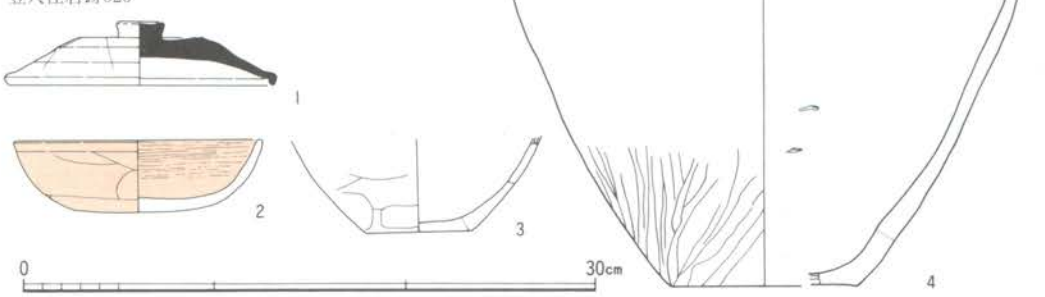
竪穴住居跡024



竪穴住居跡025



竪穴住居跡026



第51図　竪穴住居跡023・024・025・026出土遺物

持ちヘラ削り調整が施される。9は下半部に手持ちヘラ削り調整後、ヘラナデが施される。10は下端部に回転ヘラ削り調整が施され、そのほかは無調整である。

14は須恵器高台付き杯で、常陸産と思われる。色調は薄い灰色で、やや軟質である。底部外面は回転ヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は回転ヘラ削り調整が施される。

15・16は須恵器杯蓋のつまみである。いずれも常陸産と思われる。

17・18は土師器杯である。17は非ロクロの土師器である。外面はヘラ削りで、内面はヘラ磨きが施される。外面に赤彩が施される。18は体部外面のロクロ痕が明瞭である。内外面に赤彩が施される。

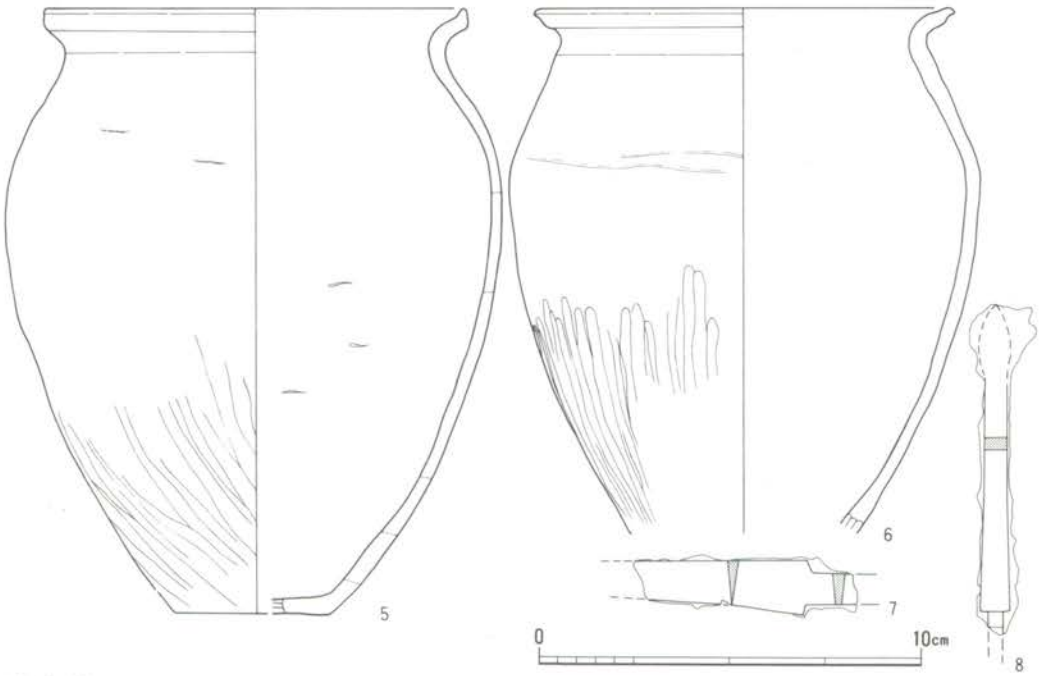
19～22は土師器甕である。19は器壁が薄い甕である。21・22は「常総型」の甕である。22は底部外面に木葉痕がみられる。

23は須恵器甕である。頸部外面に段をもつ。胎土は緻密で、硬く焼き締まる。

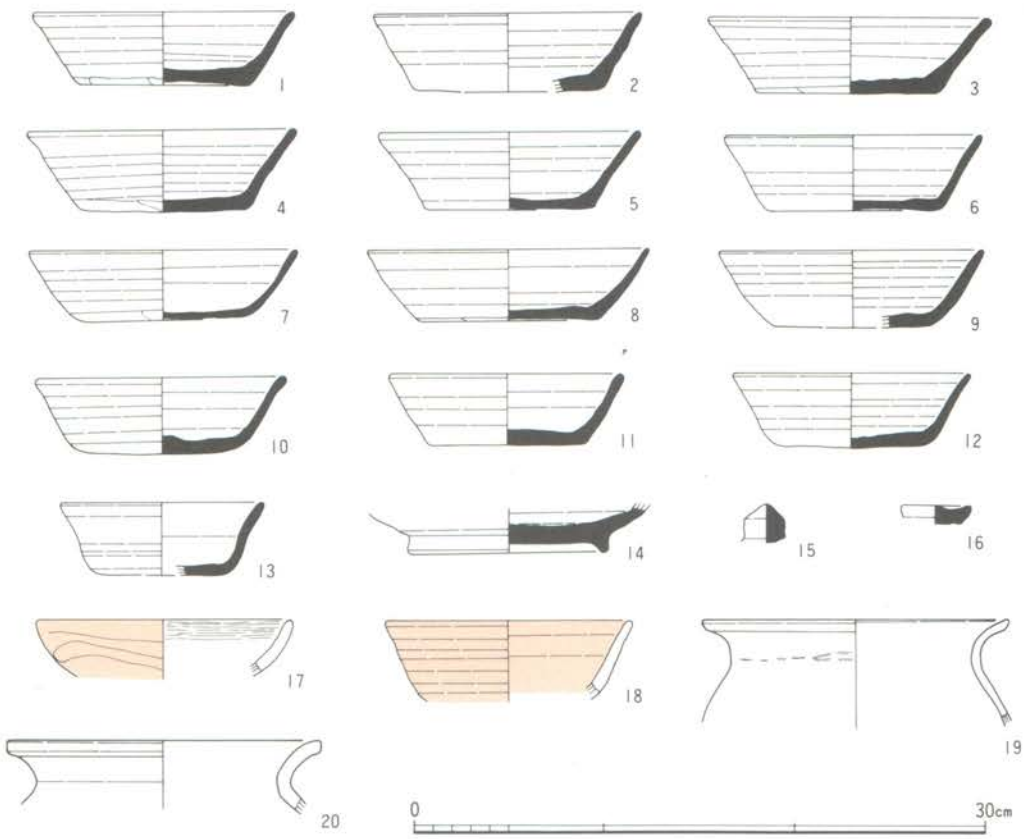
24は砥石である。石質は砂岩質である。側面も使用され、表面の隅には小さな突起状の高まりをもつ。

25～38は鉄製品である。25～30は刀子である。25・26は茎部で、接合しないが同一個体と思われる。25は遺存長62.0㎜、重さ4.73ｇ、幅8.5㎜、厚さ3.0㎜、26は遺存長15.0㎜、重さ0.51ｇを測る。27は両関と思われる。28は接合しないが27と同一個体と思われる。27は遺存長34.0㎜、重さ4.52ｇ、刃部遺存長14.0㎜、幅14.5㎜、厚さ3.0㎜、茎部遺存長20.0㎜、幅8.0㎜、厚さ3.0㎜、28は遺存長37.5㎜、幅8.0㎜、厚さ4.0㎜、重さ4.02ｇを測る。29は両関であるが、刃部側の関は研ぎ減りで明瞭ではなくなっている。長さ164.0㎜、重さ10.11ｇ、刃部は長さ88.0㎜、幅10.0㎜、厚さ3.0㎜、茎部は長さ76.0㎜、幅8.5㎜、厚さ3.0㎜を測る。30は両関であるが、刃部側の関は欠損している。長さ146.5㎜、重さ13.86ｇ、刃部は長さ91.0㎜、推定幅12.5㎜、厚さ3.0㎜、茎部は長さ55.5㎜、幅10.0㎜、厚さ4.0㎜を測る。31・32は鏃である。31は三角形式で、両丸造りである。遺存長60.5㎜、重さ10.41ｇ、刃部は長さ24.5㎜、幅34.5㎜、厚さ2.0㎜、頸部は長さ34.5㎜、推定幅8.5㎜、厚さ5.0㎜、茎部は遺存長9.5㎜、幅4.0㎜、厚さ4.0㎜を測る。32は遺存長38.0㎜、重さ4.19ｇ、頸部は遺存長31.0㎜、幅9.0㎜、厚さ4.0㎜、茎部は遺存長7.0㎜、幅4.5㎜、厚さ4.0㎜を測る。33は性格不明である。棒状品に別の個体が付着しているものと思われる。遺存長16.5㎜、幅4.5㎜、厚さ4.0㎜、重さ1.74ｇを測る。34は鎌で、緩やかな曲線をもつ曲刃鎌である。刃を下、基部を右側にして置いた場合、基部を手前に折り曲げる。長さ188.5㎜、幅36.5㎜、厚さ2.5㎜、重さ62.21ｇを測る。35は環状品である。横方向は外径37.5㎜、内径22.5㎜、縦方向は外径31.0㎜、内径20.0㎜、幅6.5㎜、厚さ7.0㎜、重さ8.69ｇを測る。36～38は穂摘具である。36は中央付近だけが使い減りしている。表面には鉄釘の頭が残り、裏面は折れて根元だけが残っている。長さ105.5㎜、幅23.5㎜、厚さ1.0㎜、重さ17.34ｇ

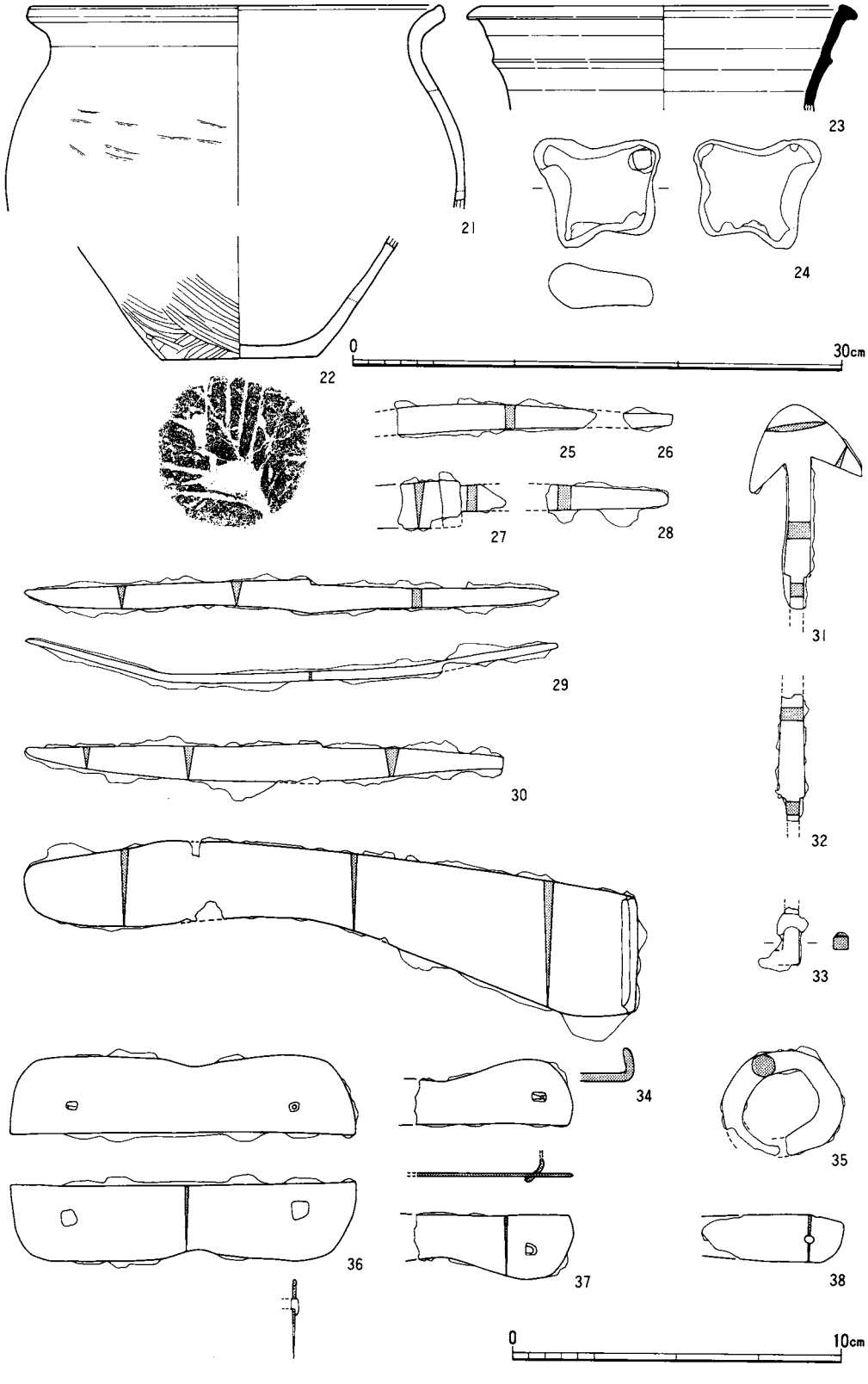
竪穴住居跡026



竪穴住居跡027



第52図　竪穴住居跡026・027出土遺物



第53図　竪穴住居跡027出土遺物

を測る。37はかなり使い込まれ、使い減りが著しい。表面には鉄釘の頭が残り、裏面は先端部が折れている。遺存長49.0㎜、幅19.5㎜、厚さ1.0㎜、重さ4.26ｇを測る。38は小形のもので、右側の目釘孔が遺存する。遺存長43.0㎜、幅14.0㎜、厚さ1.0㎜、重さ3.04ｇを測る。

竪穴住居跡028（第54図、図版39・57）　［土器観察表199Ｐ］

須恵器杯１点、土師器甕５点、土製支脚１点、鉄鏃２点が図示できた。図示できなかった資料の総数は148点で、土師器がほとんどである。

１は須恵器杯で、還元炎焼成になりきれない須恵器である。口縁部内外面の一部のみが灰色をしている。底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施されるが、調整痕は明瞭ではない。

２～６は土師器甕である。２は「常総型」の甕で、口縁部から胴部外面の一部に煤が付着する。また、外面は火熱を受け、器面が赤くなっている部分が多くみられる。３・４は胴部外面に縦方向のヘラ削りが比較的丁寧に施される。５は底部外面はヘラ削りが施され、６は火熱を受け、器面が著しく荒れている。

７は土製支脚である。火熱を受け、全体に脆くなっている。

８・９は鉄鏃である。８は棘状突起が遺存する。遺存長49.0㎜、重さ2.78ｇ、頸部は遺存長13.0㎜、幅5.5㎜、厚さ2.8㎜、茎部は遺存長36.0㎜、幅3.0㎜、厚さ3.0㎜を測る。９は頸部のみが遺存する。遺存長52.0㎜、幅5.0㎜、厚さ3.0㎜、重さ2.20ｇを測る。

竪穴住居跡029（第54図、図版39・57・58）　［土器観察表199Ｐ］

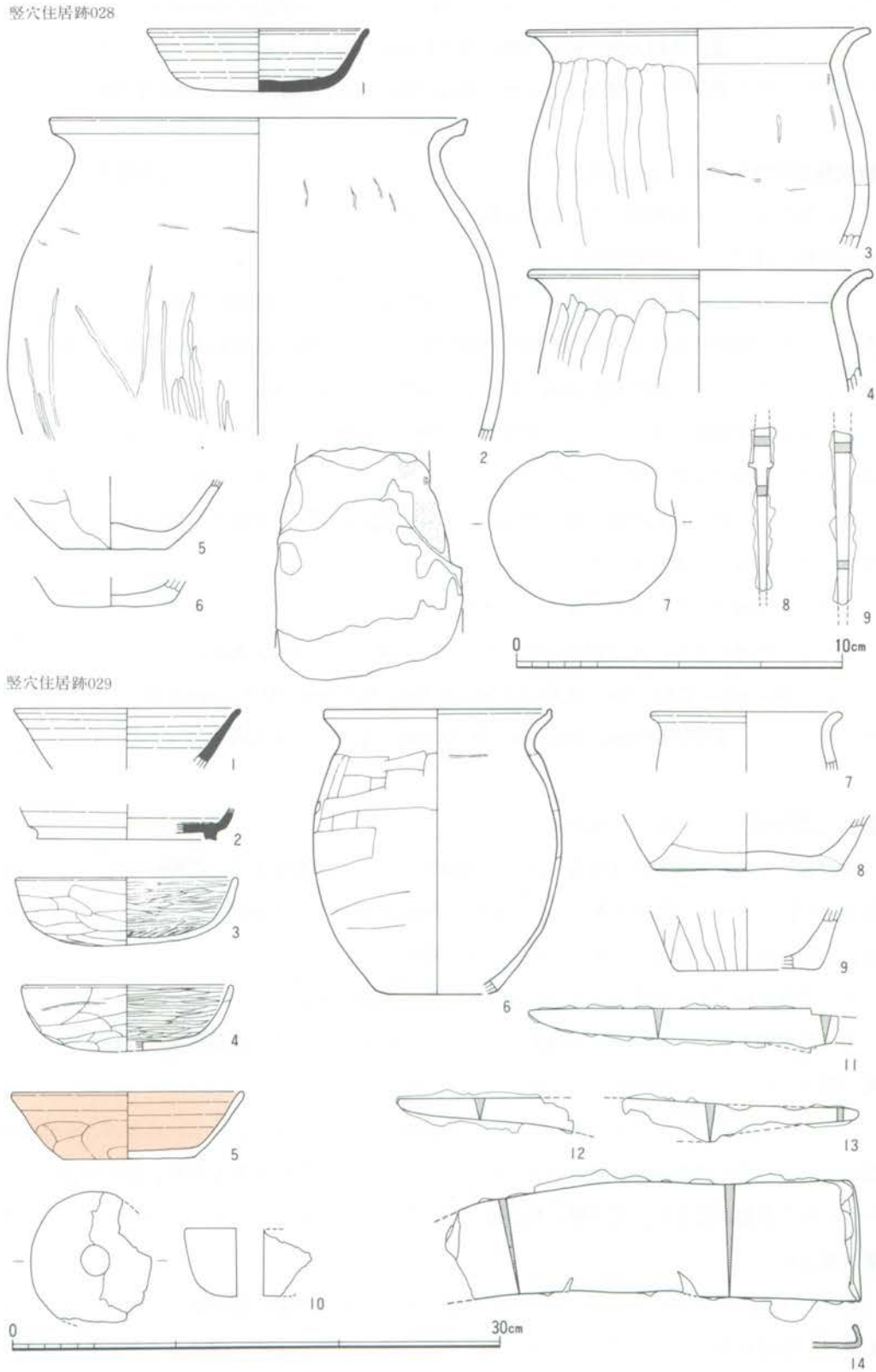
須恵器杯・須恵器高台付き杯各１点、土師器杯３点、土師器甕４点、石製紡錘車１点、鉄製品４点が図示できた。図示できなかった資料の総数は546点で、重量比では土師器が84％を占める。土師器甕は「常総型」の甕の比較的大きな破片がめだつ。

１は須恵器杯である。色調は灰色であるが、やや軟質である。

２は須恵器高台付き杯である。硬質で、よく焼き締まっている。底部外面は回転ヘラ削り調整が施される。

３～５は土師器杯で、３・４は非ロクロの土師器で、丸底である。いずれも体部から底部外面はヘラ削りで、内面はヘラ磨きが施される。５は内外面に赤彩が施される。底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下半部に手持ちヘラ削り調整が施される。

６～９は土師器甕である。６・７は小形の甕である。６は器壁の薄い甕で、胴部外面は火熱を受け、器面が赤くなり、荒れている。８・９は外面は火熱を受け、器面がやや荒れる。９は胴部下端部に粗いヘラナデがみられるが、「常総型」の甕とは異なる。



第54図　竪穴住居跡028・029出土遺物

10は石製の紡輪である。石材は滑石で、色調は黒灰色である。孔径9.0㎜、厚さ20.0㎜、重さ37.34ｇを測る。

11～14は鉄製品である。11～13は刀子である。11は刃部側の関が欠損しているが、両関と思われる。遺存長95.5㎜、刃部は長さ87.5㎜、幅は推定で13.0㎜、厚さ3.0㎜、茎部は遺存長8.0㎜、幅10.0㎜、厚さ3.0㎜、重さ7.95ｇを測る。12･13は接合しないが同一個体と思われる。遺存状態はよくなく、特に茎部が悪い。12は遺存長55.0㎜、重さ3.98ｇ、13は遺存長73.0㎜、刃部遺存長31.0㎜、刃部は幅11.5㎜、厚さ3.0㎜、茎部長さ43.0㎜、幅4.5㎜、厚さ2.0㎜、重さ4.69ｇを測る。13は鎌である。刃を下、基部を右側にして置いた場合、基部を手前に折り曲げる。遺存長128.5㎜、幅36.0㎜、厚さ2.5㎜、重さ57.01ｇを測る。

竪穴住居跡030（第55図、図版39）　［土器観察表200Ｐ］

須恵器杯２点、土師器鉢１点、土師器甕３点、土製支脚１点が図示できた。図示できなかった資料の総数はわずか43点である。

１・２は須恵器杯である。１は堅く焼き締まり、内外面に火襷痕がみられる。底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。２は還元炎焼成になりきれない須恵器で、常陸産と思われる。底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部の器面が摩滅しているため不明である。火熱を受け、器面がやや荒れている。また、内外面の一部には煤が付着している。

３は土師器鉢である。胴部外面に輪積み痕がみられる。器面は火熱を受け、やや荒れている。底部外面に木葉痕がみられる。

４～６は土師器甕で、いずれも器壁の薄い甕である。５と６は接合しないが同一個体と思われる。

７は土製支脚で、火熱を受け、全体に脆くなっている。

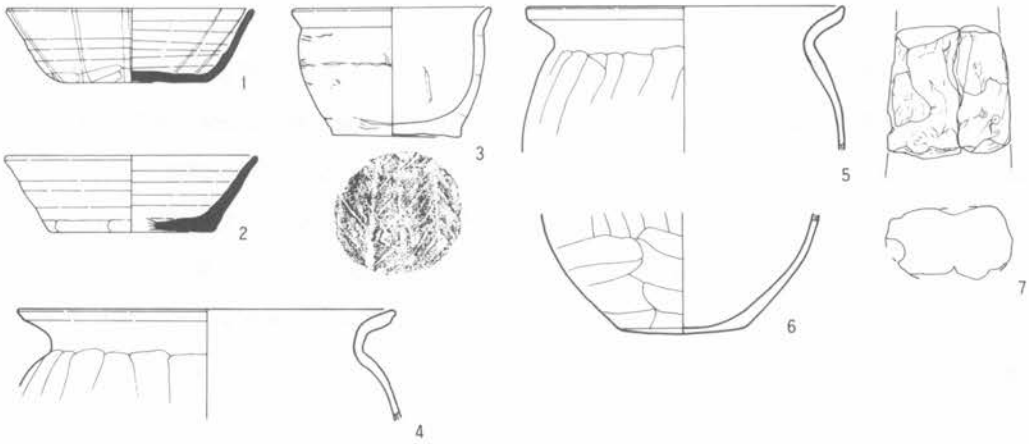
竪穴住居跡031A（第55図、図版40・57）　［土器観察表200Ｐ］

須恵器杯１点、土師器杯２点、紡錘車１点、鉄製品３点が図示できた。図示できなかった資料は、031Aと031Bを合わせた数量である。重量比で土師器が約85％を占める。土師器は杯類がほかの住居跡に比べてかなり多く出土している。

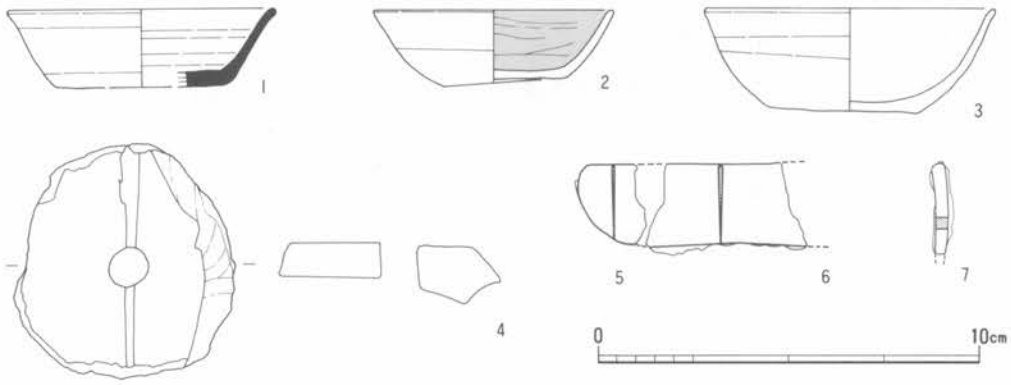
１は須恵器杯で、常陸産と思われる。やや軟質である。底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面の調整は下端部が摩耗しているため不明である。

２・３は土師器杯で、大小２つがある。２は小振りで、内面に黒色処理が施される。器面は火熱を受け、著しく荒れている。外面の調整は不明である。３は大振りで、２同様に器面は火

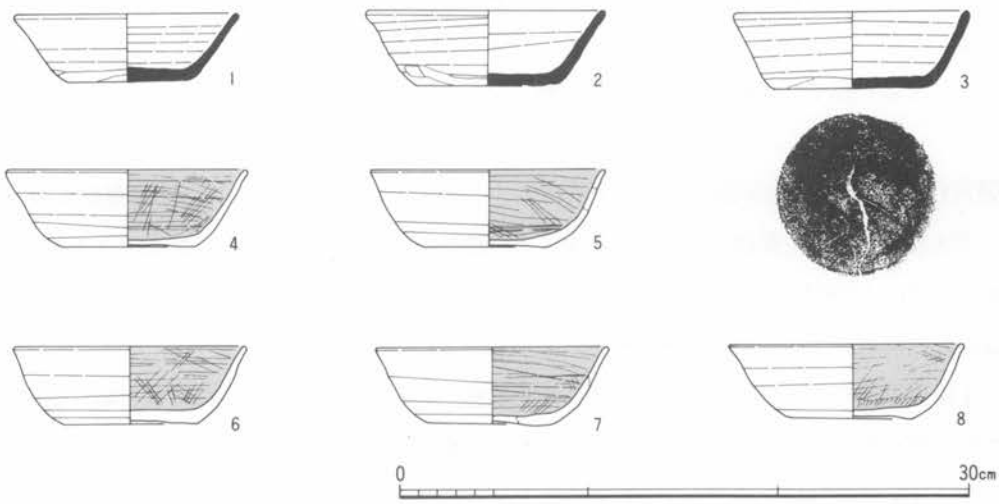
竪穴住居030



竪穴住居031A



竪穴住居031B



第55図　竪穴住居跡030・031A・031B出土遺物(1)

熱を受け、荒れている。内面はヘラ磨きが施され、底部外面はヘラ削り調整が施されるが、回転か手持ちかは不明である。体部外面は下半部に回転ヘラ削り調整が施される。

4は紡錘車の紡輪である。土師器甕の底部を転用している。甕は「常総型」の甕で、底部外面に木葉痕がみられる。長径59.4㎜、短径57.5㎜、孔径10.5㎜、重さ46.78ｇを測る。

5～7は鉄製品である。5・6は穂摘具で、接合しないが同一個体である。5は遺存長18.0㎜、重さ1.04ｇ、6は遺存長43.0㎜、幅21.0㎜、厚さ1.0㎜、重さ3.74ｇを測る。7は釘で、穂摘具に伴うものと思われる。遺存長23.5㎜、幅3.5㎜、厚さ3.0㎜、重さ0.75ｇを測る。

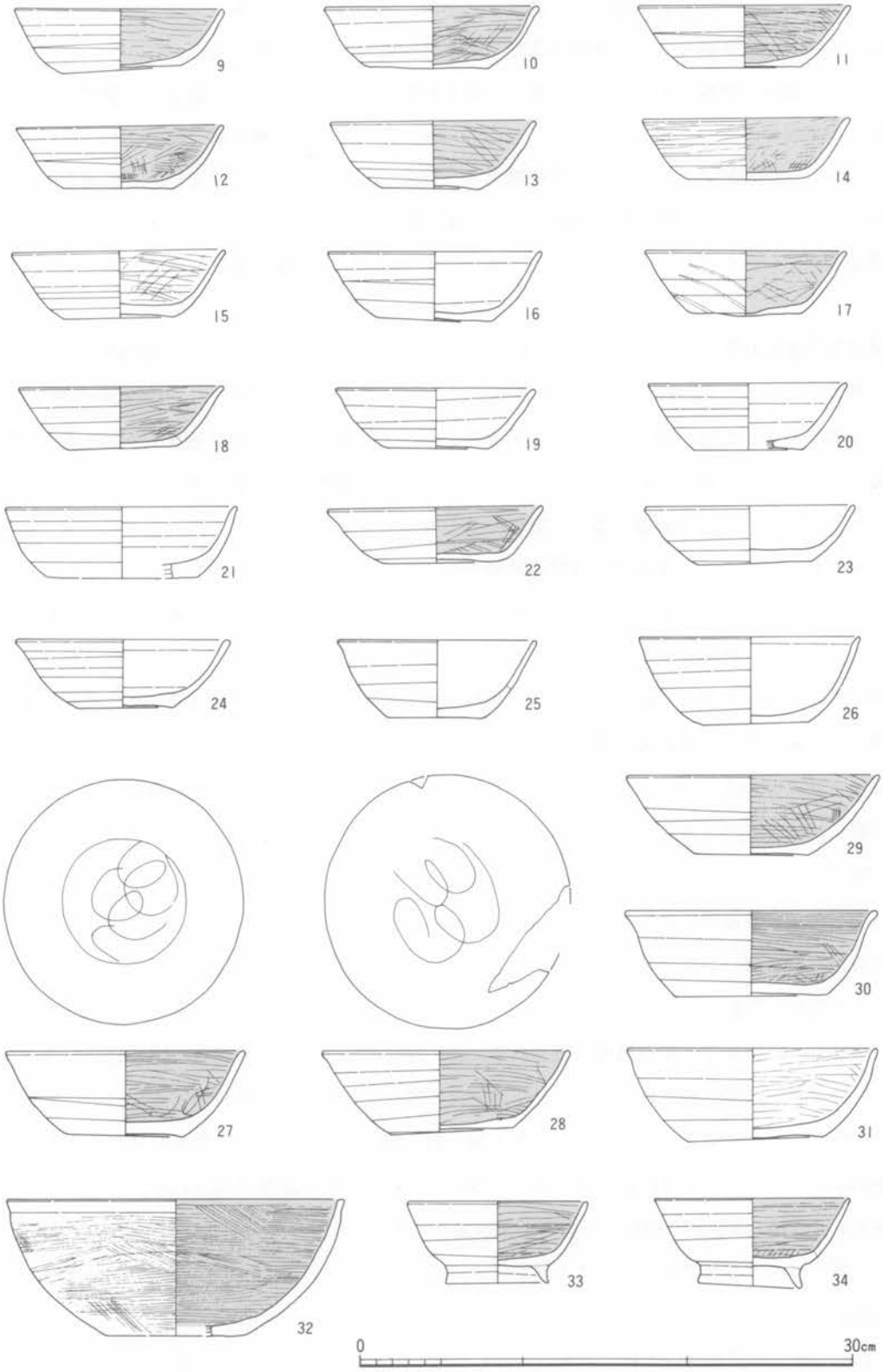
竪穴住居跡031B（第55～59図、図版40～43・54）　［土器観察表200Ｐ］

須恵器杯3点、土師器杯29点、土師器高台付き杯6点、土師器杯蓋17点、土師器香炉蓋2点、土師器壺蓋・土師器小壺各1点、土師器高杯2点、土師器甕3点、須恵器甕・不明土製品・土製支脚各1点、瓦塔部材10点が図示できた。図示できた遺物の数が最も多く、完形やそれに近いものなどが多い。土師器杯類と土師器杯蓋の数が非常に多く、それらのほとんどに黒色処理が施されていることも本竪穴住居跡の特徴といえる。

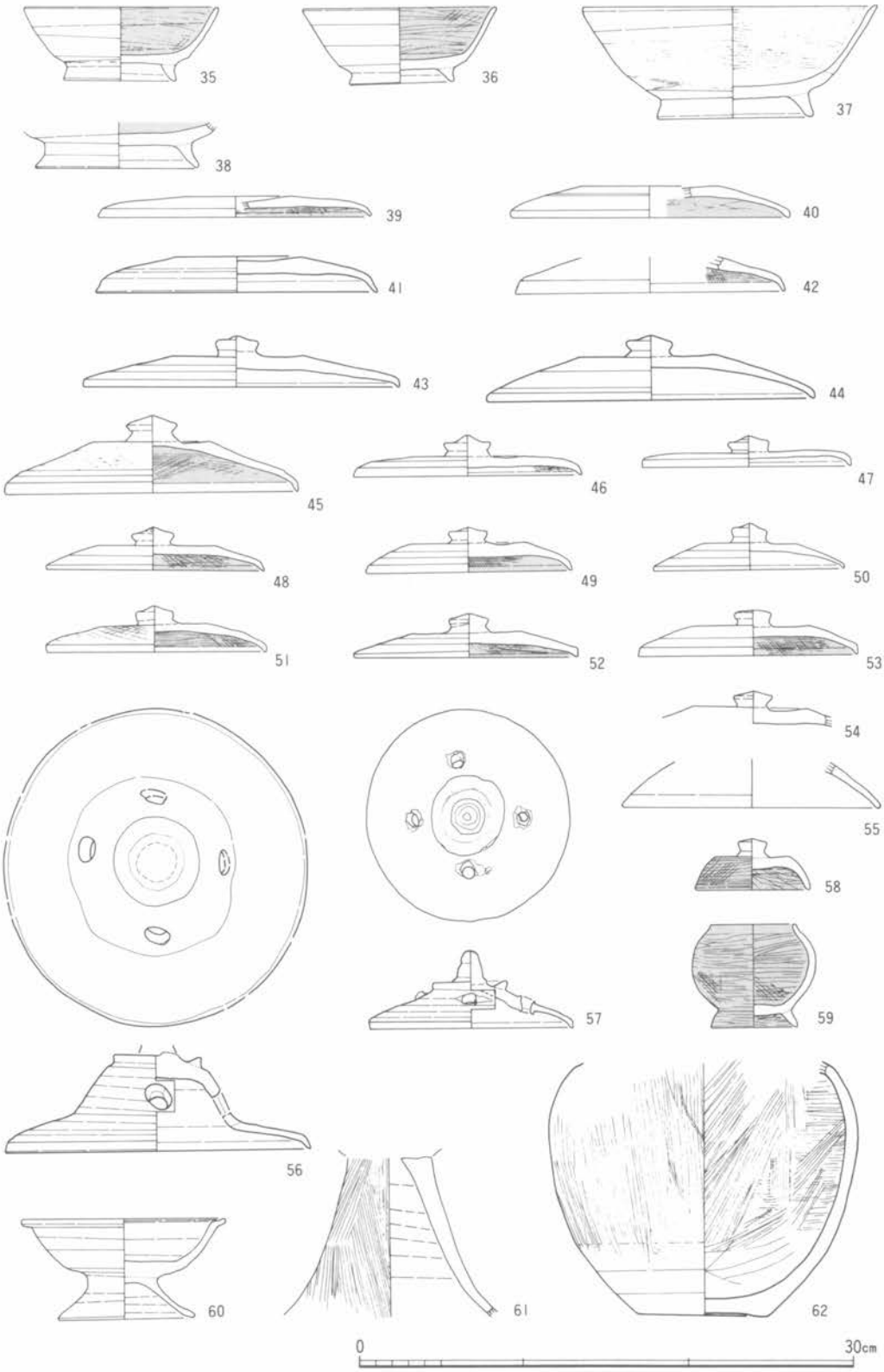
1～3は須恵器杯である。1は常陸産と思われるが、胎土中に含まれる雲母粒や石英粒は少ない。外面に火襷痕がみられる。底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。2・3は底部に特徴的な重ね焼きの痕跡が残り、県内産と思われる。3は内外面に火襷痕が残り、焼成時に重なっていた部分は、還元炎焼成になり切れていない。いずれも底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。3は底部外面に焼成前の「二」の字状のヘラ記号がみられる。

4～32は土師器杯である。口径12.0～13.5cmの小振りのもの（4～26）とそれ以上の大振りのもの（27～32）がみられるが、小振りのものの方が多い。いずれの杯も、体部外面は下半部から下端部に回転ヘラ削り調整が施される。4～15・17・18・22・27～30・32は内面は横方向の丁寧なヘラ磨き後、黒色処理が施される。27・28は底部内面にやや粗雑な螺旋暗文が施される。31は黒色処理が施されていないが、内面は丁寧なヘラ磨きが施されている。14・15・17・32は外面にもヘラ磨きが施され、27・28・30・31は底部外面に一部ヘラ磨きが施される。底部外面は4・5・23・30は回転糸切り後、周縁部に回転ヘラ削り調整が施される。6～9・22は静止糸切り後、周縁部に回転ヘラ削り調整が施される。そのほかは回転ヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。20は火熱を受け、器面は荒れている。32の口唇部端部には棒状の工具によってつけられたと思われる沈線がめぐる。

33～38は土師器高台付き杯である。これも小振りのもの（33～36）と大振りのもの（37・38）がみられる。いずれも内面は丁寧なヘラ磨き後、黒色処理が施される。高台は「ハ」の字状に



第56図　竪穴住居跡031B出土遺物(2)



第57図　竪穴住居跡031B 出土遺物(3)

付けられる。底部外面は回転ヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。しかし、33はやや不明瞭であるが、静止糸切りの可能性がある。

39～55は土師器杯蓋である。39～42はつまみの付かないものである。天井部外面は回転ヘラ削り調整が施され、窪んでいる。外面は回転ヘラ削り調整で、かえりの近くまで施される。内面はヘラ磨き後、41を除いて黒色処理が施される。43～55は高さの高い宝珠形のつまみの付くもので、大振りのもの（43～45）と小振りのもの（46～55）がみられる。また、小振りのものには天井部の高さの低いもの（46・47）がある。宝珠形のつまみは丁寧に作られている。内面はヘラ磨きが施され、45・48・49・51～54は内面に黒色処理が施される。外面は天井部を中心にして、ある程度ヘラ磨きが施されるものが多い。50・55は火熱を受け、器面が荒れている。天井部外面は回転ヘラ削り調整が、外面は回転ヘラ削り調整で、かえりの近くまで施される。

56・57は土師器香炉蓋である。大小２つあり、大振りの56は天井部が高い。いずれも外面は回転ヘラ削り調整が施される。孔の開け方や全体の仕上げ方などを比べると、56の方が57より丁寧に作られている。

58は土師器壺蓋で、59の蓋になるものと思われる。内外面ともに丁寧なヘラ磨き後、黒色処理が施される。

59は土師器小壺で、足高の高台が付く。58と同様に内外面ともに丁寧なヘラ磨き後、黒色処理が施される。

60・61は土師器高杯で、大小２つがある。60は小振りで、口縁部は受け口状に開く。杯部の体部外面は回転ヘラ削り調整が施される。61は大振りで、外面はヘラ削り後、ヘラ磨きが施される。

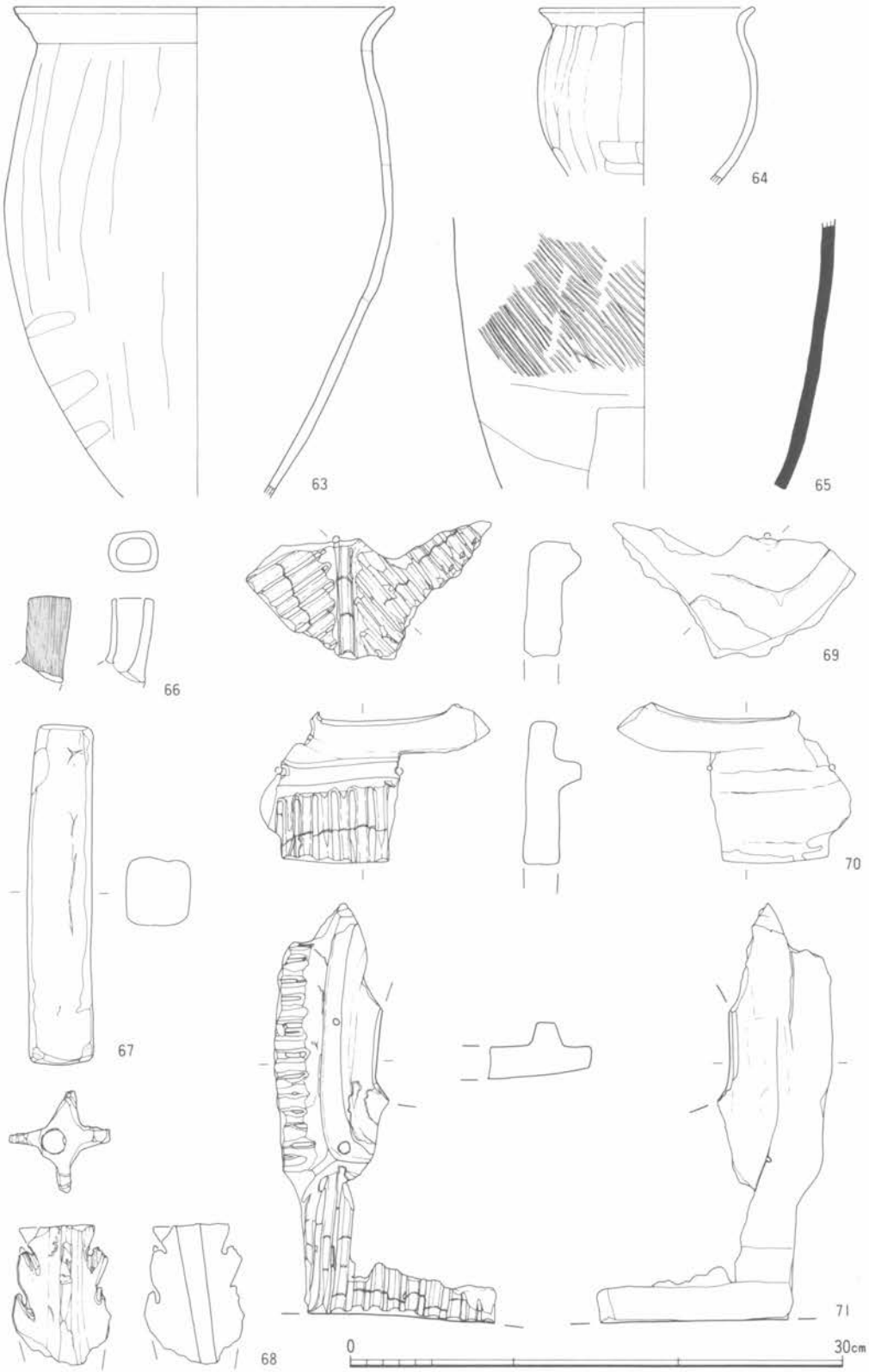
62～64は土師器甕である。62は底部および胴部外面に回転ヘラ削り後、ヘラ磨きが施される。内面もヘラ磨きが施される。63・64は胴部外面に縦方向のヘラ削りが施される。両者とも火熱を受け、器面は荒れている。

65は須恵器甕で、常陸産と思われる。胴部外面は斜め方向の叩き後、下端部にヘラ削り調整が施される。内面はオサエ痕がみられる。

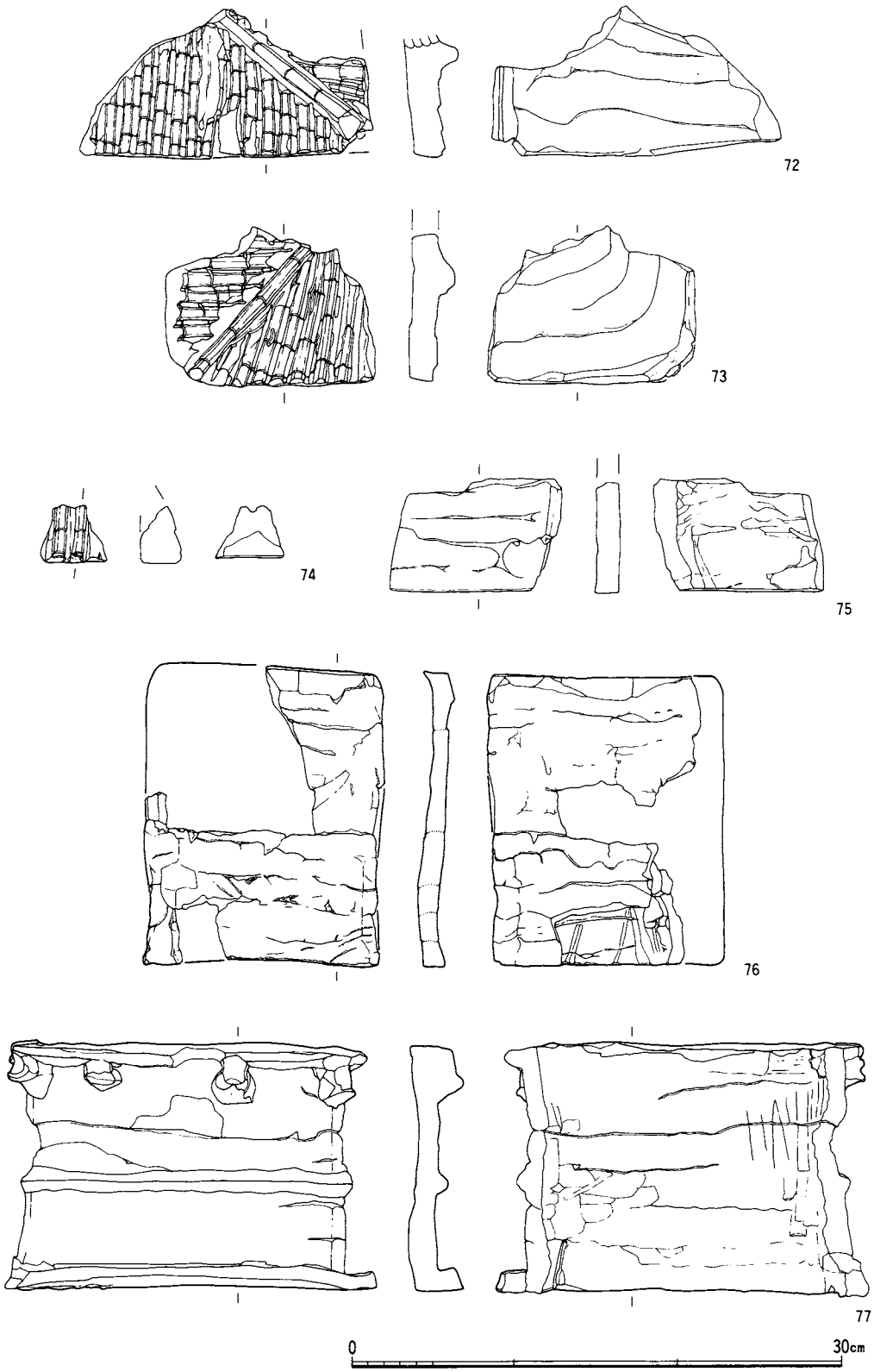
66は性格がよくわからない。外面および口唇部端部はよく磨かれ、黒色処理が施される。図の下の部分は、接合部からはがれており、何らかの注ぎ口になるのかも知れない。

67は土製支脚である。断面方形で、長さ193.0㎜、幅・厚さ約40.0㎜の角柱である。表面は火熱を受け、赤くなっているが、遺存状態はよい。

68～77は瓦塔の部材で、すべて土師質である。水煙、屋蓋部、軸部がみられることから塔と考えられる。68は水煙である。やや雑な作りで、各面の端部に２か所のスリットが施される。69～74は屋蓋部である。屋蓋部は図示したもののほかには出土していない。瓦は男瓦だけが表現され、幅は7.0㎜、厚さ6.0㎜である。軒先から10.0～23.0㎜の長さで数段にわたって葺かれ



第58図　竪穴住居跡031B出土遺物(4)



第59図　竪穴住居跡031B 出土遺物(5)

ているように表現されている。軒先はヘラ削りによって整えられる。隅棟にも男瓦が葺かれいるように表現され、軒先に向かって緩やかにせり上がっている。軒の下面はナデだけで輪積み痕が残り、垂木の表現はない。壁体ののる部分には断面方形の突帯を巡らせる。突帯上には75.0〜80.0㎜の間隔で、四隅とその中央に径5.0〜6.0㎜の小孔が開けられている。おそらく木製の欄干を模したものが取り付けられていたのではないかと思われる。突帯から20.0㎜ほどで孔が貫通する。75〜77は軸部で、図示したもののほかに22点の破片が出土している。作り方は全体にかなり粗雑で、壁体の両端部にヘラ削り調整が施されるが、それ以外はナデで、内外面に輪積み痕が明瞭に残る。77は初層で、柱の表現はなく、開口部もない。大斗の数から方3間になるものと思われる。基壇は1段で、壁体に基壇を表現する突帯を貼り付けている。基壇から45.0㎜ほど上に断面三角形の突帯を巡らせる。斗栱の表現はきわめて形骸化したものである。台輪は省略され、つまみのような大斗が貼り付けられ、その上に持ち送りを表現したと思われる柱状のものがのる。隅のものは45度の角度で付けられる。初層以外の部材は柱や斗栱などの表現はまったくない。

竪穴住居跡032（第60図、図版44・57・58）　［土器観察表201P］

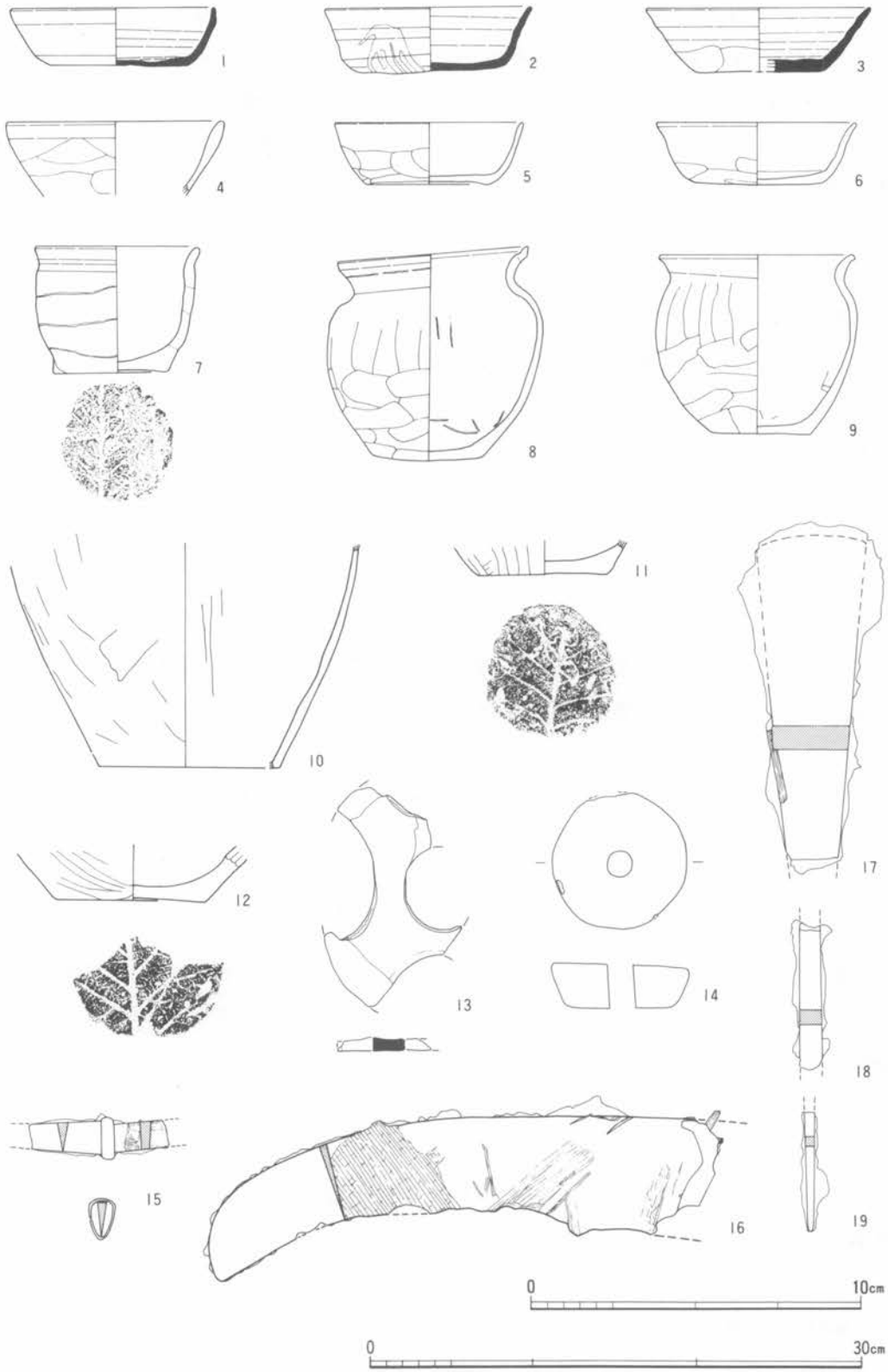
須恵器杯・土師器杯各3点、土師器鉢1点、土師器甕5点、須恵器甑・石製紡錘車各1点、鉄製品5点が図示できた。図示できなかった資料の総数は62点で、重量比で土師器が約77％を占める。

1〜3は須恵器杯である。1・2は内外面に火襷痕がみられる。1は色調が重ね焼きによって、口縁部内外面は青灰色であるがそれ以外は灰色である。底部外面は回転ヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に回転ヘラ削り調整が施される。2は底部外面は回転ヘラ切り後、手持ちヘラ削り調整が施される。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。3は常陸産と思われ、体部内外面のロクロ痕が明瞭である。底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。

4〜6は土師器杯である。4は非ロクロの土師器で、体部外面はヘラ削りで、内面はヘラ磨きが施される。5・6は法量や調整技法などがよく似た杯であり、6の口縁部の方がより大きく外反する点が異なる。底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下半部に手持ちヘラ削り調整が施される。

7は土師器鉢で、竪穴住居跡030の3の土師器鉢に類似する。内外面ともにナデで、胴部外面には輪積み痕が残り、底部外面に木葉痕がみられる。

9〜12は土師器甕である。8・9は小形の甕で、8は口縁部はつまみ上がる。胴部と底部外面はヘラ削りが施される。10は底部が遺存しないが、胴部下端部から推定すると、かなり器壁



第60図　竪穴住居跡032出土遺物

が薄い甕になる。11・12は「常総型」の甕で、底部外面に木葉痕がみられる。

13は須恵器甑で、常陸産と思われる。五孔形態になるものと思われる。

14は石製の紡輪である。石材は滑石、色調は黒褐色で、濡れたような光沢をもつ。径41.0㎜、厚さ13.5㎜、重さ37.79ｇを測る。

15～19は鉄製品である。15は刀子で、鉏が遺存する。茎部には木質が付着する。遺存長42.0㎜、刃部は遺存長22.0㎜、幅10.0㎜、厚さ3.0㎜、茎部は遺存長20.0㎜、幅8.5㎜、厚さ3.5㎜、重さ2.98ｇを測る。16は鎌で、刃部が緩やかな曲線をもつ曲刃鎌である。刃部の表面には茅と布が付着する。裏面にも茅が多量に付着する。遺存長156.0㎜、遺存幅34.0㎜、厚さ2.0㎜、重さ45.51ｇを測る。17～19は鏃の可能性も考えられる。3点とも接合しないが同一個体と思われる。17は図の上の部分の銹膨れが著しく、形態は不明である。17は遺存長100.5㎜、推定幅33.0㎜、厚さ8.0㎜、重さ90.75ｇ、18は遺存長43.0㎜、幅6.5㎜、厚さ4.5㎜、重さ4.56ｇ、19は遺存長35.0㎜、幅3.0㎜、厚さ3.0㎜、重さ1.13ｇを測る。

竪穴住居跡036（第61図、図版44・57）　［土器観察表202Ｐ］

須恵器杯・土師器杯各1点、土師器鉢2点、土師器甕1点、鉄製品2点が図示できた。図示できなかった資料の総数はわずか11点だけである。

1は須恵器杯で、常陸産と思われる。胎土中には雲母粒はまったくみられず、石英粒も比較的少ない。焼成はよく、硬く焼き締まっている。底部外面は回転ヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に回転ヘラ削り調整が施される。

2は土師器杯で、内外面に赤彩が施される。内面はやや粗いヘラ磨きが施される。底部外面は手持ちヘラ削り後、ナデ調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は口縁部直下まで手持ちヘラ削り調整が施され、底部同様にナデが施される。

3・4は土師器鉢で、よく似た形態をもつ。口縁部内外面はナデで、胴部および底部は一部ヘラ削りが施されるが、基本的にはナデである。いずれも火熱を受け、器面が荒れる。

5は土師器甕で、「常総型」の甕である。

6・7は鉄製品で、いずれも鎌である。6は破損した先端部を再利用したものと思われる。刃を下、基部を右側にして置いた場合、基部を手前に折り曲げる。長さ92.5㎜、幅23.0㎜、厚さ2.5㎜、重さ29.59ｇを測る。7は刃部が緩やかな曲線をもつ曲刃鎌である。刃を下、基部を右側にして置いた場合、基部を手前に折り曲げる。長さ166.0㎜、幅36.0㎜、厚さ2.5㎜、重さ50.07ｇを測る。

竪穴住居跡037（第61図、図版45・57）　［土器観察表202Ｐ］

土師器杯・須恵器杯蓋・土製品各1点、青銅製帯金具2点が図示できた。図示できなかった

資料の総数は61点で、重量比では須恵器がわずかに土師器を上回る。その大部分を占める須恵器甕は還元炎焼成になりきれない須恵器である。

1は土師器杯である。内面はヘラ磨き後、黒色処理が施される。底部外面は回転ヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に回転ヘラ削り調整が施される。底部外面に「石井」と墨書される。火熱を受け、器面は荒れ、墨書の遺存状態も悪い。

2は須恵器杯蓋である。胎土中に白色の微細粒が多く含まれる。色調は青灰色であるが、天井部外面付近は暗赤色である。天井部外面は回転ヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。

3は土製品であるが、性格は不明である。端部はヘラナデで、比較的丁寧に調整が施される。色調は明褐色で、胎土中に微粒石を含み、焼成はよい。

4・5は青銅製の帯金具で、接合しないが同一個体と思われる。遺存状態は悪い。4は遺存長12.5㎜、幅9.0㎜、重さ0.25gを測る。5は遺存長13.0㎜、幅5.0㎜、重さ0.21gを測る。

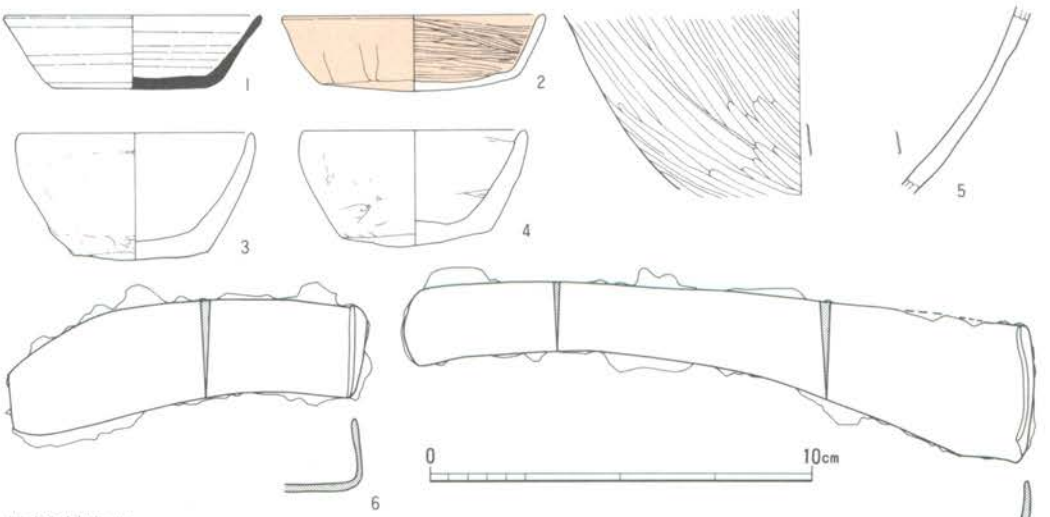
竪穴住居跡038（第61・62図、図版45・46）　［土器観察表203P］

須恵器杯2点、土師器杯5点、土師器甕3点、須恵器甕1点、土師器香炉蓋1点が図示できた。図示できなかった資料の総数は364点で、点数では土師器が多いが、重量比で須恵器がわずかに土師器を上回る。須恵器は甕が大部分を占め、11の破片と思われるものが多い。

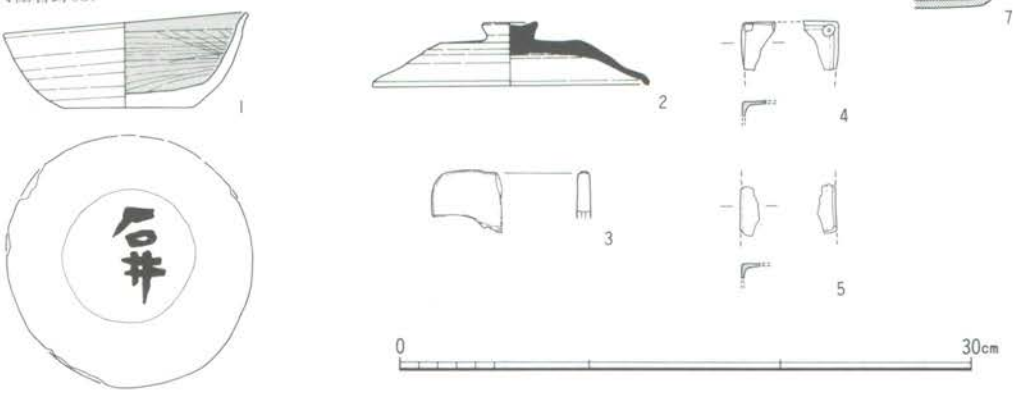
1・2は須恵器杯である。1は「くすべ焼成」の須恵器である。底部外面の色調は赤褐色である。底部外面は回転ヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に回転ヘラ削り調整が施される。2は底部外面は回転ヘラ切り後、手持ちヘラ削り調整が施される。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。底部外面に焼成前に「下」かと思われる文字がヘラ書きされる。

3～7は土師器杯である。3は非ロクロの土師器で、平底である。体部外面は口縁部直下までヘラ削りが施される。底部外面はヘラ削りで、内面はナデが施される。4は底部内面に「新万」と墨書される。このほかに体部内外面に多数の墨痕がみられ、「財カ」、「山カ」と読める部分もあるが、基本的には「筆ならし」と思われる。底部外面は回転糸切り離し後、回転ヘラ削り調整が施される。体部外面は下半部に回転ヘラ削り調整が施される。5は体部外面に正位で「山」と墨書される。底部外面は一定方向への手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。6は口唇部の一部に油煙状の付着物がみられる。底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。7は大振りの杯で、内面は丁寧なヘラ磨きが施される。底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。

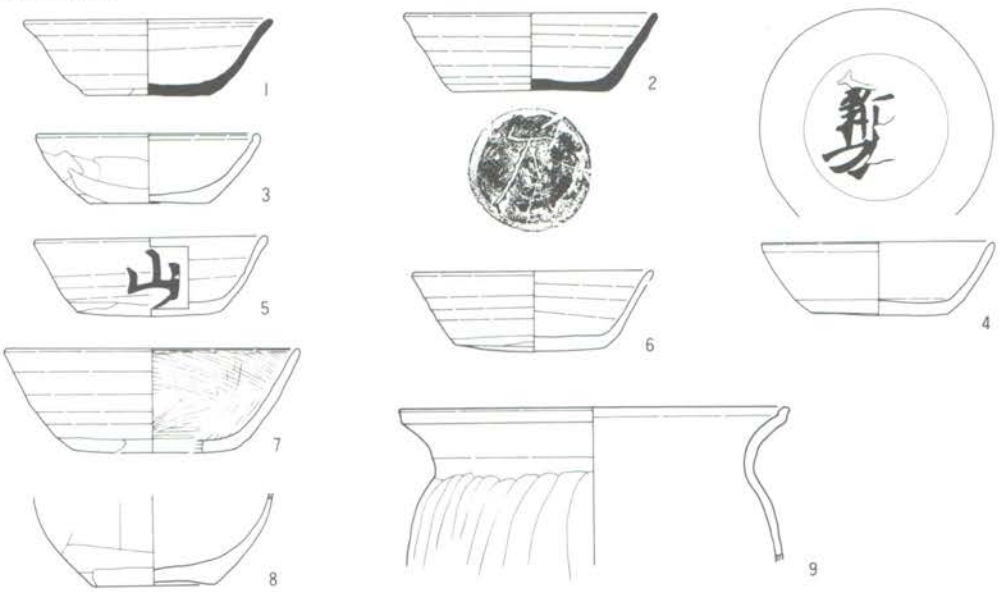
竪穴住居跡036



竪穴住居跡037



竪穴住居跡038



第61図　竪穴住居跡036・037・038出土遺物

8～10は土師器甕である。8・9は器壁が薄い甕で、胎土・色調などから同一個体の可能性がある。胴部と底部外面はヘラ削りが施される。10は「常総型」の甕である。この甕も器壁は通常の「常総型」の甕に比べてかなり薄い。

11は須恵器甕で、還元炎焼成になりきれない須恵器である。胴部外面は縦方向の叩き後、軽いナデが施され、下端部はヘラ削り調整が施される。内面は指頭によるオサエ後、ナデが施される。

12は土師器香炉蓋である。竪穴住居跡031Bの56に類似する。ただし、天井部外面は031Bが回転ヘラ削り調整なのに対して、本遺物は縦方向の手持ちヘラ削り調整が施される。器面は火熱を受け、全体に荒れ、赤くなっている部分がみられる。

竪穴住居跡039（第62図、図版46・47・57・58）　［土器観察表202P］

土師器杯4点、土師器皿・須恵器杯蓋各2点、土師器甕・砥石・鉄製品各1点が図示できた。図示できなかった資料の総数は72点で、須恵器杯が1点だけで、そのほかはすべて土師器である。

1～4は非ロクロの土師器杯で、いずれも丸底である。1は内外面ともにヘラ磨き後、黒色処理が施されるが、遺存状態はあまりよくない。器面はやや荒れている。2～4は器形や調整方法がよく似た杯である。内面は丁寧なヘラ磨きが施され、外面はヘラ削り後、ヘラナデが施される。

5・6は非ロクロの土師器皿である。いずれも内外面ヘラ磨き後、赤彩が施される。5はやや丸底ぎみで、6は中央部が上げ底になる。

7・8は常陸産と思われる須恵器蓋である。7は天井部が高くかえりをもたない短頸壺の蓋で、全体にやや歪んでいる。8は内側にかえりをもつ杯蓋である。天井部外面の調整はいずれも同じで、回転ヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。

9は小形の土師器甕である。胴部および底部外面はヘラ削りで、内面はヘラナデが施される。胴部外面の器面は火熱を受け、荒れている。

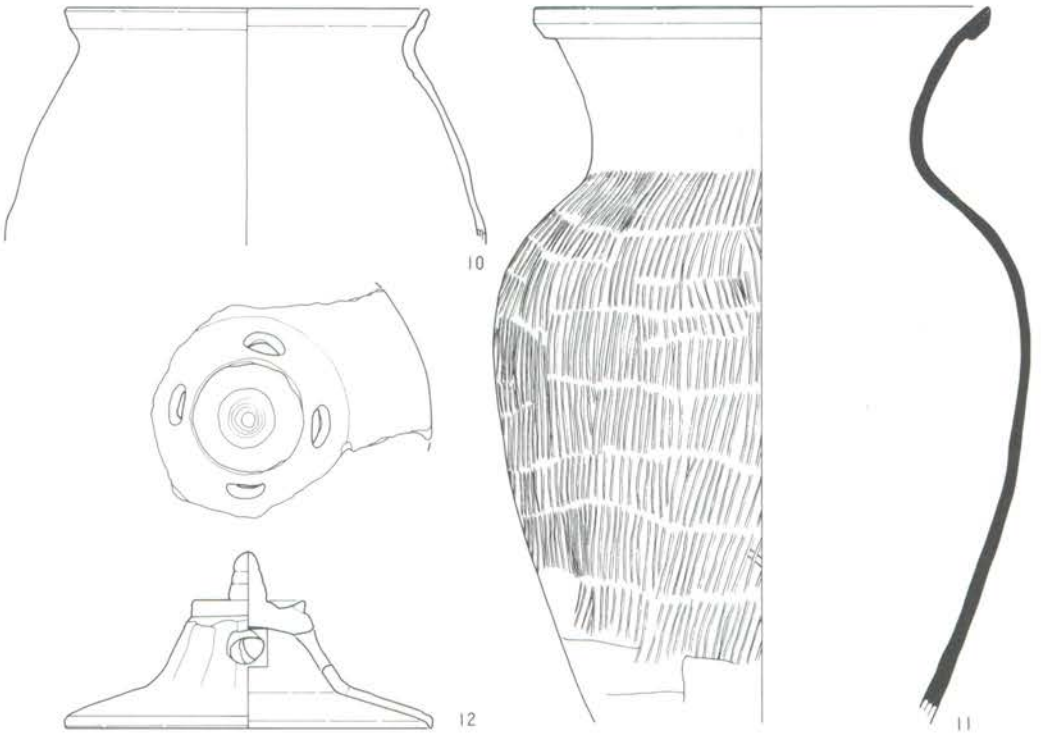
10は砥石である。石材は凝灰岩質で、四面ともよく使い込まれている。

11は鉄鏃である。三角形式で、両丸造りである。頸部と茎部の境は緩やかに「ハ」の字状に広がる。頸部の一部に繊維質のものが付着する。遺存長100.5㎜、重さ16.69g、刃部は遺存長37.5㎜、幅44.0㎜、厚さ3.0㎜、頸部は長さ46.0㎜、幅6.5㎜、厚さ5.0㎜、茎部は遺存長35.5㎜、幅3.5㎜、厚さ3.0㎜を測る。

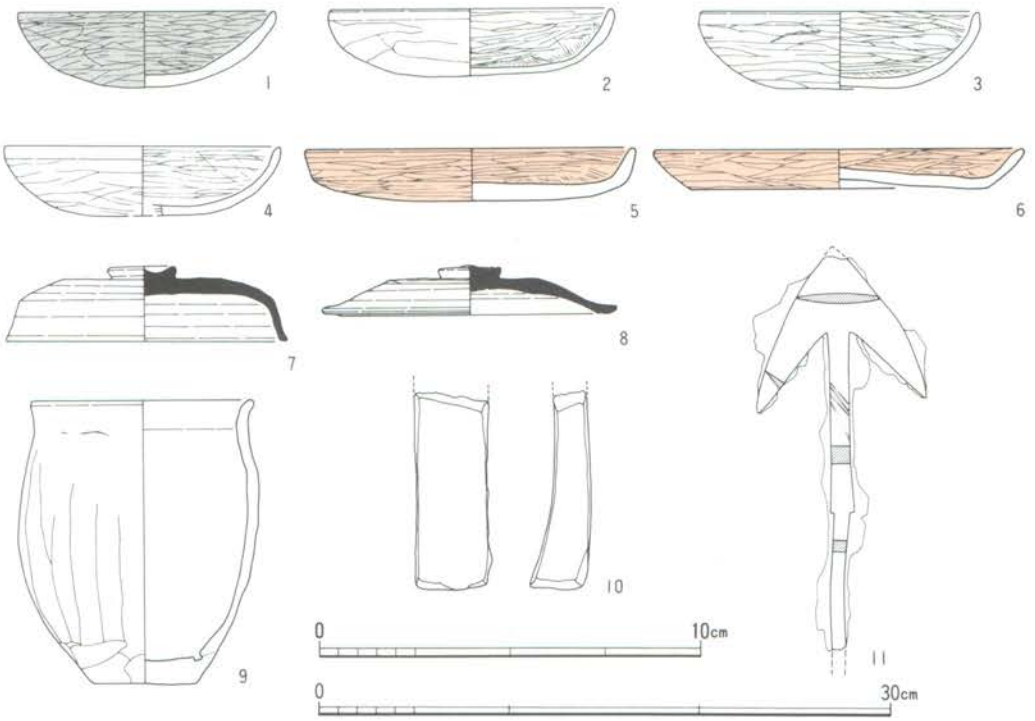
竪穴住居跡040（第63図、図版47・57・58）　［土器観察表202P］

土師器杯・土師器甕・石製紡錘車・鉄製品各1点が図示できた。図示できなかった資料の総

竪穴住居跡038



竪穴住居跡039



第62図　竪穴住居跡038・039出土遺物

数は67点で、点数での重量比はわずかに土師器が上回る。

1は非ロクロの土師器杯で、丸底である。器面は火熱を受け、荒れているので、調整等については不明である。

2は土師器甕で、器壁の薄い甕である。内外面ともに器面は火熱を受け、荒れている。

3は石製、紡輪の未製品である。一部に研磨が施され、孔も途中までしか開けられていない。石材は凝灰岩質である。形状は楕円形で、長径49.0㎜、短径39.5㎜、厚さ20.0㎜、重さ46.57gを測る。

4は鎌で、刃部に緩やかな曲線をもつ曲刃鎌である。刃を下、基部を右側にして置いた場合、基部を手前に折り曲げる。長さ158.5㎜、幅42.0㎜、厚さ3.0㎜、重さ94.33gを測る。

竪穴住居跡041（第63図、図版47）　［土器観察表202P］

須恵器杯1点、土師器杯2点、土師器高台付き杯・土師器高台付き皿・土師器皿各1点、土師器甕4点、土師器鉢・須恵器鉢・須恵器甕・土製支脚各1点が図示できた。図示できなかった資料の総数は446点で、重量比で土師器が約78%を占める。土師器は甕が多数を占め、「常総型」の甕もかなりみられる。

1は須恵器杯である。口縁部内面に1条の沈線がめぐる。口縁部は歪んでいる。底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は無調整である。

2・3は土師器杯である。いずれも器面は火熱を受け、荒れているので、調整方法は不明である。

4は土師器高台付き杯である。器面は火熱を受け、荒れている。底部外面は回転糸切りであるが、調整方法は不明である。体部外面は下半部に手持ちヘラ削り調整が施されるが、これも不明瞭である。

5は土師器高台付き皿で、高台部は剝がれている。高台部の接合部分にヘラによる沈線が1条みられる。底部外面は回転糸切り後、回転ヘラ削り調整が施される。器面はやや荒れ、内面の調整は不明である。

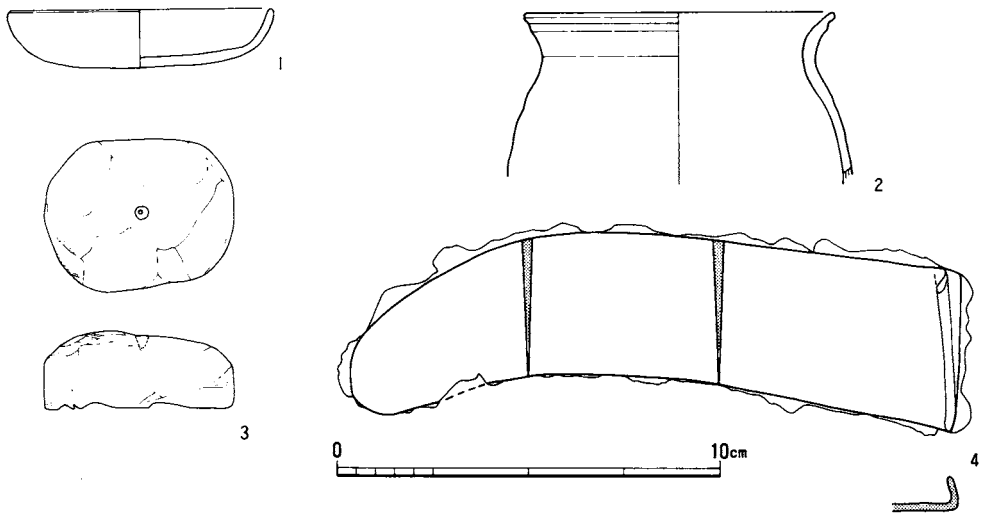
6は土師器皿で、底部は突出する。器面は火熱を受け、荒れている。底部外面は回転ヘラ切り後、手持ちヘラ削り調整が施される。底部外面の端部は手持ちヘラ削りによる面取りが行われる。

7～10は土師器甕で、いずれも器壁の薄い甕である。7～9は器面は火熱を受け、荒れている。10は胴部および底部外面はヘラ削りで、内面はナデが施される。

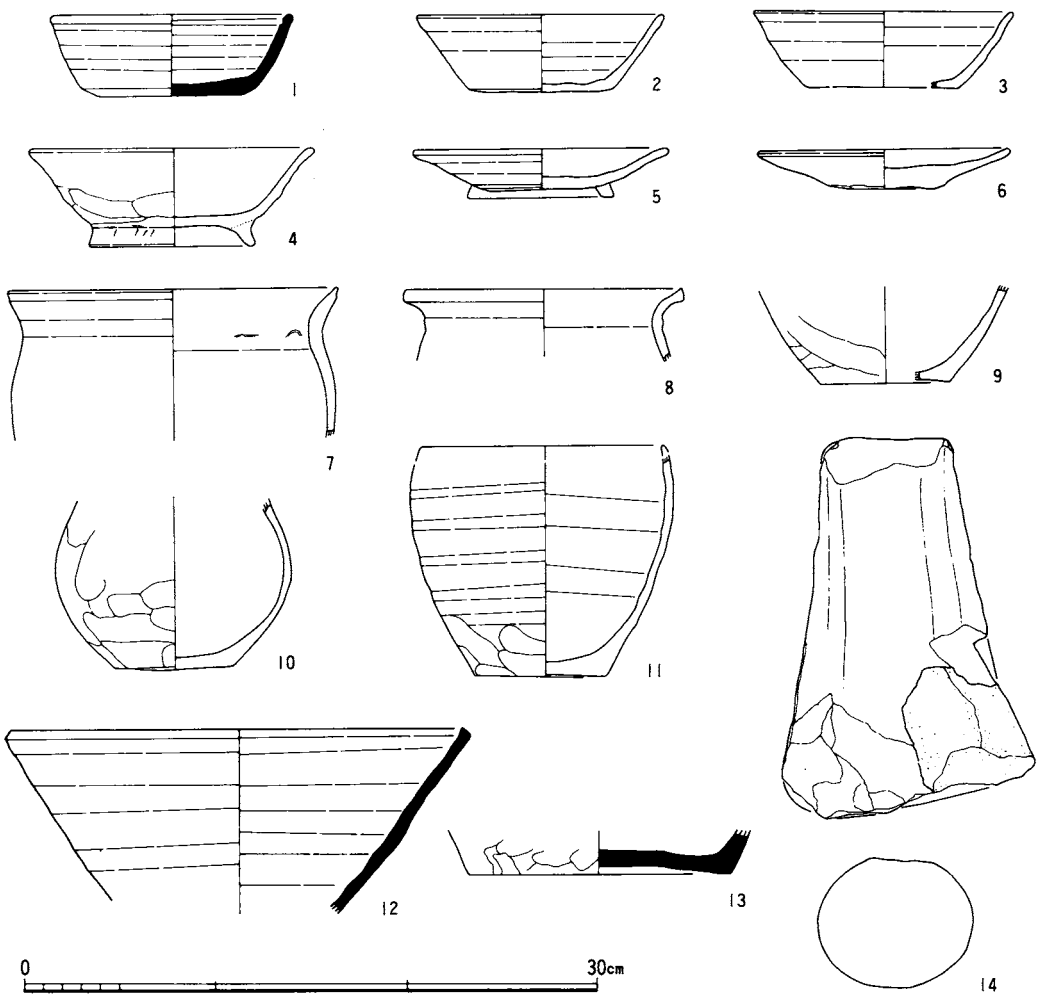
11は土師器鉢である。ロクロ成形で、胴部内外面のロクロ痕が明瞭である。胴部外面下端部と底部は手持ちヘラ削り調整が施される。

12は須恵器鉢で、還元炎焼成になりきれない須恵器と思われるが、器面がかなり荒れている

竪穴住居跡040



竪穴住居跡041



第63図　竪穴住居跡040・041出土遺物

ので、土師器の可能性もある。ロクロ成形である。

13は須恵器甕で、「くすべ焼成」の須恵器である。底部内面は一部摩耗している部分がみられる。胴部外面は手持ちヘラ削り調整が施される。底部外面には縄状の圧痕がみられる。

14は土製支脚で、頭部が遺存する。下部には焼土塊が付着する。底面も剝離が多いが、かなり原形に近いものと思われる。遺存長190.0mmを測る。

竪穴住居跡045（第64図）　［土器観察表202P］

土師器杯1点、土師器甕3点が図示できた。図示できなかった資料の総数は210点で、点数および重量比で土師器が大部分を占める。土師器では甕がほとんどで、「常総型」の甕がそれ以外の甕をはるかに上回る。

1は非ロクロの土師器杯である。内外面ともにヘラ磨き後、赤彩が施される。底部は欠損しているが、類似した杯の底部から、平底の可能性もある。

2～4は土師器甕で、いずれも「常総型」の甕である。2は器面は火熱を受け、荒れている。4は底部外面に木葉痕がみられる。

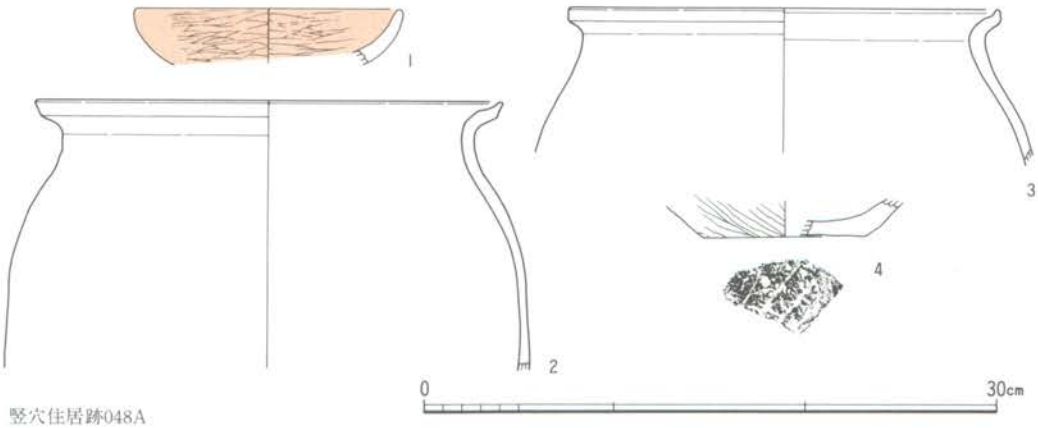
竪穴住居跡048A（第64図、図版48・49・58）　［土器観察表203P］

須恵器杯8点、土師器杯5点、土師器甕3点、土師器高杯・砥石各1点が図示できた。図示できなかった資料の総数は271点で、重量比で須恵器が52％で、土師器をわずかに上回る。その大部分を還元炎焼成になりきれない須恵器甕が占めている。

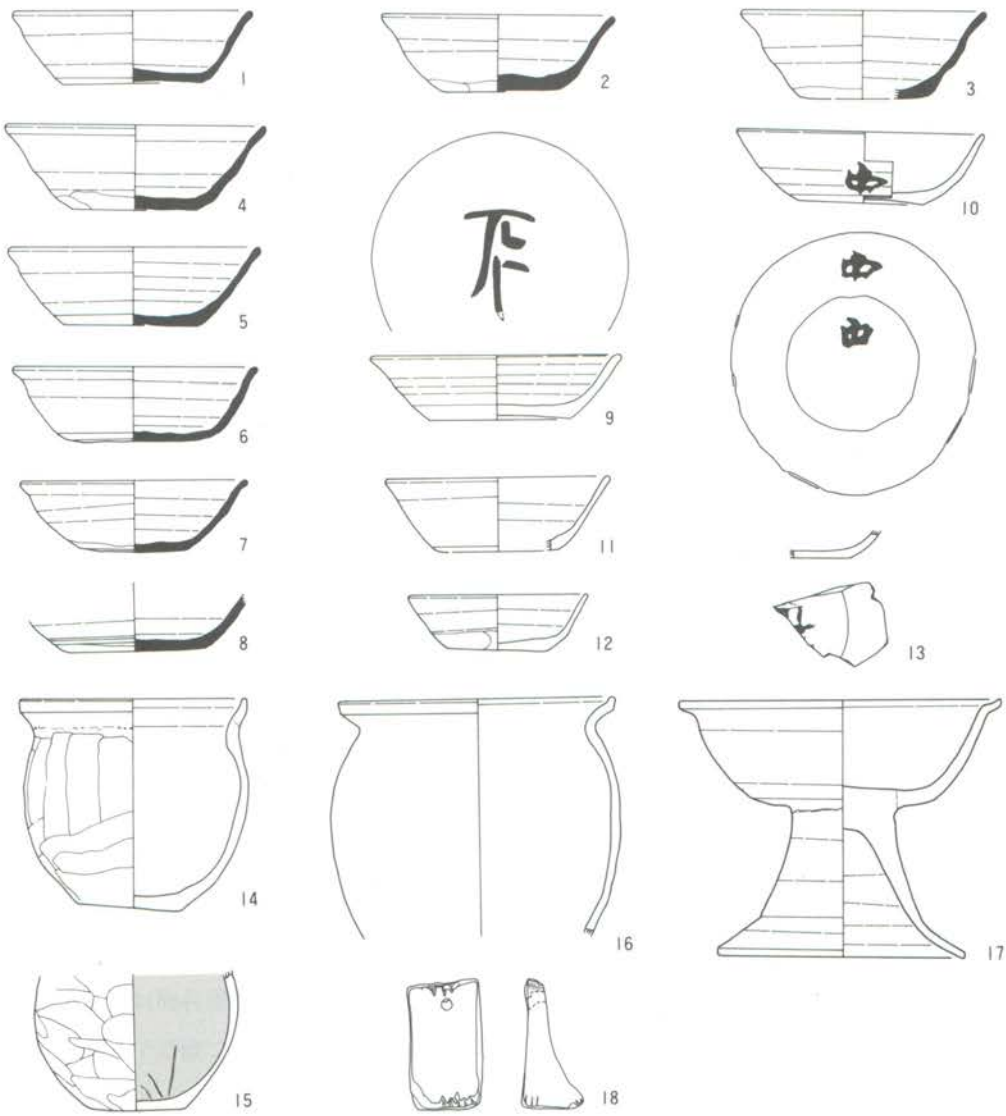
1～8は須恵器杯である。1～3は色調が青灰色であるが、全体にやや褐色がかっている。4～8は還元炎焼成になりきれない須恵器である。いずれも体部下端部にやや丸みをもち、体部外面のロクロ痕が明瞭で、口縁部はわずかに外反する。1・5・6は底部外面は回転ヘラ切り後、回転ヘラ削り調整が施される。体部外面は下端部に回転ヘラ削り調整が施される。2・8は底部外面は回転ヘラ切り後、手持ちヘラ削り調整が施される。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。3・4・7は底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。

9～13は土師器杯である。9は底部内面に「下」と墨書される。体部から底部にかけての外面に煤の付着がみられる。底部外面は回転糸切り離し後、回転ヘラ削り調整が施される。体部外面は下半部に回転ヘラ削り調整が施される。胎土中の雲母粒と石英粒がごく少量含まれている。10は口唇部に油煙状の付着物がみられる。体部外面に正位で、また底部外面に「[illegible]」と墨書される。底部外面は回転ヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は中位まで回転ヘラ削り調整が施される。11は遺存する口唇部の3か所に油煙状の付着物がみられる。12は小振りの杯で、遺存する口唇部の7か所ほどに油煙状の付着物がみられる。底部外面

竪穴住居跡045



竪穴住居跡048A



第64図　竪穴住居跡045・048A出土遺物

は回転ヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に回転ヘラ削り調整が施される。13は底部外面に墨書されるが、遺存部分が少なく判読できない。内面はヘラ磨き後、黒色処理が施される。底部外面は回転糸切り後、周縁部に回転ヘラ削り調整が施される。体部外面は下端部に回転ヘラ削り調整が施される。

14～16は土師器甕である。14・15は小形の甕である。胴部および底部外面はヘラ削りで、内面はヘラナデが施される。胴部外面に煤が付着する。15は内面はヘラナデ後、黒色処理が施される。外面はヘラ削りが施される。16は胴部外面に煤が付着し、器面は火熱を受け、一部赤くなっている部分がみられる。

17は土師器高杯である。杯部は深く、口縁部は受け口状に大きく開く。脚部はロクロ成形で、脚柱部の径は太い。杯部底部外面には脚柱部より一回り大きい径で、ヘラによる沈線が1条めぐる。杯部内面には煤が付着する。底部および体部外面の中位までは回転ヘラ削り調整が施される。

18は砥石である。石材は凝灰岩質で、色調は白灰色である。四面ともよく使い込まれている。図の上下両端部にも擦痕がみられる。図の上部に孔があり、表裏両面から開けられている。上部の厚さが薄い部分が折れて、紐を通すように開けられたものと思われる。長さ67.0㎜、重さ82.21gを測る。

竪穴住居跡049（第65図、図版49・50・57）　［土器観察表203P］

須恵器杯2点、土師器杯5点、土師器皿2点、土師器鉢・須恵器甕各1点、土師器甕2点、鉄製品3点が図示できた。図示できなかった資料の総数は44点で、図示できた点数の割には破片資料が少ない。

1・2は須恵器杯である。いずれも竪穴住居跡048A出土の須恵器杯に類似した形態をもつ。1は底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。2は還元炎焼成になりきれない須恵器である。色調は底部外面の周辺だけが褐色がかった青灰色である。底部外面は回転ヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に回転ヘラ削り調整が施される。

3～7は土師器杯である。3は体部外面に墨書されるが、判読不能である。底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。4は底部外面に「冨」と墨書されるが、遺存状態はあまりよくない。4・5は底部外面は回転ヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下半部から下端部に回転ヘラ削り調整が施される。6・7は小振りの杯で、048Aの12に類似する。いずれも口縁部内面に油煙状の付着物がみられ、6はわずかな間隔を開けて、口縁部を1周するほどみられる。底部外面は回転ヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端

部に回転ヘラ削り調整が施される。内面はヘラ磨きが施され、7は黒色処理が施される。

8・9は土師器皿である。8は底部は回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明である。9は底部が突出する。底部内面および破断面に墨痕がみられ、器面がやや摩耗していることから、皿が破損した後に硯として使用された可能性がある。底部外面は回転糸切り後、ナデが施され、外面は強くナデられ、外見上高台のように作り出されている。

10は土師器鉢である。底部は欠損しているがやや尖った丸底になるものと思われる。口縁部は外反気味に内屈する。口縁部内外面を除いて丁寧なヘラ磨きで、内面は黒色処理が施される。胴部外面には斜め方向のヘラの当り痕がみられる。

11は須恵器甕で、常陸産と思われる。胎土中に含まれる雲母粒や石英粒は少ない。胴部外面は斜め方向の叩きで、内面は指頭によるオサエ後、ナデが施される。

12・13は土師器甕である。12は口唇部はつまみ上がる。いずれも胴部外面はヘラ削りで、内面はヘラナデが施される。焼成はよく、硬く焼き締まる。

14～16は鉄製品である。14は刀子で、茎部のみが遺存する。遺存長53.0㎜、幅8.0㎜、厚さ3.0㎜、重さ4.17gを測る。15・16は薄い板状の製品であるが、性格は不明である。接合しないが同一個体と思われる。15は遺存長50.0㎜、幅43.0㎜、厚さ1.0㎜、重さ7.93gを測る。16は遺存長30.0㎜、遺存幅30.0㎜、厚さ1.0㎜、重さ6.40gを測る。

竪穴住居跡057（第65図）　［土器観察表203P］

土師器杯2点だけが図示できた。図示できなかった資料の総数は139点で、点数でも重量比でも土師器が大部分を占める。土師器は「常総型」の甕の占める割合が高い。

1・2は非ロクロの土師器杯で、丸底である。1は体部および底部外面にヘラ削りが施されるが、火熱を受け、器面は荒れている。2は体部外面がヘラ削りで、内面にはヘラ磨きが施される。

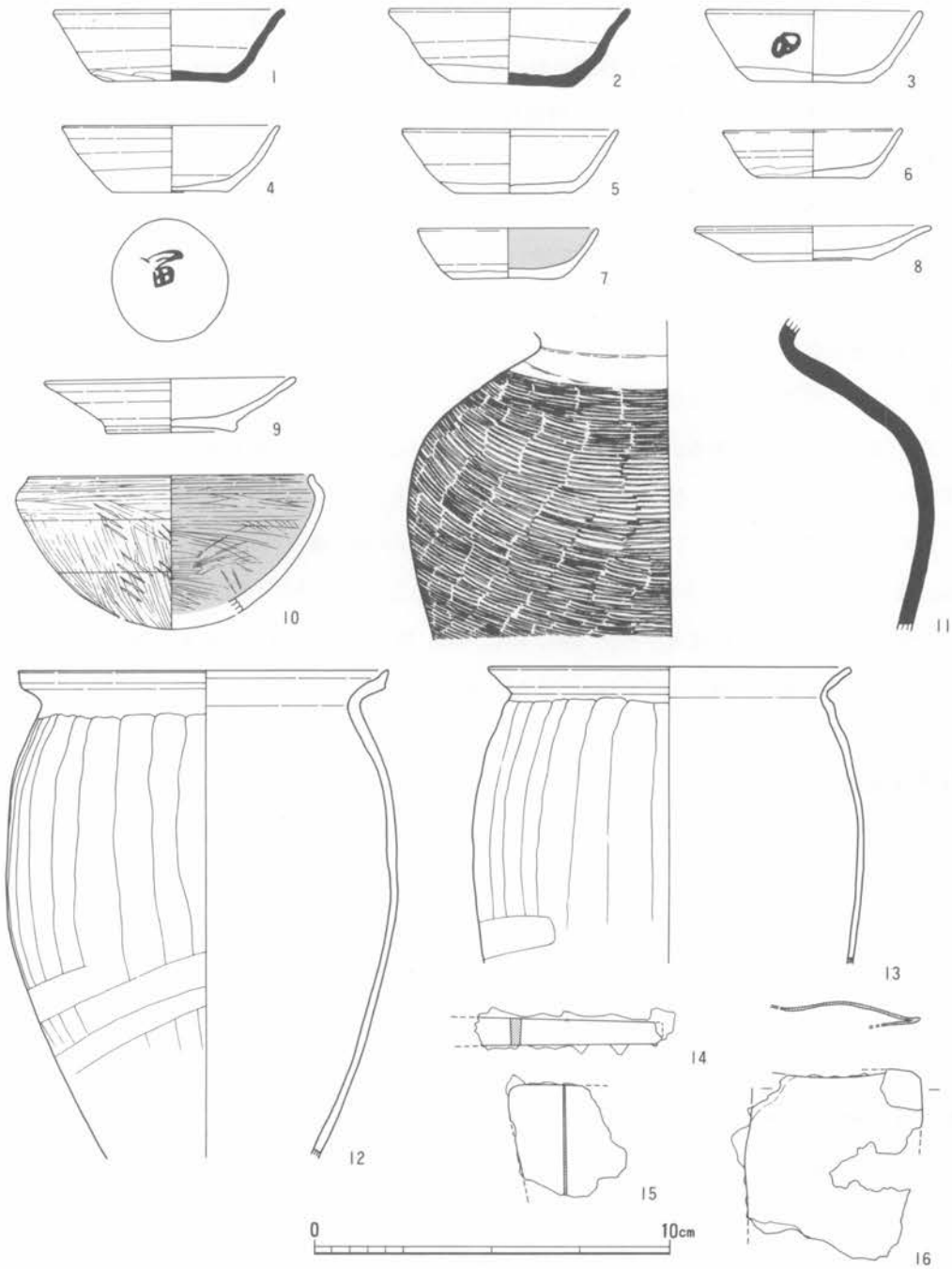
竪穴住居跡062（第66図、図版50・58）　［土器観察表203P］

土師器杯・砥石各1点が図示できた。図示できなかった資料の総数はわずか8点を数えるのみである。

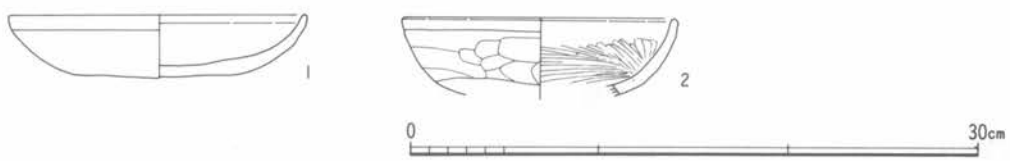
1は非ロクロの土師器杯で、平底である。器面は全体に荒れているが、体部および底部外面はヘラ削り後、ヘラナデが施され、内面はヘラ磨きが施される。体部および底部外面に赤彩が施されるが、遺存状態は悪い。

2は砥石で、図の下と左下部分は欠損している。遺存部分はよく使い込まれている。石材は軟質の砂岩である。

竪穴住居跡049



竪穴住居跡057



第65図　竪穴住居跡049・057出土遺物

竪穴住居跡064（第66図、図版50・51）　［土器観察表P　］

須恵器杯2点、土師器甕4点、土師器甑・須恵器甕各1点が図示できた。図示できなかった資料の総数は150点で、重量比で土師器が85％を占める。

1・2は須恵器杯で、常陸産と思われる。いずれも胎土中に含まれる雲母粒や石英粒の数は比較的少ない。1は底部外面に焼成前の「×」状のヘラ記号がみられる。底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。2は底部内面が摩耗している。底部外面は回転ヘラ切り後、手持ちヘラ削り調整が施される。体部外面は下半部に手持ちヘラ削り調整が施される。

3～6は土師器甕である。3～5は小形の甕で、いずれも火熱を受け、内面の器面は一部荒れている。また、外面には煤が付着する。底部外面はヘラ削りである。3・4は口唇部がわずかにつまみ上がる。3・5は胴部外面はヘラ削り後、ヘラナデが施される。6は「常総型」の甕である。火熱を受け、胴部外面に煤が付着する。

7は土師器甑である。口唇部はつまみ上がる。口縁部直下に小さな把手が3つ付けられる。

8は須恵器甕で、常陸産と思われる。胎土中に含まれる雲母粒や石英粒は少ない。胴部外面は横方向の叩き後、下端部にヘラ削り調整が施される。内面は指頭によるオサエ後、ナデが施される。

竪穴住居跡065（第67図、図版51）　［土器観察表203P］

土師器甕・土師器甑各1点が図示できた。図示できなかった資料の総数はわずか32点である。

1は土師器甕の胴部破片で、外面に焼成前のヘラ記号がみられる。遺存する部分では「キ」状と思われる。

2は土師器甑である。胎土中に雲母粒や石英粒を含み、胴部外面に縦方向のヘラ磨きはみられないものの、胴部上部にヘラの当り痕を残すなど「常総型」の甕の特徴に類似する。胴部内外面ともにヘラナデで、下半部はヘラ削りが施される。

竪穴住居跡069（第67図）

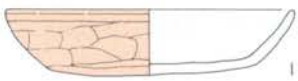
土製支脚1点だけが図示できた。図示できなかった資料の総数は68点で、重量比で土師器が約89％を占める。常陸産と思われる須恵器杯の破片がみられる。

1は土製支脚である。火熱を受け、表面は脆くなっている。

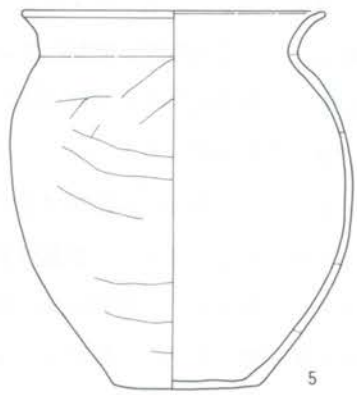
竪穴住居跡070（第67図、図版52・54）　［土器観察表203P］

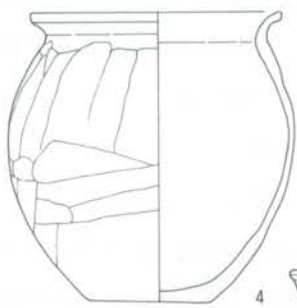
灰釉陶器椀・須恵器高台付き皿・須恵器杯蓋各1点、土師器杯・須恵器長頸壺・土師器甕各2点、須恵器甕1点、瓦塔部材2点が図示できた。図示できなかった資料の総数は366点で、重

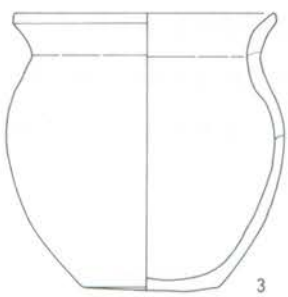
竪穴住居跡062

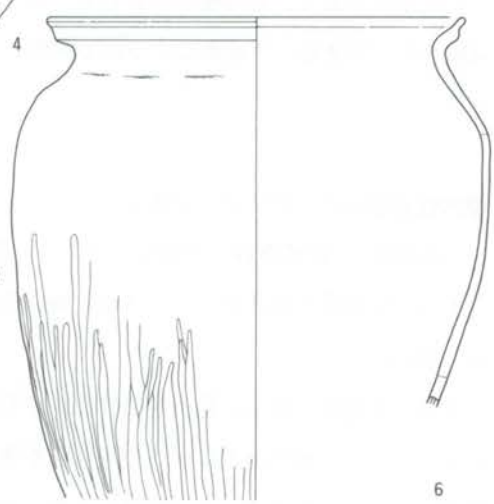


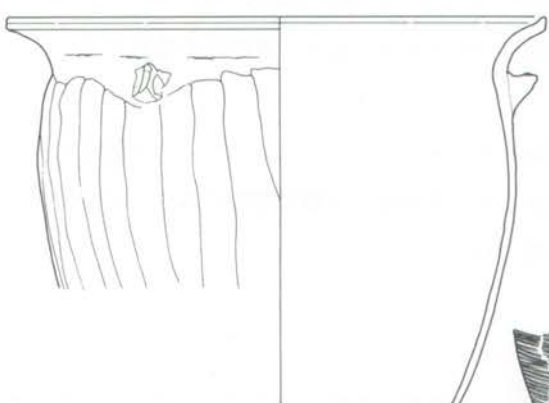
竪穴住居跡064

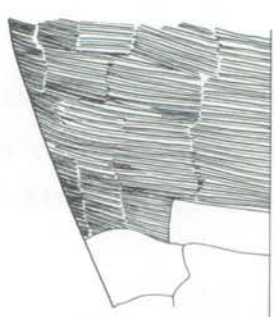












第66図　竪穴住居跡062・064出土遺物

量比で土師器が約81％を占める。土師器甕は「常総型」の甕の占める割合が高い。

1は蛇の目高台となる灰釉陶器椀である。釉は刷毛塗りで、内面だけに施されている。底部外面は回転糸切り後、回転ヘラ削り調整が施される。台部外面は下半部に回転ヘラ削り調整が施される。高台は高さ4.0㎜、幅10.0㎜を測る偏平なものである。高台底部には1か所トチンの痕跡がみられる。胎土は緻密で、黒色の微粒石を少量含み、硬く焼き締まる。

2は須恵器高台付き皿である。焼成はあまく、色調は表面だけ青灰色で、内部は茶褐色である。底部内面の器面は摩耗する。底部外面は回転ヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。

3は須恵器杯蓋である。焼成はよく、硬く焼き締まる。天井部外面は回転ヘラ削り後、ナデが施される。

4・5は土師器杯である。いずれも火熱を受け、器面は荒れ、脆くなっている。4は底部外面は回転ヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に回転ヘラ削り調整が施される。5は底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。

6・7は須恵器長頸壺である。いずれも焼成はよく、硬く焼き締まる。6は肩部で、内面に指頭によるオサエ痕がみられる。

8・9は土師器甕である。8は「常総型」の甕である。9は明らかに8とは別個体で、火熱を受け、器面がやや荒れている。底部外面に木葉痕がみられる。

10は須恵器甕で、常陸産と思われる還元炎焼成になりきれない須恵器である。器面は火熱を受け、荒れているので調整等がかなり不鮮明であるが、胴部外面にわずかに叩き痕が残る。胴部外面下端部はヘラ削り調整が施される。

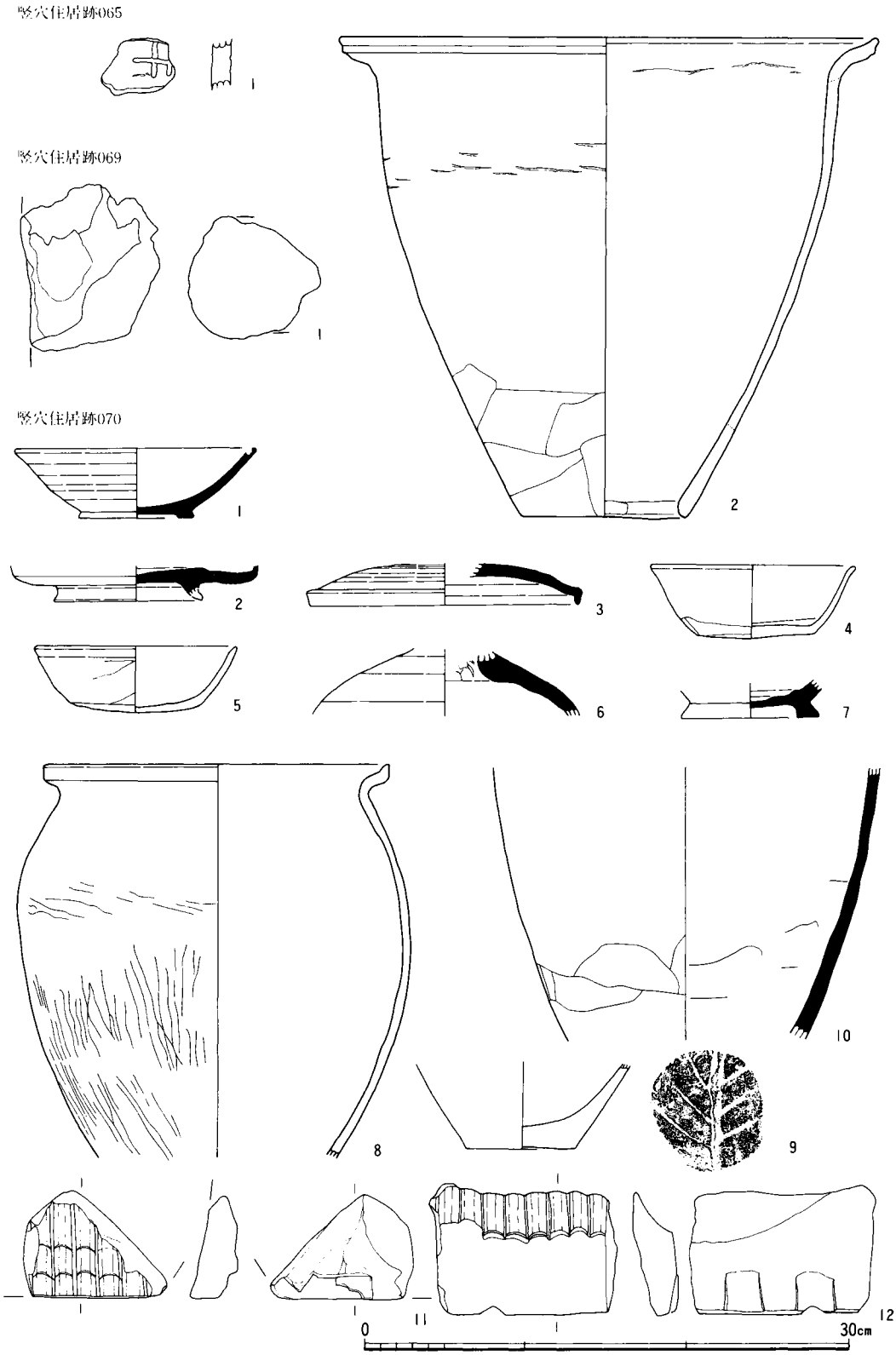
11•12は瓦塔の部材で、須恵質であるが、焼成はややあまく軟質である。いずれも屋蓋部で、瓦は男瓦だけで表現されている。幅12.0㎜で、軒先から14.0㎜と31.0㎜のところで瓦が葺かれているように表現されている。軒先はヘラで丁寧に整えられ、軒下にはヘラ削りによって垂木が表現されている。竪穴住居跡031B出土の瓦塔の屋蓋部より丁寧に作られている。

竪穴住居跡071（第68図、図版53・57）　［土器観察表204Ｐ］

土師器杯•鉄斧各1点が図示できた。図示できなかった資料の総数はわずか4点だけである。

1は非ロクロの土師器杯で、丸底である。体部および底部外面はヘラ削りが施されるが、器面は荒れているので、やや不明瞭である。内面はやや粗いヘラ磨きが施される。底部と口縁部の内面に油煙状の付着物がみられる。

2は鉄斧で、両刃である。表面は銹が著しく、断面は一部推定である。長さ104.0㎜、刃部幅39.0㎜、厚さ10.0～12.0㎜、重さ141.92ｇを測る。



第67図　竪穴住居跡065・069・070出土遺物

竪穴住居跡073（第68図、図版53）　［土器観察表204Ｐ］

土師器杯・須恵器甕各２点が図示できた。図示できなかった資料の総数はわずか25点だけである。

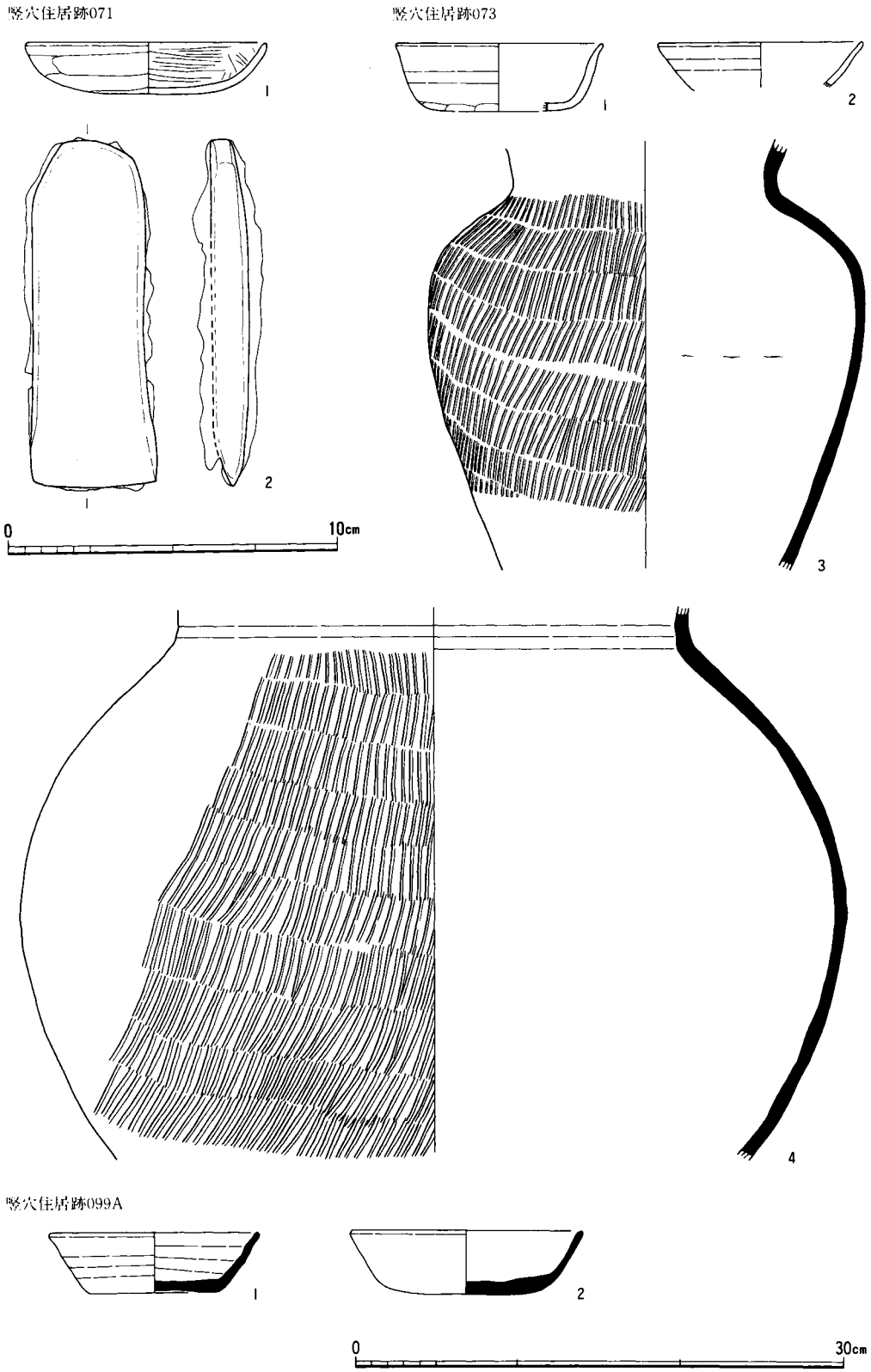
１・２は土師器杯である。いずれも器面は火熱を受け、荒れている。１は底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。２は体部外面の下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。

３・４は須恵器甕で、いずれも還元炎焼成になりきれない須恵器である。一部に青灰色の部分がみられる。胴部外面は縦方向の叩きで、３には横方向の筋状のナデが施される。内面は指頭によるオサエ後、ナデが施される。

竪穴住居跡099A（第68図、図版53）　［土器観察表204Ｐ］

須恵器杯２点が図示できた。図示できなかった資料の総数は099Bと合わせて350点で、重量比で土師器が約95％を占める。土師器甕は「常総型」の甕がそれ以外の甕をわずかに上回る。土師器杯の出土点数は少ない。

１・２は須恵器杯である。１は底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は器面が摩耗しているので不明瞭であるが、無調整であると思われる。２は常陸産と思われる。器面は火熱を受け、かなり荒れている。色調は大部分が淡黄褐色である。底部と体部外面下端部にヘラ削り調整が施されているが、不明瞭である。



第68図　竪穴住居跡071・073・099A出土遺物

2．掘立柱建物跡

(1)遺構

掘立柱建物跡042（第69図、図版21）

台地南西側の斜面中で、竪穴住居跡038の南東約４ｍの位置にある（リ６－21グリッド）。標高は31.5m前後である。

３間×２間の側柱構造で、桁行方向は等高線に平行している。掘方は円形で、北東側の１つは長方形に近い形をしている。また、南西側の３つは検出面での径がほかのものより小さい。桁行は北東側が6.02m、南西側が5.46mで、南西側の桁行が短く、柱間も南西側が1.80m前後とそのほかの2.00m前後に比べて小さくなっている。南東側の梁行の中間の掘方は直線上にのらない。

遺物は土師器甕と杯および須恵器の杯と蓋の破片わずかに出土しているだけで、図示できるものはない。

掘立柱建物跡043（第69図、図版21）　（遺物132Ｐ）

台地中央の平坦地で、竪穴住居跡024の北西側にあり、一部重複している（リ６－14･15グリッド）。標高は35.3m前後である。南東側の２つの柱の掘方が024の壁とカマドを壊して掘り込まれている。

３間×２間の側柱構造で、桁行6.50m、梁行4.26mである。桁行方向はほぼ東西方向と同じである。掘方は円形で、比較的しっかりと掘り込まれている。

遺物は総数で38点出土しているが、土師器甕の胴部破片がほとんどである。１の須恵器杯は024の北西隅を壊して掘り込まれている掘方の中から出土している。

掘立柱建物跡050A（第70図、図版21）

台地南東側の縁辺部にあり、掘立柱建物跡050Bと重複している（ヌ６－12グリッド）。標高は34.0m前後である。北隅の部分の掘方は攪乱を受けている。

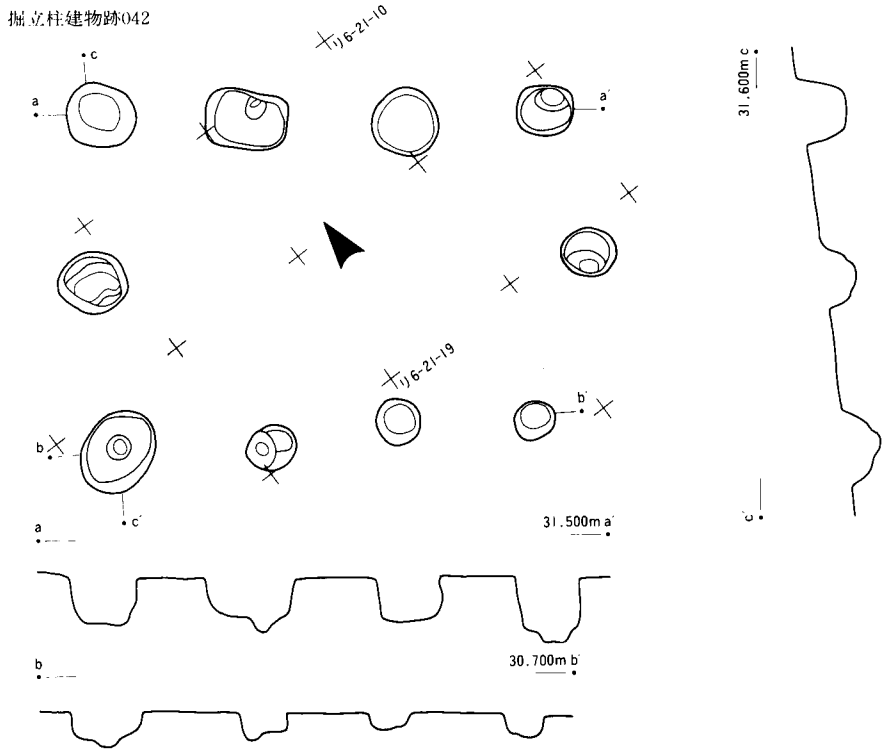
２間×２間の側柱構造で、桁行4.26m、梁行3.96mで東側の桁行がもっとも長い。掘方は円形である。柱間寸法はややばらつきがみられる。

遺物は050Aと050Bを合わせて総数で36点出土しているが、土師器甕の胴部破片がほとんどで、図示できるものはない。

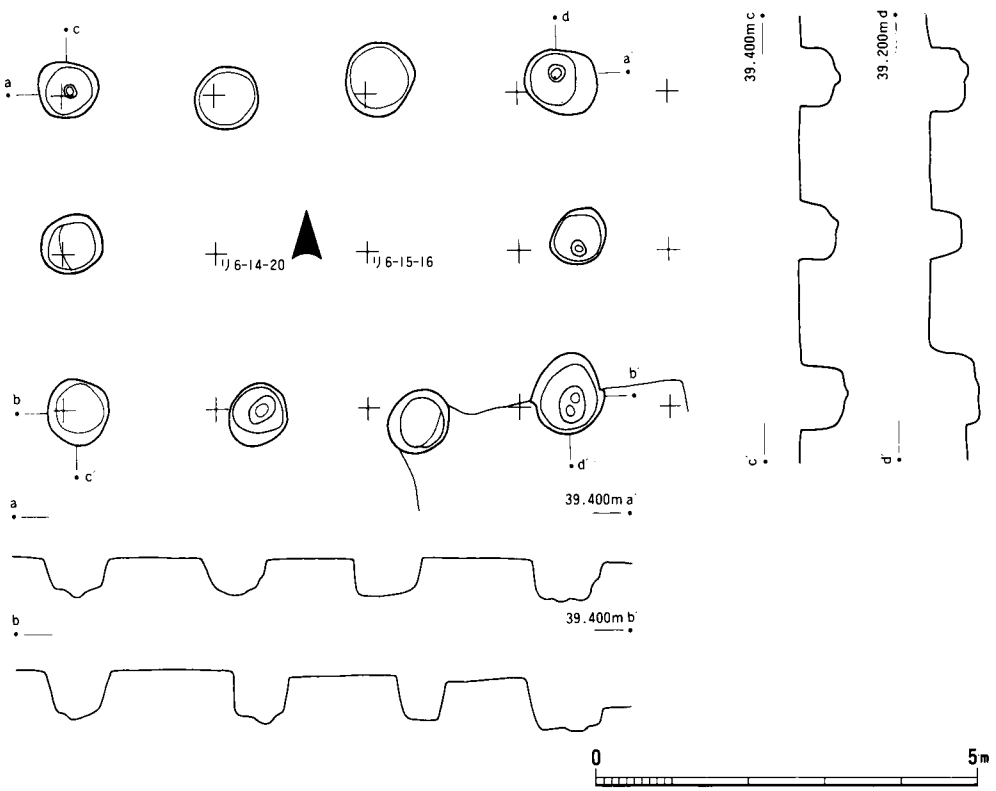
掘立柱建物跡050B（第70図、図版21）

掘立柱建物跡050Aの内側に納まる位置にあり、050Aの西側の桁行方向の掘方の埋土を切って掘り込まれている。

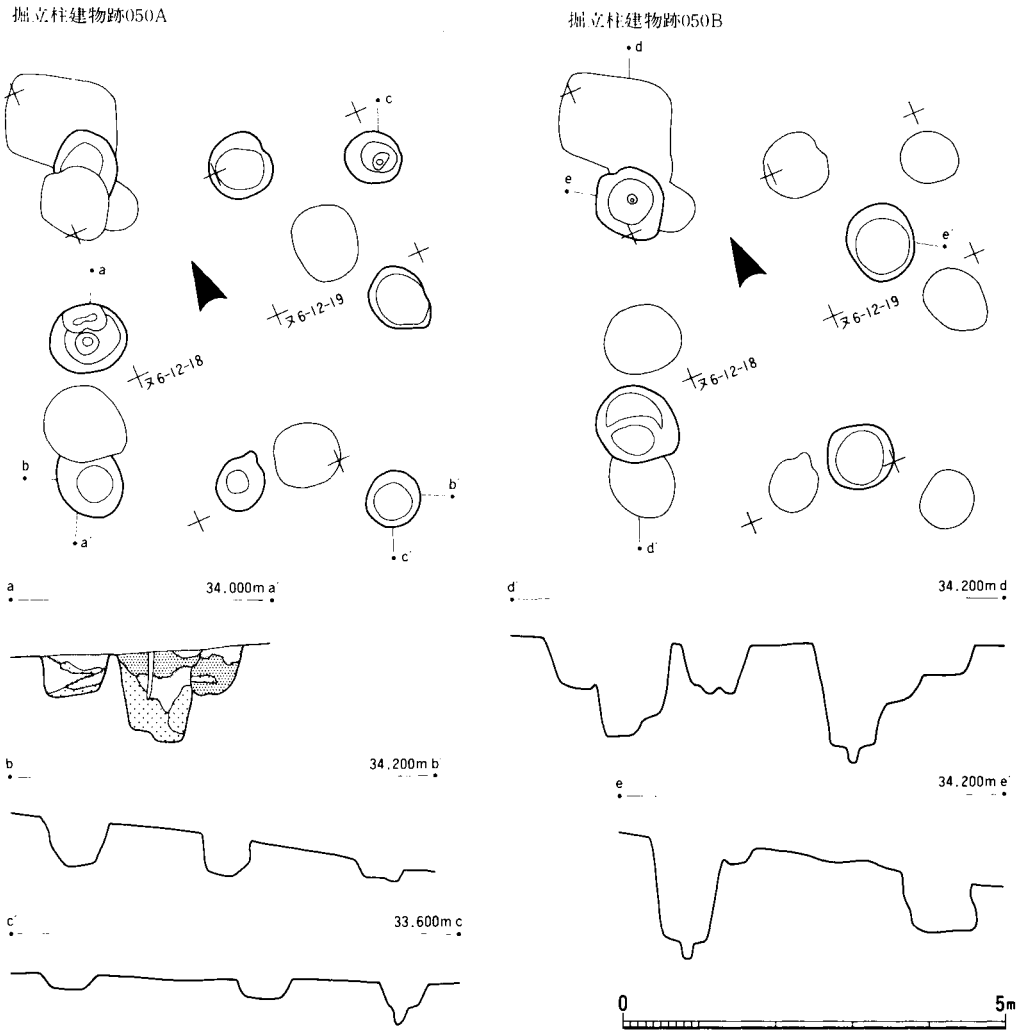
掘立柱建物跡042



掘立柱建物跡043



第69図　掘立柱建物跡042・043



第70図　掘立柱建物跡050A・050B

1間×1間の構造で、桁行3.30m、梁行3.06mで北側の桁行がもっとも長い。掘方は円形で、050Aに比べて深くしっかり掘り込まれている。

掘立柱建物跡051（第71図、図版22）

台地南側の平坦地で、竪穴住居跡039の北西約2mの位置にある（リ6－13グリッド）。標高は35.2m前後である。掘立柱建物跡060と東側で接している。

3間×2間の総柱構造で、桁行5.82m、梁行4.00mである。掘方は円形であるが、径や深さが不揃いである。西側に柵列と思われる小ピット列がみられるが、本掘立柱建物跡とは軸方向が異なり、直接関連する遺構ではないと思われる。

遺物は総数で30点出土しているが、土師器甕と杯が中心で、図示できるものはない。

掘立柱建物跡052（第71図、図版22）

台地のやや南側によった平坦地で、掘立柱建物跡051の北西約４ｍの位置にある（リ６－８・13グリッド）。標高は35.6m前後である。

３間×２間の側柱構造で、桁行5.94m、梁行3.72mである。各掘方の中心を結ぶ線はきれいな長方形になる。掘方は円形で、比較的小さいが、径・深さともに均一に掘り込まれている。柱間寸法も桁行が1.90～2.00m、梁行が1.80～1.90mと揃っている。

遺物は土師器甕の胴部の破片が２点出土しただけで、図示できるものはない。

掘立柱建物跡054（第72図、図版22）

台地のやや東側によった平坦地で、竪穴住居跡019の南西約２ｍの位置にある（リ６－10グリッド）。標高は35.5m前後である。

１間×１間の構造で、桁行2.50m、梁行2.02mである。掘方は円形で、比較的しっかり掘り込まれている。

遺物はまったく出土していない。

掘立柱建物跡056（第72図、図版23）

台地のやや南側によった平坦地で、掘立柱建物跡052の東約４ｍの位置にある（リ６－14グリッド）。標高は35.6m前後である。

３間×２間の側柱構造で、桁行6.05m、梁行4.04mである。側柱の内側にもピットがいくつかみられるが、並び方が不規則で、束柱にはならない。南西側の梁行の掘方の１つは直線上にのらない。

遺物は土師器甕の胴部破片が２点だけで、図示できるものはない。

掘立柱建物跡060（第72図、図版23）

台地のやや南側によった平坦地で、掘立柱建物跡051の東側で梁が交差する位置にある（リ６－14・19グリッド）。標高は35.2m前後である。

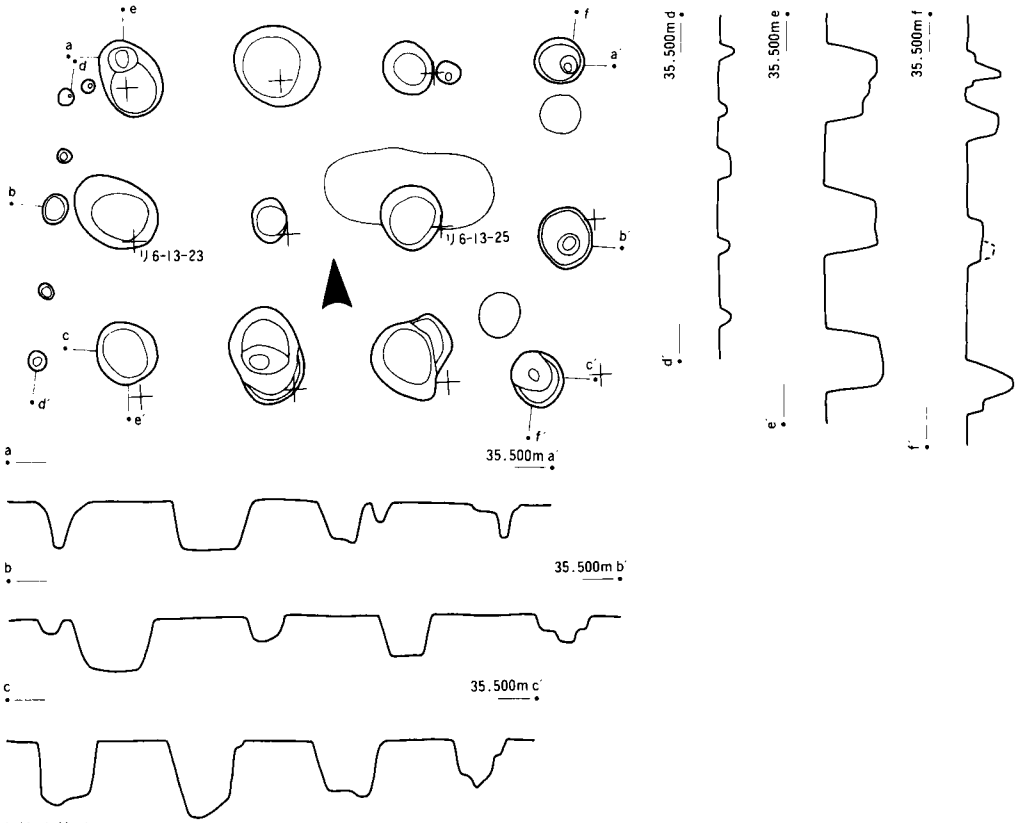
南側の掘方は、竪穴住居跡039があるために、検出できなかったが、３間×２間の側柱構造になるものと思われる。桁行5.32m、梁行4.86mで、あまり差がなく方形に近い。掘方は円形であるが、梁行の掘方は桁行に比べて小さい。

遺物はまったく出土しなかった。

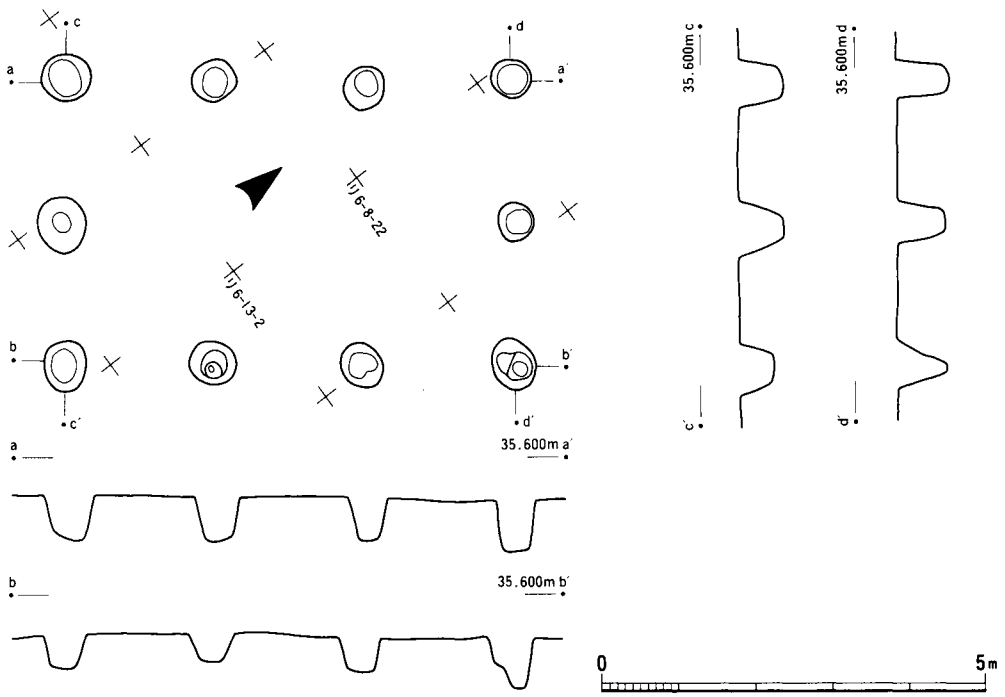
掘立柱建物跡061（第73図、図版23）

台地北東側の縁辺部にあり、竪穴住居跡010と重複している（ヌ５－17グリッド）。標高は34.7

掘立柱建物跡051

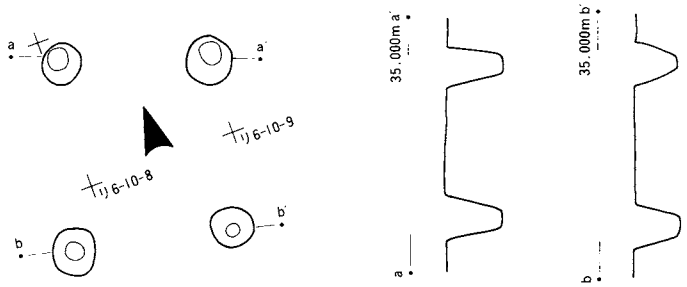


掘立柱建物跡052

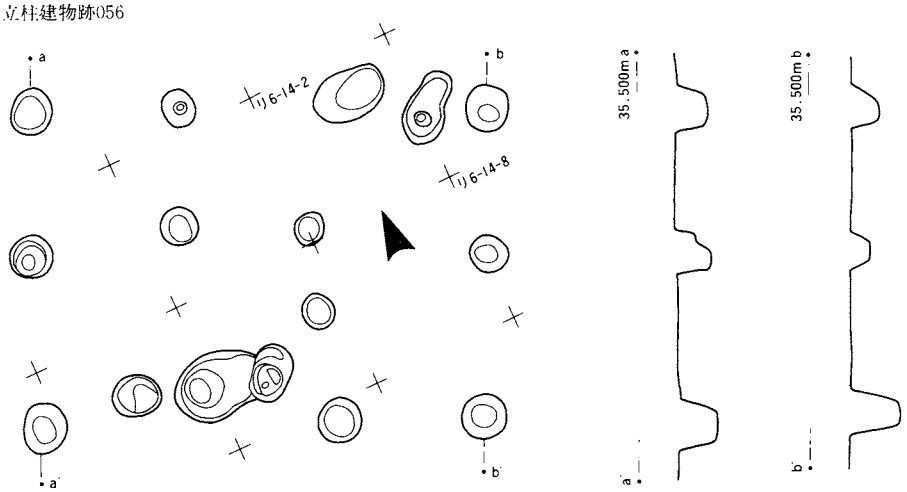


第71図　掘立柱建物跡051・052

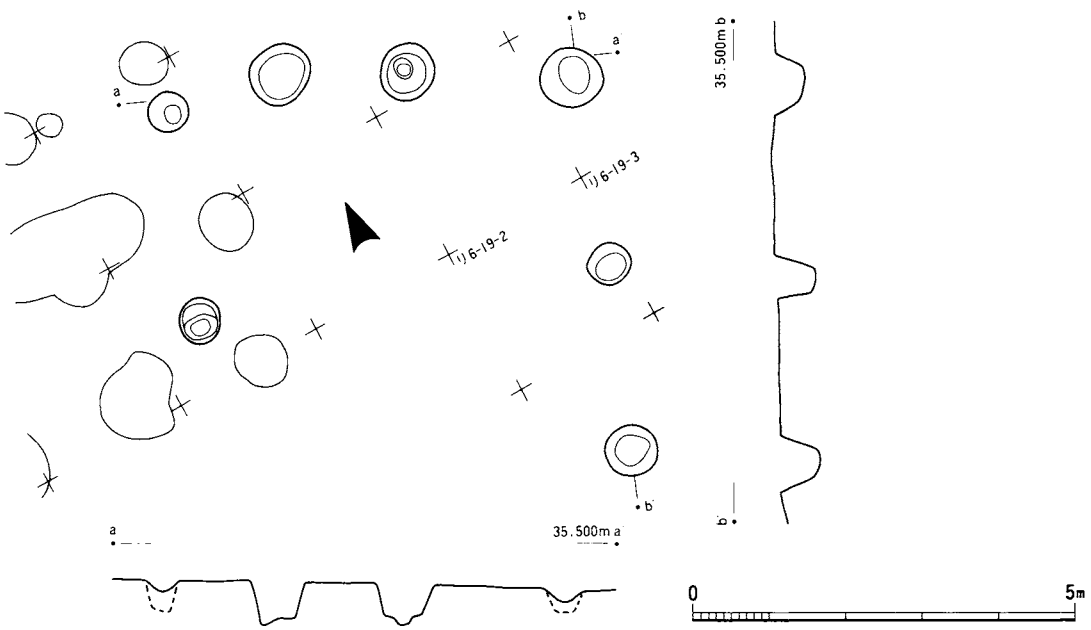
掘立柱建物跡054



掘立柱建物跡056

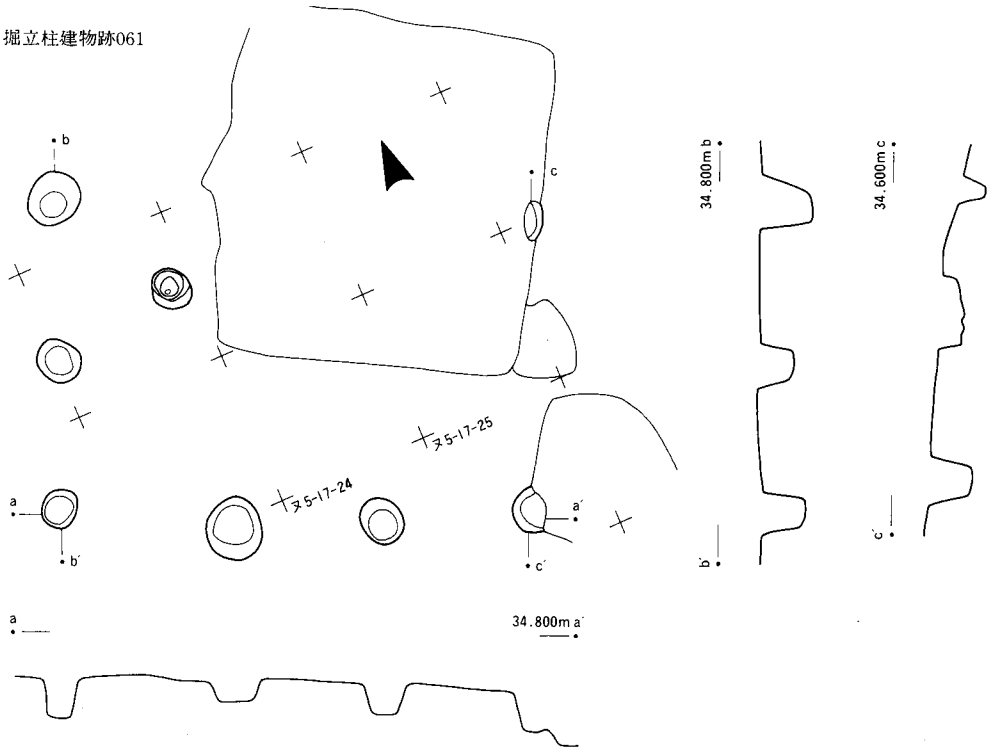


掘立柱建物跡060

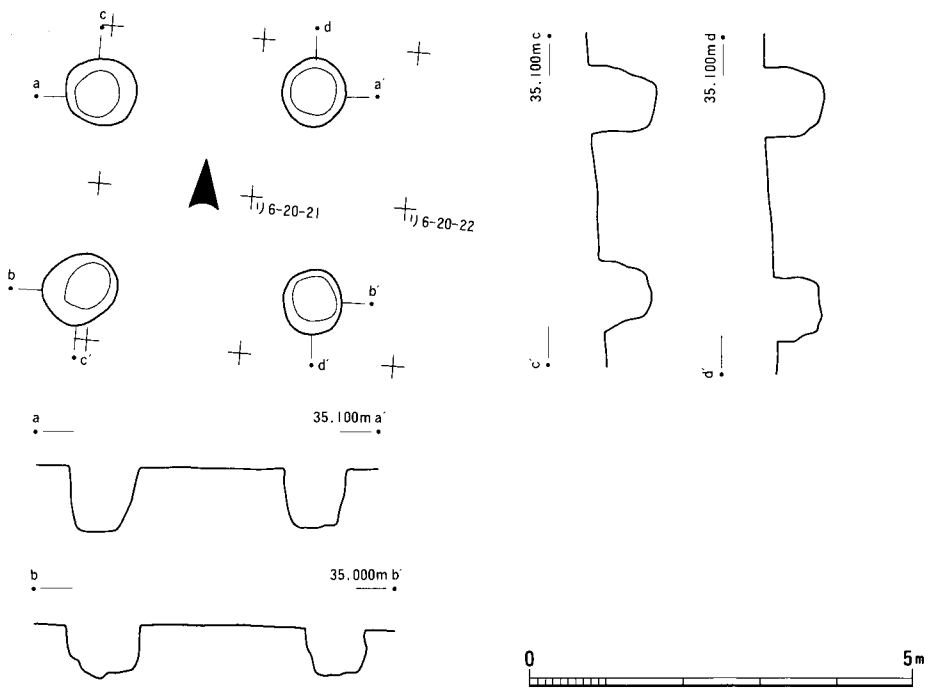


第72図　掘立柱建物跡054・056・060

掘立柱建物跡061



掘立柱建物跡068



第73図　掘立柱建物跡061・068

m前後である。

3間×2間の側柱構造で、桁行6.26m、梁行3.90mである。南東側の梁行の中間の掘方は攪乱のため検出できなかった。また、北東側の桁行の2本の掘方は竪穴住居跡010があるため検出できなかった。おそらく掘方の底面が010の床面とほぼ同じだったのではないかと思われる。掘方は円形であるが、大きさや深さにばらつきがある。

遺物は土師器甕の破片を中心にわずか6点のみの出土で、図示できるものはない。

掘立柱建物跡068（第73図、図版24）

台地南側の縁辺部で、竪穴住居跡038と064の中間の位置にある（リ6－20グリッド）。標高は34.7m前後である。

1間×1間の構造で、桁行2.96m、梁行2.65mのほぼ方形である。掘方は円形で、比較的しっかり掘り込まれている。

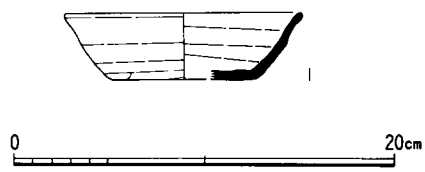
遺物はまったく出土しなかった。

(2)遺物

掘立柱建物跡043（第74図）　［土器観察表202P］

須恵器杯1点が図示できた。図示できなかった資料の総数は37点である。土師器は甕だけで、全体の96%を占める。

1は須恵器杯で、「くすべ焼成」の須恵器である。胎土中に白色の微粒石を含む。底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。



第74図　掘立柱建物跡043出土遺物

3．土坑

(1)遺構

土坑053（第75図）　（遺物135P）

台地南東側の斜面中で、竪穴住居跡057の北西約6mの位置にある（ヌ6－18グリッド）。標高は31.0m前後である。推定径約1.0m、深さ約0.5mである。斜面の下にあたる東側は全体に一段低くなっているが、人為的なものかどうか不明である。また、周辺の小ピットも人為的に掘り込まれたものと考えるにはやや疑問の残るものもある。土坑の内側にあたる範囲に山砂や焼土がみられ、調査時点においてカマドと考えたが、袖にあたるものや火床部および焼土化した部分などがみられないことなどから、住居跡ではなく土坑と判断した。

遺物は図示した1の土師器高台付き杯1点のみで、底面よりやや高い位置から出土している。

土坑067（第75図、図版24・25）　（遺物135P）

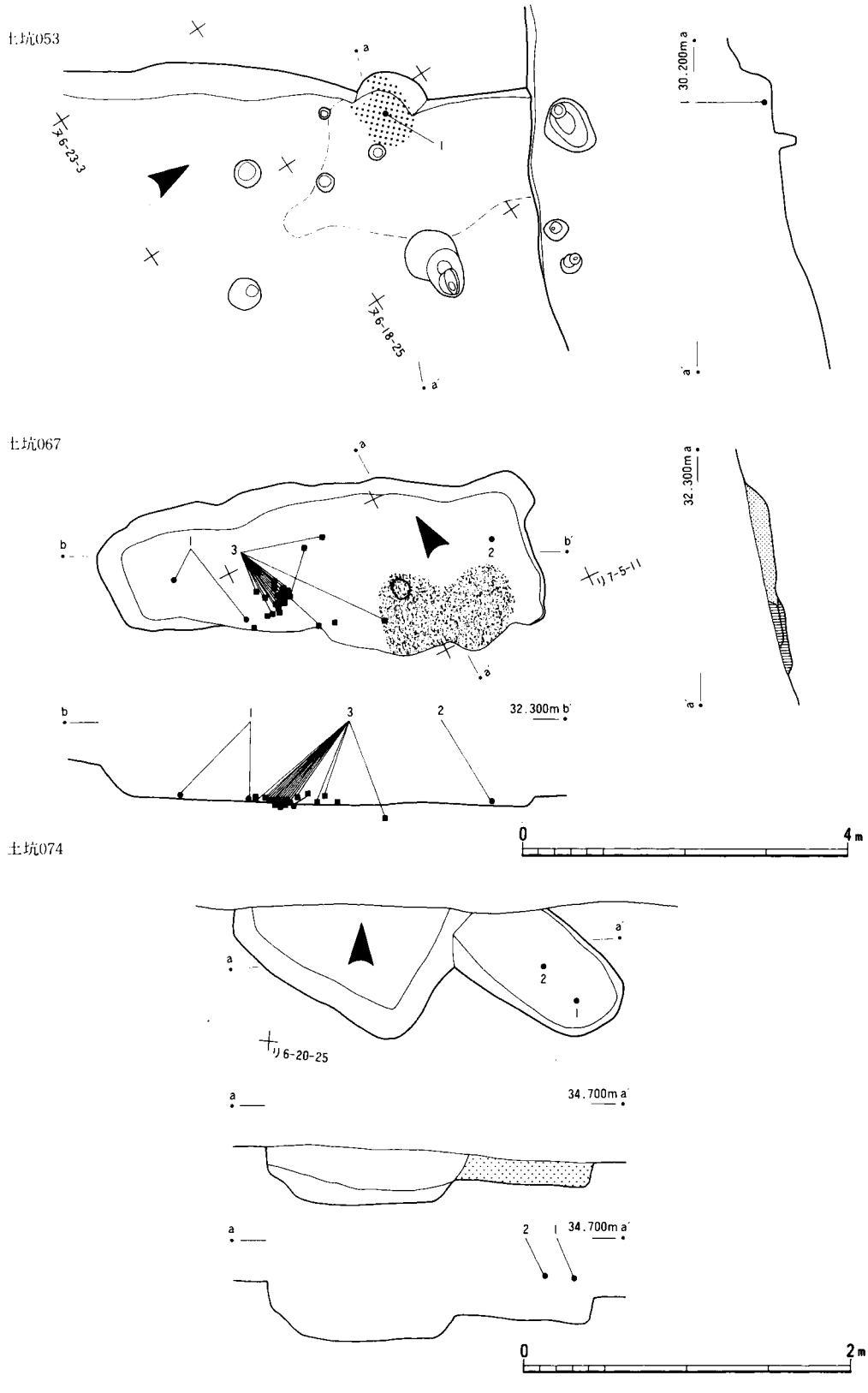
台地南側の斜面中で、掘立柱建物跡068の南約12mの位置にある（リ7－4グリッド）。標高は32.5m前後である。形状は長軸が等高線に平行する長方形で、規模は長軸5.4m、短軸が最大で1.9mである。短軸方向の方位はN－341°－Wである。底面はハードローム層上面まで掘り込まれているが、掘り込みは浅く、壁の立ち上がりもなだらかである。斜面の下にあたる南東壁は一部検出できなかった。東よりの位置に径24cmの炉がみられ、炉から南側にかけて焼土の堆積がみられる。炉の底面は焼土化し硬くなっている。埋土中にも焼土粒がみられる。

遺物は図示したもの以外に土師器甕の破片を中心にして、総数で67点出土している。また、図示した瓦塔のほかにも瓦塔の破片が出土し、いずれも底面に接した位置から出土している。

土坑074（第75図、図版25）　（遺物135P）

台地南側の縁辺部で、竪穴住居跡022の南側で重複する位置にある（リ6－20グリッド）。標高は34.5m前後である。北西側は近世の炭窯によって壊されている。形状は楕円形になるものと思われる。規模は長軸の遺存長0.95m、短軸0.6m、深さ14～20cmである。022との新旧関係は調査時点ではわからなかったが、出土遺物の検討から本土坑の方が新しい。

遺物は図示した2点の土師器杯のほかには土師器甕の小破片が3点出土しているだけである。いずれも底面からかなり高い位置から出土している。



第75図　土坑053・067・074

(2)遺物

土坑053（第76図、図版50）　［土器観察表203Ｐ］

土師器高台付き杯１点が図示できた。本土坑から出土した遺物は図示した１点だけである。

１は土師器高台付き杯で、高台部は接合部分から剝がれている。接合部にはヘラによる沈線が１条めぐる。内面はヘラ磨きが施される。底部外面は回転ヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下半部に回転ヘラ削り後、下半部を中心にヘラ磨きが施される。

土坑067（第76図、図版52）　［土器観察表203Ｐ］

須恵器杯・土師器杯・瓦塔部材各１点が図示できた。図示できなかった資料の総数は67点で、重量比で土師器が約69％を占める。このほかに瓦塔の部材が11点出土している。

１は須恵器杯で、還元炎焼成になりきれない須恵器である。胎土中に白色の微細粒を含む。底部外面は回転ヘラ切り後、手持ちヘラ削り調整が施される。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。

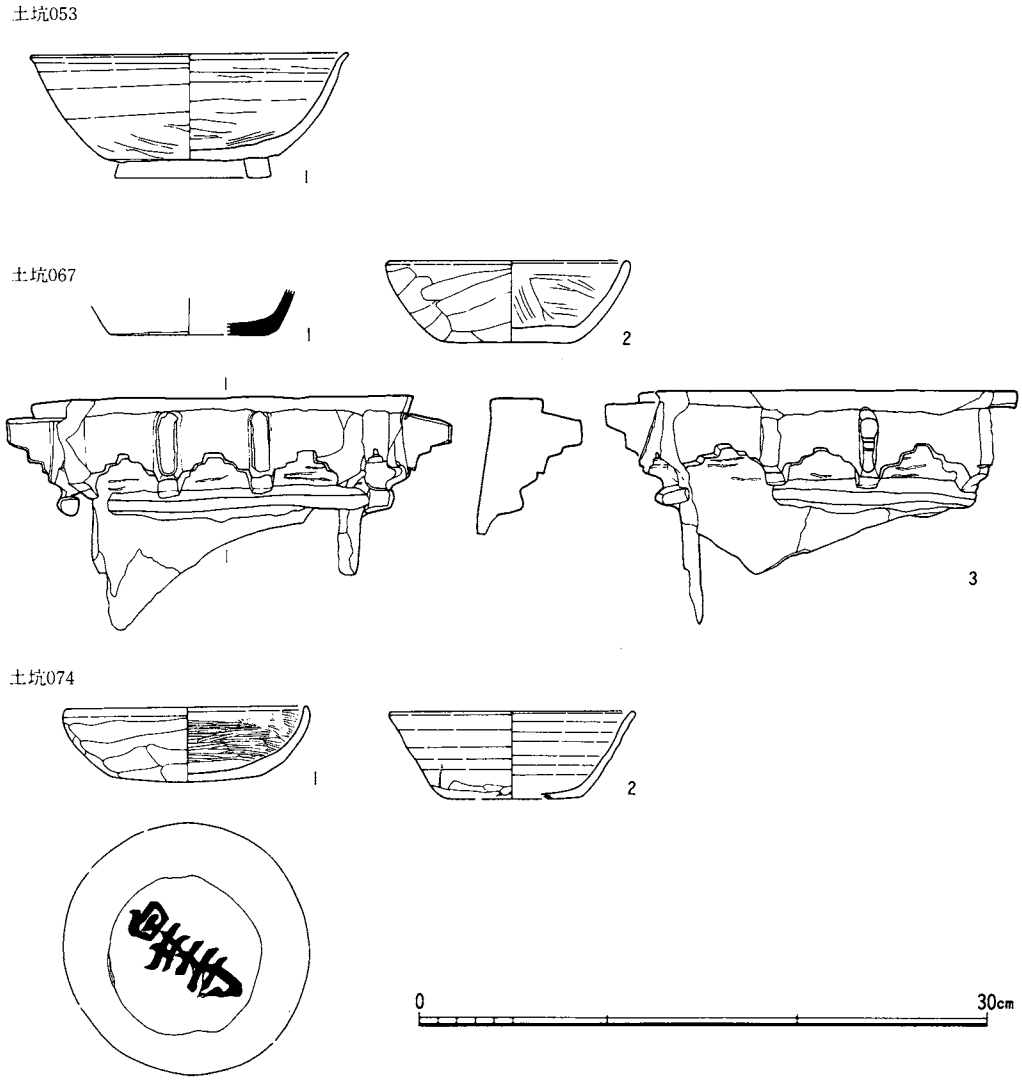
２は非ロクロの土師器杯で、平底である。底部と体部外面はヘラ削り後、粗いヘラ磨きが施される。内面はナデの後、やや粗いヘラ磨きが施される。

３は瓦塔の部材で、須恵質である。図示できなかったほかの部材も須恵質である。軸部で、そのほかの部材も壁体と思われる。壁体の遺存している部分は少ないが、柱は剝がれた痕跡もないことから、当初から表現されていなかったものと思われる。台輪は幅10.0㎜前後、厚さ10.0㎜の断面台形の突帯を巡らせて表現している。その上に大斗が表現され、大斗の数から方３間とわかる。斗栱は壁付き三斗と持ち送りからなる。壁付き三斗は横36.0㎜、縦32.0㎜の長方形の板状の粘土に2.0㎜前後の刻みを２段入れ、大斗と大斗の間の壁体に貼り付けて表現している。持ち送りは大斗の上に位置し、三斗と同様に、板状の粘土に刻みを３段入れて表現している。隅のものは45度の角度で付けられている。孔の内径は130.0～135.0㎜である。柱がなく、開口部を想定させるような部材がないことなどから、初層以外の軸部であると思われる。

土坑074（第76図、図版53）　［土器観察表204Ｐ］

土師器杯２点が図示できた。図示できなかった資料の総数はわずかに３点だけで、土師器甕だけである。

１は非ロクロの土師器杯で、やや丸みをもつが平底である。底部外面に「白井寺」と墨書される。底部と体部外面はヘラ削りで、内面はヘラ磨きが施されるが、器面はやや荒れる。口縁部内外面に油煙状の付着物がみられる。２は体部外面にロクロ痕を残す。底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。



第76図　土坑053・067・074出土遺物

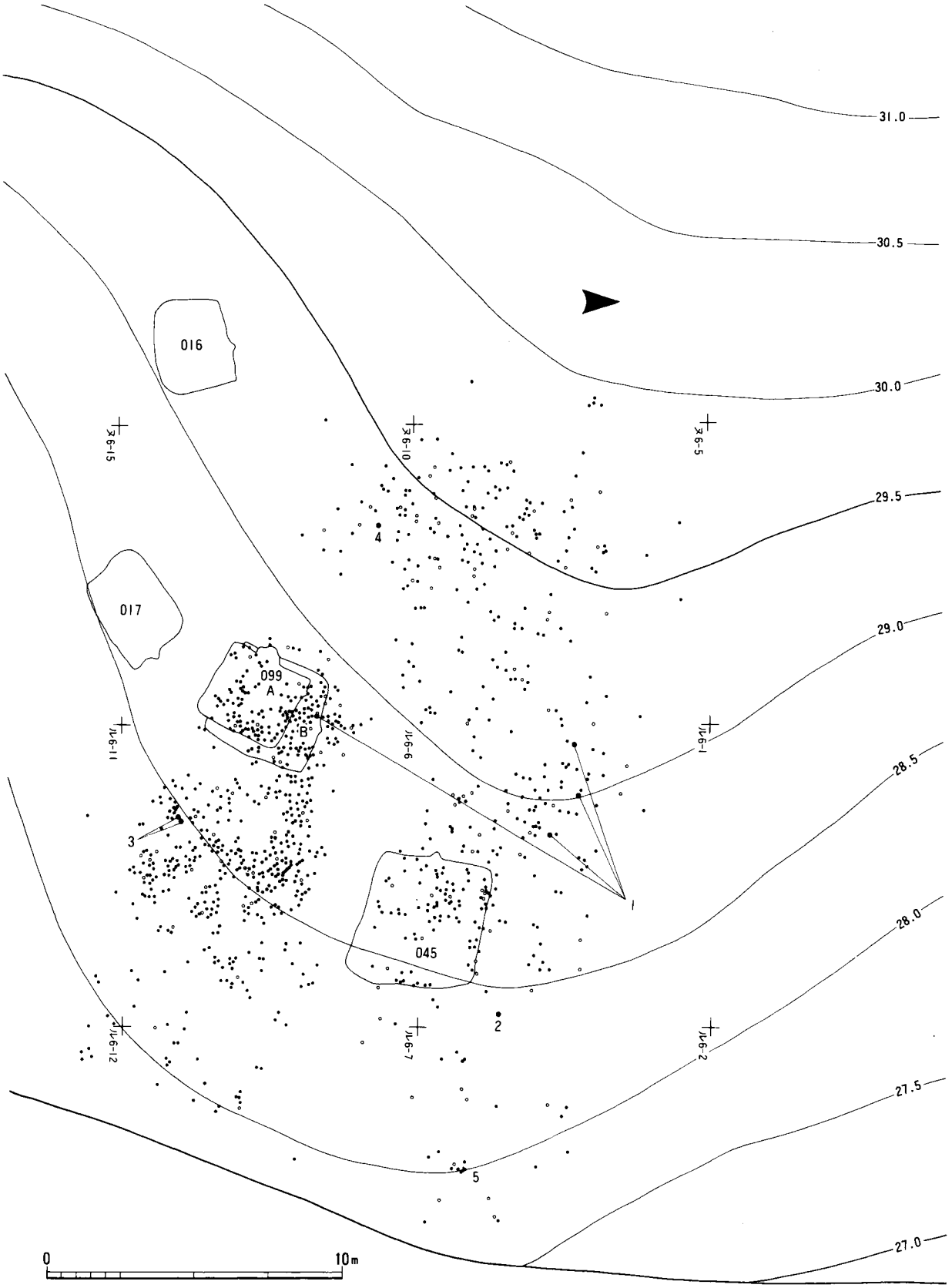
4．土器集中地点

(1)遺構

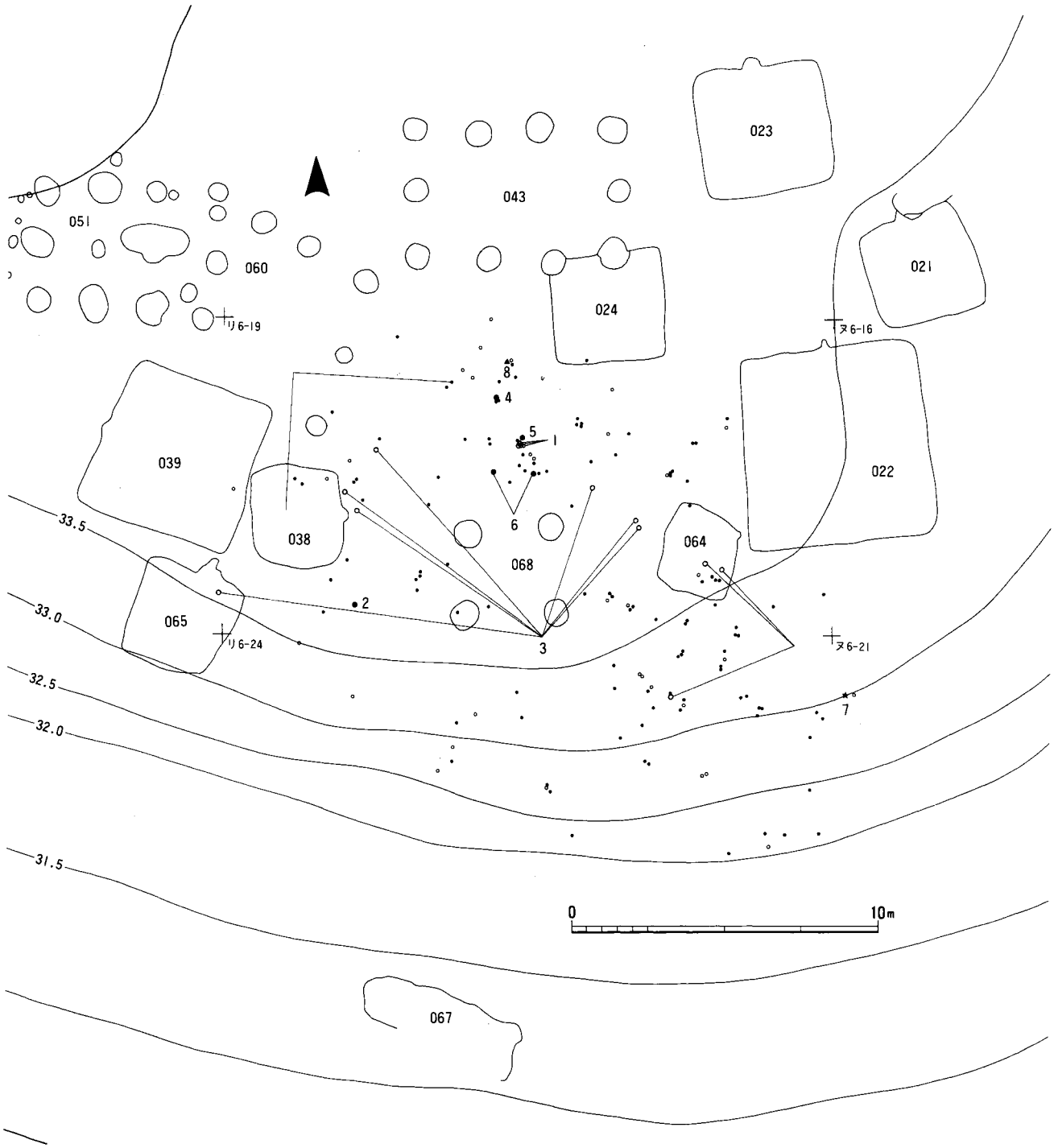
土器集中地点001（第77図）

台地東側の斜面中で、東西約29m、南北約20m、面積約466.35㎡の範囲である（ヌ６－５・10、ル６－１・２・６・７グリッド）。標高は26.5～31.0mである。土器を投棄した場所と考えられる。竪穴住居跡045と099A・Bはこの範囲内にはいり、099A・Bの周辺は遺物が最も集中しているところである。

遺物は図示したもののほかに総数で1,358点出土しているが、土師器甕の胴部破片が大部分である。



第77図　土器集中地点001



第78図　土器集中地点035

土器集中地点035（第78図）

台地南側の平坦地から縁辺部にかけての東西約22m、南北約18m、面積約287.20m²の範囲である（リ6－19・20・24・25グリッド）。標高は33.5～35.2mである。001と同様に土器を投棄した場所と考えられる。この周辺は竪穴住居跡などが集中しているが、掘立柱建物跡068がほぼ中心の位置にあり、竪穴住居跡038と064がこの範囲にはいるが、比較的住居跡のない場所である。

遺物は図示したもののほかには総数で165点出土しているが、001に比べてかなり少ない。038と064の床面に近いところから出土した遺物との接合がみられる。

(2)遺物

土器集中地点001（第79図、図版55）　［土器観察表196P］

須恵器甕・須恵器甑各1点、土師器甕2点、鉄鏃1点が図示できた。図示できなかった資料の総数は1,358点で、重量比で土師器が約88%を占める。土師器甕では「常総型」の甕がそのほかの甕をはるかに上回る割合で出土している。須恵器甕は「くすべ焼成」の須恵器が多くみられる。

1は須恵器甕で、「くすべ焼成」の須恵器である。胴部外面は縦方向の叩きで、内面は指頭によるオサエ後、ナデが施される。

2は須恵器甑で、「くすべ焼成」の須恵器である。小さな三角錐形の把手が付く。胴部外面は縦方向の叩きが施される。

3・4は土師器甕である。3は底部と胴部外面はヘラ削りが、内面は比較的丁寧なナデが施される。4は胴部外面に粗いヘラ削り痕が残る。また、内面には指頭によるナデ痕が残る。底部外面に木葉痕がみられる。

5は鉄鏃で、無茎鏃である。遺存長62.0mm、遺存幅46.0mm、重さ20.40gを測る。

土器集中地点035（第79図、図版44）　［土器観察表201P］

須恵器杯・須恵器高台付き杯・須恵器長頸壺各1点、土師器杯3点、砥石・鉄釘各1点が図示できた。図示できなかった資料の総数は165点で、重量比で土師器が64.5%を占める。全体でも土師器杯の割合が高い。

1は須恵器杯である。胎土中に白色の微粒石を比較的多く含む。底部外面は回転ヘラ切り後、手持ちヘラ削り調整が施される。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。

2は須恵器高台付き杯で、常陸産と思われる。胎土中に含まれる雲母粒や石英粒は比較的少ない。底部外面は回転ヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。

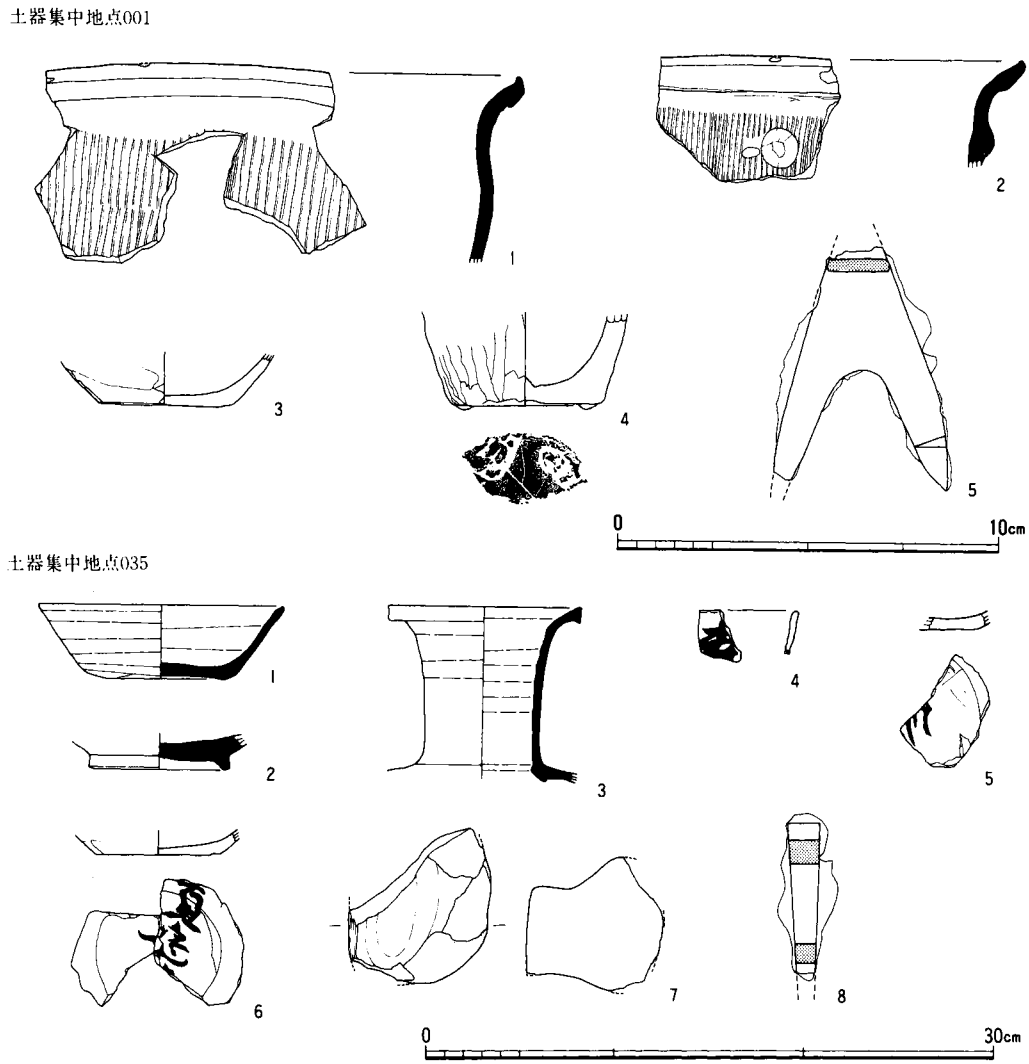
3は須恵器長頸壺である。焼成はよく、硬く焼き締まっている。部分的に緑がかった釉がか

かる。

4～6は土師器杯の小破片で、墨書されるものである。4は口縁部外面に、5は底部外面に墨書されるが、判読できない。5底部外面は回転糸切り後、周縁部に回転ヘラ削り調整が施される。体部外面は下端部に回転ヘラ削り調整が施される。6は体部外面から底部外面にかけて複数の文字が墨書されるが、判読できない。底部外面は回転糸切り後、手持ちヘラ削り調整が施される。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。

7は砥石で、欠損部分が多く、一部に自然面が残る。石材は軟質の砂岩である。

8は鉄釘で、頭部が遺存する。遺存長38.5㎜、幅8.5㎜、厚さ7.0㎜、重さ8.40gを測る。



第79図　土器集中地点001・035出土遺物

第3節　そのほかの遺構

そのほかの遺構としては、土坑4基と1か所の土坑群があり、これらはいずれも時期を明らかにできるような出土遺物がほとんどなく、その性格も不明な遺構である。

土坑046（第80図）

台地西側の平坦地で、竪穴住居跡029の西約3mの位置にある（リ5－21グリッド）。標高は35.6m前後である。長軸の方向はN－0°－Wである。形状は楕円形で、規模は長軸3.22m、短軸2.22mである。遺構の掘り込みは浅く、4～9cmである。中央よりやや東側によった位置に長径52cm、短径42cmのピットがあり、埋土中に焼土がみられたが、底面などに焼土化したところはまったくみられない。壁に沿って小ピットがみられるが、いずれも規模が小さく柱穴と考えるには疑問が残る。一見して形状的には縄文時代の竪穴住居跡のように思われるが、積極的な根拠が見当たらないので、便宜的に土坑として取り扱った。

遺物は土師器甕と須恵器杯の小破片15点と縄文土器片1点が出土している。

土坑058（第80図）

台地東側の縁辺部で、竪穴住居跡013の西約2mの位置にある（ヌ5－11グリッド）。標高は35.1m前後である。長軸の方向はN－308°－Wである。形状は不整形な楕円形で、規模は長軸2.30m、短軸1.28mである。埋土はローム粒を含む黒褐色土が堆積している。

遺物は土師器甕の胴部破片2点と縄文土器片4点が出土している。

土坑059（第80図）

台地東側の縁辺部で、土坑058の北西約6mの位置にある（ヌ5－16グリッド）。標高は35.1m前後である。長軸の方向はN－318°－Wである。形状は長方形で、規模は長軸1.36m、短軸1.12mである。北西側は攪乱を受けている。掘り込みは浅く30cm前後である。埋土はローム粒を含む黒褐色土が堆積している。

遺物は土師器甕の胴部破片2点と、縄文土器片10点が出土している。

土坑066（第80図）

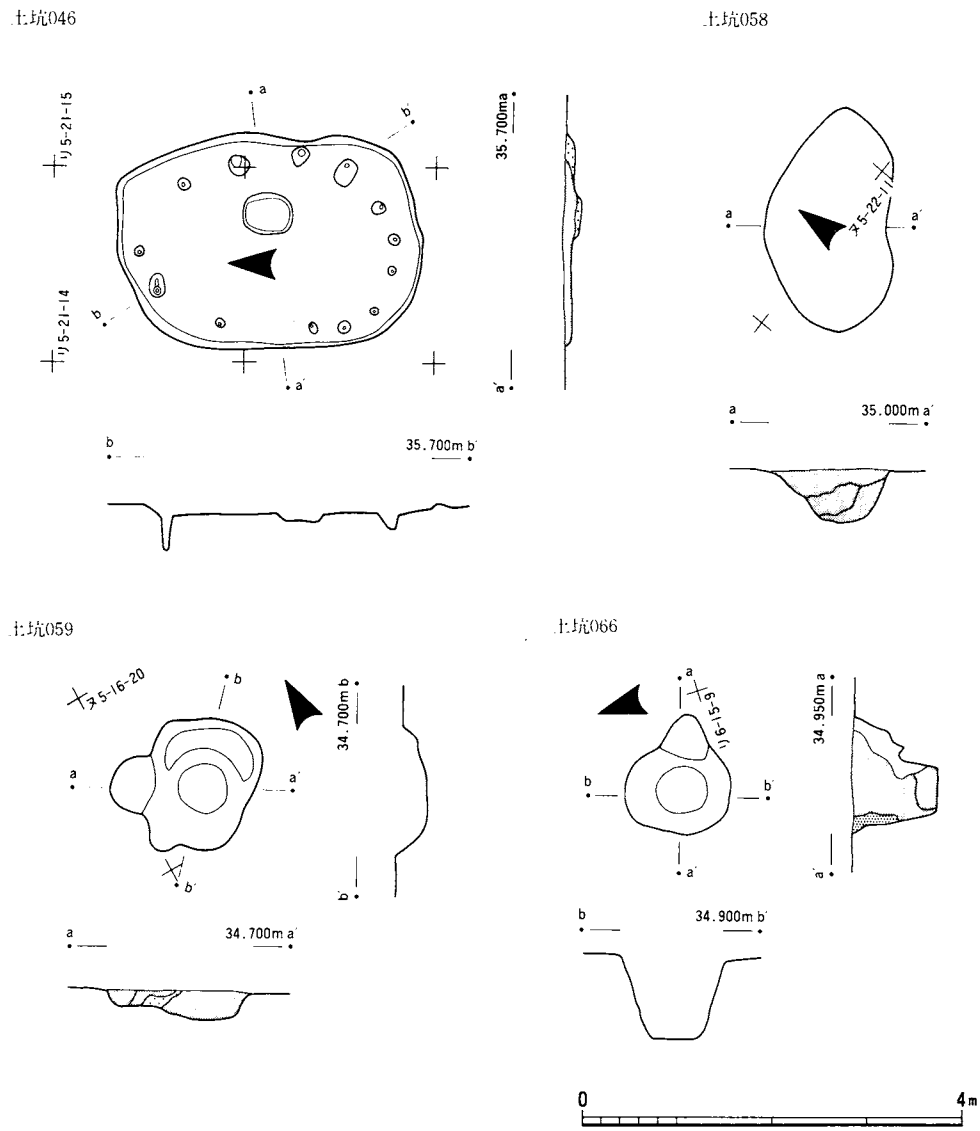
台地南東側の平坦地で、竪穴住居跡023の北東約2mの位置にある（リ6－19グリッド）。標高は35.1m前後である。東側は攪乱を受けている。長軸の方向はN－342°－Wである。形状は円形で、規模は長径1.10m、短径0.94mである。深さは60cm前後である。埋土はローム粒を含む黒褐色土がおもに堆積している。

遺物は土師器甕の胴部破片１点と縄文土器片10点が出土している。

土坑群047

台地中央の平坦地で、広い範囲で検出した土坑を一括したものである（リ５－17・18・22・23、リ６－２・３グリッド）。標高は35.7m前後である。総数で36基を数える。大きくは北側の15基の一群と南側の21基の一群に分けることはできる。しかし、いずれも径が40～80cm、深さが10～60cmで、規模がまちまちで、規則的な並び方をしていない。

遺物は総数で149点出土しているが、ほとんどが土師器でわずかに須恵器がみられる程度である。



第80図　土坑046・058・059・066

第4節　遺構外出土の遺物

本節では、グリッドや確認トレンチといった遺構以外において検出した遺物を中心に、表採品（表土中からの出土品も含む）や、遺構から出土したものの明らかに時期が異なる混入品と判断したものを含めて取り扱う。これらの中には、縄文時代から近世に及ぶ長い時代の、様々な遺物が含まれているため、各時代別にまとめることにする。

1．縄文時代

概　　要

今回の調査で検出した遺構のうち縄文時代の所産と判断できたものは竪穴住居跡、土坑各1基のみであったが、表土中や確認トレンチ内、歴史時代の竪穴住居跡の埋土中などから草創期と前期を除く各期の縄文土器片2,333点、重量にして24.34kgが発見された。出土量は決して多いとはいえないが、様々な時期にわたる縄文土器が出土するといった佐倉第三工業団地内の他の縄文時代遺跡と同じ特徴を備えている。

縄文時代の所産と思われる遺物としては、土器のほかに土製品や石器が少量出土している。

縄文土器（第81～88図、図版59～62）

総数2,333点のうち早期撚糸文系土器が1,007点と最も多く、ついで加曽利B式が509点、早期沈線文系土器が491点となっている。その他の諸型式については総数30点以下とわずかな出土をみるにすぎない。早期撚糸文系土器を最も多く出土するという特徴は、事業地内の多くの縄文時代遺跡で共通してみられる。

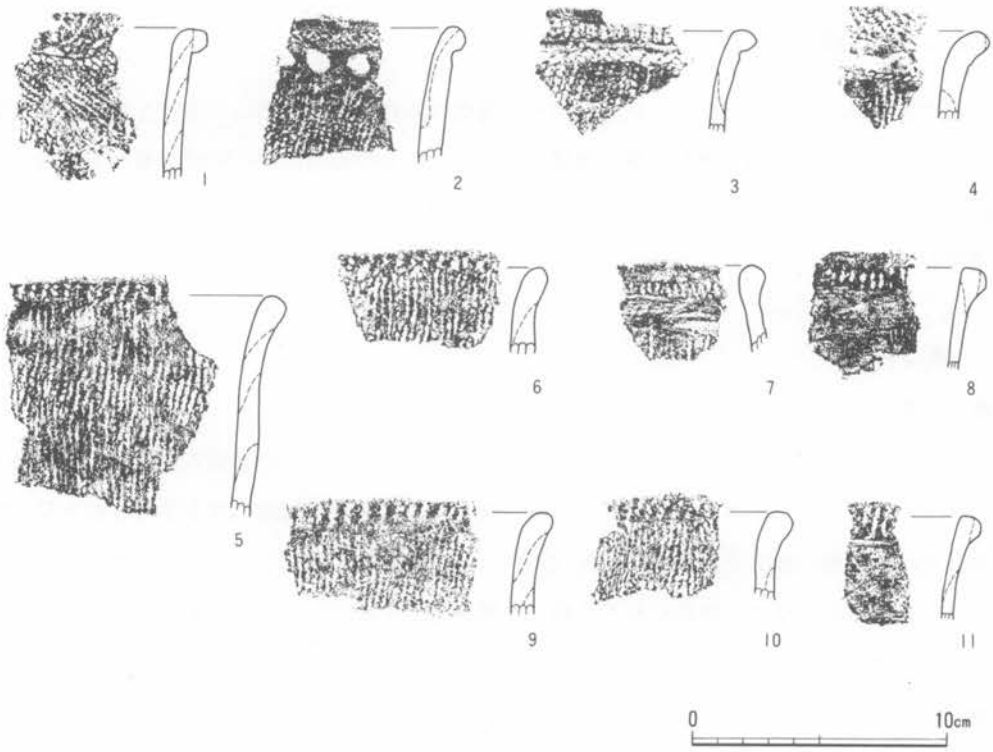
ここでは、これらの縄文土器を便宜的に下記の6群に大別し、既存型式名や諸要素の分析結果から各々類・種に細分して報告することにする。

第Ⅰ群　早期初頭　撚糸文系土器様式
第Ⅱ群　早期　沈線文系及び条痕文系土器様式
第Ⅲ群　中期の諸型式
第Ⅳ群　後期の諸型式
第Ⅴ群　晩期の諸型式
第Ⅵ群　時期不明の底部

第Ⅰ群土器（第81～82図、図版59）

第1類（1）

口縁部、頸部、胴部の3文様帯構成をとる井草Ⅰ式土器である。この1点を認めたのみで、



第81図　遺構外出土遺物(縄文土器１)

他には出土していない。

口唇部が著しく肥厚しており、その外面はＬＲ単節縄文の横位回転施文による斜縄文となる。口唇上面には文様は施されていない。口縁部と頸部の境界、すなわち口唇の肥厚によってできた屈曲部にはＲＬ単節縄文原体が押捺され、以下の頸部文様帯は同一原体の横回転施文による斜縄文、胴部文様帯もやはり同一原体による縦走縄文となっている。

第２類（２～26）

井草II式及び大丸式を一括した。両型式の間には口縁部形態等のいくつかの属性について微妙な差異が指摘されているが、出土点数が余り多くないため、今回は縄文施文のものを井草II式、撚糸施文のものを大丸式として一括して捉え、口縁部文様帯の施文手法から４種に分けて報告することにする。なお、両者の存在比をみると、井草II式の方が圧倒的多数を占めており、大丸式は客体的に少数が存在しているにすぎない。

A種　口縁直下に指頭圧痕があるものである。深く明瞭に行われ、文様効果を有するものは２のみであるが、５や16のように胴部文様施文以前に、おそらく整形作業の一環として指頭圧痕をつけているものもみられる。

B種　口縁直下に原体圧痕が施されるものを当種とする。３・４の２片が出土している。この手法は井草Ｉ～II式に散見されるものであるが、頸部文様帯が消失していることから井草II

式と判断した。

3は口唇部、圧痕、胴部ともにＲＬ単節縄文であるが、胴部の原体は前の２者とは別のものを使用している。

4は口唇上面にＬＲ単節縄文、口縁直下はＲ撚糸文の原体による絡縄体圧痕、胴部はＬ撚糸文と３種類の原体を使い分けて施文している。縄文と撚糸文を併用した、井草II式と大丸式の折衷形と考えられる。

Ｃ種　口唇部に、縄文や撚糸文が縦走しているもの、または撚糸文の原体が縦位に連続押捺されるものを一括する。５～11の７点を当種とするが、Ｂ種とした３も原体圧痕の有無を除けば当種に類似する手法をとっている。

５・６・９は同一個体である。口唇部にはＲ撚糸文が、胴部にはＲＬ単節縄文が施されている。口唇部の撚糸文は回転施文によるものか押捺施文によるものかはっきりしないが、かなり深く、また施文単位の規則性も見い出せないことから、押捺施文の可能性が強いと思われる。10もこれらと全く同種の原体を使用しておりよく似た特徴を備えているが、別の個体である。

７は口唇部、胴部ともにＲ無節縄文の同一原体による縦走施文である。当個体の口唇部文様は明らかに回転施文である。

８と11は同一個体である。口唇部にはＬ撚糸文が縦位に施されているが、回転施文か押捺施文かの区別はつかない。頸部は幅広く無文となるようで、遺存部分からは胴部文様を知ることはできない。胴部が無文となる可能性も否定できないが、頸部に無文帯を持つと判断し、やや古い様相を持つものとして捉えるのが妥当であろう。

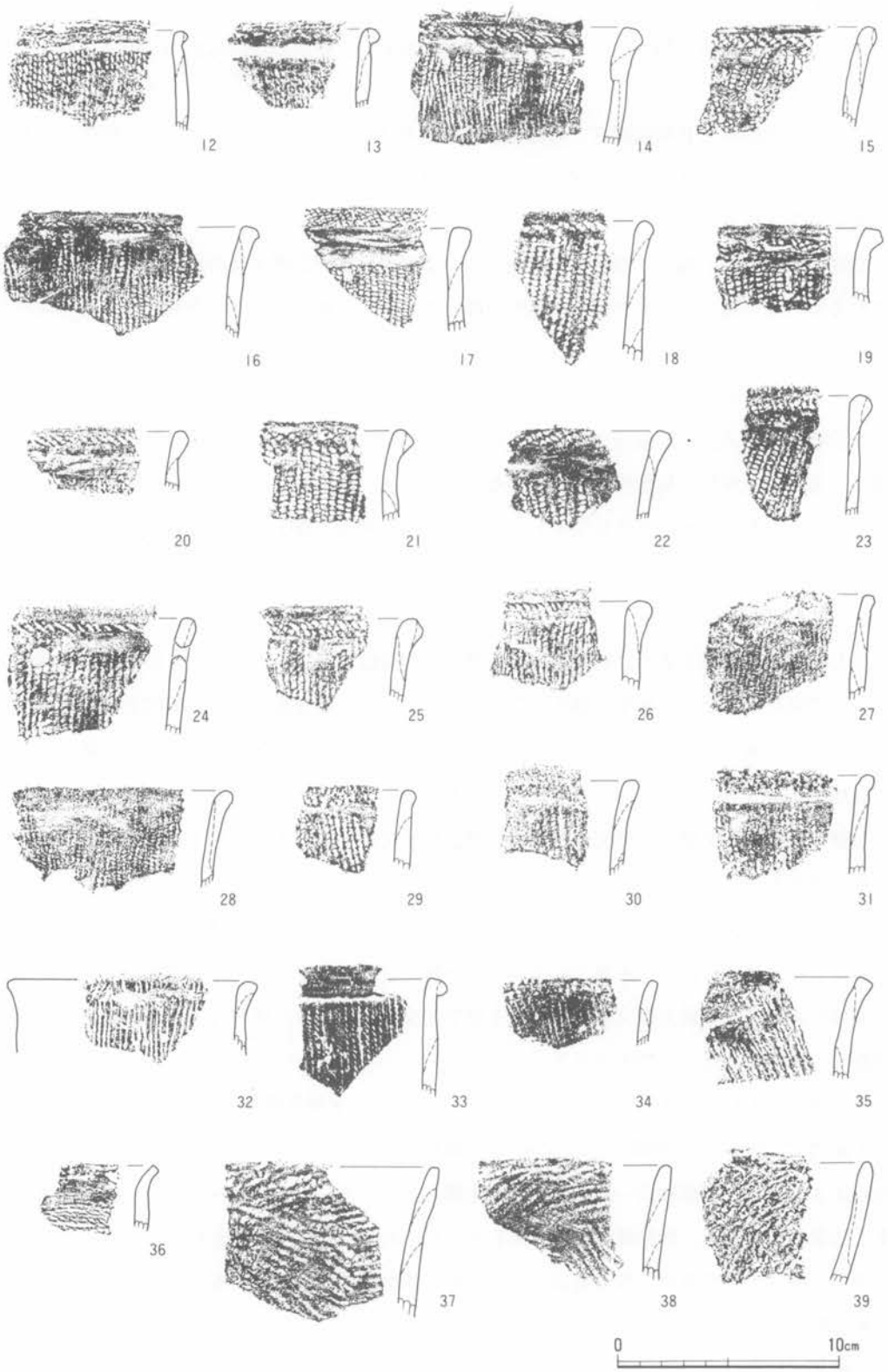
Ｄ種　口唇部の文様が、縄文や撚糸文の横回転施文によるものを一括する。12～26の15点が当種に含まれる。

12と13は同一個体である。肥厚した口縁部の口唇上面にＲ撚糸文を横回転施文し、胴部は同一原体により縦位Ｒ撚糸文を施文している。当種に含まれるもののうち、撚糸施文のものはこの個体のみである。縄文施文が多く、撚糸施文が少ないといった傾向は、周辺地域の縄文時代遺跡で一般的にみられる特徴である。

縄文施文のものの原体にはＲＬ単節縄文（14～21）、ＬＲ単節縄文（22）、直前段反撚りのＲ$\frac{L}{R}$単節縄文（23）、Ｒ無節縄文（24～26）の４種類があるが、いずれの場合も口唇部は横回転施文による斜縄文、胴部は同一原体による縦走縄文となっている。数でみると、一般的な単節縄文ではＲＬがＬＲを、無節縄文ではＲがＬをそれぞれ圧倒している。また、17のように口縁部外面を丁寧にナデて胴部文様を磨消し、無文帯を作出する例も存在する。

第３類（27～35）

口縁部文様帯が消失し、器面全体に縦走する縄文や撚糸文が施されるものを一括する。従来の夏島式である。縄文施文のものが撚糸施文のものよりも多いが、存在比の差は前段階よりか



第82図　遺構外出土遺物(縄文土器２)

なり小さくなる。また、縄文原体に様々なバラエティがみられるようになる。すなわち27のような0段多条の単節縄文、35のような撚戻しによる単節縄文（ＬＬやＲＲ）などが施文されるようになる。

撚糸施文のものについては、前段階で圧倒的多数を占めたＲ撚糸文が半数以上を占めるが、存在比の差は小さくなる。32のように口径11.3cmと小形のものや、33のように胴部撚糸文を施文した後に粘土紐を貼り付けることによって口縁を肥厚させるものなど、特殊な例もみられる。

第4類（36～39）

今回の調査で出土した撚糸文系土器の中では新しい様相を示すものであるが、細別型式を決定しかねるものを一括して当類とした。37・38は同一個体の口縁部破片で、Ｌ無節縄文により不規則な羽状縄文を描出している。口縁外面に原体圧痕があれば花輪台式として扱いたいところである。

36は外反する口縁直下に細密なＬ撚糸文を横位に施している。回転施文か多条にわたる押捺施文かはわからない。小破片であり全容が把握できないため、神奈川県大浦山遺跡出土資料との類似を指摘するにとどめておく。

第Ⅱ群土器（第83図、図版60）

撚糸文系土器に後続する縄文早期の諸型式、すなわち沈線文系土器と条痕文系土器を一括して本群とする。

第1類（40～51）

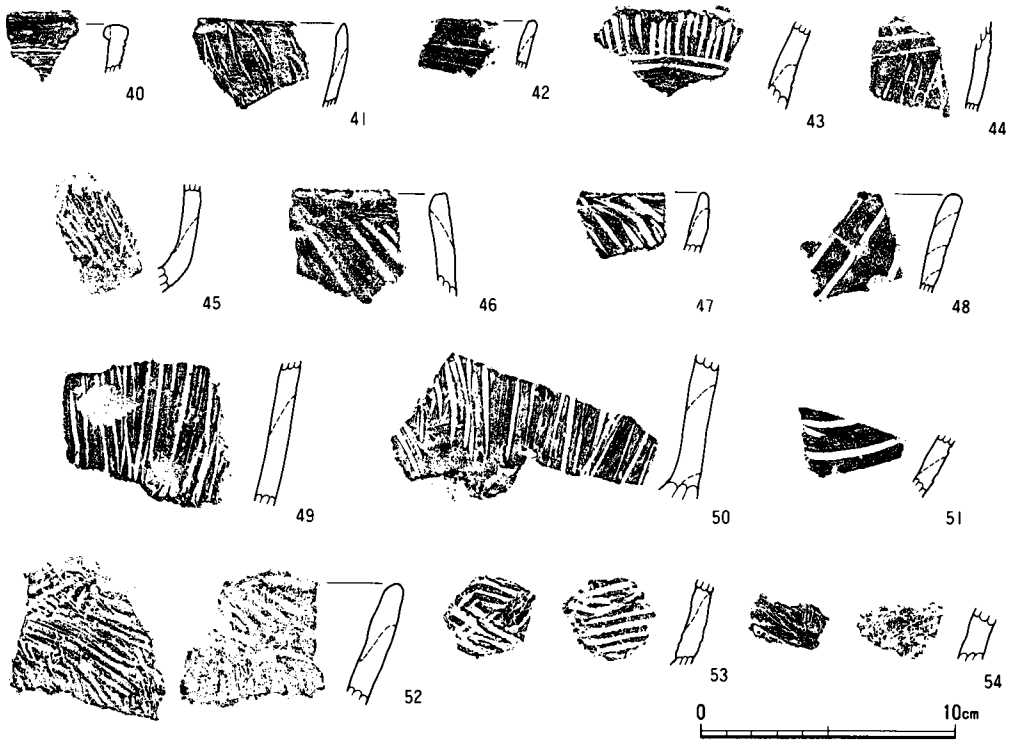
沈線文系土器を一括して本類とする。総点数は487点と比較的まとまって出土しているが、そのほとんどは胴部の小破片であり、細別形式を判別できたものはわずかである。

40～45は細沈線による文様をもつもので、三戸式土器と思われるものである。43や44のようなモチーフは三戸式土器によくみられるものである。

46・47は口縁部破片で、太沈線によって右下がり斜位の文様が描かれるものである。49・50は底部付近の破片で、同一個体である。文様は縦位の条線状の沈線がみられるのみで、50から判断すると、底部は砲弾形の尖底になるものと思われる。48と51も同一個体であり、断面方形の沈線により口縁部を中心に幾何学文様が描かれるものである。これら6点については田戸上層式または田戸下層式に属するものと思われるが、細別できる決定的要素はない。

第2類（52～54）

条痕文系土器群を一括する。今回の調査で出土したのはわずかに5点を数えるのみである。52・53は表裏貝殻条痕文、54はわずかな調整痕のみが残る無文の土器で文様は観察することができない。いずれも胎土中には植物繊維を混入している。細別型式を決定する要素はないが、52は茅山上層式ではないかと思われる。



第83図　遺構外出土遺物(縄文土器３)

第Ⅲ群土器（第84図、図版60）

基本的には中期に属する諸形式を一括して本群とするが、一部に前期最終末まで遡る可能性のあるものも含む。

第１類（55～61）

中期初頭の五領ケ台式を当類とする。出土点数は25点とわずかであるが、既存型式に基づいて３種に細分して提示する。

A種　結節文を伴う縄文施文の土器を当種とする。55はＲＬ単節縄文に、56はＬ無節縄文に縦位の結節文が伴っている。これらの土器は前期最終末に出現するものであるが、縦位に施文されていることから中期初頭の所産である可能性が強い。また中期初頭の土器群の中でも、その帰属型式としては、折り返し口縁を持ち器面全体に結節文を伴う縄文が施される旧来下小野式と呼称されるものと、五領ケ台Ⅰ式の胴部文様にみられるものの２者が考えられるが、この２片については後者である可能性が強い。

B種　五領ケ台Ⅰ式を一括する。57は鋸歯状の小波状の口縁が、全体では大きな波状を呈するものと思われ、口縁部文様帯は鋸歯状の口縁と密接に関連した三角形陰刻文とそれに付随する平行沈線によって構成される。当破片の左端の波頂部付近では文様構成が多少変化している様子を看取することができる。胴部はＲＬ単節縄文を地文に２条の平行結節沈線によるＹ字状

懸垂文が施され、Ｙ字内の空白部には三角形陰刻文が充塡されている。58は57と同一個体の胴部破片であり、破片左上方には57と同様のＹ字状懸垂文の下端をわずかに確認することができる。また、両サイドに沈線や結節沈線が付随する、断面半円形の隆帯による懸垂文も配置されている。この隆帯は、上面にも地文と同一のＲＬ単節縄文が施されている。

Ｃ種　五領ケ台Ⅱ式に含まれるもので、３点を図示した。59と60は確実に、61もおそらく同一個体であると思われる。59・60では口縁部文様帯から垂下する平行沈線による懸垂文がみられ、その両サイドには結節沈線状の連続刺突が付随している。61では横位の交互刺突による連続「コ」の字状文がみられ、破片の下端には胴部文様帯最上部の結節沈線状の連続刺突文をわずかに確認することができる。

第２類（62～72）

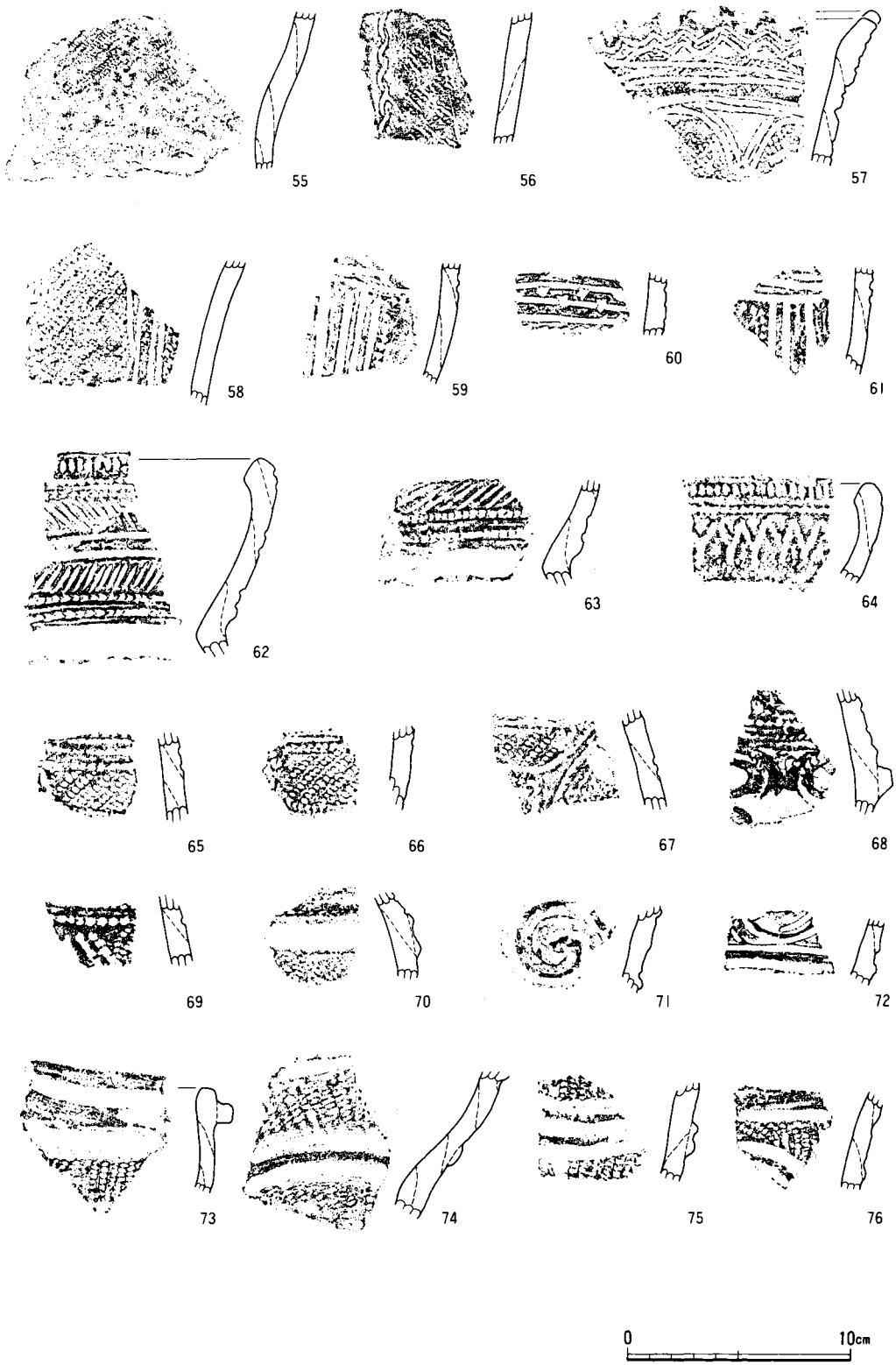
中期前半の阿玉台式を当類とするが、阿玉台直前型式と呼ばれているものも含める。総数23点が出土しているが、そのほとんどは同一の１個体の破片であり、総個体数としては２～３個体にとどまる。文様構成の一部や文様要素をうかがい知ることのできる11点を図示した。

62～70は同一個体である。全体から判断すると、器形はやや胴部の張るキャリパー形となるものと思われる。口唇部には刻みが施され、口縁部文様帯は上端と下端を１条の結節沈線で区画している。口縁部文様をうかがい知ることができるのは62～64、66等の数片にすぎないが、62と64では明らかに文様要素が異なっていることから、上下を区画する結節沈線は窓枠状の区画文を構成するものと思われる。この窓枠状区画文内には、さらに縦２段に横長の窓枠状文で区画して斜位の集合沈線を充塡するもの（62・63）や、結節沈線による連続Ｙ字状文と横回転施文のＲＬ単節縄文の組み合わせを充塡するもの（64）の二者がみられる。前者の斜位集合沈線は上段と下段では傾斜方向が異なっており、矢羽状を呈している。後者のＲＬ単節縄文は、太い原体を用いて器面がかなり乾燥した段階で施文したためか、条間が広く文様も浅い。

頸部の括れ部分には何度も丁寧にナデることによって現出した幅広沈線状の無文帯が廻っており、口縁部文様帯と胴部文様帯を画している。胴部の破片はいずれも小片であるためその文様構成の全容を知ることはできないが、67や69から判断すると縦回転施文のＲＬ単節縄文を地文に結節沈線による幾何学文様や区画文様が展開するものと思われる。また68や70のような破片からは、胴部文様帯中にも横位区画効果を持つ無文帯が配され、それに４単位程度の「x」の字状小突起が伴って縦に分割していることが想像される。

71・72は隆起線による渦巻文様に沈線や結節沈線が付随しているものである。胎土や焼成状況が62～70と酷似しており同一個体の可能性もあるが、部位が明確でないため可能性を指摘するにとどめておく。

62～70は口縁部に連続Ｙ字状文が配されることや地文に縄文が見えることから阿玉台直前式に比定されるものと思われる。71・72は、62～70と同一個体でないとすると阿玉台式の古い段



第84図　遺構外出土遺物(縄文土器４)

階、阿玉台Ⅰａ式ないしは阿玉台Ⅰｂ式の古い段階まで下る可能性がある。

第３類（73～76）

中期後半の加曽利Ｅ式を一括する。16点が出土した。

73・74はいわゆるキャリパー形土器と呼ばれるものである。73は波状を呈する口縁の外面に１条の隆帯がみられる。この隆帯は断面が正方形に近く無骨な印象を受けるが、隆帯の上下には加曽利Ｅ式に特徴的な丁寧なナゾリを加えており、沈線状になっている。細別型式ははっきりしない。74はかなり開く器形となり、胴部は比較的直線的になるものと想像される。口縁部文様帯と胴部文様帯は断面カマボコ形の隆帯で画されているが、両文様帯ともＲＬ単節縄文であり、その施文方向は転換されていない。これらのわずかな特徴からは加曽利ＥⅢ式まで下る可能性が高いといえる。

75は２条の隆帯により胴部に渦巻文を描くものである。粘土紐を貼り付けた後に両サイドにナゾリを加えており、隆帯の断面形はカマボコ形、ナゾリ部分は縄文施文部にまで及び磨消している。加曽利ＥⅢ式である。

76は口縁部外面に１条の沈線を横走させて無文帯を作出し、胴部には隆帯による渦巻文もしくは横位連繋弧線文が配されるものである。破片上には隆帯は１条しか遺存していないが、断面形から判断すると２条の平行隆帯である可能性が強く、胴部文様は渦巻文になるものと思われる。これも加曽利ＥⅢ式に属するものである。

第Ⅳ群土器（第85～86図、図版61～62）

後期の土器を一括する。今回の調査では後期前半の称名寺式や堀之内式は出土していないため、ここで扱うものは加曽利Ｂ式が中心であり、一部安行１式まで下る可能性のあるものを含んでいる。精製土器と粗製土器に分類して紹介することとする。

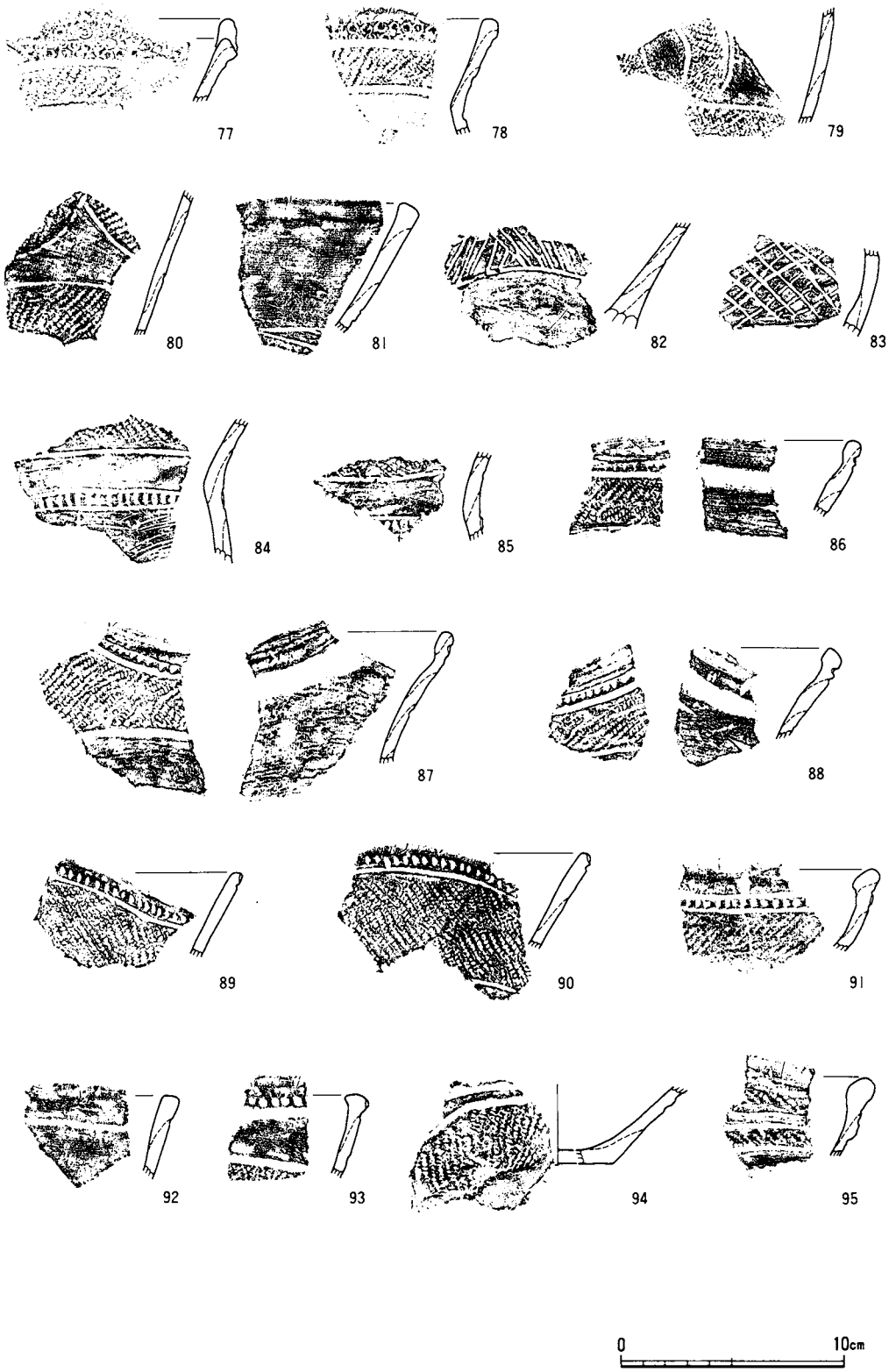
第１類（77～95）

該期の精製土器を一括して当類とする。

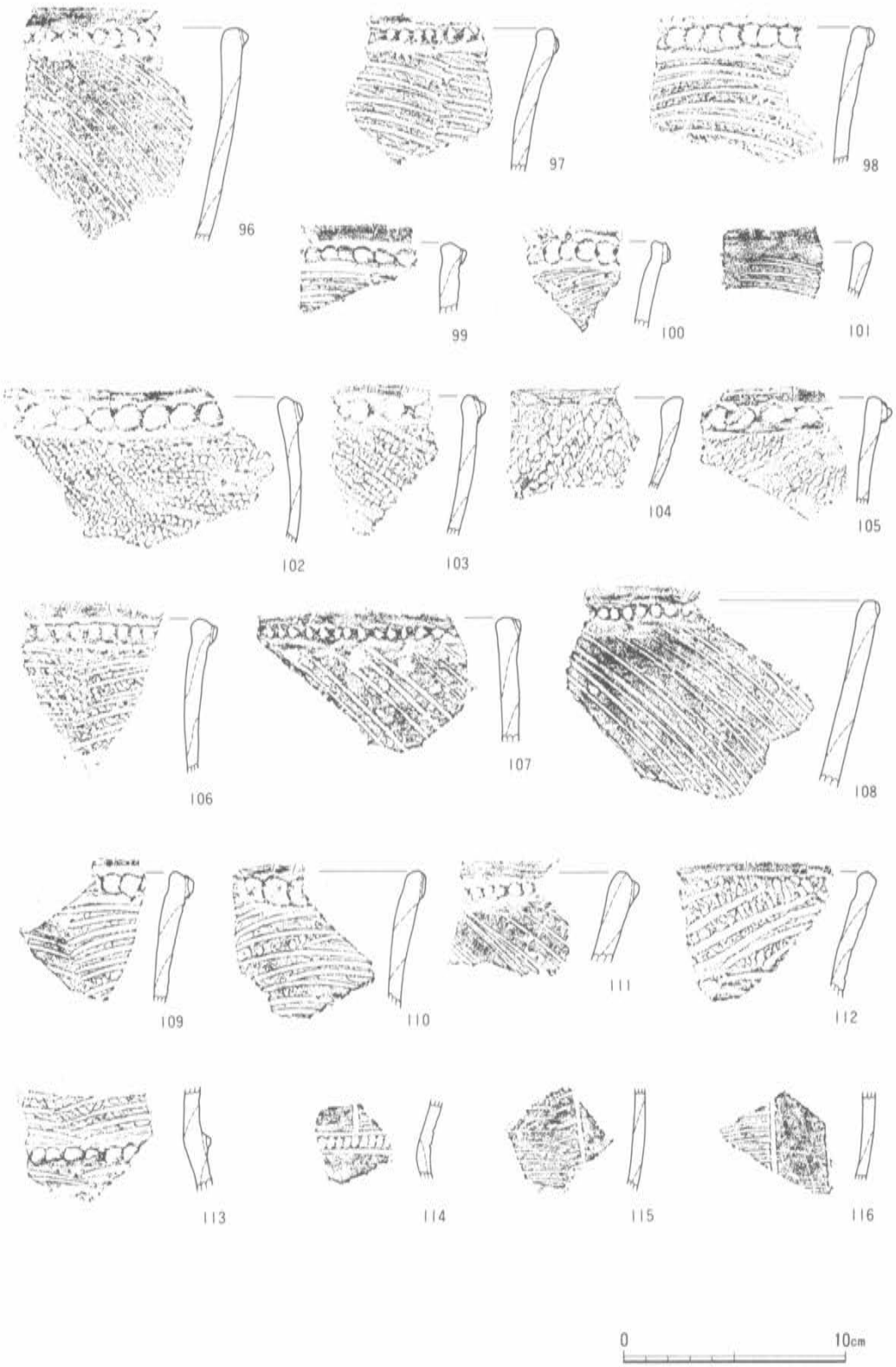
77・78は波状口縁深鉢で、同一個体である。頸部には括れを有し、口縁部はまっすぐに開きながら立ち上がっている。遺存部から判断すると、文様は縄文部と無文部を交互に配置した横帯文構成となっており、加曽利Ｂ１式の新しい段階ないしはＢ２式に属するものと思われる。口縁部に円形竹管による刺突文が充填される稀有な例である。

79・80はいずれも深鉢の胴部破片である。充填縄文手法により79は球状の文様が、80は横位下向き連弧文かと思われる文様が描かれており、無文部は両者とも丁寧に研磨されている。加曽利Ｂ２式と思われる。

81・82は鉢形土器の破片である。同一個体であると思われるが断定できない。口縁部はナデを加えただけの幅広の無文帯となっており、胴部は横走する沈線で幅の広い横帯を区画した後



第85図　遺構外出土遺物(縄文土器５)



第86図　遺構外出土遺物(縄文土器６)

に斜位沈線を充塡している。充塡される斜位沈線は部位によって傾斜方向を転換して組み合わされており、綾杉状や格子目状となっている。加曽利Ｂ２式と思われるが、Ｂ３式まで下る可能性も否定できない。

83は深鉢の口縁部破片であるが、口唇はわずかに欠損している。口縁部文様は鋭く尖った沈線による格子目状の文様となっており、右傾方向のものが左傾方向のものに先行して施文されている。破片下端にはわずかに横走する沈線を確認することができ、この沈線をもって口縁部文様帯と胴部文様帯が区画されているものと思われる。加曽利Ｂ２式ないしはＢ３式に属するものであろう。

84・85は、77・78などと同様の器形を呈する深鉢の胴部破片で、同一個体である。口縁部の大部分を欠損するためその形態は不明であるが、破片から判断する限り口縁部文様帯は縄文帯と無文帯を交互に配置する横帯文構成をとるものと思われる。括れて外折する頸部には２条の幅狭の平行沈線が廻り、口縁部文様帯と胴部文様帯を画している。胴部文様帯は粗製土器には一般的にみられる上向き連弧状の横位条線となっており、沈線を懸垂文状に垂下させて文様帯を縦位に区画している。帰属時期としては加曽利Ｂ１式からＢ３式までの広い範囲が考えられ、特定できない。

86～88は大波状口縁をもつ深鉢の口縁部破片で、同一個体である。３片とも胴部下位が遺存していないため断定できないが、77・78や84等と類似する器形になるものと思われる。口縁外面には連続刺突による結節沈線と沈線が１条づつ上下に密接して廻っており、紐線文と同様の効果を現出している。口縁部文様帯の下方にはほぼ水平に横走する沈線が１条みられ、その上位が縄文帯、下位が丁寧に研磨された無文帯となっている。口縁内面には丁寧にナゾリを加えた幅広の沈線が１条廻っている。この沈線は波頂部でさらに幅が広くなり、三角形になるようである。加曽利Ｂ３式と思われる。

89・90は同一個体の口縁部破片である。波状を呈する口縁の直下に１条の沈線が横走し、その上位に刻文を充塡することによって紐線文と同様の効果を現出している。沈線以下は幅広の縄文帯となり、下端を横走沈線で画し、無文帯へ移行している。おそらく深鉢であろうが、急角度で直線的に開いていることから波状口縁鉢形土器となる可能性も否定できない。加曽利Ｂ３式である。

91は平縁の口縁部破片である。口縁直下にわずかな無文帯を残し、下端は２条の横走沈線と刻文の組み合わせによる紐線文条の横帯で画している。口縁内面は肥厚し、段を有している。胴部には縄文が施されるのみである。口縁部がかなり内湾していることから椀形に近い鉢形土器になるものと思われる。加曽利Ｂ３式である。

92～94には細別型式が判断できかねるものを一括した。92は口縁外面に１条の沈線が横走するのみで縄文等の地文はみられない。93は口縁外面に粘土紐貼付による紐線文が廻り、その直

下には沈線が付随している。無文帯を介して沈線に区画された縄文帯が配されるが、この縄文帯部分は何らかの単位文様の一部であると思われる。安行期まで下るものかもしれない。94は浅鉢の底部破片である。縄文を地文に２条の平行沈線が横走している。

95はわずかに波状となる口縁部の破片である。口縁部文様帯は幅の狭い縄文帯と無文帯を交互に配する横帯文構成をとっている。縄文部は粘土紐を貼り付けた低い隆起線の上面に縄文を施したもので、上下には沈線が付随している。安行１式と思われる。

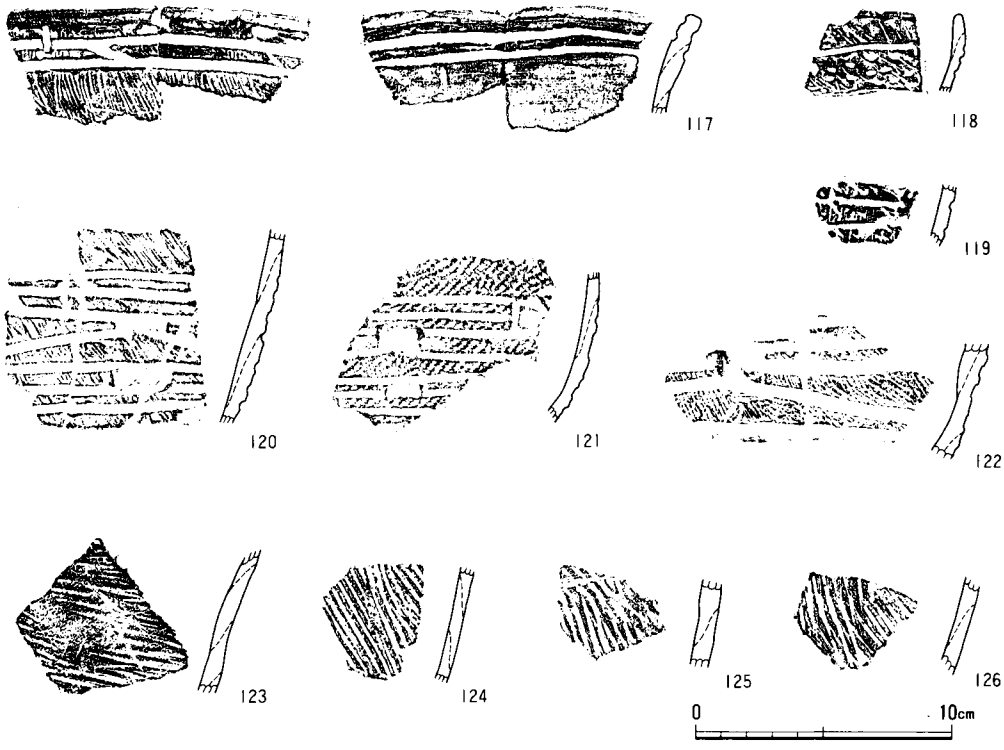
本類土器を概観する限り、当遺跡の縄文後期の土器は加曽利Ｂ２式からＢ３式を主体とするようである。地文の縄文はいずれも横回転施文されたもので、原体にはＲＬ単節縄文、ＬＲ単節縄文の二者があるがその存在比に偏りはみられない。

第２類（96～116）

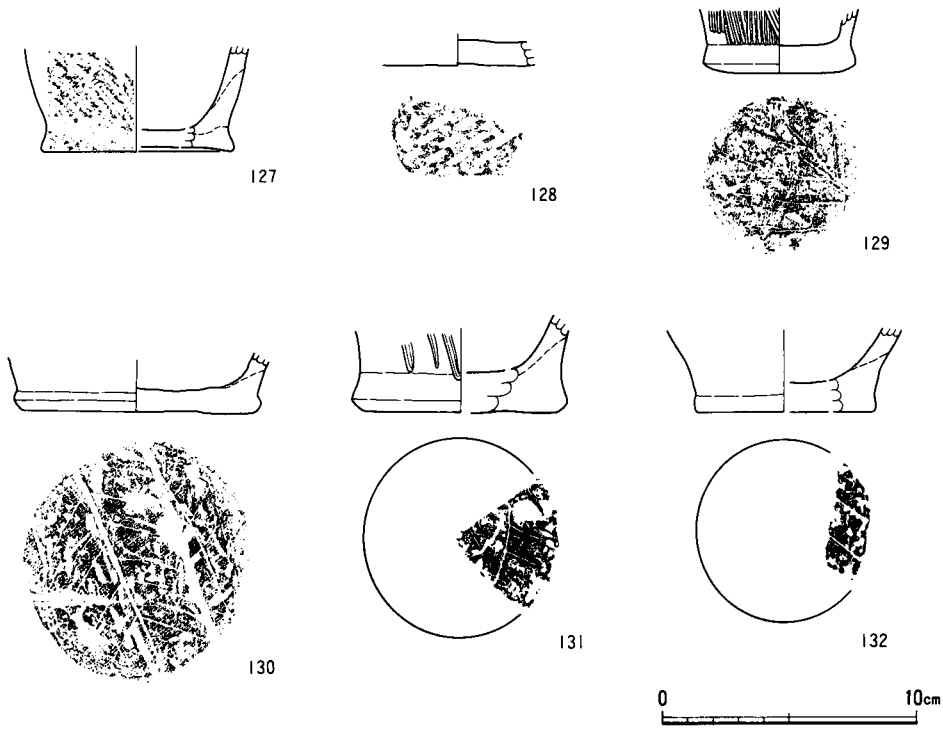
該期の粗製土器を一括する。いわゆる紐線文土器と呼ばれるものである。

地文には条線のみが施されるもの（96～101・114～116）、縄文のみのもの（102～104）、縄文施文後に条線を重ねるもの（105～113）といったバラエティがある。条線は上向き連弧状に横位に施文されるものと右下り斜位に施文されるものの二者が一般的である。後者の方がやや新しいといえるかもしれない。112のように左下り斜位のものも稀に存在する。

口縁外面と胴部中位に廻るいわゆる紐線文は、粘土紐貼付後に連続指頭押捺するものが一般



第87図　遺構外出土遺物（縄文土器７）



第88図　遺構外出土遺物(縄文土器８)

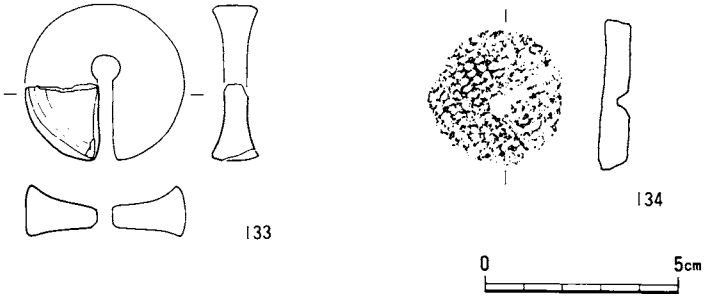
的であるが、ヘラ状の施文具を用いて刻みを加えるもの（97・107・108）や粘土紐貼付を行わず平行沈線と刻文で代用するもの（114)、全く省略されるもの（101・104・112）も存在する。口縁部条線帯を縦位平行沈線で区画し、その内部を磨消するもの（114～116）もみられる。

第Ⅴ群土器（第87図、図版62）

晩期に属する土器を当群とする。今回の調査では関東地方縄文土器編年の中で最も新しいとされる荒海式土器が数点出土した。なお、当遺跡の北側に隣接する高崎新山遺跡の調査では本群とほぼ同時期、およびやや遡る千網式期の資料が検出されている。本群の記載にあたっては千葉県教育庁生涯学習部文化課　渡辺修一氏の教示を得た。

117・120～122は沈線により変形工字文を描くもので、117と120は同一個体である。口縁部には内外面ともに２条の平行沈線が廻り、外面上段の沈線は縦位短沈線によって区切られている。胴部変形工字文を構成する沈線は断面方形で、その交点は長方形に削り取られている。地文には縄文施文のもの（121）と櫛歯状工具による細条線を施すもの（117・120・122）の二者が認められる。

118・119は櫛歯状工具による細条線を地文に、変形工字文を構成すると思われる沈線が横走している。沈線の間隔が広い部分には細竹管の背面を使用した刺突が充塡されている。



第89図　遺構外出土遺物(縄文時代土製品)

123～126は該期の粗製土器である。器面全体に貝殻条痕文が施されている。胎土は緻密で焼成も良好である。

第Ⅵ群土器（第88図、図版62）

時期を特定できなかったもののうち、底部破片を一括して当群とする。47点、1200gが出土しているが、胴部文様の一部が判別できるものや底面に圧痕の残るもの等6点を図示した。

127は胴部に直前段反撚りのL$\frac{R}{L}$単節縄文が施されている。胎土中には少量ながら植物繊維を含んでいる。前期前半の関山式や黒浜式ではないかと思われるが、該期のものは他に1点も出土していないため本群に含めた。

128～132は底面に何らかの圧痕が遺存するものである。128には網代痕が、129～132には木葉痕が残っている。胴部文様としては129に櫛歯状工具による細条線を、131に3条の縦位沈線を確認できるが、型式を判別できるものは1点もない。

土製品（第89図・図版63）

今回の調査で出土した縄文時代の土製品は図示した2点のみである。

133は玦状耳飾の破片である。推定直径42mmの円形になるものと思われる。断面形は中心部が薄く縁辺部が厚くなっており、文様は施されていない。134は土器片利用の円板形の土製品である。表面中央には回転運動によって孔が穿たれているが、裏面まで貫通していない。側縁は全周にわたって丁寧に擦られている。使用されている土器片は、その胎土や施文原体から加曽利B式と思われる。

石　器（第90～92図、図版63～64）

今回の調査で出土した石器は総数で60点余りにのぼるが、当節では明らかに古墳時代以降の所産と思われるものを除いた33点について報告することとする。なお、一部時期を決定できなかったものも含んでいる。

135は頁岩の薄い縦長剝片を素材とする槍先形尖頭器である。並列した押圧剝離により鋭利な先端部を作出している。縄文時代草創期にみられるタイプである。136は安山岩製の尖頭器で、先端部と基部を欠損する。石材の性格のためか135と比較してかなり厚い剝片を素材としており、調整加工は表裏面とも粗雑なものとなっている。

137はチャート製の、138は安山岩製の石鏃で、両者とも先端が鋭角の二等辺三角形を呈し基部には浅い抉りが入っている。137の裏面は周縁部のみの調整加工となっており、素材となる剝片の主要剝離面が残存している。ここから判断すると、打面部分を折断した剝片を素材にしていると思われる。138は表裏とも全面に調整加工が及んでいる。

139は黒曜石の石鏃未製品である。表面は全面にわたって調整加工が施されているが、裏面は一部を除いて素材となる剝片の主要剝離面が広く残存している。三角形の剝片を素材にしたものと思われる。140はチャート製で、これも石鏃の未製品と思われる。調整加工の初期の段階で先端部を欠損してしまい、製作を中断せざるをえなかったのであろう。

141はチャートの剝片で、明瞭な２次調整が加えられている。横長剝片の両側を折断した後に２次調整加工を行っている。石鏃未製品の可能性もあるが、はっきりしない。142は黒曜石の２次調整剝片である。両側縁の中央部に両極打撃を加えたような剝離がみられる。側縁の一部には使用痕と思われる微細な剝離が認められる。143はチャートの２次調整剝片である。打面部分を残して折断した剝片の表裏面の一部に調整加工を加えている。石鏃未製品の可能性も考えられる。145もチャートの２次調整剝片である。剝片剝離後に打面から表面側へむかって押圧剝離を加えている。

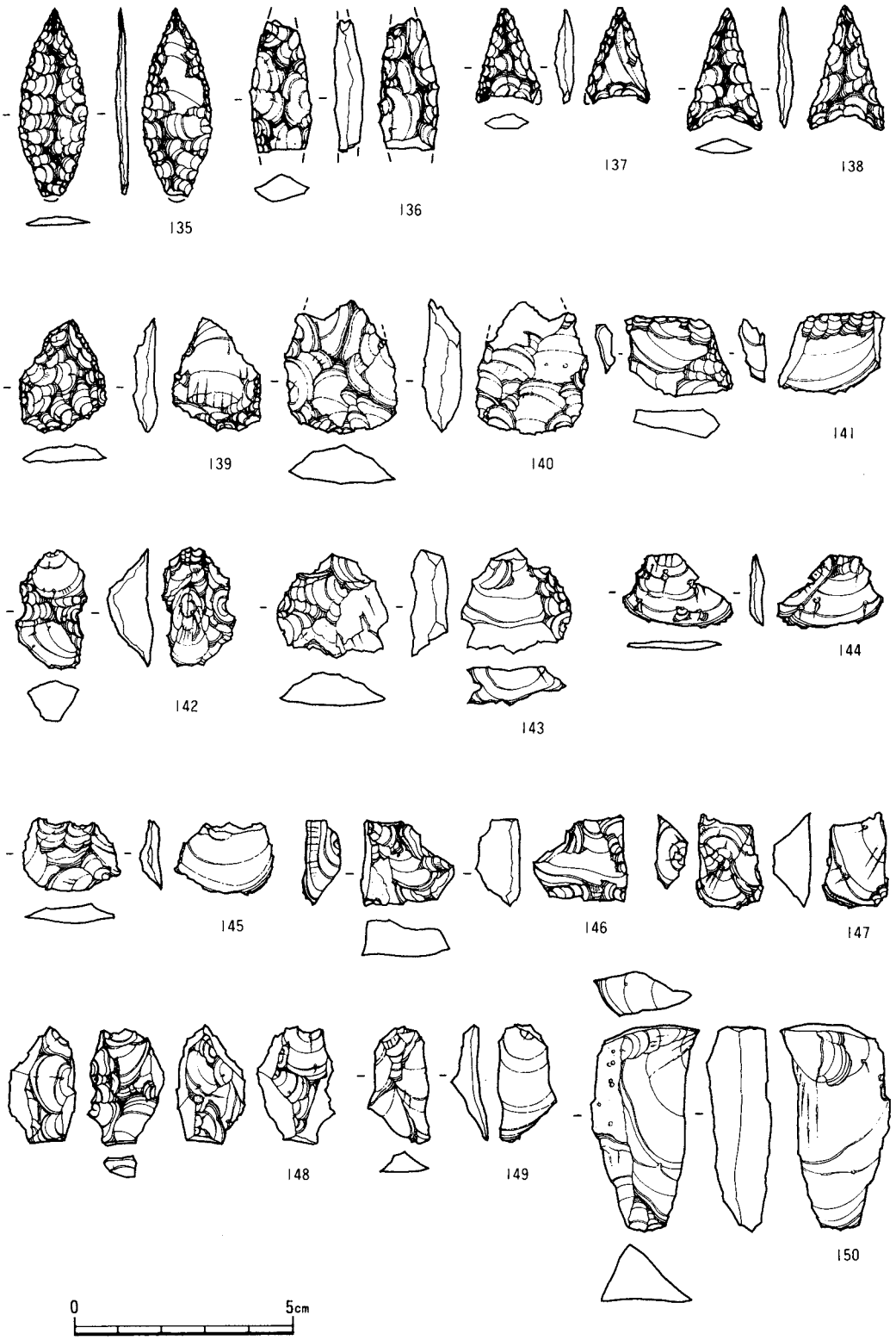
144は黒曜石の剝片で、側縁の一部に使用痕と思われる微細な剝離を確認できる。流紋岩の挟雑物を多く含む石材である。

146・147は黒曜石の剝片で、いずれも剝片剝離後に折断されている。２次加工痕や使用痕は認められない。

148は黒曜石で、比較的大きな剝離が全面にわたって不規則に並んでいる。石鏃等の素材となる剝片を得た後に残った残核ではないかと思われる。

149はチャート、150は頁岩の縦長の剝片で、打面が残存しており、２次加工痕や使用痕は認められない。150は一部に礫面が残っている。この２点は先土器時代の所産かも知れない。

151は雲母質の粒子が互層をなし、やや光沢をもつ片岩を石材とする敲石である。いわゆる雲母片岩とは異なって粒子の緻密な硬い石材である。形態的には石斧のようでもあるが、下端の



第90図　遺構外出土遺物(石器１)

剝離は敲打に伴う使用痕であるものと判断される。基部にも敲打痕が認められる。表裏面とも丁寧に研磨されており、裏面には細い溝が2条縦走している。

152は硬砂岩の打製石斧である。表面の下端から右側縁の一部にかけて調整加工を加えて刃部を作出している。裏面は全面が礫面で、使用に伴う微細剝離はみられるが調整加工は及んでいない。基部と刃部の一部に敲打痕を確認することができる。鑿のように使用したのであろうか。

153は変成岩で、右側縁に調整痕か使用痕かは明かでないが顕著な研磨痕が残っている。下端の剝離も使用痕である可能性があることから、あるいは磨製石斧かも知れない。すなわち欠損部分に刃部が形成されていることも考えられる。

154は蛇紋岩で、下端に明瞭な敲打痕を看取することができる。石斧あるいは敲石の基部である可能性もあるが、この敲打痕は調整痕というよりは使用痕であるとみるのが妥当と思われるため、敲石の敲打面であると理解しておく。

155は珪岩系の石材を用いた礫器である。節理が原因で離脱した面の縁辺を刃部として使用している。裏面の一部に敲打痕や磨痕が残っており、礫器と同時か、あるいは礫器として使用される以前に敲石や磨石の機能を有していたものと思われる。

156は敲石と磨石の両機能をもつもので、安山岩のやや厚みのある扁平円礫を用いている。敲打痕は表裏面の中央付近と側縁の一部に認められ、これにより表裏面とも中央部は凹んでいる。磨痕は側縁をほぼ全周している。

157は石英で、やはり敲石・磨石の両機能を有している。上端面を敲きに、裏面と下端面を磨りに使用している。表面と両側面は剝離面となっているが、全体に摩耗していることから磨りに使用された可能性もある。

158は安山岩、159は玄武岩、160は硬砂岩の球状の円礫を使用したもので、類似した形態を呈している。158・159は敲打痕、磨痕ともに認められるが、160は裏面の平坦部を中心に全面に磨痕が残るものの敲打痕は確認できない。

161は硬砂岩の楕円形の円礫で、ほぼ全面に磨痕が、側縁の一部に敲打痕が認められる。約半分が欠損しており、離脱面とその周辺の一部は被熱により赤化している。被熱によって破損したというよりは破損後に被熱したものであろうと思われる。

162は花崗岩の厚みのある扁平円礫を用いた磨石である。ほぼ全面にわたって摩耗しており、非常に重量感のあるものである。163は硬砂岩の扁平円礫を用いた磨石で、表裏の平坦面が顕著に摩耗している。両者とも敲打痕はみられない。

164は硬砂岩の扁平円礫を用いた敲・磨石で、裏面での敲打の際に破損したものと思われる。表裏面の中央部に顕著な敲打痕が、裏面と側縁の残存部の全周にわたって磨痕が認められる。一部被熱により赤化している。

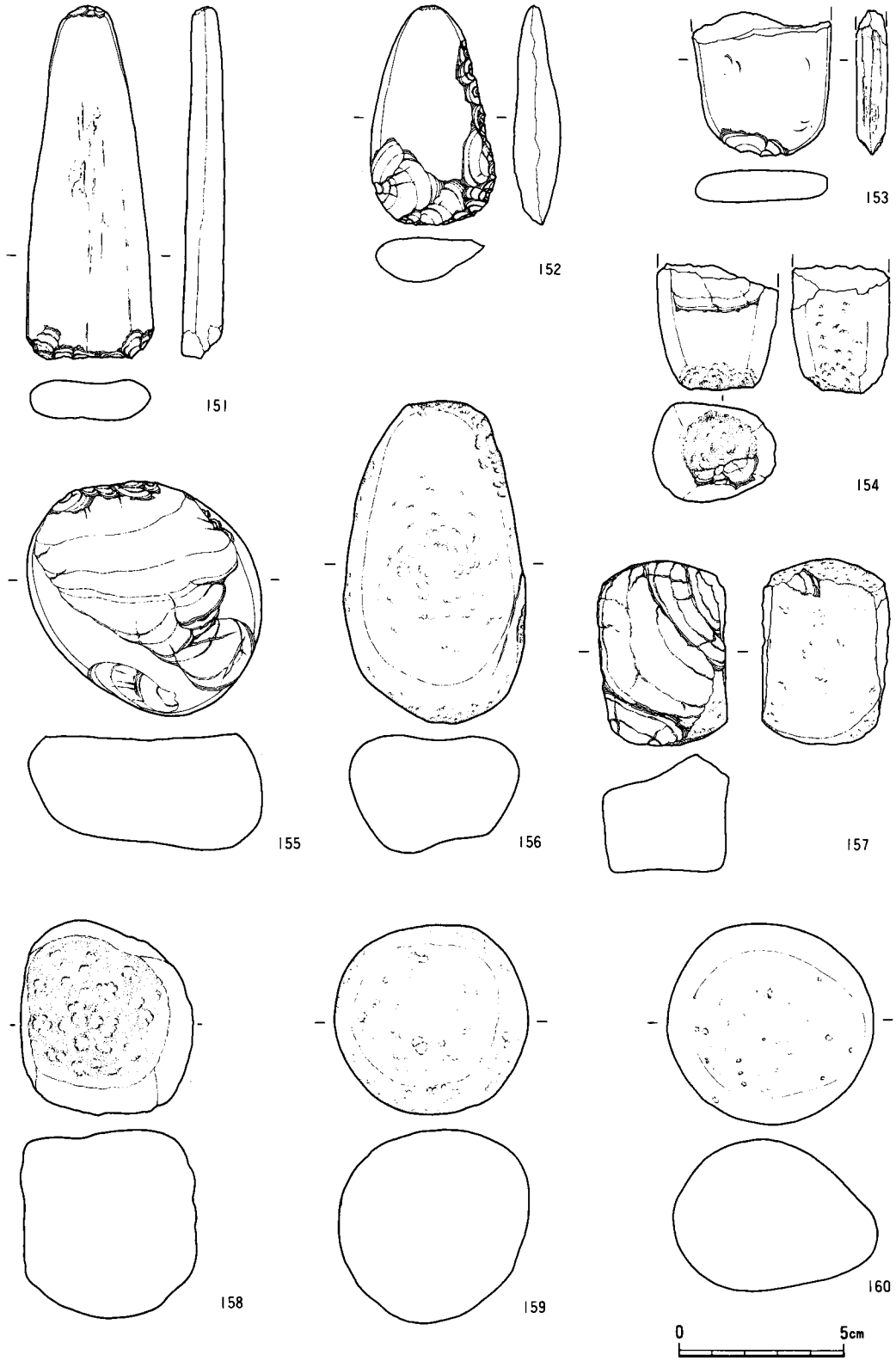
165～167はいずれも安山岩製の石皿片である。165と167の表裏面は使用に伴う摩耗で中央部

が凹んでいる。

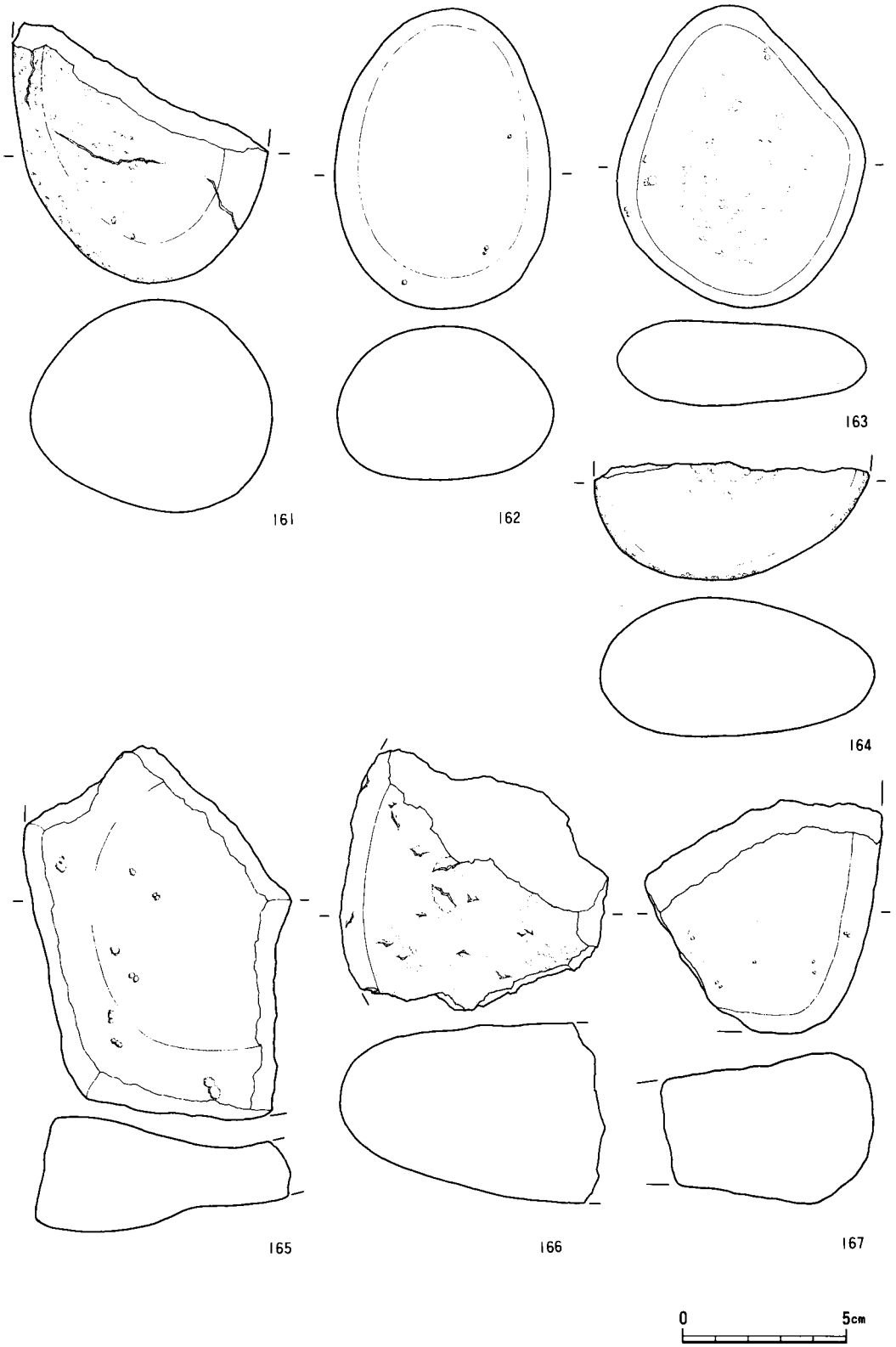
図示したもののほかに特筆すべきものとしては、雲母粒を大量に含む片岩系の石片2点が挙げられる。土器胎土中の混和剤として砕いて使用したものであろうか。敲石の中にはこれを砕くのに使用されたものもあるかも知れない。

第1表　遺構外出土石器観察表　（長さ：mm・重さ：g）

図No.	出土位置	器　種	石　材	長	幅	厚	重	備　考
135	リ7－2	尖頭器	頁　岩	43.9	15.3	2.3	1.42	
136	トレ9	尖頭器	安山岩	(32.6)	13.8	7.1	3.44	先端・基部欠損　調整粗
137	038	石　鏃	チャート	21.5	(15.2)	4.5	1.19	片脚欠損　主要剥離面残存
138	013	石　鏃	安山岩	27.3	17.7	3.9	1.22	
139	050	石鏃未製品	黒曜石	25.9	19.9	5.6	2.17	主要剥離面残存
140	チ6－10	石鏃未製品	チャート	(29.8)	25.4	9.2	6.98	先端欠損　主要剥離面残存
141	ヌ6－6	R剥片	チャート	18.2	25.1	6.4	3.22	剥片折断後2次調整　石鏃未製品か
142	不　明	R剥片	黒曜石	26.5	15.9	9.6	3.57	使用痕あり
143	不　明	R剥片	チャート	22.4	25.7	8.4	4.70	石鏃未製品か
144	不　明	U剥片	黒曜石	15.7	25.1	2.8	0.96	
145	トレ10	R剥片	チャート	15.8	22.7	5.3	1.61	
146	不　明	剥　片	黒曜石	18.6	21.4	9.7	3.67	剥片折断
147	不　明	剥　片	黒曜石	21.7	15.5	8.7	2.72	剥片折断
148	001	石核？	黒曜石	26.1	15.6	18.5	6.24	残核か
149	065	剥　片	チャート	26.5	14.5	6.6	1.66	先土器時代か
150	トレ12	剥　片	頁　岩	46.3	24.7	13.8	12.82	先土器時代か
151	039	敲　石	片　岩	107.0	37.9	11.8	76.50	両面研磨　裏面溝2条
152	チ6－5	打製石斧	硬砂岩	67.3	39.1	15.3	47.61	基部敲打痕　裏面未調整
153	表　採	磨製石斧？	変成岩	(43.9)	(42.1)	(10.1)	29.37	側縁研磨痕　磨製石斧基部か
154	024	敲石？	蛇紋岩	(39.2)	(37.9)	(30.5)	72.14	使用による敲打痕か
155	ヌ6－23	礫　器	硅　岩	65.9	76.1	34.3	221.48	裏面に敲打痕・磨痕
156	033	敲・磨石	安山岩	97.1	55.7	39.4	290.95	厚みのある扁平円礫
157	041	敲・磨石	石　英	56.2	39.4	37.7	123.15	
158	035	敲・磨石	安山岩	58.7	52.4	54.4	192.16	円礫
159	035	敲・磨石	玄武岩	55.2	58.5	61.3	220.69	円礫
160	リ6－20	磨　石	硬砂岩	59.0	63.2	45.3	228.66	円礫
161	ヌ5－12	敲・磨石	硬砂岩	(80.9)	(75.3)	(66.7)	399.00	円礫　離脱面被熱赤化
162	047	磨　石	花崗岩	93.0	67.1	47.6	397.00	厚みのある扁平円礫
163	029	磨　石	硬砂岩	93.4	76.3	26.4	265.83	扁平円礫
164	トレ12	敲・磨石	硬砂岩	(37.0)	(84.3)	(42.1)	151.11	扁平円礫　一部被熱赤化
165	003	石　皿	安山岩	(113.4)	(85.6)	(45.3)	491.00	
166	035	石　皿	安山岩	(81.6)	(85.9)	(55.1)	412.00	158と同一石材
167	ヌ6－16	石　皿	安山岩	(76.6)	(70.1)	(46.3)	207.06	



第91図　遺構外出土遺物(石器２)



第92図　遺構外出土遺物(石器３)

2．歴史時代（第93図、図版53）　［土器観察表204Ｐ］

ここでは、グリッド・トレンチ調査によって出土したものや表面採集された遺物で、検出した遺構に帰属しないものについて記述する。須恵器杯６点、須恵器壺蓋１点、土師器杯10点、土師器甕３点、須恵器甕１点、小型土器１点、瓦塔部材４点、砥石３点が図示できた。図示できなかった資料の総数は16,095点で、重量比で土師器が77％を占める。歴史時代の遺物だけで、古墳時代や弥生時代の遺物はまったくみられない。

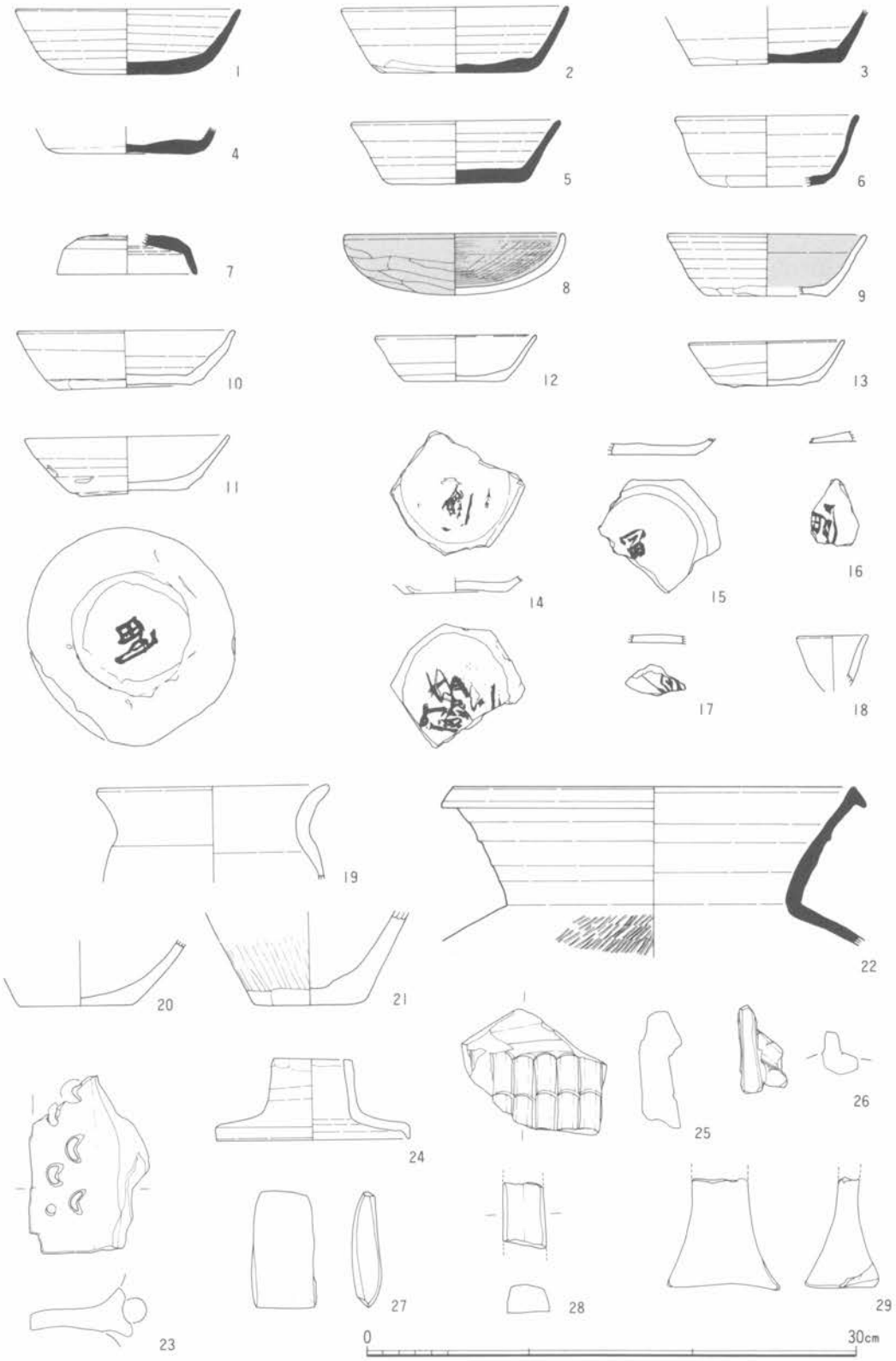
１～６は須恵器杯である。１～４は常陸産と思われる。４は還元炎焼成になりきれない須恵器である。１は底部外面は回転ヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に回転ヘラ削り調整が施される。２・３・５・６は底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。６は表面の色調は灰褐色であるが、内部は褐色である。４は内外面ともに器面が荒れ、やや不鮮明であるが、底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。

７は須恵器壺蓋である。焼成はよく、硬く焼き締まる。かえりはなく、つまみは剝がれて、遺存しない。天井部外面は回転ヘラ削り調整が施される。

８～17は土師器杯である。８は非ロクロの土師器杯で、丸底である。内外面に黒色処理が施される。底部と体部外面はヘラ削り後、ヘラ磨きが施されるが、ヘラ削り痕が残る。内面は丁寧なヘラ磨きが施される。９は体部外面のロクロ痕が明瞭である。内面はナデ後、黒色処理が施される。底部外面は回転糸切り後、周縁部に手持ちヘラ削り調整が施される。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。10は口縁部内面に油煙状の付着物が２か所みられる。底部外面は手持ちヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。11は口縁部の一部が歪んでいる。底部外面に「冨」と墨書される。底部外面は回転糸切り後、無調整である。体部外面は下端部に手持ちヘラ削り調整が施される。12・13は小振りの杯である。12は口縁部内面に２か所と口唇部に１か所、油煙状の付着物がみられる。いずれも底部外面は回転ヘラ削り調整が施され、切り離し技法は不明である。体部外面は下半部に回転ヘラ削り調整が施される。14～17は底部で、墨書がみられるものである。14は底部内外面に複数の文字が墨書されるが、薄いために判読不能である。底部外面は回転糸切り後、周縁部に手持ちヘラ削り調整が施される。体部外面は無調整と思われる。15・16底部外面に「冨」と墨書される。17は底部外面に墨書されるが、判読不能である。底部外面の切り離しはいずれも回転糸切りで、15・17は周縁部に手持ちヘラ削り調整が施される。

19～21は土師器甕である。19・20は接合しないが同一個体と思われる。器面は火熱を受け、荒れている。20は胴部外面はヘラ削り後、縦方向のヘラ磨きが施される。

21は須恵器甕で、頸部外面に断面三角形の突帯をもつ。胴部外面は斜め方向の叩き後、筋状



第93図　遺構外出土遺物(歴史時代)

のヘラナデが施される。胎土は緻密で、焼成はよく、硬く焼き締まる。

18は土師器小型土器で、縄文早期の尖底土器を思わせるような器形である。内外面ともにナデで、器面は比較的平滑である。

23～26は瓦塔の部材で、いずれも須恵質である。竪穴住居跡070と土坑067出土のものと類似する。23は水煙で、一面だけが遺存する。径7.0㎜の小孔１つと長さ13.0～15.0㎜、幅9.0～11.0㎜の三日月形の孔が５つ以上開けられている。端部は浅いスリットが施されている。24は相輪で、上部の内外面と端部はヘラ削り調整が施される。25・26は屋蓋部で、ともに瓦は男瓦だけで表現されている。25は幅12.0㎜、長さ22.0㎜前後で２段の瓦が葺かれていることがわかる。26は隅棟の部分で、断面方形の突帯で表現され、せり上がりがきついことから、軒先に近い部分と思われる。竪穴住居跡031Bのような瓦の表現はされていない。

27～29は砥石である。27は先端部が刃状に尖っている。表裏面ともに使用されている。石材は砂岩質である。長さ69.0㎜、幅38.5㎜、厚さ17.5㎜、重さ65.57ｇを測る。28は四面とも使用されている。石材は凝灰岩質である。29は四面と図の下面も使用されている。石材は凝灰岩質である。

第３章　調査成果のまとめ

六拾部遺跡は、その一部がすでに削平されているものの、今回の調査及び佐倉市教育委員会による調査の成果を合わせると、ほぼその全容を明らかにすることができたものと思われる。佐倉市教育委員会の調査成果を含めると、縄文時代は竪穴住居跡１軒と土坑１基、歴史時代は竪穴住居跡73軒、掘立柱建物跡15棟、土坑５基、土器集中地点２か所を検出することができた。隣接する南広遺跡や腰巻遺跡と異なり、古墳時代の遺構がまったく存在せず、歴史時代になってから集落が営まれるようになった地区といえる。本章では、特に、本遺跡の主たる時期である歴史時代について、出土遺物の検討を通して、集落の変遷過程をみていきたいと思う。検討の対象は、今回の調査によって検出した遺構のみならず、できる限り佐倉市教育委員会の調査によって検出されたものも合わせて行うことにした。

先に報告した南広遺跡のなかでも歴史時代の土器について細分を行い、それに基づいて集落の変遷の復元を試みた。今回もその細分を基本に本遺跡の土器の検討を行った。南広遺跡で細分した土器の形態分類の範囲に納まらない土器がいくつかあり、また、今回の検討のなかで、見直しの必要を感じたものもあったが、現時点で六拾部遺跡出土の土器について細分を行うことは、かえって混乱を招く恐れがあると考えたので、ここでは細分を行わないことにした。また、時期区分についても、南広遺跡のものと今回のものとは、必ずしも整合しないこともあらかじめご了解いただきたい。

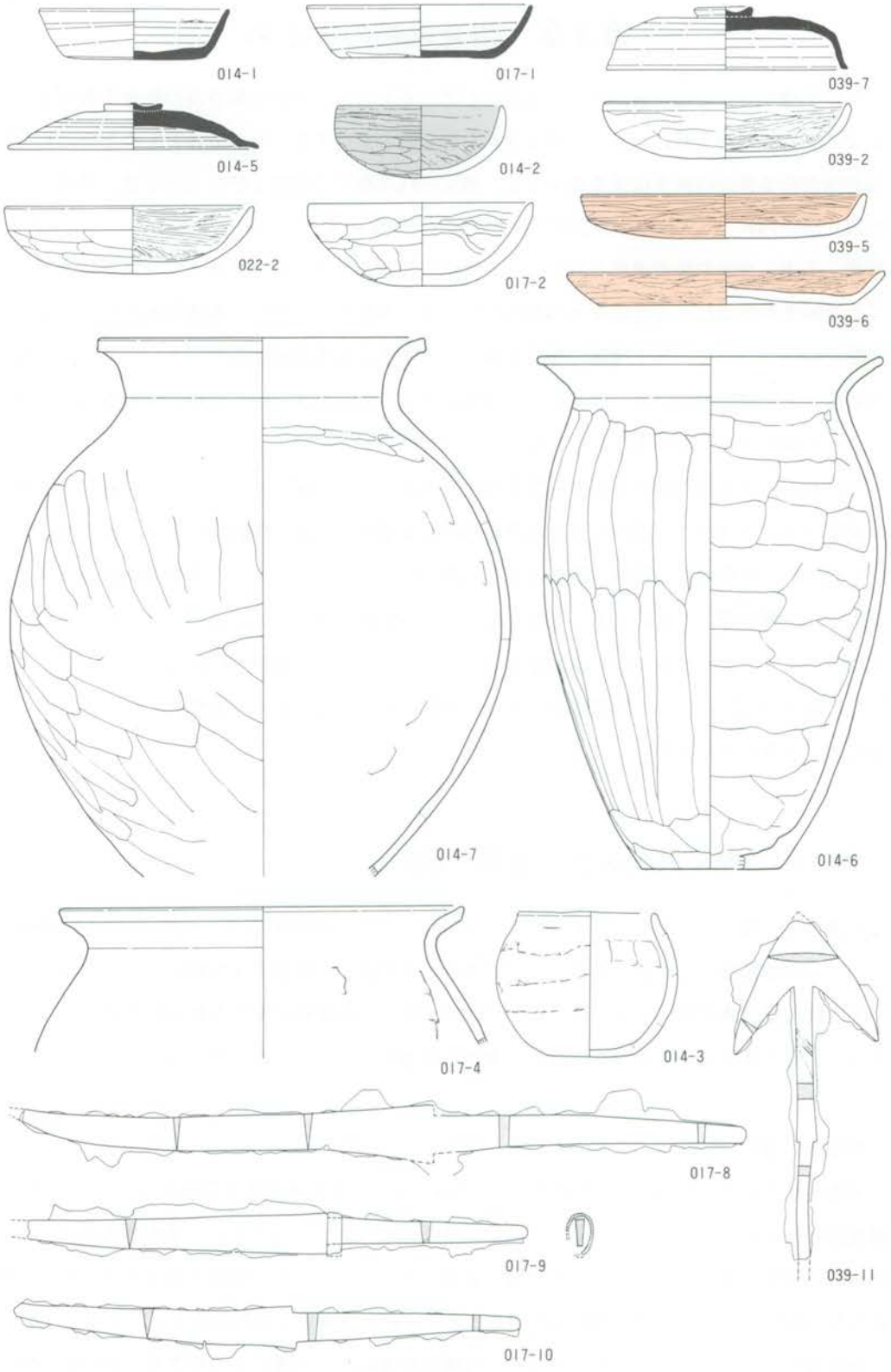
第１節　歴史時代の出土遺物の検討

本遺跡では竪穴住居跡から出土したものを中心として、須恵器128点、土師器276点と鎌・鏃・刀子などの鉄製品などを図示することができた。須恵器・土師器では杯類がもっとも多く、ついで土師器甕が多く出土している。ここでは須恵器・土師器杯の変化を基本的な指針として考えつつ、甕や鉢などの土器やそのほかの遺物の変遷をも併せてみていきたい。

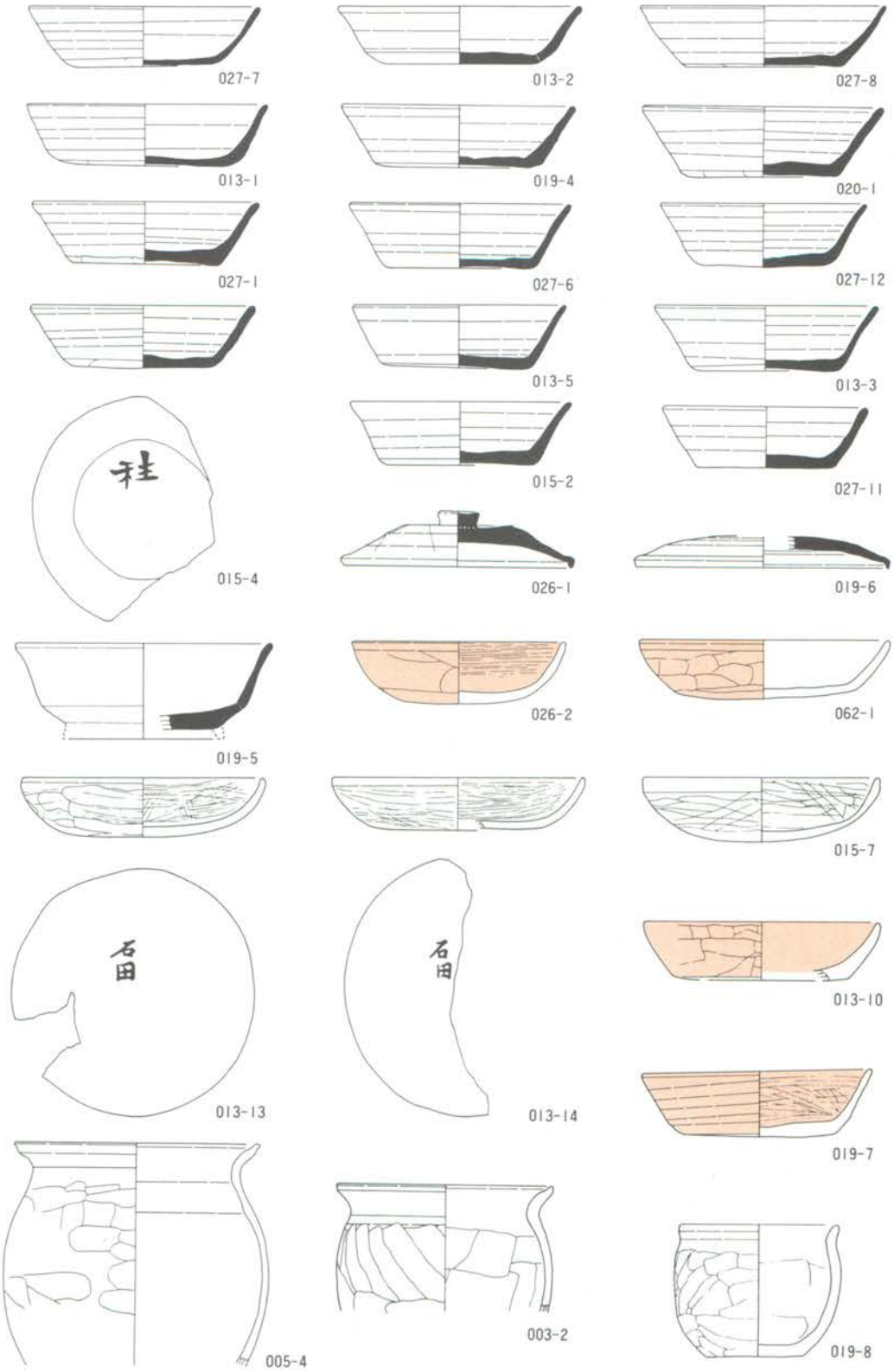
六拾部Ⅰ期（第94図）

須恵器杯はわずかしかなく、大きさに大小があるが、いずれも箱形の器形をもつものである。須恵器杯蓋はかえりをもつもので、すべて常陸産と思われるものである。須恵器蓋には、このほかに短頸壺の蓋と思われる天井部の高い蓋が１点出土している。類例はあまりないが、太宰府ＳＸ2480出土のものの中に類似品が見られる。本品も常陸産と思われるものである。

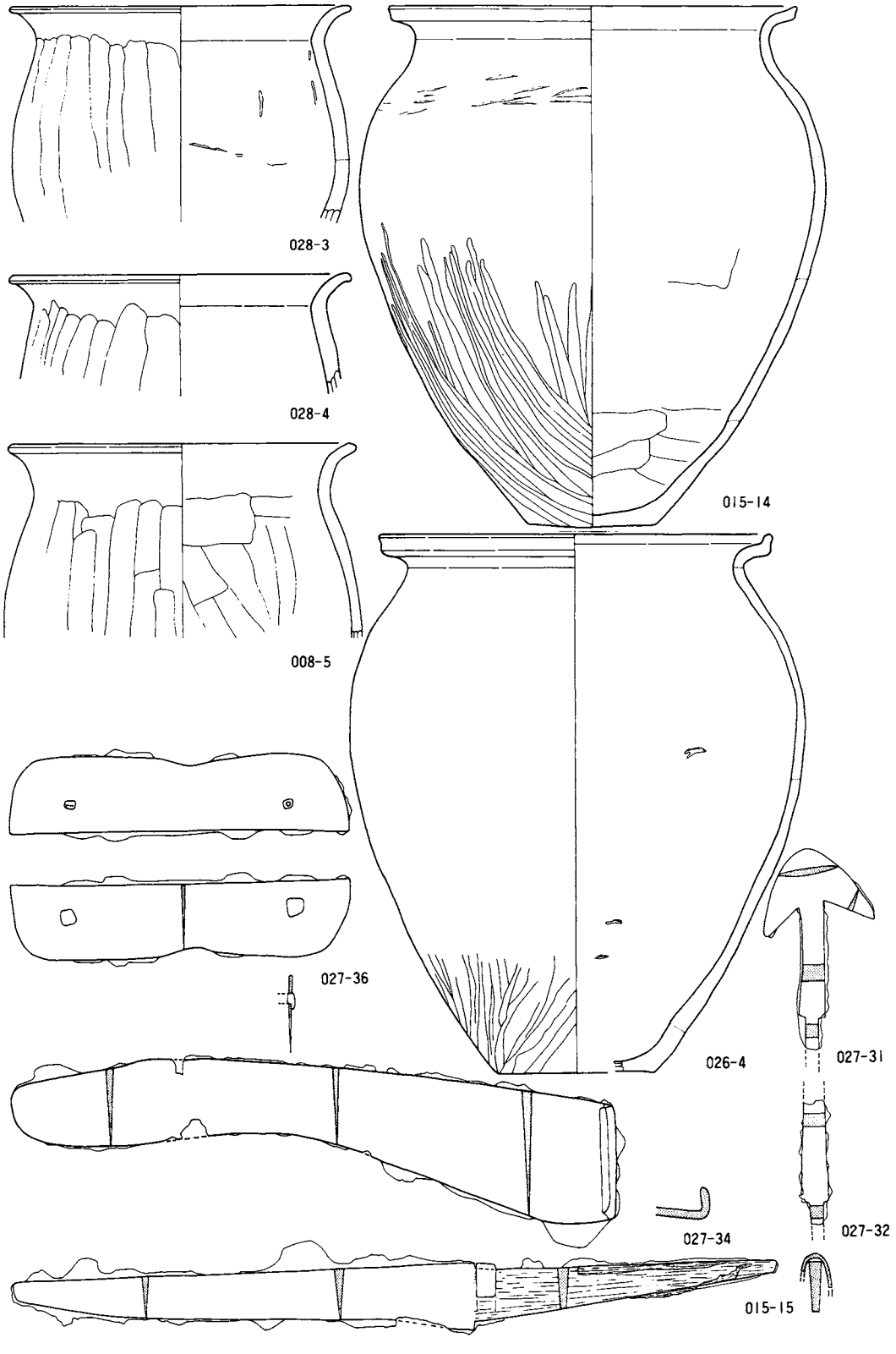
土師器杯は非ロクロのものだけであり、古墳時代後期からの流れをくむ体部の深い杯（竪穴住居跡014－２）のほかは、やや浅い体部をもつものである。また、内外面に赤彩が施される盤



第94図　土器変遷図(1) －六拾部Ⅰ期－



第95図　土器変遷図(2) －六拾部Ⅱ期(1)－



第96図　土器変遷図(3) －六拾部II期(2)－

状の皿が本時期にのみ見られる。

土師器甕は在地産の甕が主体を占め、長胴のものと球形の胴部の２種類がみられる。「常総型」の甕も見られるが、その数はまだ少ない。

そのほかの遺物としては、鉄製品では刀子が多く、鏃や斧もある。

本時期の土器群の特徴は須恵器の出土点数が少なく、須恵器杯蓋にかえりをもつこと、土師器杯は非ロクロの杯のみで構成され、盤状の皿がみられることなどがあげられる。太宰府ＳＸ2480出土の短頸壺の蓋には７世紀後半の時期が与えられているが、これらのことから、本時期は８世紀の第１四半世紀を中心とする時期と考えられる。

六拾部Ⅱ期（第95・96図）

本時期は須恵器杯の数量が急激に増加し、土師器杯を上回るようになる。

須恵器杯は口径が13～14cm、底径が８～９cmと大振りで、体部が比較的直線的に立ち上がるものが主体であり、常陸産と思われるものが大部分を占めている。須恵器杯蓋はかえりをもたないものに変わる。須恵器高台付き杯も見られるが（竪穴住居跡019－５）、本時期の中でも比較的新しい段階で現れてくるものと思われる。

土師器杯は、まだ、非ロクロの杯が主体を占めているが、平底に近いもの（竪穴住居跡061－１）が見られ、ロクロ使用の杯が現れてくる。その多くのものは内外面に赤彩が施され、施されていないものも、内外面に丁寧なヘラ磨きが施される。

本時期から須恵器杯と非ロクロの土師器杯の両者に墨書がみられる。

土師器甕は胴部上半部を強く張った「常総型」の甕が、それまでの在地産の甕に変わって主体的な存在になる。

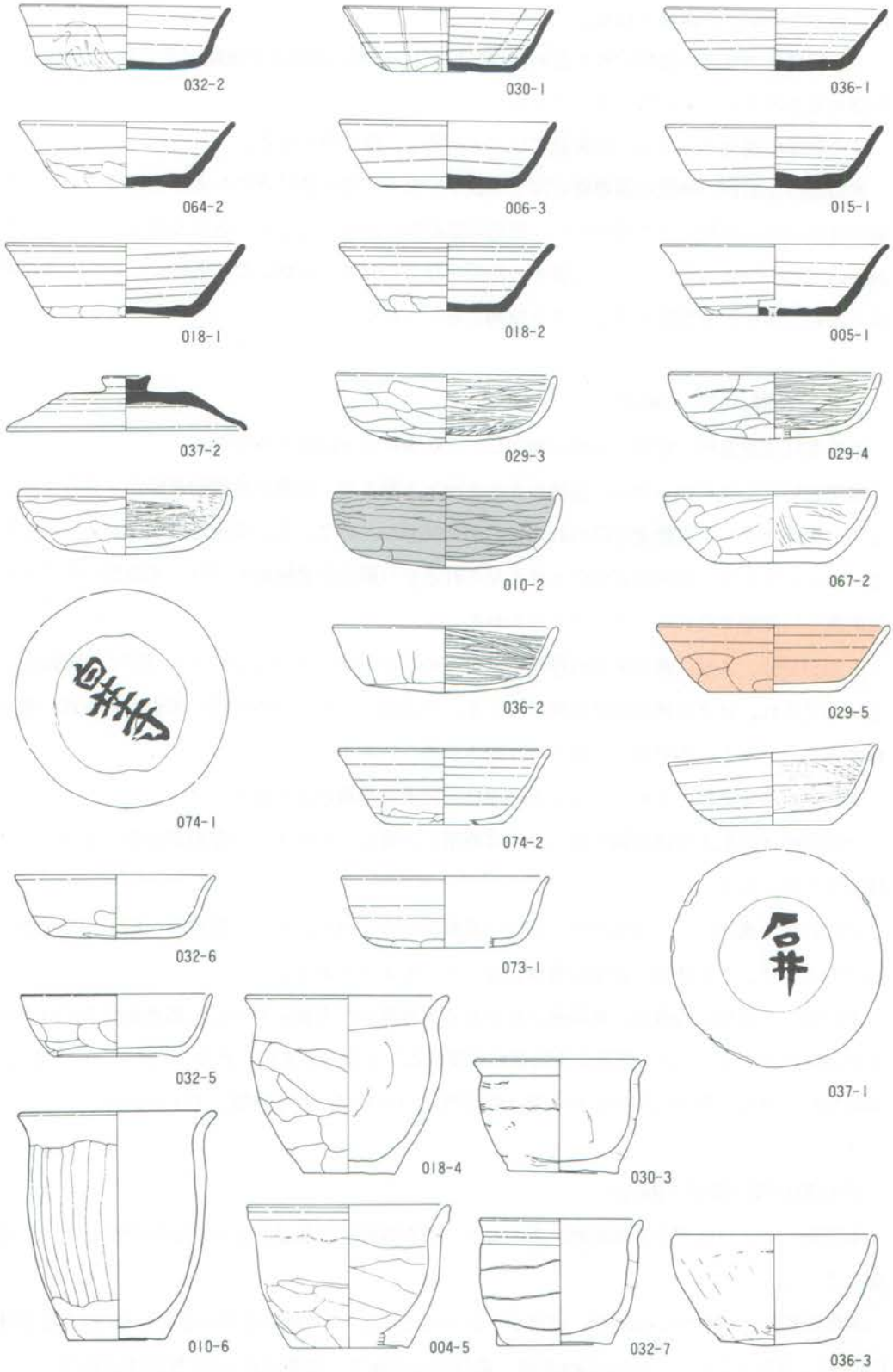
そのほかの遺物としては前時期と同様に鉄製品が多く見られるが、穂摘具や鎌・刀子・鏃といったように、その種類・数量が豊富になってくるようである。

本時期の土器群の特徴は、常陸産と思われる須恵器杯が多量に見られ、須恵器杯蓋ではかえりが消滅すること、ロクロ使用の土師器杯が現れることなどがあげられる。これらのことから、本時期は８世紀の第２四半世紀から第３四半世紀の一部にかかる時期と考えられる。

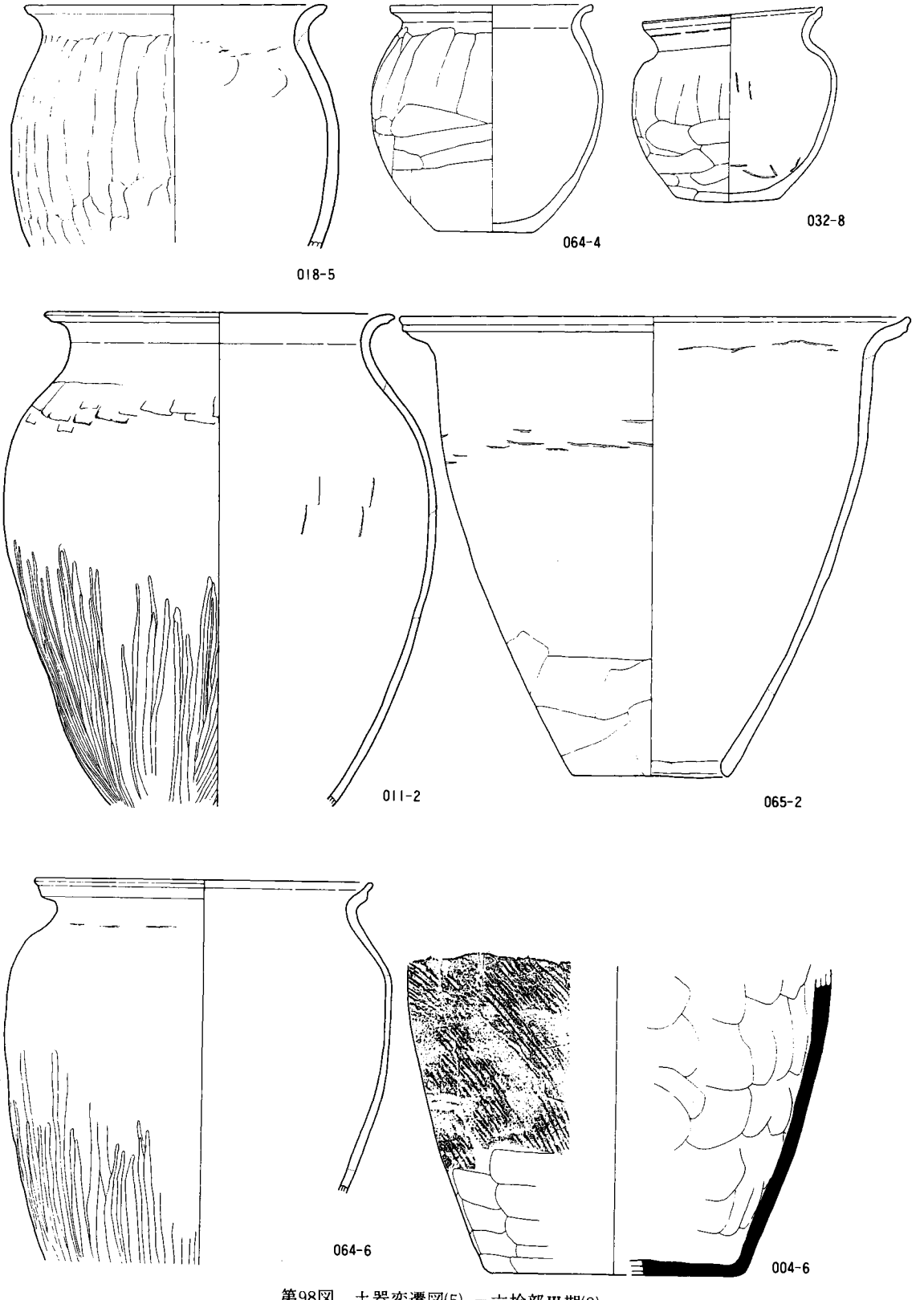
六拾部Ⅲ期（第97～99図）

本時期はロクロ使用の土師器杯が多くなり、須恵器杯との数量的な比率が前時期に比べて均衡してくる。

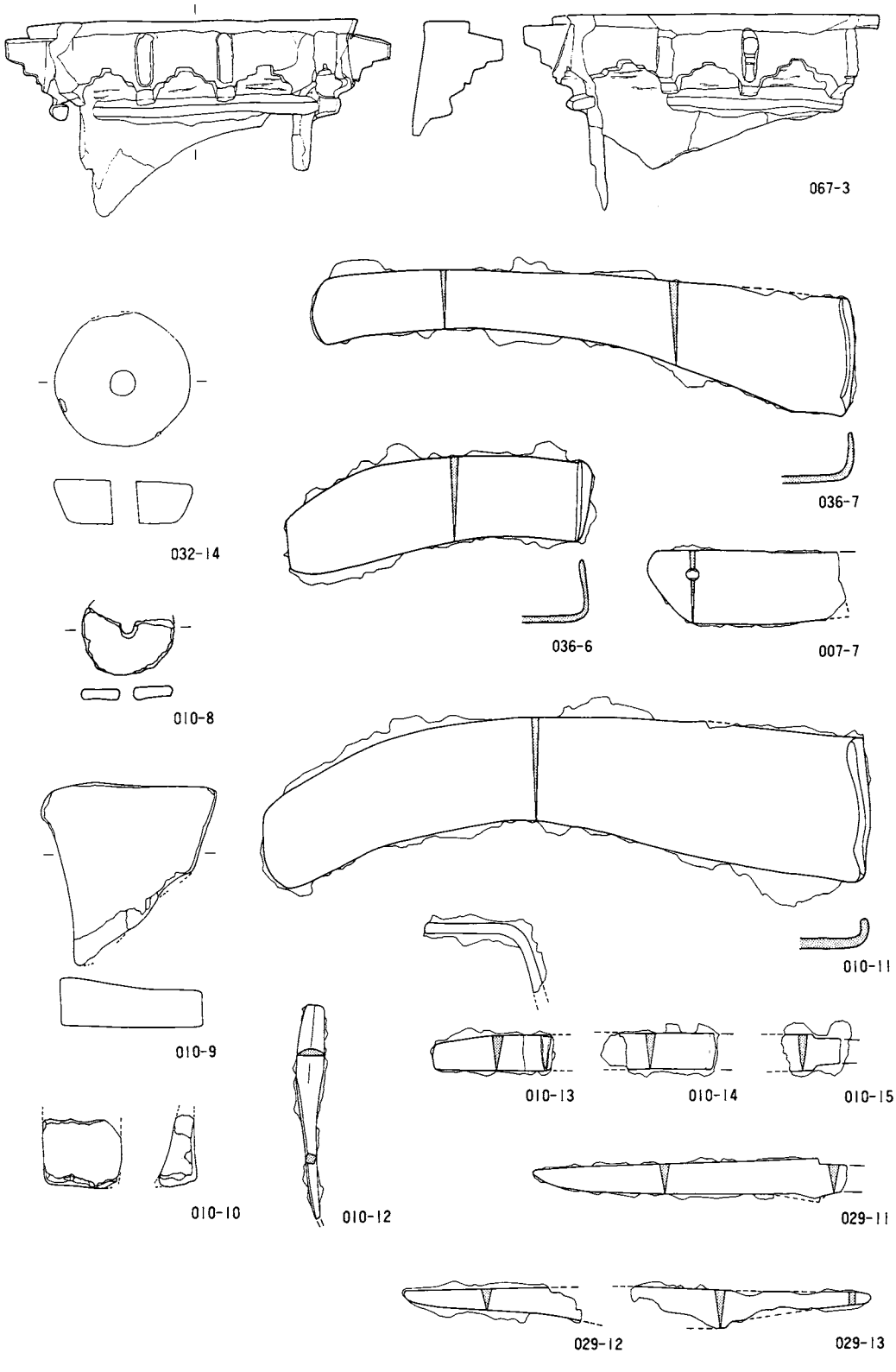
須恵器杯は、口径が13cm前後、底径が7.5～８cm位で、やや箱形の器形をもつ杯（竪穴住居跡030－１、032－２）と、口径が14cm前後、底径８cm前後で、器高が高い杯（竪穴住居跡005－１、018－１・２）が現れる。後者は前時期に主体的に見られた杯からの変化としてとらえることが



第97図　土器変遷図(4) －六拾部Ⅲ期(1)－



第98図　土器変遷図(5) －六拾部Ⅲ期(2)－



第99図　土器変遷図(6) －六拾部Ⅲ期(3)－

できる。これらの多くは前時期と同様に常陸産と思われるものが多いが、県内産と思われるような杯もある。須恵器高台付き杯は今回の調査では良好な資料を得ることはできなかったが、佐倉市教育委員会が調査した遺構の中の10号住居跡（以下佐倉市10号と略す）出土のものは、本時期の資料と考えられるものである。

土師器杯は、非ロクロの杯は体部がやや深く、平底あるいはそれに近いものがある。内外面あるいは内面に黒色処理が施される杯が見られ、内面に丁寧なヘラ磨きが施される杯も多く、これらも黒色処理が施されていた可能性があり、そう考えるとかなりの割合で黒色処理が施されていたことになる。ロクロ使用の杯は前時期と同様に内外面に赤彩が施される杯が見られる。これとは別に口径が12～13cmで、体部中位まで手持ちヘラ削り調整が施される、箱形の器形をもつ杯（竪穴住居跡032－5・6）が現れる。この変化は須恵器の変化と期を一にするもののと思われる。

墨書は非ロクロ及びロクロ使用の杯にみられ、その中には「白井寺」のように仏教との関わりの深さを思わせる文字がみられる。

土師器甕は「常総型」の甕が主体となり、在地産の甕は少なくなる。土師器甑の中にも胎土・色調・調整技法などが「常総型」の甕に極めて類似した甑がみられる。また、佐倉市10号、同11号などの資料からも、本時期に須恵器甕の量が増加してくる傾向がみられる。

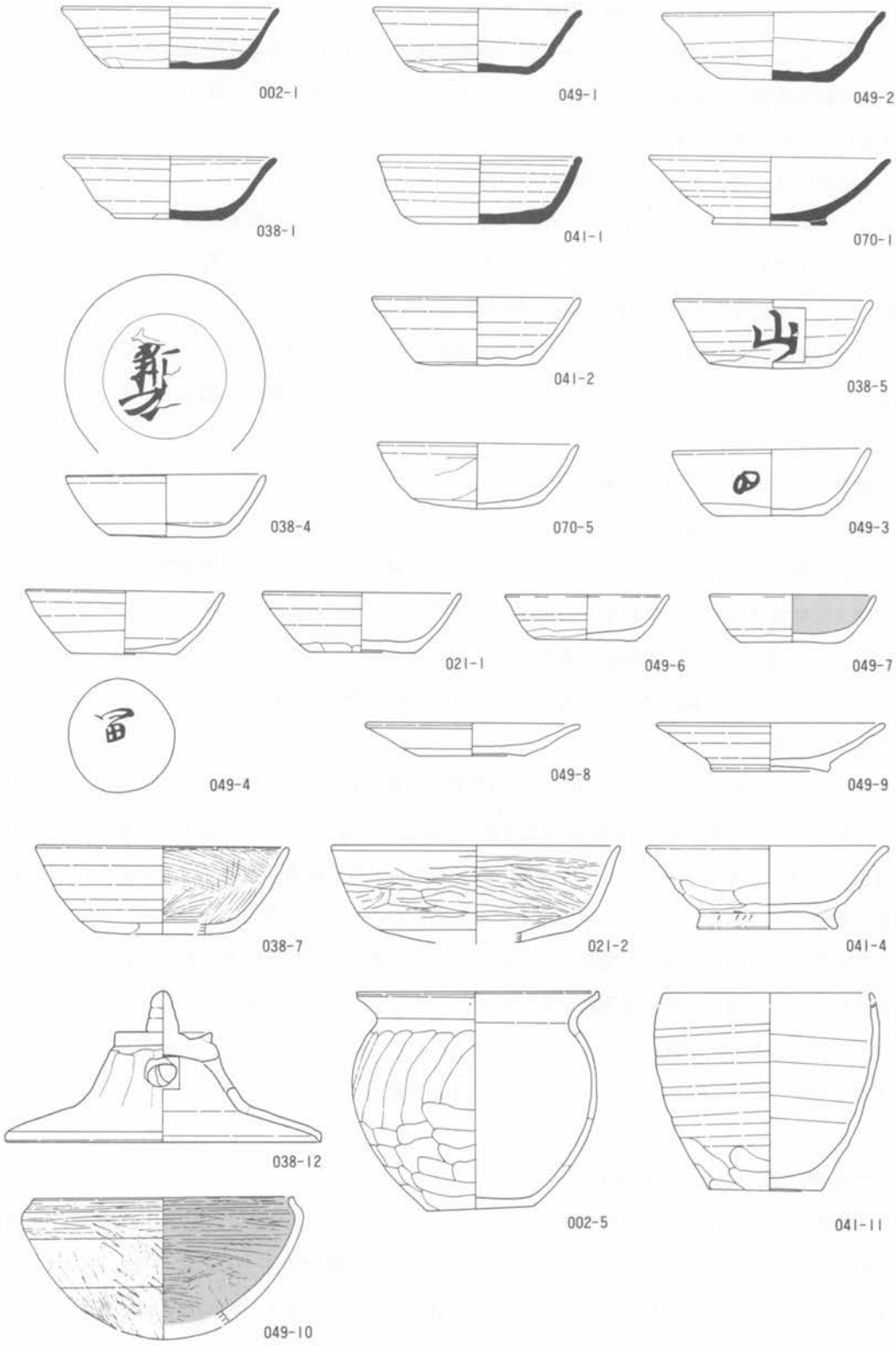
土師器鉢の中に、器面の外面に輪積み痕を明瞭に残す特徴的な鉢（竪穴住居跡030－3・032－7）が見られる。

そのほかの遺物としては、土坑067から須恵質の瓦塔部材が出土しており、作り方や表現方法が比較的丁寧で忠実である。表採品の須恵質の瓦塔部材や竪穴住居跡070出土の須恵質の瓦塔屋蓋部の部材は、本品と同一のものと考えるのが妥当かと思われる。鉄製品は前時期と同様に種類・数量ともに豊富であるが、鏃の出土がほとんどみられなくなる。

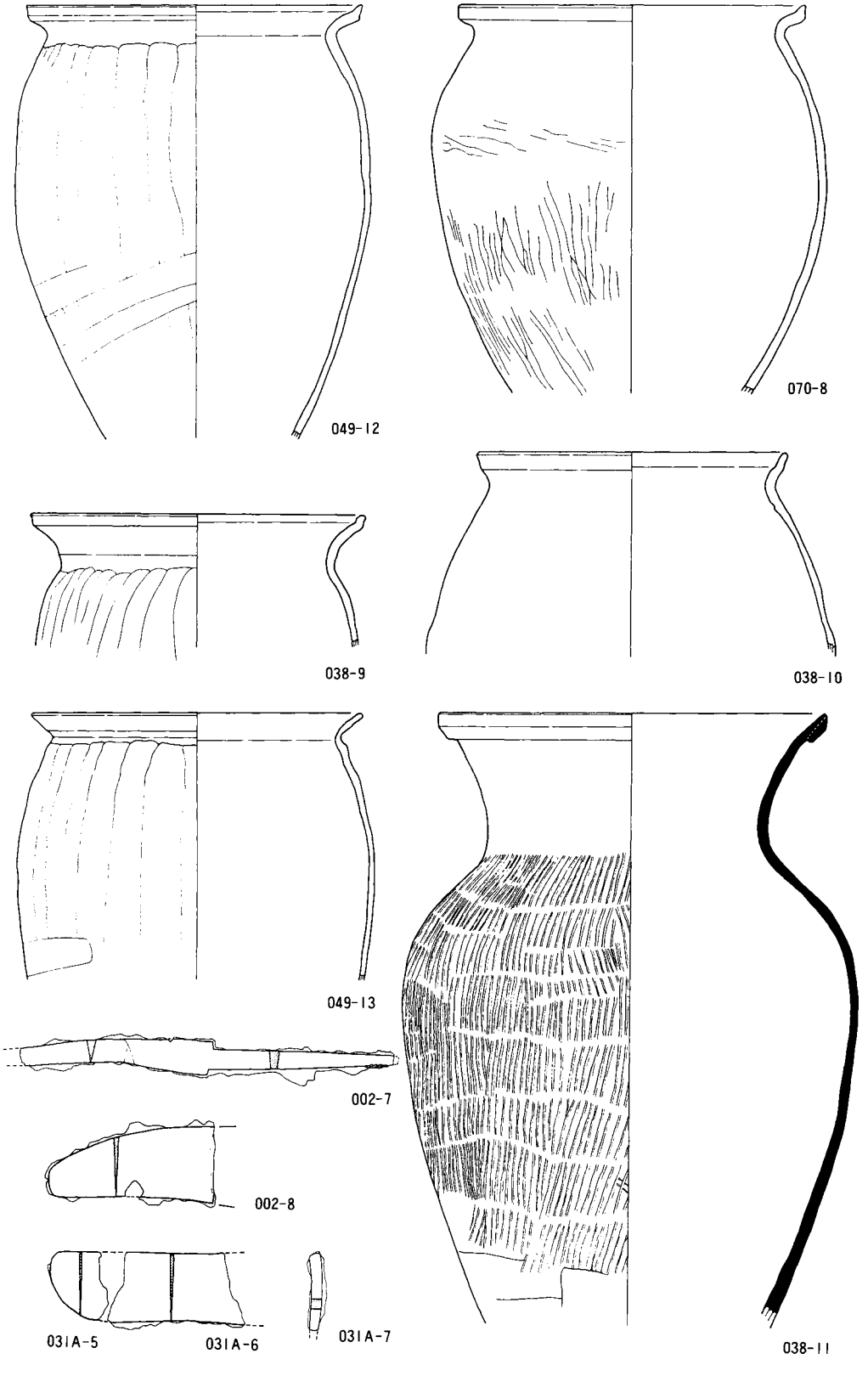
本時期の土器群の特徴は、箱形に近い器形をもつ須恵器杯や器高の高い杯が現れること、土師器杯はロクロ使用の杯が普遍的にみられるようになり、須恵器に類似したような箱形の器形をもつ、小振りの杯が現れることなどがあげられる。これらのことから、本時期は8世紀の第3四半世紀の後半から8世紀いっぱいまでの時期と考えられる。

六拾部Ⅳ期（第100・101図）

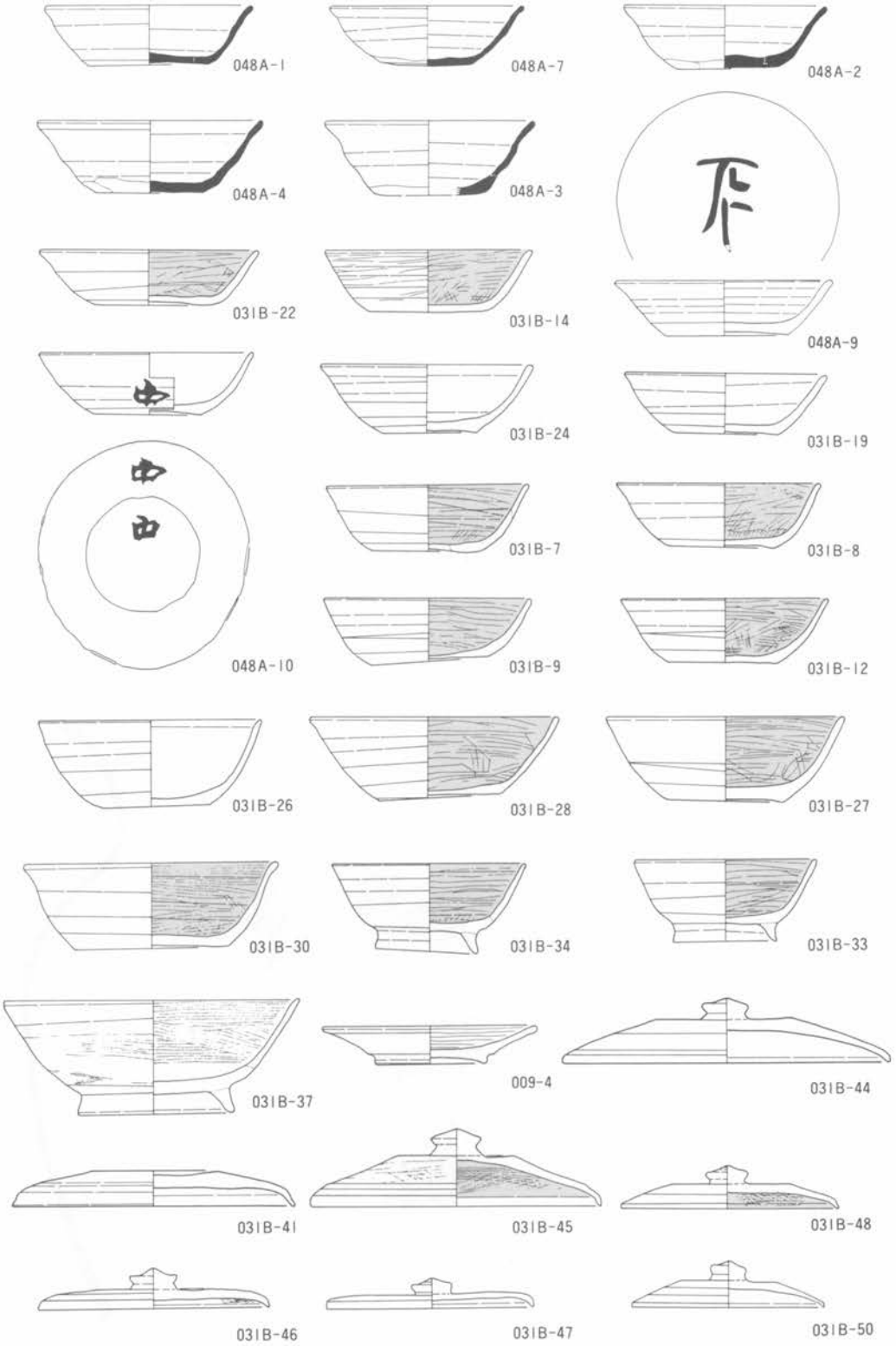
須恵器杯は前時期から引き続き箱形の器形をもつものが見られるが、口径が13cm前後、底径が6.5～8cmで、体部下半部に丸みをもち、口縁部が外反気味に立ち上がる杯が現れる。これらは「くすべ」焼成や還元炎焼成になりきれない須恵器のものが多く、前時期までの常陸産と思われるものに替わって、県内産と思われる杯が多くみられる。また、その特徴から黒笹14号窯産と思われる灰釉陶器椀が本時期の土器と伴っている。



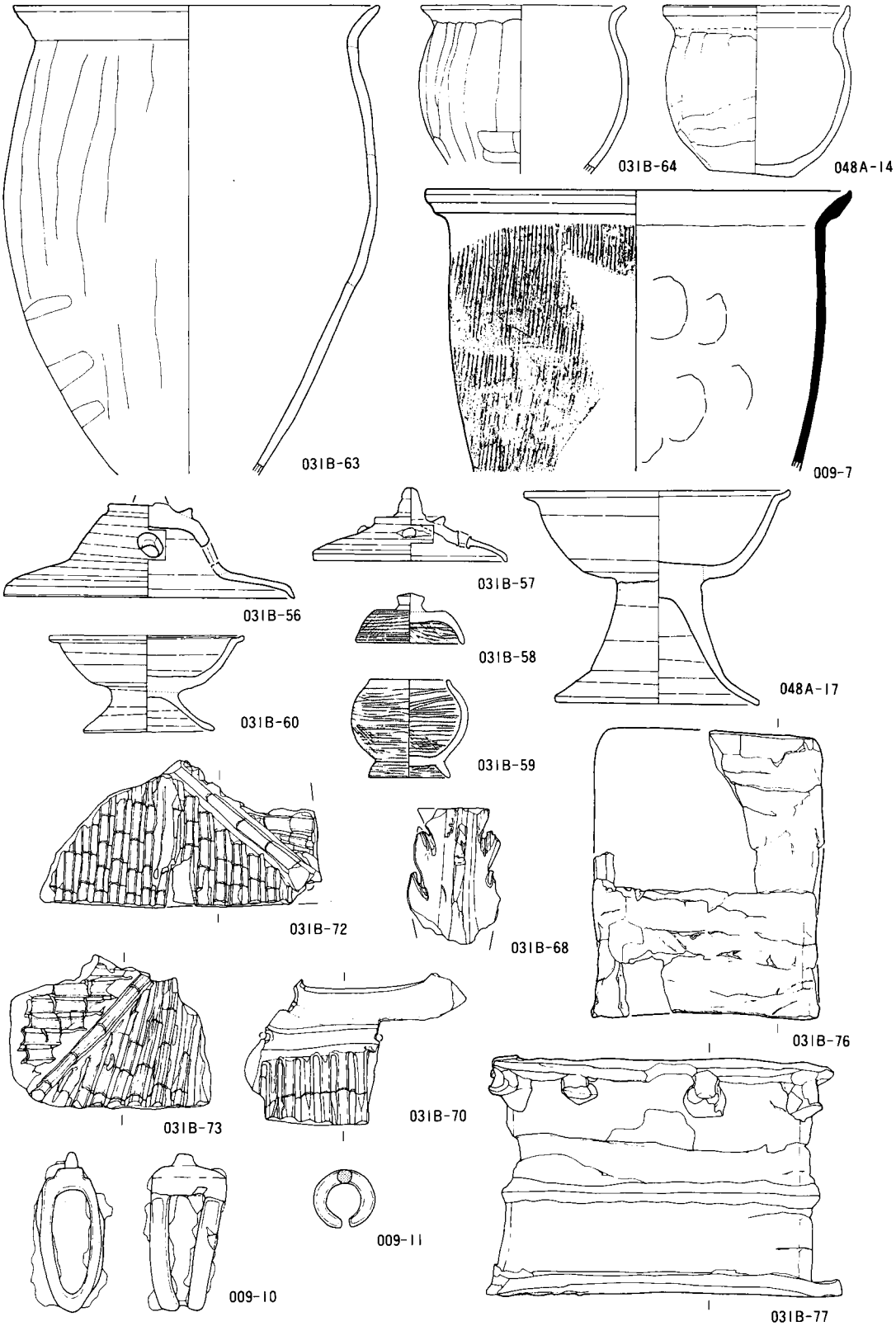
第100図　土器変遷図(7) －六拾部Ⅳ期(1)－



第101図　土器変遷図(8) －六拾部Ⅳ期(2)－



第102図　土器変遷図(9) －六拾部Ⅴ期(1)－



第103図　土器変遷図(10) －六拾部Ⅴ期(2)－

土師器杯は口径が12.5cm前後で、体部がやや内湾気味に立ち上がる杯が主体を占める。このほかに、口径が10cm前後の小振りの杯と大振りの杯がみられ、これらの一部には内面に黒色処理が施されるものがある。本時期から土師器皿が現れ、高台付きと無高台の2種類がある。

墨書は前時期や次の時期のものと比べると、筆の運び方などから、文字を書き慣れた人の存在を思わせるものがある。

土師器甕は「常総型」の甕にかわって、器壁が薄く、胴部外面に縦方向の長いヘラ削りが施され、よく焼き締まった甕が主体となる。須恵器甕や甑は佐倉市7号や同13号などの出土土器を含めると、その出土数量が全時期を通して最も多い。今回調査した遺構でも、その破片資料の傾向からも同様なことがうかがえる。これらは「くすべ」焼成や還元炎焼成になりきれない須恵器が主体を占めている。

そのほかの遺物の中には、香炉蓋や仏器を模倣したと考えられる鉢があり、前時期に引き続き仏教の影響を受けたと考えられる遺物がみられる。鉄製品は前時期に比べてかなりその数量が減っている。

本時期の土器群の特徴は、須恵器杯と土師器杯の数量の割合が逆転し、ロクロ使用の土師器が主体となり、土師器皿が現れる。また、須恵器は常陸産のものが減少し、それに代わって県内産と思われるものが増加する、などのことがあげられる。これらのことと、黒笹14号窯産と思われる灰釉陶器椀の存在などから9世紀の第1四半世紀から第2四半世紀の一部にかかる時期と考えられる。

六拾部Ⅴ期（第102・103図）

須恵器杯は、口径が12cm前後のもの（竪穴住居跡048A－1・2・7）と、13cm前後のやや大振りのもの（竪穴住居跡048A－3・4）とがあるが、底径はいずれも7cm前後であり、体部下半部にやや丸みをもち、口縁部が外反する特徴をもつものが主体を占める。これらは、その大部分が県内産と思われ、その特徴から中原窯あるいは宇津志野窯産と思われるものである。

土師器杯は、口径が12.5cm前後、底径が6.5cm前後で、体部下半部に回転ヘラ削り調整が施されるものが主体となり、これらの杯は内面ヘラ磨きの後に、黒色処理が施されるものが多い。また、前時期にわずかにみられた大振りの杯の存在が明確になり、これもほとんどが内面に黒色処理が施される。高台付き杯も、杯の変化に対応して、大小の2種類がみられる。土師器杯蓋が多くみられ、つまみの付くものとつまみの付かないもの、口径の大きいものと小形のものなどのバラエティーがあるが、いずれにも内面に黒色処理が施されるものがある。しかし、これらがすべて瓦塔部材や香炉蓋などの仏教に関わる遺物を多数出土した竪穴住居跡031B出土であることから、本時期の普遍的な特徴であるかどうかは、慎重に判断すべきかと思える。

土師器甕は前時期と比べてさらに「常総型」の甕が少なくなり、ほとんどみられなくなる。

土師器甕と須恵器甕・甑のあり方は基本的に前時期と同じ傾向にある。

そのほかの遺物の中には、香炉蓋、小壺、仏器模倣と思われる高杯、土師質の瓦塔部材などがある。土師質の瓦塔部材は六拾部III期にみられた須恵質のものに比べると、全体の作りや表現方法がかなり簡略化あるいは退化したものである。また、仏器模倣と思われる高杯は、市原市萩ノ原遺跡出土のものに類似したものである。鉄製品は、竪穴住居跡の数が少ないこともあり、数量はごくわずかである。

本時期の土器群の特徴は、県内産（特に中原窯あるいは宇津志野窯）と思われる須恵器杯が普遍的にみられること、定型化した小振りの土師器杯と大振りの土師器杯の2種類が明確にみられること、などがあげられる。これらのことから、本時期は9世紀の第2四半世紀の後半から第3四半世紀にかかる時期と考えられる。

第2節　集落の変遷

前節において須恵器・土師器を中心にして、その時期的な変遷とそれらにともなう鉄製品のあり方を概観し、第Ⅰ期から第Ⅴ期までの5つの時期に分けることができた。ここでは、その区分に基づいて、それぞれの時期に帰属する竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの遺構のあり方を概観し、六拾部遺跡の集落の性格とその変遷について考えていきたい。なお、佐倉市6号、同9号、同15号、同17号、同19号、竪穴住居跡034、同072は出土遺物が少なく、時期を特定することができなかった。

六拾部Ⅰ期（第104図）

本時期に属する遺構は竪穴住居跡だけで、佐倉市3号、014、017、022、039の5軒である。

遺構の占地状況は017が東側の傾斜面中である以外は、すべて台地縁辺部あるいは平坦面上に造られており、4軒が西側に開く大きな弓状に配置されている。規模は017が7.63m²と最も小さく、それ以外はおよそ20m²以上で、最も大きい022は36.90m²を測る。017は谷側の壁の立ち上がりに若干不明瞭な部分があり、実際はもう少し規模が大きかったものと考えられる。カマドの位置は概ね壁の中央部で、017を除いてカマドの対壁の中央部には出入口ピットが造られる。遺物で特に注目される点としては、最も規模の小さい017から刀子3点が出土していることが挙げられる。

六拾部Ⅱ期（第105図）

本時期に属する遺構も前時期と同様竪穴住居跡だけで、佐倉市4号、同5号、同12号、003、008、012、013、015、019、020、026～028、040、045、062、071の17軒である。本時期から竪穴住居の数が増加するが、013と015は近接しており、同時に存在したとは考えられないことか

第104図　集落変遷図(1) ―六拾部Ⅰ期―

第105図　集落変遷図(2) ―六拾部Ⅱ期―

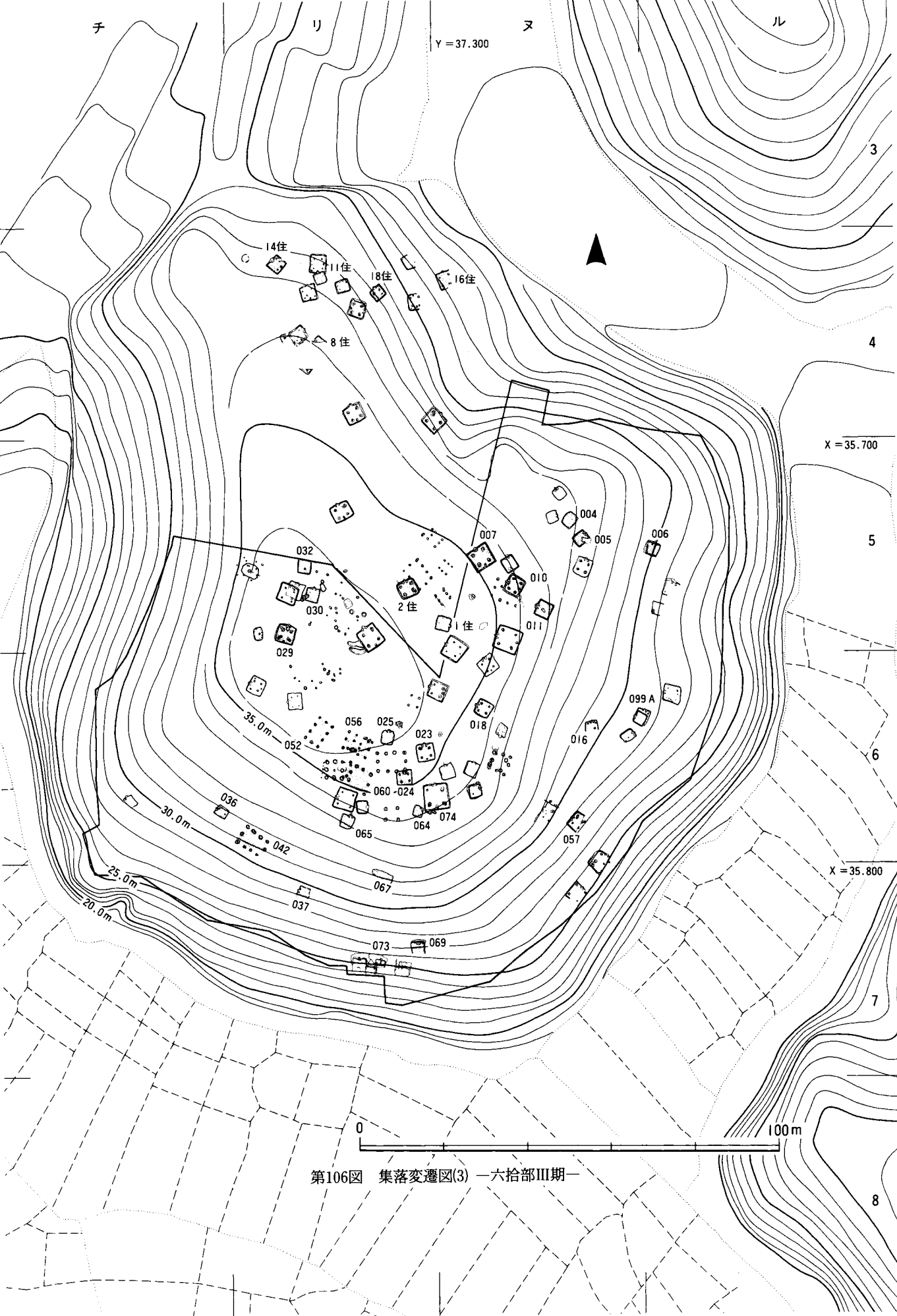
ら、本時期の中に若干の新旧があるものと思われる。

遺構の占地状況は台地中央の平坦部、北側の台地の付け根部分、南から東側にかけての傾斜面中の、大きく3つの地区に分けることができる。本時期以降、基本的にそれぞれの地区のなかで竪穴住居跡の変遷がみられる。竪穴住居跡の平面規模は15㎡前後が平均的であり、前時期と比較して若干小さくなっている。最も規模大きいのは013の34.70㎡で、それに続くのは027の28.16㎡であるが、これらは2軒とも台地中央部の平坦面に位置している。013からは「石田」と墨書された土師器杯が2点出土しており、また027からは鉄鏃や穂摘具、鎌などの鉄製品が比較的多く出土しているなど、明らかに他の竪穴住居跡との間には差異がみられる。平均値を下回る小さな部類にはいる竪穴住居跡には柱穴はみられず、出入口ピットについても同様の傾向がうかがえる。これらの小規模なものは全体の1/4程度に過ぎず、大部分は4本の主柱穴と出入口ピットを持っている。

六拾部Ⅲ期（第106図）

本時期に属する遺構は竪穴住居跡30軒、掘立柱建物跡5棟、土坑2基である。竪穴住居跡は佐倉市1号、同2号、同8号、同10号、同11号、同14号、同16号、同18号、004～007、010、011、016、018、023～025、029、030、032、036、037、057、064、065、069、073、099A、掘立柱建物跡は042、052、054、056、060、土坑は067、074である。本時期は遺構数が最も多いが、これは想定した年代幅が広いことにも起因しており、前時期と同様に新旧があると考えられる。また、本時期から掘立柱建物跡も存在する。掘立柱建物跡はその主軸方向や占地場所などから3群に分けられるが、竪穴住居跡との重複関係や瓦塔の出土した土坑067の長軸方向との共通性などから、この4棟を本時期に属するものとした。竪穴住居跡は前時期と比べて全体的にさらに規模が小さくなり、最大でも007の28.77㎡である。また、主柱穴や出入口ピットのないものが14軒と約半数を占めている。

本時期の段階には、土坑067出土の須恵質の瓦塔や土坑074出土の「白井寺」と墨書された丸底の土師器杯のように、明らかに寺に関係する遺物がみられる。この「白井寺」については、本遺跡の周辺に「白井」に通じるような地名が残っておらず、また、他に類例をみないので、「白井寺」と呼ばれていた「寺」がどこかにあって、そこからもたらされたものなのか、あるいはこの地に建てられた建物がそう呼ばれていたものなのかなどについては、今後の課題とせざるを得ない。須恵質の瓦塔が出土した土坑は傾斜面中に造られ、谷側の壁の立ち上がりがあまり明確ではないが、山側の壁の立ち上がりをみる限りでは、決して深いものではない。おそらくは、この土坑を覆う簡単な上屋が架けられ、その中に瓦塔が置かれていた「村のお堂」のような建物であったと思われる。また、この土坑内には炉跡状の焼土の集中箇所があり、火が焚かれていたものと思われる。「白井寺」の墨書土器を出土した土坑074は台地の縁辺部にあり、



第106図　集落変遷図(3) ―六拾部III期―

竪穴住居跡022などによって一部破壊されているが、長軸方向が土坑067と同一である。また、掘立柱建物跡042、056、060とは桁行き方向がほぼ一致しており、052はそれらとは直角に桁行き方向を変えて建てられている。これらはいずれも2間×3間の側柱建物で、決して規模の大きなものではないが、土坑074とともに土坑067の「村のお堂」に関係した建物群であったと考えられる。1間×1間の054はこれらとは若干軸方向を異にしており、本時期以降にこの種の掘立柱建物跡が継続してみられることから、「村のお堂」が土坑から1間×1間の掘立柱建物跡に変わったものと考えられる。

六拾部Ⅳ期（第107図）

本時期に属する遺構は竪穴住居跡11軒、掘立柱建物跡4棟、土坑1基である。竪穴住居跡は佐倉市7号、同13号、002、021、031A、038、041、048B、049、070、099B、掘立柱建物跡は043、050A、051、068、土坑は053である。竪穴住居跡は031Aと041を除いて12㎡以下の小形のもので、主柱穴や出入口ピットがなく、本時期から主柱穴や出入口ピットのない小形の竪穴住居跡が一般的になるようである。台地の南側にある掘立柱建物跡043、051、063と、竪穴住居跡038、070は軸方向が一致しており、関連性の強い建物群と考えられるものである。

本時期に属する寺関係の遺物は、竪穴住居038出土の土師器香炉蓋、同049出土の仏器模倣の鉢形土器がある。前時期にみられたような寺に関係する内容を示す墨書はないが、038－4・5や049－4の文字は、前時期の文字と比べると明らかに文字を書き慣れた人物の手によるものと思われ、それらが先に述べた寺関係の遺物と同一遺構から出土していることから、一定の知識層（僧侶）の存在を想定し得るものである。

遺構としては、これらの遺物が出土した038・049とその周辺にある掘立柱建物跡が、寺に関係する一連の建物と考えることができる。前時期では須恵質の瓦塔が出土した土坑067を「お堂」的施設と考えたが、本時期は出土遺物から想定することは難しい。ただ、「新万」の墨書土器や土師器香炉蓋を出土した038に隣接する1間×1間の掘立柱建物跡068、「ロ」・「ロ」の墨書土器や仏器模倣の鉢形土器を出土した049に隣接する1間×1間の掘立柱建物跡050Aなどが「お堂」としての機能を備えていたものと考えられる。しかし、同時に二つの「お堂」が存在していたとは考えにくいので、前時期からの継続性を考えると、068から050Aへといった新旧関係を考えることができる。

六拾部Ⅴ期（第108図）

本時期に属する遺構は竪穴住居3軒、掘立柱建物跡6棟であり、竪穴住居跡の数は前時期に比べて大きく減少し、特に009を除くと傾斜面には造られなくなる。竪穴住居跡は009、031B、048A、掘立柱建物跡は佐倉市1～4号、050B、061である。前時期までおおむね中心的な位置

第107図　集落変遷図(4) ―六拾部IV期―

第108図　集落変遷図(5) ―六拾部Ⅴ期―

を占めていた台地の南側から、掘立柱建物跡は台地の北東側に移り、あたかも南西方向に広場を形成するかのように、遺構が造られる。本時期を境に本台地上からは集落が消滅し、遺構は造られなくなる。

本時期の寺に関係する遺物は、竪穴住居048Aから仏器模倣の土師器高杯や須恵器杯が多く出土している。また、この時期までほとんどそれらの遺物のみられなかった台地中央より北側の位置にある竪穴住居跡031Bからは、土師質の瓦塔や土師器香炉蓋、仏器模倣の高杯、小壺などの遺物が大量に出土している。これらのなかには内面に黒色処理が施された土師器杯や土師器杯蓋が大量に含まれており、これ以前の竪穴住居跡とは様相を異にしている。

建物としては、前時期の049と050Aとは位置関係は逆になっているものの、048Aと掘立柱建物跡050Bが引き続き「お堂」とその関連の建物として存在していたものと考えられるが、これに続くような1間×1間の建物は建てられない。これに代わって、031Bの東に3間×2間の佐倉市1号掘立を中心にしてその南東及び北東側にやや規模の小さな2間×1間の掘立柱建物跡が3棟建てられる。これらが048Aと050Bとの組み合わせの次の段階に建てられた「お堂」とその関連の建物と考えられる。031B出土の土師質瓦塔はこの掘立柱建物跡の中に安置されていたものと考えられるが、その機能を失った時点で、一括して廃棄されたものと思われる。

本遺跡の集落の形成は8世紀初頭に始まり、9世紀の中葉から後半には消滅し、その最盛期は8世紀の後半から9世紀の前半とみることができる。本集落は8世紀に入って新しく形成されたものであり、近接する南広遺跡や腰巻遺跡、北側に続く台地上にある高崎新山遺跡が古墳時代後期から継続して集落が営まれている点と異なった様相を見せている。本集落の成立については、そもそもの台地の形状からみて、平坦地の面積があまり広くないことから、古墳時代にあっては竪穴住居跡や古墳を造る場所として選択されることがなかったように思える。

本集落が大きく発展するのは8世紀の中葉からで、台地上だけではなく、傾斜面中にも竪穴住居跡が造られ、以後も継続していくものである。また、これは近接する南広遺跡にみられる様相とも一致するものでもある。本遺跡を特徴付ける寺に関係する遺構や遺物の存在は、8世紀の後半～9世紀の中葉・後半まで継続してみられ、本集落はその消長と軌を一にしている。これらの内容は、いままでみてきたように、建物としては竪穴住居跡や掘立柱建物跡、土坑から構成されており、その掘立柱建物跡はいずれも側柱構造のもので、決して規模の大きなものではない。また、遺物としては、六拾部III期が「白井寺」の墨書土器と須恵質の瓦塔、続く六拾部IV期が土師器香炉蓋と仏器模倣鉢、最後の六拾部V期が土師質の瓦塔や土師器香炉蓋、仏器模倣高杯、小壺といった変遷がみられる。特に瓦塔では、須恵質から土師質という変化以上に、その表現方法がかなり簡略化されている。また、寺に関連する遺物が、他の時期と比較するとかなり増えているが、基本的には土師器による模倣という域を出ていないといえる。墨書

土器についても、六拾部III期にみられた「白井寺」以外には、直接寺と関連した内容を書いたものはみられない。

本遺跡の北西には8世紀前半頃の創建と考えられている長熊廃寺があり、時期的には本遺跡の初期段階に平行するものである。そこからは須恵質の瓦塔と「高罡寺」と墨書された土師器の丸底の杯が出土しており、六拾部III期における寺に関連した遺物のあり方と共通するものがある。本遺跡における寺に関連する遺物等は、長熊廃寺の影響の下に、集落内における「村のお堂」として成立し、その内容から最も身近な仏教施設としての役割を担っていたものと考えられる。また、その成立の背景としては、本遺跡や隣接する南広遺跡、腰巻遺跡などに共通した谷津田の開墾に向けた集落の展開と無関係ではないと思われる。

主要参考文献

『佐倉市長熊廃寺跡確認調査報告』　千葉県教育委員会　1986
『六拾部遺跡発掘調査報告書』　佐倉市教育委員会　1986
『佐倉市腰巻遺跡』　（財）千葉県文化財センター　1987
『千葉県佐倉市　高崎新山遺跡発掘調査報告書』（財）印旛郡市文化財センター　1987
『佐倉市南広遺跡』（財）千葉県文化財センター　1993
『房総考古学ライブラリー7　歴史時代（1）』（財）千葉県文化財センター　1993

第２表　文字資料一覧

出土位置	挿図No.	器種名	部　位	文字	方法	備　　考
竪穴013	13	土師器杯	底部外面	石田	墨書	
竪穴013	14	土師器杯	底部外面	石田	墨書	
竪穴015	4	須恵器杯	底部外面	□	墨書	椅か？
竪穴024	1	須恵器杯	底部外面	由	線刻	由又は甲の意か？
竪穴19	3	須恵器杯	底部外面	―	ヘラ	
竪穴24	2	須恵器杯	底部外面	｜	線刻	
集中035	4	土師器杯	口縁部外面	□	墨書	不明。正位か？
集中035	5	土師器杯	底部外面	□	墨書	不明
集中035	6	土師器杯	底部外面	□□	墨書	不明
竪穴037	1	土師器杯	底部外面	石井	墨書	内面黒色磨研
竪穴038	5	土師器杯	体部外面	山	墨書	正位
竪穴038	2	須恵器杯	底部外面	□	ヘラ	下か？
竪穴038	4	土師器杯	底部内面	新万	墨書	内外面全部位に文字・筆ならしと思われる墨痕あり
竪穴048A	9	土師器杯	底部内面	下	墨書	「万呂」か？
竪穴048A	10	土師器杯	底部外面	由	墨書	灯明皿として使用
			体部外面	由	墨書	正位
竪穴048A	13	土師器杯	底部内面	□	墨書	不明
竪穴049	3	土師器杯	体部外面	由	墨書	中か？
竪穴049	4	土師器杯	底部外面	冨	墨書	
竪穴064	1	須恵器杯	底部外面	□	ヘラ	「×」か？
竪穴065	1	土師器甕	胴部	□	ヘラ	「キ」か？
土坑074	1	土師器杯	底部外面	白井寺	墨書	灯明皿として使用
遺構外	11	土師器杯	底部外面	冨	墨書	トレンチ７
遺構外	14	土師器杯	底部外面	□□	墨書	トレンチ１
			底部内面	□	墨書	
遺構外	15	土師器杯	底部外面	冨	墨書	ヌ６－３グリッド
遺構外	16	土師器杯	底部外面	冨	墨書	ヌ６－16グリッド
遺構外	17	土師器杯	底部外面	□	墨書	表採

第3表　竪穴住居跡計測表

数値＝復元：（　）遺存：［　］長さ・深さ：m　面積：m²　方位：N－W　間仕切溝：本数

遺構番号	主軸長×横軸長	方位	竈位置	床面積	柱内面積	壁高 最大～最小	数	主柱穴 最深～最浅	出入口
002	2.92 × 2.76	42°	中央	7.59		0.74～0.58	0	～	無
003	2.65 × 2.75	291°	中央	7.05		0.39～0.30	0	～	無
004	3.56 × 3.05	318°	中央	10.05		0.52～0.42	0	～	無
005	3.60 × 3.00	312°	左寄り	10.21		0.70～0.28	0	～	無
006	3.22 × 3.51	336°	中央	(10.81)		0.93～0.13	0	～	無
007	5.35 × 5.65	36°	左寄り	28.77	8.32	0.70～0.53	4	0.84～0.50	有
008	4.40 × 3.95	338°	中央	(16.48)	3.71	0.71～0.14	4	0.59～0.43	無
009	3.91 × 3.30	340°	中央			0.49～0.12	0	～	無
010	4.16 × 4.56	60°	中央	18.48	4.98	0.77～0.58	4	0.60～0.59	有
011	3.80 × 3.78	65°	中央	14.15		0.73～0.28	0	～	無
012	(2.40)× 2.94	84°	左角			0.28～0.20	0	～	無
013	6.20 × 5.84	71°	中央	34.70	10.10	0.77～0.40	4	0.62～0.50	有
014	5.30 × 5.12	58°	中央	25.65	5.38	0.51～0.40	4	0.97～0.68	有
015	4.25 × 4.40	37°	中央	17.50	4.13	0.71～0.58	4	0.71～0.58	有
016	2.45 × 3.05	12°	右寄り			0.29～0.09	3	0.42～0.19	
017	3.25 × 2.50	309°	右寄り	7.63		0.33～0.01		～	無
018	3.97 × 3.94	63°	中央	14.49	3.54	0.75～0.45	4	0.48～0.43	無
019	4.45 × 4.30	64°	中央	18.51	4.62	0.69～0.55	4	0.61～0.38	有
020	3.47 × 3.26	339°	中央	10.76		0.59～0.31	0	～	無
021	3.54 × 3.60	19°	中央	11.76		0.43～0.38	0	～	無
022	6.24 × 6.24	8°	左寄り	36.90	13.32	0.65～0.44	4	0.81～0.62	有
023	4.14 × 4.40	8°	左寄り	17.20	4.41	0.28～0.17	4	0.76～0.43	有
024	3.50 × 3.72	4°	中央	12.46	3.29	0.38～0.32	4	0.63～0.45	無
025	3.34 × 3.14	350°	中央	9.68		0.23～0.17	0	～	無
026	3.43 × 4.02	94°	中央	13.40	3.36	0.57～0.34	4	0.21～0.20	無
027	5.46 × 5.42	35°	中央	28.16	7.44	0.68～0.55	4	0.73～0.58	有
028	3.82 × 4.20	65°	左寄り	15.30	3.08	0.41～0.33	4	0.56～0.37	有
029A	4.48 × 4.62	341°	中央	19.50	5.25	0.38～0.24	4	0.71～0.50	有
029B	4.48 × 4.62	341°	中央	19.50	3.76	0.52～0.30	4	0.64～0.44	有
030	3.30 × 3.25	346°	中央	10.24		0.17～0.08	0	～	無
031A	4.56 × 4.72	337°	中央	20.58	5.29	0.63～0.34	4	0.55～0.39	無
031B	4.06 × 4.22	334°	中央			0.24～0.17	0	～	有
032	3.36 × 3.24	353°		10.42		0.35～0.24		～	無
034	2.82 × 2.15	39°	中央	5.85		0.03～0.02		～	無
036	3.18 × 2.47	54°	中央	7.42		0.70～0.18	0	～	有
037	3.00 ×(2.44)	64°	中央			0.41～0.09	0	～	無
038	2.85 × 3.10	270°	中央	8.50		0.56～0.45	0	～	無
039	5.26 × 4.98	69°	中央	24.70	8.23	0.62～0.42	4	0.59～0.52	有
040	4.34 ×(3.10)	318°	中央		8.16	0.71～0.18	4	0.50～0.15	
041	4.68 ×(3.62)	319°	中央		8.25	0.86～0.13	4	0.71～0.35	無
045	4.35 × 4.25	76°	中央	17.19	5.02	0.43～0.10	4	0.29～0.18	有
048A	3.50 × 3.45	291°	左寄り	11.04		0.42～0.16	0	～	無
048B	3.06 × 3.03	15°	右寄り	9.05		0.10～0.04		～	無
049	2.88 × 2.60	150°	中央	6.63	0.97	0.47～0.10	4	0.16～0.02	有
057	3.02 × 4.46	50°	左寄り		3.27	0.65～0.08	4	0.51～0.20	
062	3.63 × 3.34	32°	右寄り	11.76		0.56～0.38	0	～	無

壁　溝	間仕切溝	位　置	貯蔵穴 長軸×短軸×深さ	時期	備　　考
無し	0	無し	× ×	六Ⅰ	
無し	0	無し	× ×	六Ⅱ	
無し	0	無し	× ×	六Ⅲ	
全周	0	無し	× ×	六Ⅲ	
半分以上	0	無し	× ×	六Ⅲ	
全周	0	無し	× ×	六Ⅲ	
無し	0	無し	× ×	六Ⅱ	
無し	0	無し	× ×	六Ⅴ	南西コーナーに小ピット1。
全周	0	無し	× ×	六Ⅲ	
全周	0	無し	× ×	六Ⅲ	
無し	0	無し	× ×	六Ⅱ	
全周	0	無し	× ×	六Ⅱ	
全周	0	無し	× ×	六Ⅰ	
無し	0	無し	× ×	六Ⅱ	
無し	0	無し	× ×	六Ⅲ	
半分以下	0	無し	× ×	六Ⅰ	中央と南コーナーに小ピット各1。
半分位	0	無し	× ×	六Ⅲ	
半分以上	0	無し	× ×	六Ⅱ	
半分以下	0	無し	× ×	六Ⅱ	
半分以下	0	無し	× ×	六Ⅳ	
全周	0	無し	× ×	六Ⅰ	
無し	0	無し	× ×	六Ⅲ	
無し	0	無し	× ×	六Ⅲ	
無し	0	無し	× ×	六Ⅲ	
無し	0	無し	× ×	六Ⅱ	
全周	0	無し	× ×	六Ⅱ	
全周	0	竈右上角	0.38×0.32×0.45	六Ⅱ	
半分以上	0	無し	× ×	六Ⅲ	
半分以上	0	無し	× ×	六Ⅲ	
無し	0	無し	× ×	六Ⅲ	
全周	0	竈右脇	0.38×0.36×0.27	六Ⅳ	
無し	0	無し	× ×	六Ⅴ	
全周	0	無し	× ×	六Ⅲ	南壁寄りにピット1。
無し	0	無し	× ×	不明	西コーナーにピット1。
無し	0	無し	× ×	六Ⅲ	
無し	0	無し	× ×	六Ⅲ	
全周	0	無し	× ×	六Ⅳ	
全周	0	無し	× ×	六Ⅰ	
全周	0	無し	× ×	六Ⅱ	
半分以下	0	無し	× ×	六Ⅳ	径0.6-0.7mのピット3と小ピット1。
半分以下	0	無し	× ×	六Ⅱ	南壁寄りに小ピット3。
無し	0	無し	× ×	六Ⅴ	
半分以上	0	無し	× ×	六Ⅳ	南西コーナーにピット1。
無し	0	竈右脇	0.29×0.27×0.25	六Ⅳ	その他に小ピット2。
全周	0	無し	× ×	六Ⅲ	
全周	0	無し	× ×	六Ⅱ	

数値＝復元：（　）遺存：［　］長さ・深さ：m　面積：m²　方位：N－W　間仕切溝：本数

遺構番号	主軸長×横軸長	方位	竈位置	床面積	柱内面積	壁高 最大～最小	数	主柱穴 最深～最浅	出入口
064	2.78 × 2.42	342°	右角	5.88		0.51～0.23	0	～	無
065	3.24 × 3.36	337°	右寄り	9.94		0.70～0.14	0	～	無
069	2.86 × 3.46	1°	中央			0.74～0.09	0	～	
070	2.26 × 3.77	2°	中央			0.60～0.17	0	～	
071	2.40 × 3.68	358°	左寄り			0.54～0.24	0	～	
072	2.82 × 1.76	262°	中央			0.54～0.09		～	無
073	2.40 × 1.98	82°	中央			0.26～0.12	0	～	
099A	3.72 × 3.44	340°	中央	11.79		0.39～0.16		～	有
099B	2.66 × 3.00	64°	左寄り	7.90		0.42～0.10	0	～	無

第4表　掘立柱建物跡計測表

数値＝復元：（　）遺存：［　］長さ・深さ：m　面積：m²　方位：N－W

遺構番号	規模	構造	桁行長	梁行長	柱間寸法	面積	掘方径	掘方深さ	方位	時期	備考
042	3 × 2	側柱	6.0 ×	4.3	1.8～2.2	24.27	0.5～1.1	0.3～0.8	325°	六III	
043	3 × 2	側柱	6.5 ×	4.3	1.9～2.4	26.80	0.7～1.0	0.5～0.5	1°	六IV	
050A	2 × 2	側柱	4.3 ×	4.0	1.8～2.5	16.31	0.6～1.0	0.3～0.7	68°	六IV	
050B	1 × 1		3.3 ×	3.1	3.1～3.3	8.86	0.9～1.1	0.7～1.6	326°	六V	
051	3 × 2	側柱	5.8 ×	4.0	1.7～2.3	21.83	0.7～1.3	0.5～1.0	357°	六IV	
052	3 × 2	側柱	5.9 ×	3.7	1.8～2.1	21.84	0.5～0.6	0.6～0.7	53°	六III	
054	1 × 1		2.5 ×	2.1	2.1～2.5	5.03	0.5～0.6	0.6～0.8	75°	六III	
056	3 × 2	側柱	6.1 ×	4.0	1.8～2.4	23.48	0.4～1.0	0.2～0.5	335°	六III	
060	3 ×[2]	側柱	5.3 ×	[4.9]	1.4～2.8	[26.29]	0.5～0.8	0.4～0.6	336°	六III	
061	3 × 2	側柱	6.3 ×	3.9	1.9～2.3	23.74	0.5～0.7	0.4～0.6	334°	六V	
068	1 × 1		3.0 ×	2.7	2.7～3.0	7.39	0.8～1.0	0.6～0.6	5°	六IV	

壁　溝	間仕切溝	位　置	貯蔵穴 長軸×短軸×深さ	時期	備　　考
無し	0	無し	×　×	六III	
無し	0	無し	×　×	六III	
半分位	0	竈右上角	0.28×0.24×0.04	六III	
半分位	0	無し	×　×	六IV	
無し	0	無し	×　×	六II	
半分以上	0	無し	×　×	不明	カマド左に小ピット１。
無し	0	無し	×　×	六III	北壁中央に旧カマド。
半分位	0	無し	×　×	六III	カマド右に小ピット２。
半分以上	0	無し	×　×	六IV	

第5表　土器観察表

復元：(　)　現存：[　]　遺存度：%　口径・底径・器高：cm　容量：cm³　産地焼成：Ⅰ＝常陸産　Ⅱ＝県内産　a＝くすべ焼成　b＝還元焼成になりきれない須恵器

遺構番号	挿図番号	実測番号	器種名	遺存度	口径	底径	器高	容量	色調	産地焼成	備考
001	1	1	須恵器甕	5	(33.8)		[9.6]		暗褐色	a	
001	2	2	須恵器甑	5	(32.6)		[5.5]		暗褐色	a	胴上部にツマミ。
001	3	8	土師器甕	15		7.0	[2.7]		暗褐色		
001	4	3	土師器甕	5		(6.6)	[4.9]		暗黄色		底部木葉痕。
002	1	4	須恵器杯	100	13.2	7.8	3.9	297.5	灰色	Ⅰ	
002	2	5	須恵器杯	90	13.8	7.9	4.1	286.2	灰色	Ⅰ	
002	3	6	須恵器杯	40	(13.2)	7.2	4.2	280.4	灰色	Ⅰ	
002	4	2	土師器杯	55	(13.2)	6.8	4.3	286.1	暗褐色		
002	5	1	土師器甕	75	15.0	6.6	13.0	1542.7	明赤色		微粒石多量。火熱を受ける。
002	6	3	土師器甕	5		(9.0)	[3.4]		明赤色		内外面の一部に煤。火熱を受ける。
003	1	2	須恵器杯	100	13.6	7.7	3.9	286.1	灰色	Ⅰ	重ね焼きA。2～3㎜の白い石。
003	2	1	土師器甕	40	(13.1)		[7.4]		明褐色		
004	1	2	須恵器杯	85	13.7	8.1	4.1	286.2	灰色		口縁部と体部内面の一部に煤。
004	2	3	須恵器杯	90	11.0	6.2	3.6	171.0	灰色	Ⅰ	2㎜前後の白い石。
004	3	5	須恵器杯	10	(15.3)	(9.6)	4.2	491.1	灰色	Ⅰ	
004	4	4	須恵器高台付き杯	10		7.7	[2.4]		黒色	Ⅰa	
004	5	1	土師器鉢	20	(12.3)	(7.2)	8.5	(517.9)	褐色		
004	6	6	須恵器甕	20		(15.3)	[19.7]		青灰色	Ⅰ	6㎜前後の白い石。
005	1	4	須恵器杯	100	14.0	8.2	4.4	339.9	灰色	Ⅰ	底部中央に焼成後の穿孔。内面に火襷痕。
005	2	2	土師器杯	30	14.2		3.7	328.9	暗褐色		内外面黒色処理。
005	3	3	土師器杯	15	(13.2)		[3.9]	(323.3)	淡黄色		外面赤彩。口縁の一部に煤。
005	4	1	土師器甕	30	(14.8)		[13.0]		暗褐色		
006	1	3	須恵器杯	30	(14.8)	8.0	4.4	368.2	灰色		微粒石多量。
006	2	4	須恵器杯	40	(14.2)	(8.5)	4.0	318.2	灰色	Ⅰ	
006	3	2	須恵器杯	50	(13.3)	8.2	4.1	318.5	青灰色	Ⅰ	最大4㎜の白い石多量。
006	4	1	土師器甕	25	13.2		[6.5]		暗褐色		微粒石多量。火熱を受ける。
006	5	6	土師器甕	5		(5.8)	[5.2]		暗褐色		微粒石多量。火熱を受ける。
007	1	7	須恵器杯	10	(13.6)	(7.4)	3.5	(242.3)	灰色	Ⅰ	
007	2	6	須恵器杯	15		(9.8)	[2.3]		青灰色	Ⅰ	1～5㎜の白い石。
007	3	4	土師器杯	5	(13.5)		[3.5]		明赤色		内外面赤彩。
007	4	8	須恵器長頸壺	5	(9.8)		[1.7]		灰色		内面に釉。
007	5	5	須恵器甕	5		(12.4)	[3.7]		黒色	Ⅰa	
007	6	1	土師器甕	10		9.0	[4.9]		暗赤色		底部に木葉痕。外面の一部に煤。
008	1	5	須恵器杯	20	(13.8)	(11.0)	[3.9]		青灰色	Ⅰ	重ね焼きA。
008	2	6	須恵器甕	5			[5.0]		灰色		口唇部に自然釉。
008	3	4	須恵器甕	10		(17.1)	[5.0]		灰色	Ⅰ	石英・雲母粒多量。
008	4	3	土師器甕	5	(22.7)		[4.4]		明赤色		火熱を受ける。
008	5	1	土師器甕	15	(21.5)		[11.8]		暗黄色		
008	6	2	土師器甕	5	(23.2)		[10.4]		暗赤色		挿図番号7と同一個体。火熱を受ける。
008	7	11	土師器甕	5		(7.4)	[5.2]		暗赤色		挿図番号6と同一個体。火熱を受ける。
009	1	6	土師器杯	95	13.4	7.4	3.4	238.1	淡黄色		外面に輪積み痕。
009	2	7	土師器杯	90	12.5	6.7	4.1	245.0	淡黄色		
009	3	8	土師器杯	60	12.6	6.9	4.2	289.1	淡黄色		赤色砂粒を含む。
009	4	9	土師器高台付き皿	95	13.2		2.3	102.2	淡黄色		内面の一部に煤。
009	5	3	須恵器甕	5	(24.1)		[6.5]		明褐色	b	
009	6	4	須恵器甕	10	(22.7)		[7.3]		黒色	a	
009	7	2	須恵器甑	10	(27.0)		[17.3]		明赤色	b	

遺構番号	挿図番号	実測番号	器種名	遺存度	口径	底径	器高	容量	色調	産地	焼成	備考
009	8	1	土師器甕	10	(21.8)		[12.5]		明褐色			
009	9	5	土師器小甕	20	(13.1)		[7.1]		明赤色			
010	1	7	須恵器杯	20	(13.6)	(8.2)	3.3	(242.7)	暗灰色		I	1～2㎜の白い石多量。
010	2	6	土師器杯	70	13.9		4.5	432.6	暗黄色			内外面黒色処理。
010	3	5	土師器杯	70	13.4	9.5	4.0	363.8	赤色			内外面赤彩。
010	4	3	土師器甕	5	(22.4)		[4.2]		暗赤色			1～2㎜の白い石多量。
010	5	1	土師器甕	60	23.7		[29.5]		暗黄色			
010	6	4	土師器甕	80	12.0	5.8	13.4	772.5	暗褐色			
010	7	2	土師器甕	10		(9.5)	[18.0]		明褐色			
011	1	3	土師器小甕	35	(12.1)		[10.7]		暗褐色			胴部下半部の外面と内面に煤。
011	2	2	土師器甕	15	21.8		[13.0]		暗褐色			
011	3	4	土師器甕	5		5.4	[2.8]		赤色			火熱を受ける。
011	4	1	土師器甕	70	22.7		[31.4]		明褐色			胴部下半部の外面に煤。石英粒多量。
012	1	1	土師器杯	15	(13.5)		[3.3]	(258.3)	褐色			内外面黒色処理。
013	1	11	須恵器杯	95	14.4	11.0	3.8	386.3	灰色		I	
013	2	14	須恵器杯	40	14.8	(9.0)	3.5	327.0	灰色		I	大粒の石英粒多量。
013	3	13	須恵器杯	70	13.4	8.2	3.9	300.7	灰色		I	大粒の石英粒多量。
013	4	15	須恵器杯	30	(14.0)	(9.4)	3.4	268.8	灰褐色		I	大粒の石英粒多量。
013	5	12	須恵器杯	95	13.0	9.2	3.7	265.0	灰色		I	大粒の石英粒多量。
013	6	19	須恵器杯	20	(14.0)	(10.0)	4.1	(359.9)	灰色		I	
013	7	21	須恵器杯	10	(13.0)	(9.0)	3.7	(305.2)	灰色		I	
013	8	22	須恵器杯	10	(13.3)		[3.8]		灰色		I	
013	9	16	須恵器杯	20		9.4	[3.1]		暗灰色		I	大粒の石英粒多量。
013	10	10	土師器杯	5	(14.2)	(10.4)	[3.4]	(293.2)	淡黄色			内外面赤彩。
013	11	8	土師器杯	30	(14.2)		3.1	(266.5)	暗褐色			微粒石多量。
013	12	9	土師器杯	10	(14.5)		[3.4]	(327.0)	明褐色			
013	13	25	土師器杯	90	15.0		3.4	327.4	明褐色			底部外面「石田」墨書。
013	14	26	土師器杯	45	(15.5)		3.1	(338.2)	明褐色			底部外面「石田」墨書。
013	15	6	土師器壺	5	(7.8)		[5.7]		明褐色			
013	16	4	土師器鉢	20			[11.7]		明褐色			
013	17	1	土師器甕	15	(23.0)		[10.3]		褐色			火熱を受ける。
013	18	7	土師器甕	20	(26.8)		[12.7]		明褐色			火熱を受ける。
013	19	2	土師器甕	10		(8.4)	[13.0]		褐色			底部に木葉痕。内面の一部に煤。
013	20	3	土師器甕	10		(9.7)	[7.5]		淡黄色			底部に木葉痕。0.5～1㎜の白い石多量。
014	1	7	須恵器杯	70	(11.4)	8.5	3.1	183.7	灰色		I	
014	2	6	土師器杯	100	10.2		4.4	190.9	黒色			内外面黒色処理。
014	3	4	土師器鉢	100	8.5	5.3	8.7	422.7	明褐色			火熱を受ける。微粒石多量。
014	4	3	須恵器長頸壺	35					灰色			内外面の一部に釉。
014	5	9	須恵器杯蓋	20	(15.0)		2.8		灰色		I	石英粒多量。
014	6	1	土師器甕	60	20.8	(8.4)	32.5	(7166.8)	暗褐色			2～3㎜の小石多量。内外面に煤。火熱を受ける。
014	7	2	土師器甕	40	(19.8)		[31.8]		褐色			外面の一部に煤。火熱を受ける。
014	8	5	土師器甕	10		7.9	[4.3]		赤色			1～2㎜の白い石。
014	9	8	土師器甕	5		5.9	[4.0]		明褐色			
015	1	10	須恵器杯	70	13.3	8.0	3.9	273.6	青灰色			
015	2	11	須恵器杯	60	(13.5)	8.8	3.8	265.6	灰色			
015	3	9	須恵器杯	80	13.8	8.6	3.8	284.0	灰色		I	
015	4	18	須恵器杯	60	(13.6)	(8.2)	3.7	281.0	灰色		I	底部外面「椅」墨書。1～1.5㎜の白い石。
015	5	12	須恵器杯	15	(14.0)	(9.0)	[3.5]	(279.5)	青灰色			

遺構番号	挿図番号	実測番号	器種名	遺存度	口径	底径	器高	容量	色調	産地	焼成	備考
015	6	13	須恵器杯	15	(14.0)	(9.4)	[3.4]	(264.9)	青灰色			
015	7	5	土師器杯	45	(14.2)		[3.7]	315.2	明褐色			
015	8	17	須恵器壺	5	(12.0)		[5.4]		灰色			内面に自然釉。
015	9	7	須恵器甑	5			[12.7]		灰色			挿図番号10と同一個体。
015	10	8	須恵器甑	5			[7.0]		灰色			挿図番号9と同一個体。
015	11	2	土師器甕	10	(15.5)		[6.2]		明褐色			
015	12	3	土師器甕	10	(14.9)		[6.0]		褐色			火熱を受ける。外面煤。
015	13	4	土師器甕	10		6.9	[4.9]		明褐色			
015	14	1	土師器甕	45	(25.4)	(7.8)	31.9	13302.7	暗黄色			底部に木葉痕。火熱を受ける。
016	1	1	土師器甕	60		(7.0)	[13.3]		暗褐色			1～3㎜の白と黒の小石。
017	1	6	須恵器杯	80	13.8	9.6	3.3	303.3	灰色	I		1～1.5㎜の白い石多量。
017	2	5	土師器杯	80	13.8		5.1	362.9	暗褐色			
017	3	9	土師器杯	5	(21.8)		[2.4]		赤色			内外面赤彩。
017	4	1	土師器甕	5	(24.5)		[8.3]		明褐色			1～2㎜の白い石。火熱を受ける。
017	5	2	土師器甕	5	(23.0)		[9.1]		明褐色			石英・雲母粒多量。
017	6	3	土師器甕	5	(24.4)		[6.1]		明赤色			石英・雲母粒多量。火熱を受ける。
017	7	4	土師器甕	5	(16.2)		[5.3]		明赤色			火熱を受ける。
018	1	3	須恵器杯	70	14.5	8.2	4.6	386.4	灰色	I		大粒の石英粒多量。
018	2	4	須恵器杯	40	(13.3)	(7.2)	4.2	282.5	灰色	I		
018	3	5	須恵器杯	15	(14.4)	(9.2)	[3.9]	(337.7)	青灰色			
018	4	2	土師器鉢	60	(12.6)	5.7	10.7	659.5	暗褐色			内外面の一部に煤。
018	5	1	土師器甕	20	(19.6)		[15.8]		明褐色			内外面の一部に煤。
019	1	12	須恵器杯	100	14.3	7.9	3.8	300.6	青灰色	I		
019	2	11	須恵器杯	90	14.2	8.2	4.0	310.7	灰色	I		
019	3	13	須恵器杯	65	14.0	9.0	3.7	318.8	青灰色	I		底部外面に「一」状の浅いヘラ記号。黒色粒子含む。
019	4	15	須恵器杯	50	(14.2)	(8.8)	3.8	321.6	灰色	I		
019	5	14	須恵器高台付き杯	40	(15.6)	(8.6)	[5.1]	(525.7)	灰色	I		
019	6	16	須恵器杯蓋	40	(14.2)		[1.8]		青灰色	I		
019	7	9	土師器杯	80	13.9	9.0	3.9	298.7	淡黄色			内外面赤彩。
019	8	4	土師器鉢	95	9.7	6.0	7.8	370.5	暗赤色			最大7㎜の黒い石。底部に木葉痕。
019	9	5	土師器甕	5	(26.2)		[13.1]		明褐色			4㎜前後の赤茶色の石。
019	10	3	土師器甕	15		11.5	[10.3]		暗赤色			火熱を受ける。
019	11	1	土師器甕	80	24.0		[27.1]		暗赤色			胴部外面に煤。火熱を受ける。
019	12	2	土師器甕	80	23.8		[30.2]		暗褐色			4～5㎜の白い石多量。火熱を受ける。
019	13	6	土師器甕	5		7.9	[2.6]		暗褐色			底部に木葉痕。火熱を受ける。内外面に煤。
019	14	7	土師器甕	5		9.5	[2.5]		暗褐色			底部に木葉痕。2～3㎜の白い石。
019	15	10	須恵器甕	10			[19.5]		青灰色			
020	1	1	須恵器杯	95	14.5	9.0	4.3	342.4	暗灰色	I		大粒の石英粒多量。
020	2	2	須恵器杯	15	(15.4)		[3.6]		灰色	I		黒色粒子を含む。
021	1	4	土師器杯	20	(12.2)	6.5	3.5	211.6	明褐色			2㎜前後の白い石。
021	2	2	土師器杯	10	(17.9)	(12.2)	[5.8]	(816.3)	褐色			内面黒色処理。
021	3	1	須恵器甕	10		(17.0)	[5.2]		暗褐色	b		
022	1	11	須恵器杯蓋	10	(14.0)		[1.3]		暗灰色	I		
022	2	3	土師器杯	70	15.2		4.2	359.7	暗赤色			火熱を受ける。
022	3	6	土師器杯	10	(13.2)	(6.3)	[3.2]	(215.1)	暗黄色			
022	4	8	土師器杯	5		(7.8)	[1.0]		褐色			内外面に赤彩。
022	5	4	土師器鉢	45	(13.8)		[5.0]	(321.8)	暗褐色			
022	6	2	土師器甕	5		(10.0)	[2.6]		暗黄色			2㎜前後の石。底部に木葉痕。火熱を受ける。

遺構番号	挿図番号	実測番号	器種名	遺存度	口径	底径	器高	容量	色調	産地	焼成	備考
022	7	1	土師器甕	40	(22.0)		[25.6]		暗黄色			1～2.5mmの白い石。
023	1	3	須恵器杯	15	(13.8)	(9.1)	[4.3]	(342.6)	青灰色	I		1～2mmの白い石多量。
023	2	2	土師器甕	5	(13.3)		[5.7]		暗褐色			2mm前後の白い石。
023	3	1	土師器甕	30		7.9	[10.8]		黄橙色			
024	1	4	須恵器杯	40	(14.4)	(8.5)	4.3	372.0	灰色	I		底部外面に「由」の線刻。
024	2	3	須恵器杯		(10.0)	(6.0)	3.4	139.2	青灰色			底部外面に「丨」の線刻。
024	3	1	土師器甕	10		(7.6)	[8.2]		赤褐色			火熱を受ける。
025	1	1	土師器甕	20	(21.0)		[13.7]		黄橙色			
026	1	6	須恵器杯蓋	40	(14.1)		3.3		灰色			外面に火襷痕。
026	2	5	土師器杯	20	(13.0)		3.7	261.1	黄橙色			内外面赤彩。
026	3	4	土師器甕	10		5.6	[4.8]		黄橙色			火熱を受ける。
026	4	3	土師器甕	60	(24.5)	(9.8)	32.6	(13011.0)	黄橙色			底部に木葉痕。火熱を受ける。
026	5	2	土師器甕	60	22.2	(8.0)	31.2	(9430.3)	黄橙色			底部に木葉痕。火熱を受ける。
026	6	1	土師器甕	20	(22.0)		[27.0]		黄橙色			
027	1	2	須恵器杯	95	13.7	8.7	3.7	280.5	青灰色			
027	2	9	須恵器杯	10	(14.0)	(10.0)	[4.0]	(329.8)	青灰色			
027	3	3	須恵器杯	90	14.8	9.1	3.9	316.2	灰褐色	I		大粒の石英粒多量。
027	4	4	須恵器杯	85	14.0	8.6	4.2	316.8	灰色	I		
027	5	12	須恵器杯	40	(13.8)	(9.0)	4.0	306.1	灰色	I		
027	6	7	須恵器杯	40	(13.4)	(9.0)	3.9	304.0	暗灰色	I		
027	7	1	須恵器杯	95	14.0	8.2	3.6	322.8	灰色	I		
027	8	11	須恵器杯	15	(14.8)	(9.0)	3.6	348.4	灰色	I		
027	9	10	須恵器杯	20	(13.8)	(7.6)	[4.0]	(310.0)	灰色	I		底部外面に叩き板様の圧痕。
027	10	5	須恵器杯	80	13.1	8.5	3.9	256.0	灰色	I		大粒の石英粒多量。
027	11	6	須恵器杯	40	(12.4)	(8.4)	3.6	226.3	青灰色	I		大粒の石英粒多量。
027	12	8	須恵器杯	30	(12.4)	(8.0)	3.8	237.4	灰色	I		
027	13	13	須恵器杯	30	(10.6)	(6.4)	[3.7]	(177.0)	灰褐色	I		
027	14	14	須恵器高台付き杯	20			[2.5]		灰色	I		
027	15	16	須恵器杯蓋	5					灰色	I		ツマミのみ。
027	16	15	須恵器杯蓋	5					灰色	I		ツマミのみ。
027	17	22	土師器杯	10	(13.6)		[2.9]		淡橙色			外面に赤彩。
027	18	23	土師器杯	10	(13.0)		[4.0]		黄橙色			内外面に赤彩。
027	19	19	土師器甕	10	(16.0)		[5.3]		橙色			
027	20	18	土師器甕	10	(16.4)		[3.8]		橙色			
027	21	20	土師器甕	15	(25.6)		[12.4]		黄橙色			
027	22	21	土師器甕	15		9.4	[7.2]		黄橙色			底部に木葉痕。火熱を受ける。
027	23	17	須恵器甕	5	(23.8)		[6.3]		青灰色			
028	1	6	須恵器杯	50	13.6	(8.0)	[3.8]	293.4	明褐色	b		
028	2	1	土師器甕	20	(25.6)		[19.1]		赤褐色			最大2mmの白い石多量。内外面の一部に煤。
028	3	3	土師器甕	10	(21.0)		[13.3]		赤褐色			
028	4	2	土師器甕	10	(21.2)		[7.3]		赤褐色			
028	5	4	土師器甕	10		6.5	[4.4]		暗褐色			最大3mmの白い石多量。
028	6	5	土師器甕	10		7.4	[1.8]		暗褐色			火熱を受ける。
029	1	8	須恵器杯	10	(13.9)		[3.6]		灰色			
029	2	9	須恵器高台付き杯	5			[2.1]		灰色			
029	3	5	土師器杯	100	13.7		4.0	352.7	橙色			2mm前後の白い石。
029	4	7	土師器杯	45	(13.0)		[3.9]	(301.2)	橙色			
029	5	6	土師器杯	50	(14.2)	8.0	4.0	338.0	黄橙色			内外面赤彩。

遺構番号	挿図番号	実測番号	器種名	遺存度	口径	底径	器高	容量	色調	産地	焼成	備考
029	6	1	土師器甕	50	(14.2)	(7.6)	[16.9]	(2145.0)	赤褐色			
029	7	2	土師器甕	5	(11.8)		[3.5]		暗褐色			
029	8	3	土師器甕	10		11.5	[3.4]		橙色			火熱を受ける。
029	9	4	土師器甕	5		(8.7)	[3.7]		橙色			
030	1	4	須恵器杯	60	13.0	7.6	3.9	300.9	暗灰色			内外面に火襷痕。
030	2	3	須恵器杯	45	(13.2)	(8.4)	4.0	(276.7)	暗褐色		Ⅰb	火熱を受ける。
030	3	5	土師器鉢	95	10.5	6.8	6.7	325.8	橙色			底部に木葉痕。
030	4	2	土師器甕	20	19.8		[5.6]		橙色			
030	5	1	土師器甕	20	(16.8)		[7.6]		橙色			挿図番号6と同一個体。
030	6	7	土師器甕	20		6.5	[6.3]		橙色			挿図番号5と同一個体。
031A	1	31	須恵器杯	20	(14.0)	(8.4)	[4.0]	(314.6)	黄橙色		Ⅰ	
031A	2	9	土師器杯	90	12.7	6.5	3.8	246.5	黄橙色			内面黒色処理。火熱を受ける。
031A	3	22	土師器杯	60	15.2	7.7	5.2	522.8	橙色			火熱を受ける。
031B	1	68	須恵器杯	50	(11.8)	(6.2)	3.5	187.5	青灰色		Ⅰ	
031B	2	67	須恵器杯	85	12.7	7.5	3.9	235.8	青灰色		Ⅱ	重ね焼きB。
031B	3	66	須恵器杯	100	12.5	8.4	4.0	277.5	青灰色		Ⅱb	底部外面ヘラ記号？。重ね焼きB。
031B	4	18	土師器杯	100	12.6	7.1	3.9	270.6	黄橙色			内面黒色処理。
031B	5	10	土師器杯	95	12.4	6.6	3.9	264.7	黄橙色			内面黒色処理。
031B	6	14	土師器杯	80	12.2	8.8	4.0	243.2	黄橙色			内面黒色処理。
031B	7	6	土師器杯	100	12.8	6.6	4.0	252.9	橙色			内面黒色処理。
031B	8	12	土師器杯	80	12.3	6.3	3.8	229.1	暗褐色			内面黒色処理。
031B	9	13	土師器杯	95	12.7	7.1	3.7	242.9	黄橙色			内面黒色処理。
031B	10	19	土師器杯	90	13.2	7.7	3.8	280.8	暗褐色			内面黒色処理。
031B	11	5	土師器杯	100	13.0	6.8	3.8	257.8	橙色			内面黒色処理。
031B	12	7	土師器杯	95	12.5	6.5	3.8	247.3	黄橙色			内面黒色処理。
031B	13	11	土師器杯	75	12.6	6.1	4.1	309.0	橙色			内面黒色処理。
031B	14	17	土師器杯	50	(12.6)	(7.2)	3.7	251.1	暗褐色			内面黒色処理。
031B	15	16	土師器杯	50	(12.8)	(6.6)	4.0	265.7	暗褐色			内面黒色処理。
031B	16	24	土師器杯	90	13.0	7.2	4.1	297.7	橙色			火熱を受ける。
031B	17	20	土師器杯	30	(12.2)	(6.8)	4.9	232.2	暗褐色			内面黒色処理。
031B	18	15	土師器杯	60	12.4	6.4	3.6	222.4	黄橙色			内面黒色処理。
031B	19	27	土師器杯	100	12.2	6.2	3.5	207.9	黄橙色			
031B	20	29	土師器杯	30	(12.0)	(6.6)	[3.9]	(216.2)	黄橙色			
031B	21	30	土師器杯	30	(14.0)	(9.0)	[4.2]	(347.9)	灰色			
031B	22	8	土師器杯	95	13.2	6.8	3.3	242.8	黄橙色			内面黒色処理。
031B	23	28	土師器杯	85	12.8	6.7	3.4	223.3	橙色			
031B	24	25	土師器杯	90	12.9	5.8	4.1	259.4	橙色			
031B	25	23	土師器杯	95	12.2	6.4	4.5	267.6	橙色			
031B	26	26	土師器杯	70	13.4	6.4	5.1	396.8	橙色			
031B	27	4	土師器杯	95	14.4	7.1	5.0	419.2	橙色			内面黒色処理。底部内面に羅線状の暗文。
031B	28	2	土師器杯	90	15.2	7.3	4.9	536.4	黄橙色			内面黒色処理。底部内面に羅線状の暗文。
031B	29	3	土師器杯	80	14.8	6.9	4.7	460.8	黄橙色			内面黒色処理。
031B	30	1	土師器杯	100	15.3	9.3	5.0	494.9	橙色			内面黒色処理。
031B	31	21	土師器杯	95	15.2	8.1	5.4	549.5	橙色			
031B	32	61	土師器杯	40	(20.4)	(8.4)	8.1	(1490.4)	黄橙色			内面黒色処理。
031B	33	33	土師器高台付き杯	90	11.0		4.8	193.5	橙色			内面黒色処理。
031B	34	32	土師器高台付き杯	90	11.7		5.1	240.1	橙色			内面黒色処理。
031B	35	34	土師器高台付き杯	100	11.8		4.4	200.8	橙色			内面黒色処理。

遺構番号	挿図番号	実測番号	器種名	遺存度	口径	底径	器高	容量	色調	産地	焼成	備考
031B	36	35	土師器高台付き杯	100	11.8		4.6	216.2	橙色			内面黒色処理。
031B	37	62	土師器高台付き杯	90	17.9		6.8	717.2	橙色			
031B	38	60	土師器高台付き杯	20			[2.7]		黄橙色			内面黒色処理。
031B	39	56	土師器杯蓋	15	(16.7)		[1.3]		橙色			内面黒色処理。
031B	40	54	土師器杯蓋	40	(16.8)		[1.9]		橙色			内面黒色処理。
031B	41	42	土師器杯蓋	40	(17.0)		2.1		橙色			
031B	42	57	土師器杯蓋	20	(16.3)		[2.1]		黄橙色			内面黒色処理。
031B	43	45	土師器杯蓋	95	19.1		3.1		橙色			
031B	44	43	土師器杯蓋	100	19.7		3.9		橙色			
031B	45	50	土師器杯蓋	50	(17.6)		4.6		暗褐色			内面黒色処理。
031B	46	51	土師器杯蓋	40	(13.9)		2.4		橙色			
031B	47	44	土師器杯蓋	100	12.6		1.8		橙色			
031B	48	47	土師器杯蓋	95	13.2		2.6		橙色			内面黒色処理。
031B	49	55	土師器杯蓋	30	(12.6)		2.7		橙色			内面黒色処理。
031B	50	48	土師器杯蓋	70	11.7		2.8		橙色			
031B	51	49	土師器杯蓋	95	13.3		2.8		橙色			内面黒色処理。
031B	52	53	土師器杯蓋	55	13.7		2.6		橙色			内面黒色処理。
031B	53	46	土師器杯蓋	70	13.2		2.6		橙色			内面黒色処理。
031B	54	52	土師器杯蓋	40			[1.9]		褐色			内面黒色処理。
031B	55	58	土師器杯蓋	20	(15.6)		[2.7]		黄橙色			
031B	56	41	土師器香炉蓋	80	(18.3)		[5.9]		橙色			
031B	57	40	土師器香炉蓋	95	12.3		4.5		橙色			
031B	58	38	土師器壺蓋	60	(7.0)		3.1		黒色			内外黒色処理。
031B	59	37	土師器壺	90	5.1		6.1	123.7	黒色			内外黒色処理。
031B	60	36	土師器高杯	95	12.3		5.9	165.2	橙色			
031B	61	59	土師器高杯	30			[9.4]		黄橙色			
031B	62	63	土師器甕	30		7.8	[14.9]		橙色			
031B	63	65	土師器甕	40	(23.0)		[29.3]		黄橙色			火熱を受ける。
031B	64	64	土師器甕	70	13.0		[10.8]		橙色			
031B	65	69	須恵器甕	10			[15.9]		灰色			
032	1	8	須恵器杯	100	12.4	8.4	3.5	285.0	青灰色			
032	2	9	須恵器杯	90	12.7	8.6	3.9	276.0	青灰色			胴部外面に火襷痕。
032	3	10	須恵器杯	50	(13.6)	(7.6)	[3.9]	(281.6)	青灰色	I		
032	4	7	土師器鉢	10	(13.2)		[4.5]		橙色			
032	5	13	土師器杯	95	11.8	7.6	3.7	250.8	橙色			
032	6	6	土師器杯	90	12.2	7.8	3.7	240.8	橙色			
032	7	3	土師器鉢	95	9.9	6.9	7.5	326.2	橙色			底部に木葉痕。
032	8	12	土師器甕	100	11.8	6.7	12.2	1035.9	黄橙色			
032	9	14	土師器甕	85	12.0	6.0	10.6	735.8	橙色			火熱を受ける。
032	10	1	土師器甕	30		(11.0)	[13.2]		暗褐色			火熱を受ける。
032	11	5	土師器甕	5		7.8	[2.1]		暗褐色			底部に木葉痕。
032	12	4	土師器甕	5		(9.0)	[3.3]		暗褐色			底部に木葉痕
032	13	2	須恵器甑	5					黄橙色	I		
035	1	1	須恵器杯	70	12.8	6.0	3.8	242.5	暗青灰			
035	2	3	須恵器高台付き杯	20			[1.9]		青灰色	I		
035	3	2	須恵器長頸壺	20	(10.2)		[8.9]		青灰色			口縁部内面と胴部外面に釉。
035	4	7	土師器杯	5					橙色			口縁部外面に判読不明墨書。
035	5	4	土師器杯	10					橙色			底部外面に判読不明墨書。

遺構番号	挿図番号	実測番号	器種名	遺存度	口径	底径	器高	容量	色調	産地	焼成	備考
035	6	5	土師器杯	20					黄橙色			底部外面に判読不明墨書。
036	1	5	須恵器杯	100	13.5	8.0	3.8	286.5	青灰色	I		
036	2	4	土師器杯	60	13.8	10.3	3.9	344.8	黄橙色			内外面赤彩。
036	3	2	土師器鉢	95	11.8	7.8	6.1	295.0	橙色			火熱を受ける。
036	4	3	土師器鉢	90	12.3	7.0	6.7	382.5	暗褐色			
036	5	1	土師器甕	20			[9.7]		黄橙色			
037	1	4	土師器杯	95	12.8	6.7	4.3	280.6	橙色			内面黒色処理。底部外面「石井」墨書。火熱受ける。
037	2	1	須恵器杯蓋	45	(14.5)		3.2		暗青灰			
038	1	13	須恵器杯	40	(13.0)	6.5	3.9	251.6	青灰色			底部外面に「下」？ヘラ書き。
038	2	11	須恵器杯	30	(13.3)	(8.2)	4.0	305.0	黒褐色	a		
038	3	9	土師器杯	80	11.8	6.3	3.5	192.7	橙色			
038	4	15	土師器杯	60	12.2	7.2	3.8	224.0	赤褐色			底部内面「新万」墨書。内外面筆ならし墨痕多数。
038	5	14	土師器杯	50	12.3	7.4	4.0	255.6	黄橙色			体部外面に「山」墨書。
038	6	8	土師器杯	90	12.7	7.8	4.1	267.4	橙色			口唇部内面に油煙付着（1カ所）。
038	7	10	土師器杯	15	(15.4)	(8.4)	[5.3]	(527.9)	橙色			
038	8	6	土師器甕	10		6.4	[4.7]		橙色			
038	9	2	土師器甕	15	(20.4)		[8.0]		橙色			
038	10	3	土師器甕	20	(19.1)		[12.3]		橙色			火熱を受ける。
038	11	1	須恵器甕	59	23.9		[36.8]		暗褐色	b		
038	12	7	土師器香炉蓋	45	(19.2)		8.9		橙色			
039	1	5	土師器杯	90	13.5		3.8	259.1	暗褐色			内外面黒色処理。
039	2	2	土師器杯	90	14.9		3.4	375.3	橙色			
039	3	3	土師器杯	90	14.3		3.9	381.8	橙色			
039	4	4	土師器杯	45	(14.4)		[3.6]	(331.7)	橙色			
039	5	7	土師器皿	65	17.3		3.1	344.5	橙色			内外面赤彩。
039	6	6	土師器皿	30	(19.4)	(15.4)	2.0	299.7	橙色			内外面赤彩。
039	7	8	須恵器杯蓋	100	14.7		3.9		灰褐色	I		
039	8	9	須恵器杯蓋	80	15.5		2.5		灰色	I		
039	9	1	土師器甕	95	11.6	5.4	14.4	892.9	橙色			
040	1	2	土師器杯	100	13.9		3.1	277.7	橙色			火熱を受ける。
040	2	1	土師器甕	30	(16.2)		[8.9]		橙色			火熱を受ける。
041	1	3	須恵器杯	100	12.7	7.5	4.2	277.7	暗青灰			
041	2	13	土師器杯	45	(13.0)	7.6	3.9	266.2	暗褐色			火熱を受ける。
041	3	11	土師器杯	15	(13.6)	(7.9)	[3.9]	(311.3)	赤褐色			火熱を受ける。2㎜前後の白・黒の石。
041	4	9	土師器高台付き杯	40	(14.8)		5.0	320.4	橙色			
041	5	7	土師器高台付き皿	50	(13.4)		[2.1]	106.9	橙色			
041	6	6	土師器皿	60	13.2	4.7	2.0	71.7	橙色			
041	7	5	土師器甕	20	(17.2)		[7.7]		橙色			火熱を受ける。
041	8	12	土師器甕	5	(14.8)		[3.8]		橙色			火熱を受ける。
041	9	10	土師器甕	10		(6.8)	[5.0]		橙色			火熱を受ける。
041	10	8	土師器甕	15		6.4	[8.9]		橙色			
041	11	2	土師器鉢	90		7.0	[11.4]	(1013.8)	暗褐色			火熱を受ける。
041	12	1	須恵器鉢	60	24.2		[9.4]		赤褐色	b		
041	13	4	須恵器甕	10		13.6	[2.3]		黒褐色	a		
043	1	1	須恵器杯	40	(12.5)	(7.6)	[3.4]	(234.8)	暗褐色	a		底部外面にヘラ記号。
045	1	4	土師器杯	20	(13.9)		[2.9]		褐色			内外面赤彩。
045	2	1	土師器甕	15	(24.4)		[13.8]		橙色			火熱を受ける。
045	3	2	土師器甕	15	(22.5)		[8.2]		黄橙色			

遺構番号	挿図番号	実測番号	器種名	遺存度	口径	底径	器高	容量	色調	産地	焼成	備考
045	4	3	土師器甕	5		(8.6)	[1.9]		黄橙色			底部に木葉痕。
048A	1	9	須恵器杯	100	12.6	7.3	3.7	244.3	青灰色			
048A	2	7	須恵器杯	100	12.3	6.0	3.9	214.3	青灰色			
048A	3	13	須恵器杯	45	(12.8)	(6.8)	(4.4)	(278.0)	青灰色			
048A	4	10	須恵器杯	50	(13.7)	(6.6)	4.3	315.6	暗褐色			
048A	5	5	須恵器杯	95	13.2	7.0	4.0	281.9	橙色			
048A	6	6	須恵器杯	100	12.8	7.3	3.8	275.5	橙色			
048A	7	8	須恵器杯	100	11.9	5.6	3.7	200.0	橙色			
048A	8	11	須恵器杯	30		7.2	[2.8]		橙色			
048A	9	18	土師器杯	80	13.2	7.4	3.3	214.4	黄橙色			底部内面に「[illegible]」墨書。
048A	10	16	土師器杯	95	12.9	6.6	3.6	243.8	橙色			体部底部の外面に「[illegible]」墨書。口縁部内外面に油煙。
048A	11	14	土師器杯	10	(11.8)	(6.2)	[3.8]	(217.0)	橙色			口縁部内面に油煙付着（3ヵ所）。
048A	12	12	土師器杯	80	9.5	5.3	2.8	106.2	黄橙色			口縁部内外面に油煙付着。
048A	13	15	土師器杯	5			[1.4]		黄橙色			内面黒色処理。底部外面に判読不明墨書。
048A	14	3	土師器甕	60	11.8	5.4	10.7	750.6	橙色			火熱を受ける。
048A	15	2	土師器甕	60		5.0	[7.0]		黒褐色			内面黒色処理。
048A	16	1	土師器甕	50	14.6		[12.1]		橙色			
048A	17	4	土師器高杯	90	16.8		13.1	578.5	橙色			
049	1	13	須恵器杯	95	12.8	6.7	4.0	259.2	灰色			
049	2	7	須恵器杯	90	13.7	7.0	4.2	307.9	橙色	b		
049	3	5	土師器杯	100	12.1	6.6	4.0	244.7	橙色			体部外面に判読不明墨書。
049	4	6	土師器杯	95	12.2	6.5	3.7	218.3	黄橙色			底部外面に「冨」墨書。
049	5	8	土師器杯	80	12.1	6.5	3.6	216.7	橙色			
049	6	9	土師器杯	90	10.2	6.0	2.7	110.8	黄橙色			口縁部内面に油煙付着。
049	7	10	土師器杯	30	(10.2)	(6.3)	2.8	117.8	黄橙色			内面黒色処理。口縁部内面に油煙付着。
049	8	11	土師器皿	100	13.2	6.5	2.0	97.8	橙色			
049	9	12	土師器皿	30	14.2	7.2	2.9	176.8	橙色			底部内面に墨痕。
049	10	4	土師器鉢	85	15.9		(8.3)	(974.0)	暗褐色			内面黒色処理。
049	11	14	須恵器甕	25			[17.0]		青灰色	I		
049	12	1	土師器甕	70	20.7		[26.3]		橙色			
049	13	2	土師器甕	5	(20.4)		[16.0]		黄橙色			
053	1	1	土師器高台付き杯	70	16.6		[5.5]	645.7	橙色			
057	1	1	土師器杯	40	(15.7)		[3.1]	306.8	黄橙色			火熱を受ける。
057	2	2	土師器杯	10	(14.6)		[4.1]		橙色			
062	1	1	土師器杯	60	15.1	10.6	3.5	345.6	黄橙色			外面赤彩。
064	1	8	須恵器杯	45	(13.3)	7.4	3.9	287.3	青灰色	I		底部外面に「×」ヘラ記号。
064	2	7	須恵器杯	90	13.1	7.5	4.0	256.5	青灰色	I		
064	3	6	土師器甕	90	13.8	7.2	14.1	1596.2	橙色			火熱を受ける。
064	4	5	土師器甕	85	13.3	6.5	14.7	1429.6	橙色			火熱を受ける。
064	5	4	土師器甕	70	16.1	7.8	19.3	3431.7	橙色			火熱を受ける。外面の一部に煤。
064	6	2	土師器甕	60	22.0		[24.5]		暗褐色			
064	7	3	土師器甑	55	28.3		[20.3]		黄橙色			口縁直下にツマミ（3ヵ所）。
064	8	1	須恵器甕	35			[15.3]		灰色	I		
065	1	2	土師器甕	5					黒褐色			胴部外面に「キ」ヘラ書き。
065	2	1	土師器甑	60	(33.2)	9.8	29.0	12005.8	黄橙色			
067	1	2	須恵器杯	35		(8.2)	[2.5]		橙色	b		
067	2	1	土師器杯	100	13.0	7.0	4.3	270.0	橙色			
070	1	8	灰釉陶器椀	30	(14.9)		4.1	300.7	淡灰色			内面に灰釉（淡緑色）。黒色粒子を含む。

遺構番号	挿図番号	実測番号	器種名	遺存度	口径	底径	器高	容量	色調	産地	焼成	備考
070	2	10	須恵器高台付き皿	60			[2.2]		青灰色			
070	3	9	須恵器杯蓋	20	(16.8)		[2.5]		青灰色			
070	4	4	土師器杯	80	12.6	7.3	4.5	294.1	橙色			火熱を受ける。
070	5	3	土師器杯	85	12.4	7.2	3.9	258.2	橙色			火熱を受ける。
070	6	7	須恵器長頸壺	15			[3.9]		青灰色			
070	7	6	須恵器長頸壺	5			[2.2]		灰色			
070	8	1	土師器甕	55	21.3		[23.7]		橙色			火熱を受ける。白い小石多量。
070	9	2	土師器甕	10		12.9	[5.2]		橙色			火熱を受ける。底部に木葉痕。
070	10	11	須恵器甕	20			[16.3]		橙色	Ⅰb		火熱を受ける。1㎜～5㎜の白い石多量。
071	1	1	土師器杯	95	14.7		3.2	297.1	橙色			
073	1	3	土師器杯	25	(12.8)		(4.2)	(324.2)	橙色			火熱を受ける。
073	2	4	土師器杯	10	(12.5)		[2.8]		橙色			火熱を受ける。
073	3	2	須恵器甕	30			[25.6]		黄橙色	b		
073	4	1	須恵器甕	15			[32.5]		黄橙色	b		
074	1	2	土師器杯	70	13.0	7.9	3.9	278.8	黄橙色			底部外面に「白井寺」墨書。口縁部内外面に油煙。
074	2	1	土師器杯	20	(13.0)	(7.6)	(4.5)	(318.0)	黄橙色			
099A	1	2	須恵器杯	80	12.8	7.8	3.6	240.4	青灰色			
099A	2	1	須恵器杯	95	14.4		3.9	332.6	灰色	Ⅰ		
1T	14	8	土師器杯	15		6.4	[0.9]		黄橙色			底部内外面に墨書複数判読不可。
1T	20	10	土師器甕	15		6.6	[5.6]		黄橙色			
1T	21	9	須恵器甕	5	(24.8)		[9.5]		青灰色			
4T	8	11	土師器杯	30	(13.6)		3.6	290.5	褐色			内外面黒色処理。
6T	3	12	須恵器杯	30		8.8	[3.2]		青灰色	Ⅰ		
7T	2	13	須恵器杯	30	(14.0)	(9.2)	4.0	355.6	暗灰色	Ⅰ		
8T	12	14	土師器杯	85	9.9	6.2	2.8	115.7	黄橙色			口縁部内面に油煙付着。
8T	13	15	土師器杯	30	(9.5)	(3.3)	2.7	96.9	橙色			
表採	5	20	須恵器杯	50	(13.0)	(7.8)	3.8	253.0	灰色			
表採	6	19	須恵器杯	10	(11.2)	(6.8)	[4.3]	(247.1)	灰褐色			
表採	7	21	須恵器壺蓋	25	(8.4)		[2.4]		青灰色			
表採	9	22	土師器杯	10	(12.2)	(7.4)	3.7	(226.6)	黄橙色			内面黒色処理。
表採	10	16	土師器杯	45	13.2	8.0	3.4	255.3	赤褐色			口縁部内面に油煙付着。
表採	17	18	土師器杯	5					橙色			底部外面に判読不明墨書。
表採	22	17	土師器小型土器	85	4.4		[3.3]		橙色			
ヌ6-16	16	2	土師器杯	5					橙色			底部外面に「冨」墨書。
ヌ6-17	11	7	土師器杯	90	12.5	6.5	3.3	196.0	黄橙色			底部外面に「冨」墨書。
ヌ6-3	15	1	土師器杯	15					黄橙色			底部外面に「冨」墨書。
ヌ7-6	1	3	須恵器杯	45	(13.8)	(6.6)	4.0	306.9	灰色	Ⅰ		
ヌ7-6	4	4	須恵器杯	20		8.2	[1.6]		赤褐色	Ⅰb		
ヌ7-8	18	5	土師器甕	15	(14.2)		[5.8]		赤褐色			挿図番号19と同一個体。内外面の一部に煤。
ヌ7-8	19	6	土師器甕	10		6.9	[3.8]		赤褐色			挿図番号18と同一個体。底部外面に煤。

第6表　出土土器破片資料一覧（竪穴住居跡）

破片資料：上段点数、下段重量

		遺構番号 器種	002	003	004	005	006	007	008	009	010	011
破片資料	須恵器	杯	26 181	5 35	14 95	9 49	10 94	16 91	3 22	5 65	33 140	5 85
		甕	41 943	2 10	1 30	2 15	5 185	28 215	12 730	76 1598	7 435	0 0
		甑	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	4 98	0 0	0 0
		蓋	1 17	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	1 5	2 20	0 0	0 0
		壺	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0
		その他・不明	2 70	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0
		合計A点 B g B／B＋D％	70 1211 25.3％	7 45 6.4％	15 125 9.2％	11 64 8.6％	15 279 20.2％	44 306 12.4％	16 757 47.3％	87 1781 58.3％	40 575 10.1％	5 85 10.3％
	土師器	杯 皿含む	24 150	3 15	9 53	24 207	6 68	6 38	2 20	74 486	22 138	2 17
		甕 鉢含む	121 1580	18 386	61 860	40 396	91 1035	130 1384	40 790	95 790	366 3805	37 654
		常総型甕	41 1793	12 260	20 325	5 80	0 0	32 660	0 0	0 0	67 1041	6 70
		甑	3 60	0 0	0 0	0 0	0 0	2 45	1 35	0 0	6 160	0 0
		小型土器	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0
		その他・不明	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	1 40	0 0	0 0	1 2	0 0
		合計C点 D g D／B＋D％	189 3583 74.7％	33 661 93.6％	90 1238 90.8％	69 683 91.4％	97 1103 79.8％	171 2167 87.6％	43 845 52.7％	169 1276 41.7％	462 5146 89.9％	45 741 89.7％
実測遺物	須恵器	杯	3	1	4	1	3	2	1	0	1	0
		甕	0	0	1	0	0	1	2	2	0	0
		甑	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
		蓋	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		壺	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
		その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		合計E点 E／E＋F％	3 50.0％	1 50.0％	5 83.3％	1 25.0％	3 60.0％	4 66.7％	3 42.9％	3 33.3％	1 14.3％	0 0.0％
	土師器	杯	1	0	0	2	0	1	0	4	2	0
		甕	2	1	0	1	2	1	4	2	4	4
		甑	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		蓋	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		鉢	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
		その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		合計F点 F／E＋F％	3 50.0％	1 50.0％	1 16.7％	3 75.0％	2 40.0％	2 33.3％	4 57.1％	6 66.7％	6 85.7％	4 100.0％
		その他の出土遺物	刀子1・鎌1	勾玉1	鉄片2・不明鉄製品1	円板状鉄製品1		穂摘具1	鉄鏃2・土製支脚1	足金物1・銅製耳環1	砥石2・鎌1・刀子3	錘1・土器転用紡錘車1	砥石1

012	013	014	015	016	017	018	019	020	021	022	023	024	025
0	198	16	66	3	8	17	94	4	3	26	6	4	0
0	1535	172	868	12	112	130	793	38	7	375	41	92	0
0	11	2	0	0	2	2	8	3	78	2	4	0	0
0	210	40	0	0	90	30	320	43	1055	110	30	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	25	0	0	0	0
0	16	6	2	0	2	1	0	0	0	9	2	2	0
0	190	55	15	0	10	7	0	0	0	90	10	10	0
0	7	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	130	0	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	232	24	69	3	12	20	102	7	82	37	12	6	0
0	2065	267	903	12	212	167	1113	81	1087	575	81	102	0
0.0%	13.1%	12.0%	13.3%	5.4%	7.5%	23.4%	16.0%	24.2%	54.2%	11.4%	10.1%	28.6%	0.0%
0	165	9	30	0	15	14	21	2	25	42	11	2	1
0	1110	115	338	0	210	100	225	10	215	510	120	15	10
0	587	121	206	14	53	53	320	12	83	243	44	11	1
0	5335	1245	2850	95	980	448	4390	192	695	1815	463	240	100
1	408	28	88	4	145	0	63	4	1	123	14	0	36
200	7200	600	2530	70	1442	0	1212	52	10	2115	115	0	365
0	4	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0
0	92	0	120	0	0	0	0	0	0	20	20	0	0
0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	9	0	0	0	0	0	0
1	0	0	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
45	0	0	70	45	0	0	0	0	0	0	0	0	9
2	1164	158	328	19	213	67	405	18	109	409	70	13	39
245	13737	1960	5908	210	2632	548	5836	254	920	4460	718	255	484
100.0%	86.9%	88.0%	86.7%	94.6%	92.5%	76.6%	84.0%	75.8%	45.8%	88.6%	89.9%	71.4%	100.0%
0	9	1	6	0	1	3	5	2	0	0	1	2	0
0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0
0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0
0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	9	3	9	0	1	3	7	2	1	1	1	2	0
0.0%	45.0%	33.3%	64.3%	0.0%	14.3%	60.0%	50.0%	100.0%	33.3%	14.3%	33.3%	66.7%	0.0%
1	5	1	1	0	2	0	1	0	2	4	0	0	0
0	5	4	4	1	4	1	5	0	0	2	2	1	1
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0
0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1	11	6	5	1	6	2	7	0	2	6	2	1	1
100.0%	55.0%	66.7%	35.7%	100.0%	85.7%	40.0%	50.0%	0.0%	66.7%	85.7%	66.7%	33.3%	100.0%
土製支脚1	鎌1・穂摘1・鉄鏃1・棒状品1・不明鉄製品1・不明土製品1・刀子1	刀子1・鬥金具1	刀子1		刀子3		棒状品1・刀子1・不明鉄製品1	砥石1・刀子1		石製垂飾品1・刀子1・帯金具1	刀子1・土製支脚1	土製支脚2	玉未製品1

026	027	028	029	030	031A	031B	032	034	036	037	038	039	040
3	142	1	74	1	61	0	3	0	2	3	18	1	31
35	983	60	732	4	400	0	63	0	27	123	70	30	146
8	70	1	12	2	67	0	1	0	0	11	34	0	1
110	1670	5	440	210	1240	0	110	0	0	395	1810	0	80
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	2	0	0	0
0	0	0	0	5	8	0	0	0	0	9	0	0	0
0	5	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0
0	50	0	0	0	0	0	30	0	0	0	0	0	0
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	47	0	0
12	217	2	86	4	130	0	6	0	2	16	53	1	32
150	2703	65	1172	219	1648	0	203	0	27	527	1927	30	226
2.9%	14.3%	3.7%	15.9%	25.2%	15.4%	#DIV/0	23.2%	0.0%	20.9%	59.8%	51.1%	3.3%	38.9%
8	101	9	72	1	367	0	4	4	1	19	45	7	15
120	665	45	485	5	1881	0	12	55	5	149	249	83	48
52	956	119	328	20	579	0	49	0	5	24	251	41	18
585	7860	1367	3860	140	5820	0	645	0	73	180	1448	335	262
20	385	16	60	13	59	0	3	0	3	0	14	21	2
300	7570	260	1865	90	1102	0	15	0	24	0	130	410	45
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	55	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1	14	2	0	5	36	0	0	0	0	2	1	0	0
10	150	20	0	415	267	0	0	0	0	25	20	0	0
81	1456	146	460	39	1041	0	56	4	9	45	311	71	35
1015	16245	1692	6210	650	9070	0	672	55	102	354	1847	883	355
87.1%	85.7%	96.3%	84.1%	74.8%	84.6%	#DIV/0	76.8%	100.0%	79.1%	40.2%	48.9%	96.7%	61.1%
0	14	0	2	2	1	3	3	0	1	0	2	0	0
0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1	17	0	2	2	1	4	3	0	1	1	3	2	0
16.7%	73.9%	0.0%	22.2%	33.3%	33.3%	5.3%	23.1%	#DIV/0	20.0%	50.0%	25.0%	22.2%	0.0%
1	2	1	3	0	2	35	3	0	1	1	5	6	1
4	4	5	4	3	0	3	5	0	1	0	3	1	1
0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	21	0	0	0	0	1	0	0
0	0	0	0	1	0	0	1	0	2	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	13	0	0	0	0	0	0	0
5	6	6	7	4	2	72	10	0	4	1	9	7	2
83.3%	26.1%	100.0%	77.8%	66.7%	66.7%	94.7%	76.9%	#DIV/0	80.0%	50.0%	75.0%	77.8%	100.0%
刀子1・鉄鏃1	棒状品1 鉄製環状品1・穂摘具3 刀子4・鉄鏃2・鎌1	鉄鏃2・土製支脚1	石製紡錘車1 刀子2・鎌1	土製支脚1	穂摘具2・鉄釘1 土器転用紡錘車1	土製支脚1・不明土品1	鎌1・不明鉄製品3 石製紡錘車1・刀子1		鎌2	青銅製帯金具2 土製品1		砥石1・鏃1	鎌1 石製紡錘車未製品1

041	045	048A	048B	049	057	062	064	065	069	070	071	072	073
29	2	5	0	10	7	1	6	0	9	14	0	0	1
91	20	40	0	35	120	20	32	0	50	120	0	0	18
30	1	43	6	7	2	0	2	2	3	26	1	0	12
910	43	1805	288	309	207	0	42	90	10	544	80	0	440
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
61	3	48	6	17	9	1	8	2	12	42	1	0	13
1011	63	1845	288	344	327	20	74	90	60	686	80	0	458
22.4%	1.9%	52.3%	76.8%	48.5%	19.8%	9.9%	14.9%	20.9%	11.2%	19.3%	33.1%	0.0%	72.7%
50	7	22	1	17	13	1	10	1	2	21	1	3	7
345	159	156	12	94	68	24	34	1	22	162	22	33	100
224	20	190	5	8	11	6	122	27	54	85	0	0	0
1944	327	1344	52	262	104	158	378	310	455	502	0	0	0
111	180	8	1	2	102	0	1	2	0	160	2	0	5
1208	2805	100	23	10	1105	0	10	30	0	1998	140	0	72
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	26	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	3	0	0	4	0	0	0	0	56	0	0	0
0	0	80	0	0	50	0	0	0	0	180	0	0	0
385	207	223	7	27	130	7	133	30	56	324	3	3	12
3497	3291	1680	87	366	1327	182	422	341	477	2868	162	33	172
77.6%	98.1%	47.7%	23.2%	51.5%	80.2%	90.1%	85.1%	79.1%	88.8%	80.7%	66.9%	100.0%	27.3%
1	0	8	0	2	0	0	2	0	0	2	0	0	0
1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	2
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3	0	8	0	3	0	0	3	0	0	5	0	0	2
23.1%	0.0%	47.1%	#DIV/0	23.1%	0.0%	0.0%	37.5%	0.0%	#DIV/0	41.7%	0.0%	#DIV/0	50.0%
5	1	5	0	7	2	1	0	1	0	2	1	0	2
4	3	3	0	2	0	0	5	0	0	3	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0
10	4	9	0	10	2	1	5	2	0	7	1	0	2
76.9%	100.0%	52.9%	#DIV/0	76.9%	100.0%	100.0%	62.5%	100.0%	#DIV/0	58.3%	100.0%	#DIV/0	50.0%
土製支脚1		砥石1		刀子1・不明鉄製品2		砥石1			土製支脚1		鉄斧1		

099A	099B	合計
15	0	1010
115	0	8366
1	0	629
40	0	16967
0	0	6
0	0	135
1	0	50
14	0	465
0	0	18
0	0	250
0	0	4
0	0	122
17	0	1717
169	0	26305
5.1%	#DIV/0	18.9%
6	0	1324
40	0	9244
179	0	6120
1407	0	60346
143	0	2411
1635	0	41087
4	0	27
52	0	685
0	0	1
0	0	9
1	0	133
19	0	1447
333	0	10016
3153	0	112818
94.9%	#DIV/0	81.1%
2		91
0		16
0		3
0		10
0		5
0		1
2	0	126
100.0%	#DIV/0	31.7%
0		115
0		105
0		2
0		22
0		10
0		17
0	0	271
0.0%	#DIV/0	68.3%

第７表　出土土器破片資料一覧（そのほかの遺構・遺構外）

破片資料：上段点数、下段重量

		遺構番号 器種	042 掘立柱建物跡	043	050AB	051	052	054	056	060	061	068
破片資料	須恵器	杯	5 10	2 9	4 13	1 2	0 0	0 0	0 0	0 0	1 5	0 0
		甕	0 0	0 0	1 9	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0
		甑	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0
		蓋	1 10	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0
		壺	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0
		その他・不明	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0
		合計Ａ点 Ｂｇ Ｂ／Ｂ＋Ｄ％	6 20 26.7%	2 9 3.6%	5 22 6.4%	1 2 1.9%	0 0 0.0%	0 0 0.0%	0 0 0.0%	0 0 0.0%	1 5 7.0%	0 0 0.0%
	土師器	杯 皿含む	2 15	0 0	2 24	19 76	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0
		甕 鉢含む	0 0	35 240	16 203	7 13	2 21	0 0	0 0	0 0	3 41	0 0
		常総型甕	1 40	0 0	12 92	3 16	0 0	0 0	2 21	0 0	2 25	0 0
		甑	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0
		小型土器	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0
		その他・不明	0 0	0 0	1 2	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0
		合計Ｃ点 Ｄｇ Ｄ／Ｂ＋Ｄ％	3 55 73.3%	35 240 96.4%	31 321 93.6%	29 105 98.1%	2 21 100.0%	0 0 0.0%	2 21 100.0%	0 0 0.0%	5 66 93.0%	0 0 0.0%
実測遺物	須恵器	杯	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
		甕	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		甑	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		蓋	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		壺	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		合計Ｅ点 Ｅ／Ｅ＋Ｆ％	0 0.0%	1 100.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
	土師器	杯	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		甕	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		甑	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		蓋	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		鉢	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		合計Ｆ点 Ｆ／Ｅ＋Ｆ％	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
		その他の出土遺物										

合計	053 土坑	067	074	合計	001 土器集中	035	合計	遺構外
13 39	0 0	9 66	0 0	9 66	66 384	21 203	87 587	109 973
1 9	0 0	5 106	0 0	5 106	62 1174	17 613	79 1787	259 2530
0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	1 52
1 10	0 0	0 0	0 0	0 0	4 19	0 0	4 19	4 114
0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	4 35	0 0	4 35	1 10
0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0
15 58 6.5%	0 0 0.0%	14 172 31.3%	0 0 0.0%	14 172 30.0%	136 1612 12.2%	38 816 35.5%	174 2428 15.6%	374 3679 22.9%
23 115	0 0	4 14	0 0	4 14	78 620	51 630	129 1250	116 767
63 518	0 0	43 249	3 23	46 272	284 2560	51 545	335 3105	878 8020
20 194	0 0	4 106	0 0	4 106	849 8263	25 308	874 8571	291 3525
0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	11 200	0 0	11 200	4 105
0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0
1 2	0 0	2 9	0 0	2 9	0 0	0 0	0 0	0 0
107 829 93.5%	0 0 0.0%	53 378 68.7%	3 23 100.0%	56 401 70.0%	1222 11643 87.8%	127 1483 64.5%	1349 13126 84.4%	1289 12417 77.1%
1	0	1	0	1	0	2	2	6
0	0	0	0	0	1	0	1	1
0	0	0	0	0	1	0	1	0
0	0	0	0	0	0	0	0	1
0	0	0	0	0	0	1	1	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0
1 100.0%	0 0.0%	1 33.3%	0 0.0%	1 16.7%	2 40.0%	3 50.0%	5 45.5%	8 30.8%
0	1	1	2	4	1	3	4	10
0	0	0	0	0	2	0	2	3
0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	1	0	1	0	0	0	5
0 0.0%	1 100.0%	2 66.7%	2 100.0%	5 83.3%	3 60.0%	3 50.0%	6 54.5%	18 69.2%
					鉄鏃1	鉄釘1・砥石1		砥石3

報告書抄録

ふりがな	さくらしろくじゅうぶいせき
書名	佐倉市六拾部遺跡
副書名	佐倉第三工業団地造成に伴う発掘調査報告書
巻次	11
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第267集
編著者名	金丸誠　四柳隆
編集機関	財団法人　千葉県文化財センター
所在地	〒284　千葉県四街道市鹿渡809－2　Tel043－422－8811
発行年月日	西暦　1994年10月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
六拾部（ろくじゅうぶ）	千葉県佐倉市（ちばけんさくらし） 大作（おおさく）	12212	022	35度 40分 39秒	140度 14分 46秒	19841001～ 19850331	10,700	佐倉第三工業団地建設に伴う事前調査

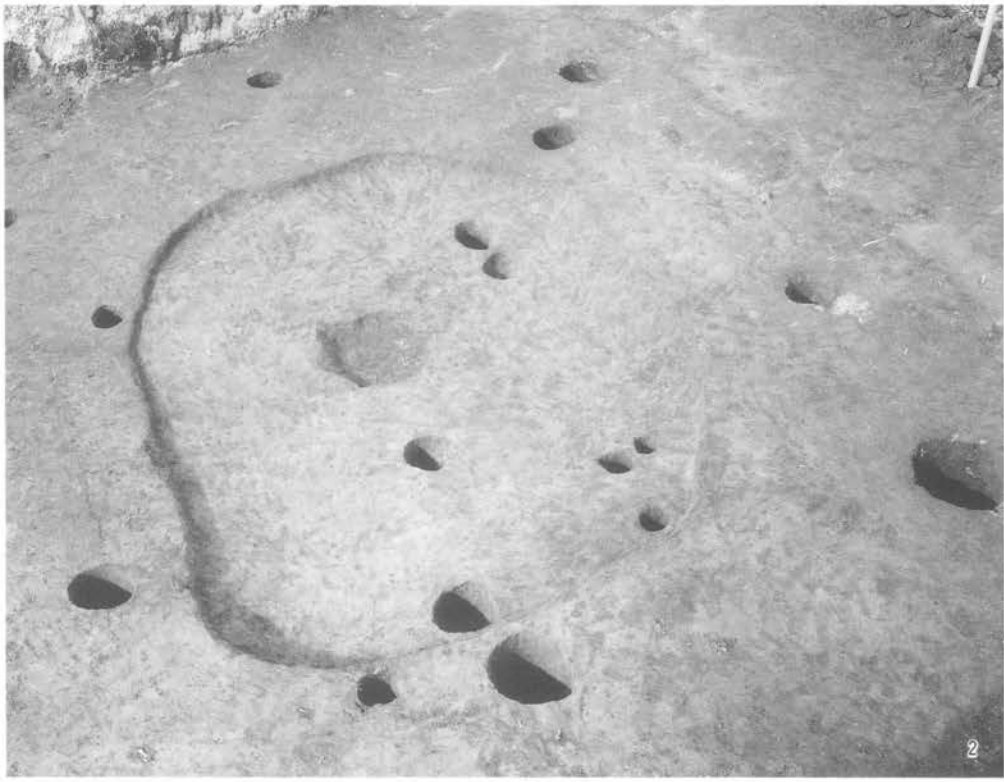
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
六拾部	集落	縄文	竪穴住居跡　1 土坑　1	土器（撚糸系・加曽利B）	「白井寺」と墨書された土師器杯や須恵質と土師質の瓦塔が出土し、奈良時代から平安時代にわたる集落と、そこでの仏教のかかわり方の変遷をみることができる。
		奈良・平安	竪穴住居跡　54 掘立柱建物跡　11 土坑　3 土器集中地点　2	土師器　須恵器　鉄製品 瓦塔	
		時期不明	土坑　4 土坑群　1		

写 真 図 版

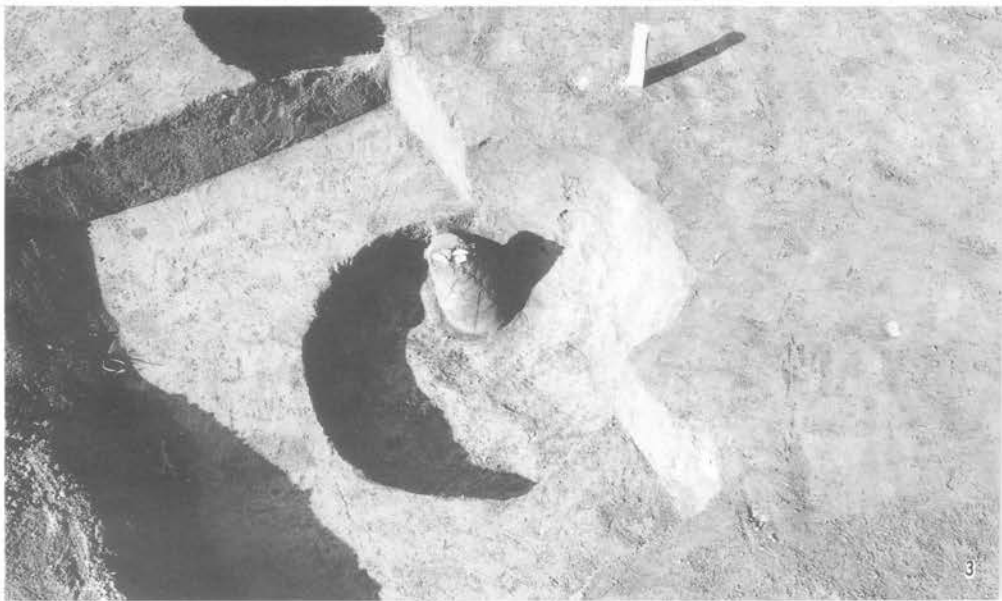
六拾部遺跡周辺の航空写真

六拾部遺跡航空写真（南西から）

遺跡遠景（南から）



竪穴住居跡033



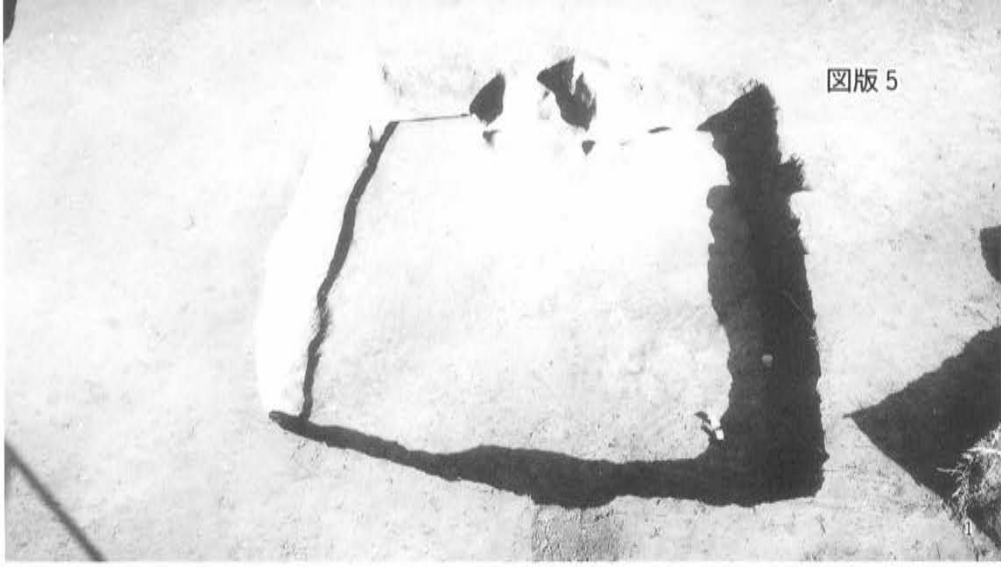
土坑044

竪穴住居跡002

竪穴住居跡003

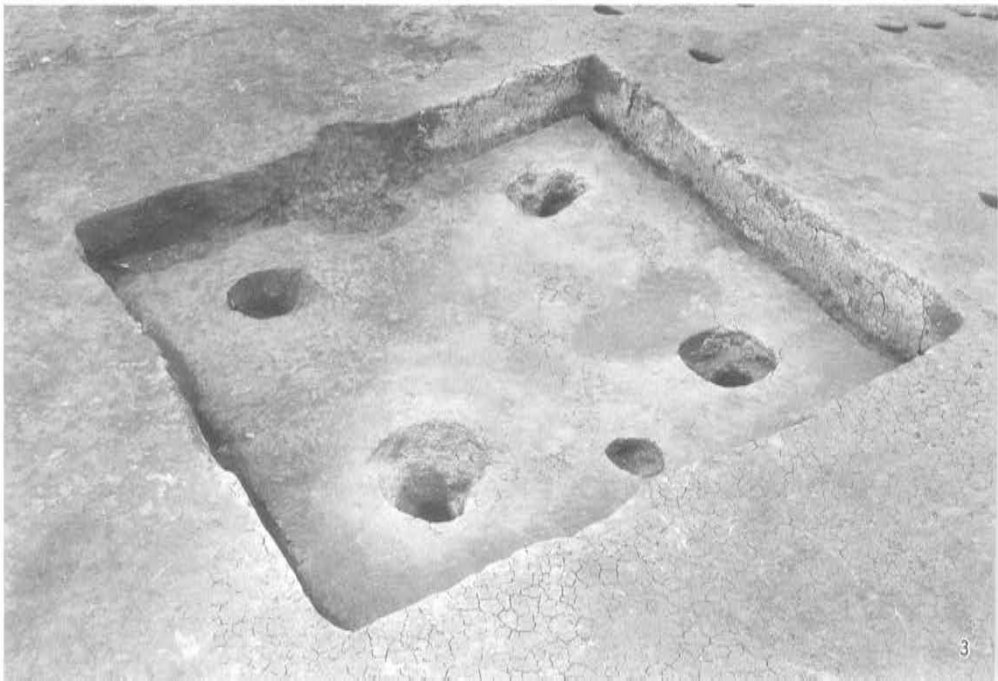
竪穴住居跡004

図版 5



竪穴住居跡005

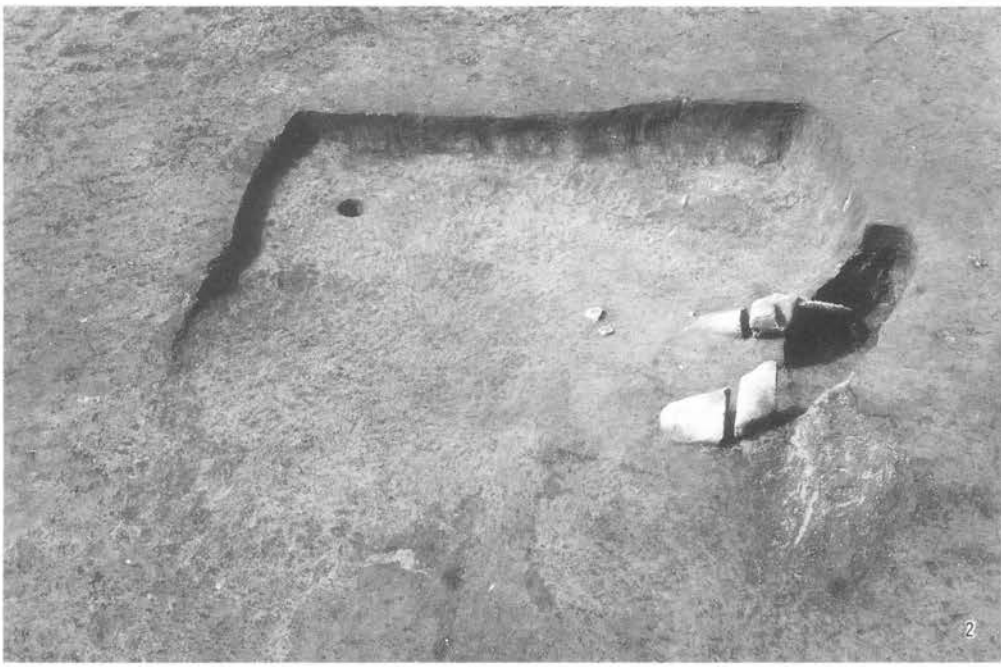
竪穴住居跡006



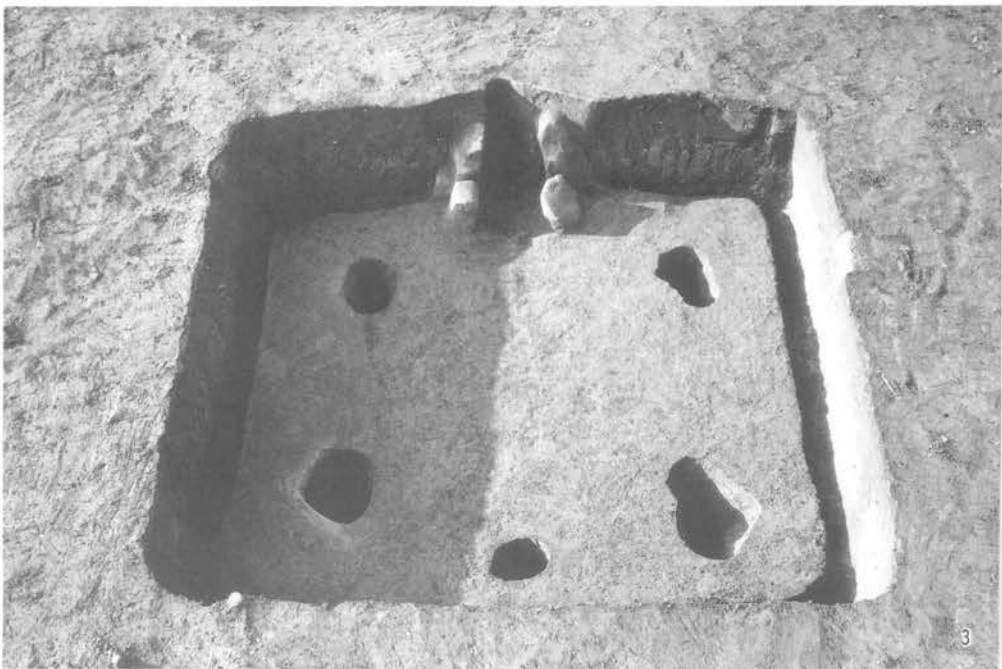
竪穴住居跡007

図版6

竪穴住居跡008



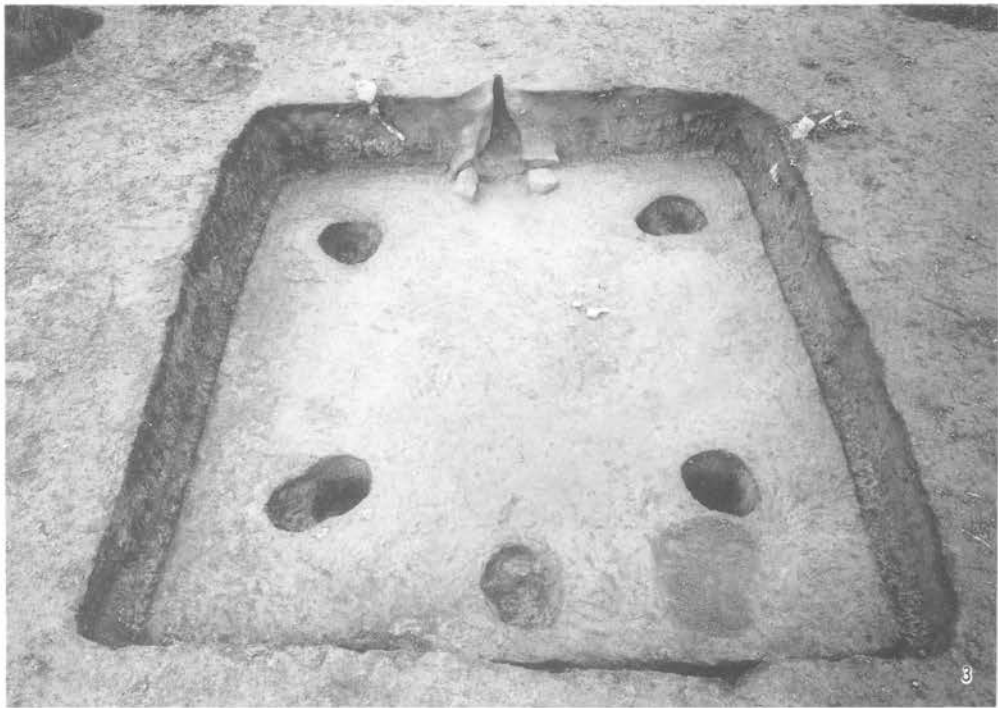
竪穴住居跡009



竪穴住居跡010

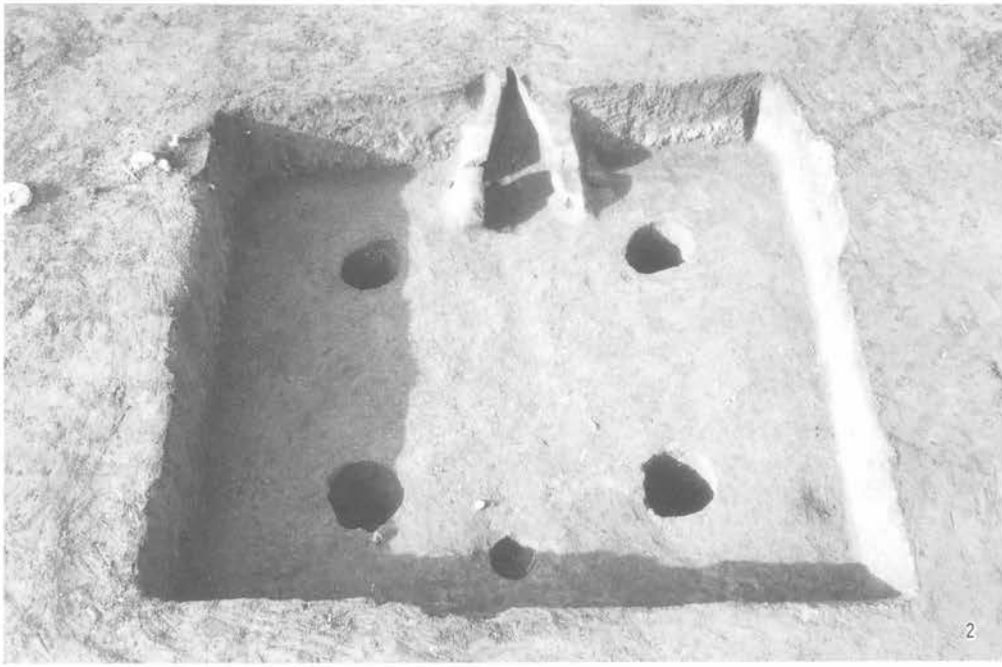
竪穴住居跡011

竪穴住居跡012

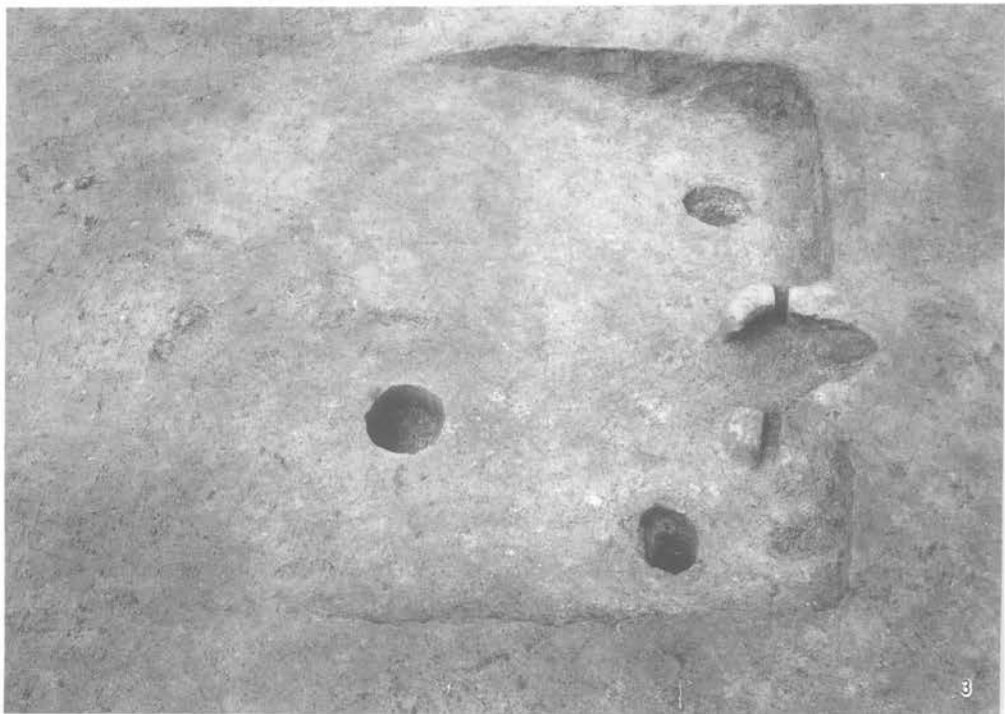


竪穴住居跡013

竪穴住居跡014

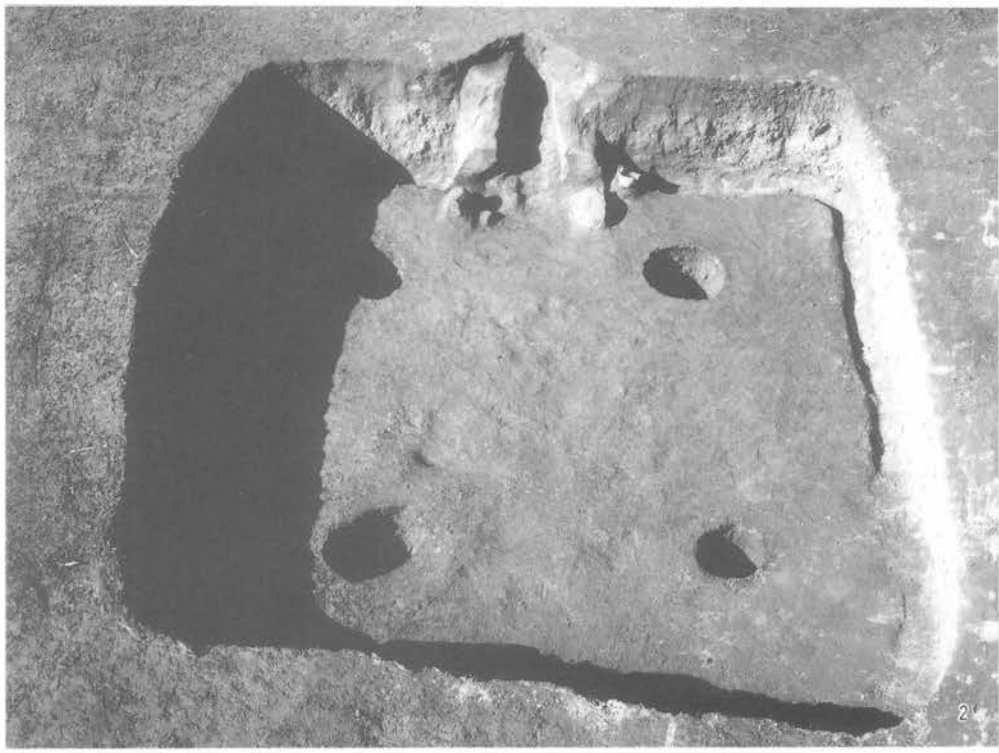


竪穴住居跡015

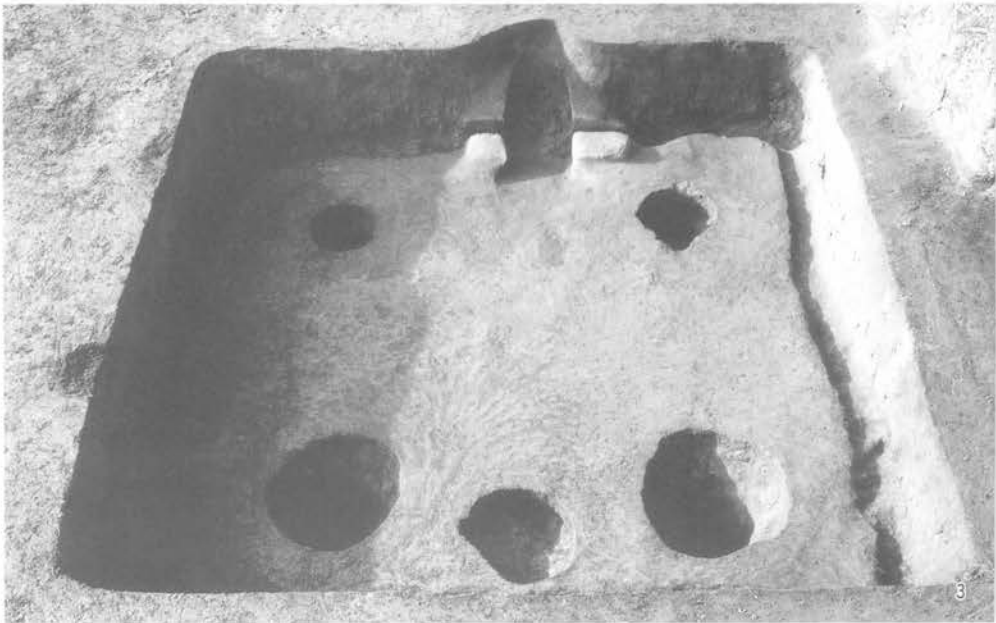


竪穴住居跡016

竪穴住居跡017



竪穴住居跡018



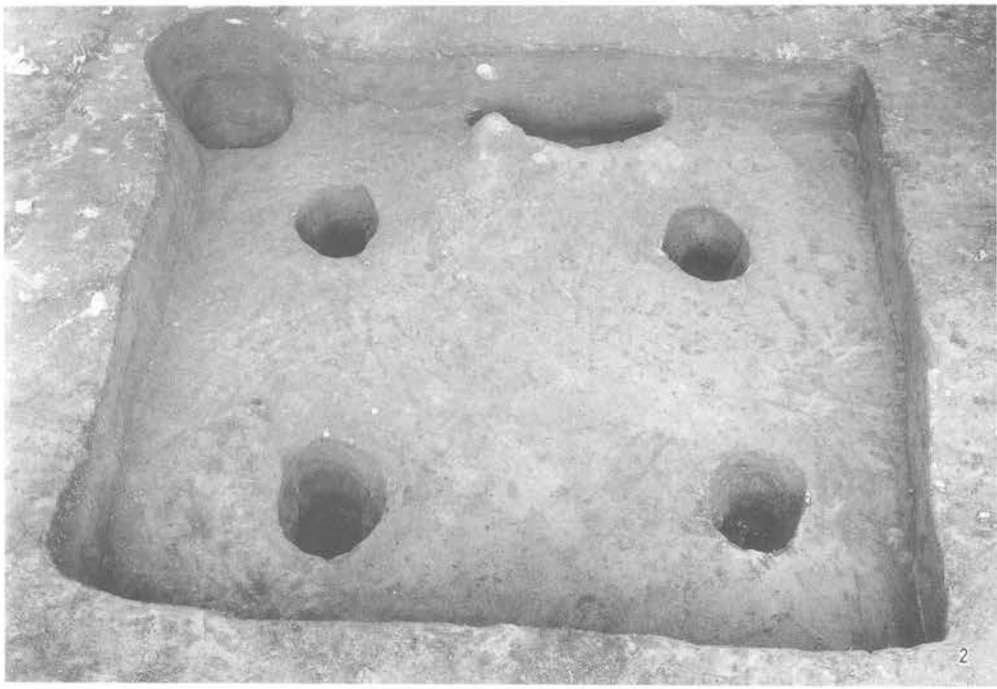
竪穴住居跡019

竪穴住居跡020

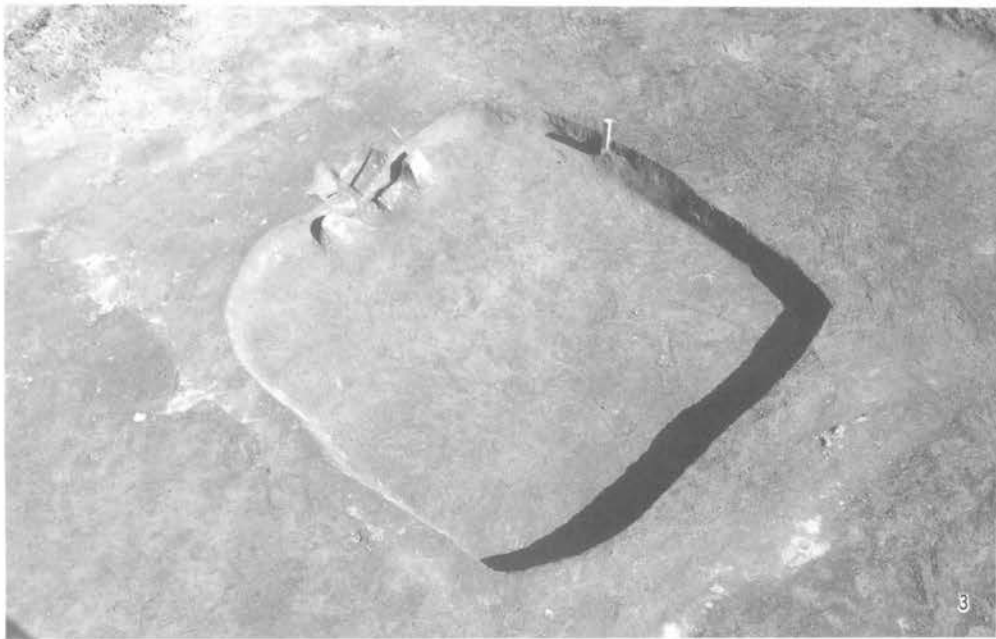
竪穴住居跡021

竪穴住居跡022

竪穴住居跡023

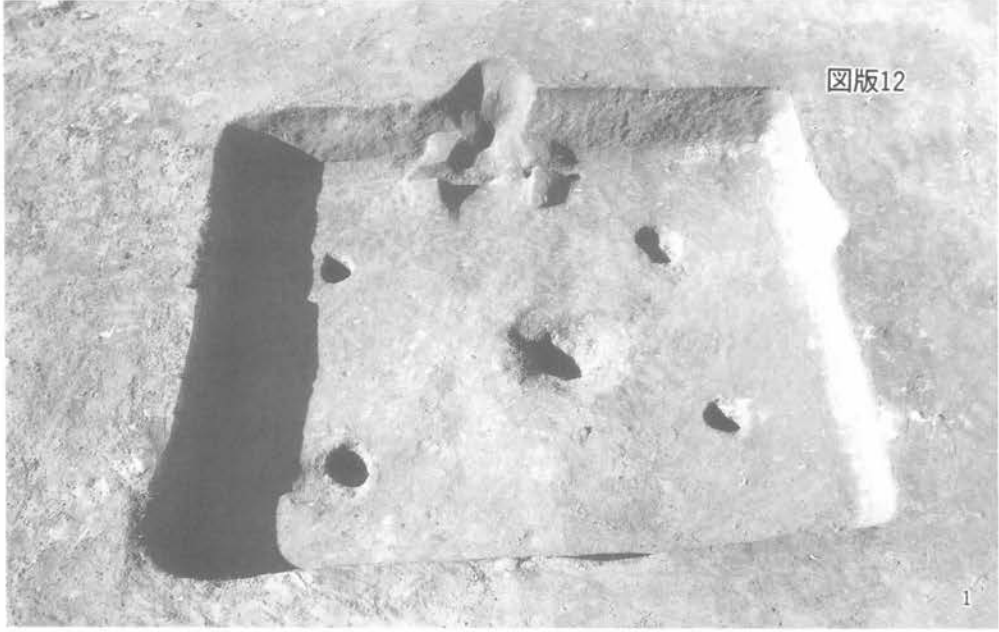


竪穴住居跡024

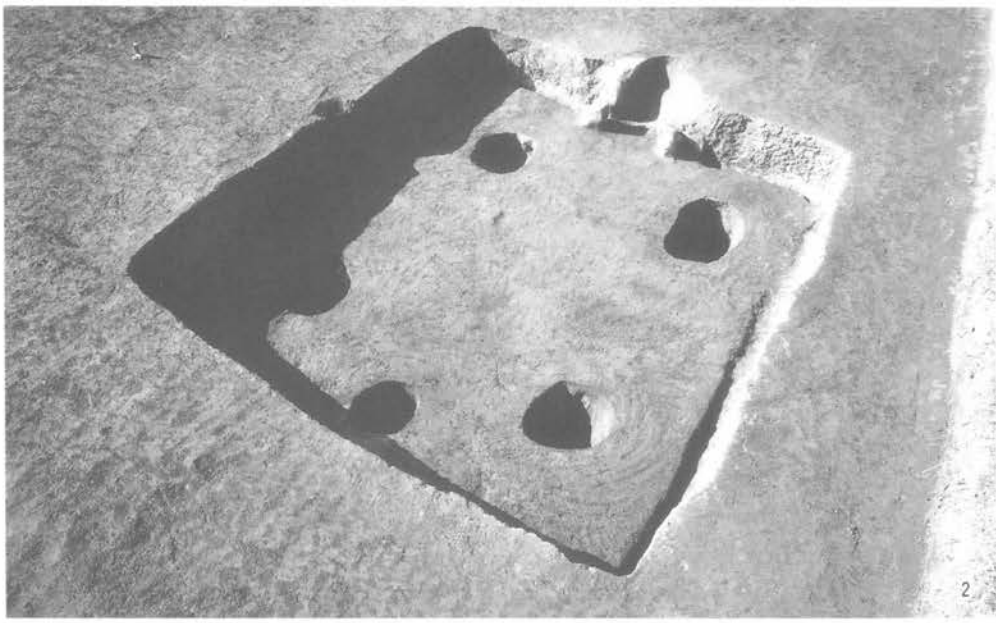


竪穴住居跡025

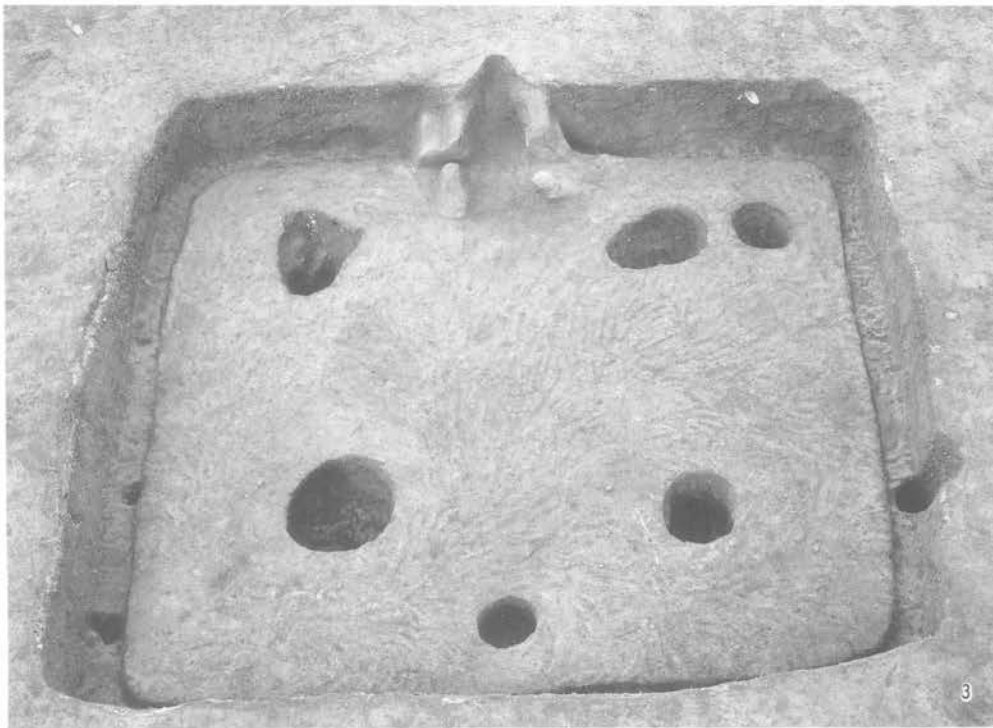
図版12



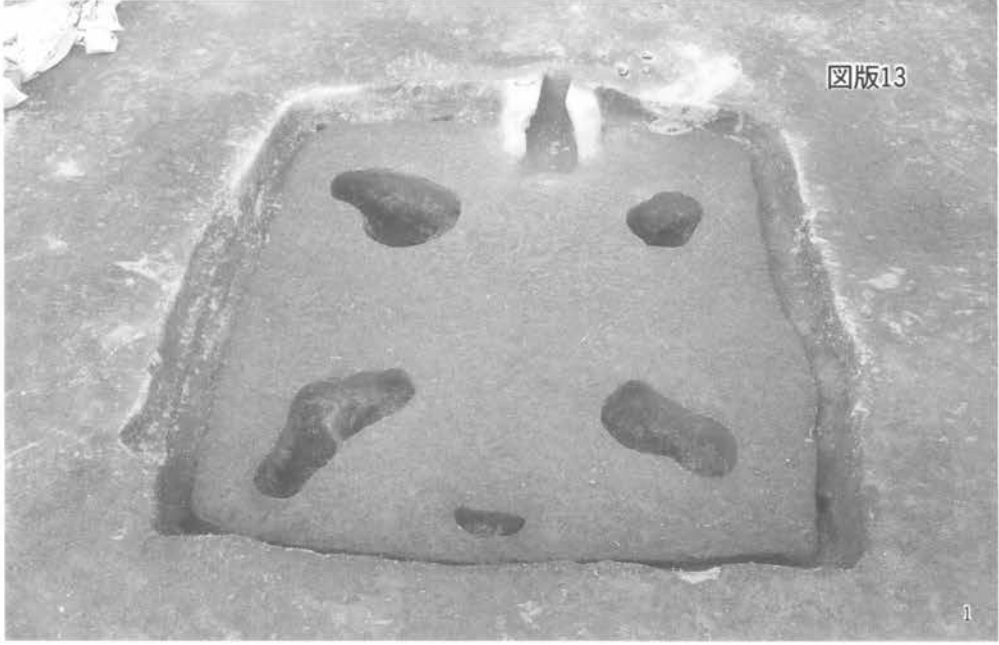
竪穴住居跡026



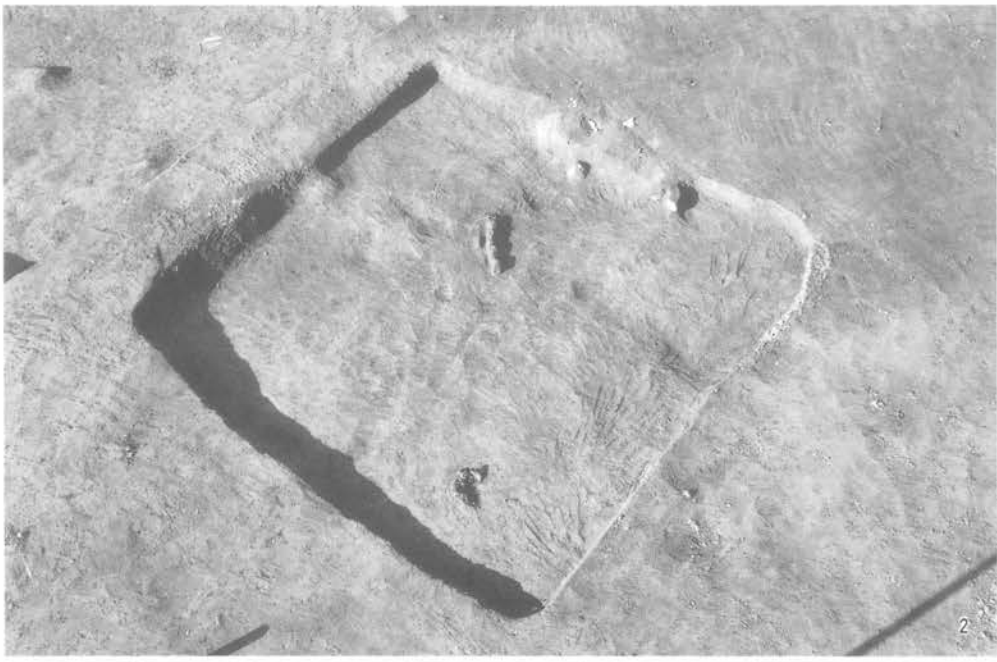
竪穴住居跡027



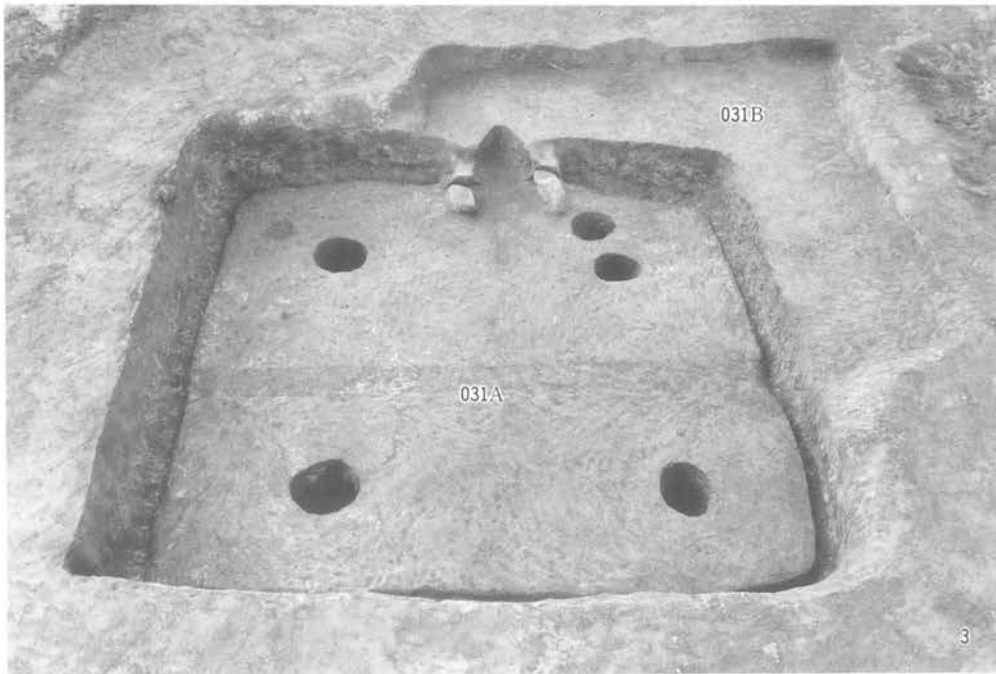
竪穴住居跡028



竪穴住居跡029

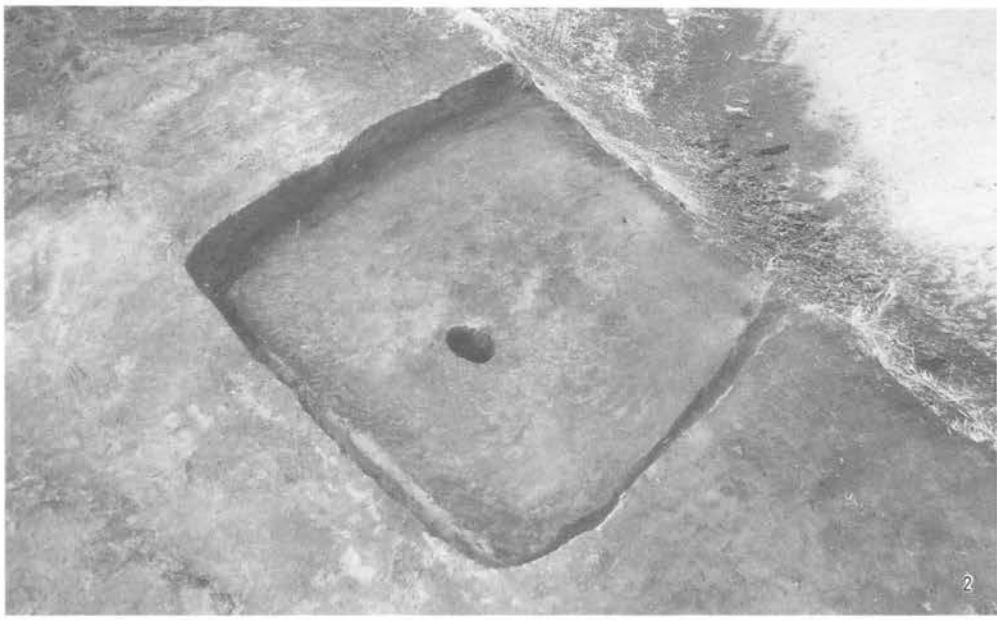


竪穴住居跡030



竪穴住居跡031A・B

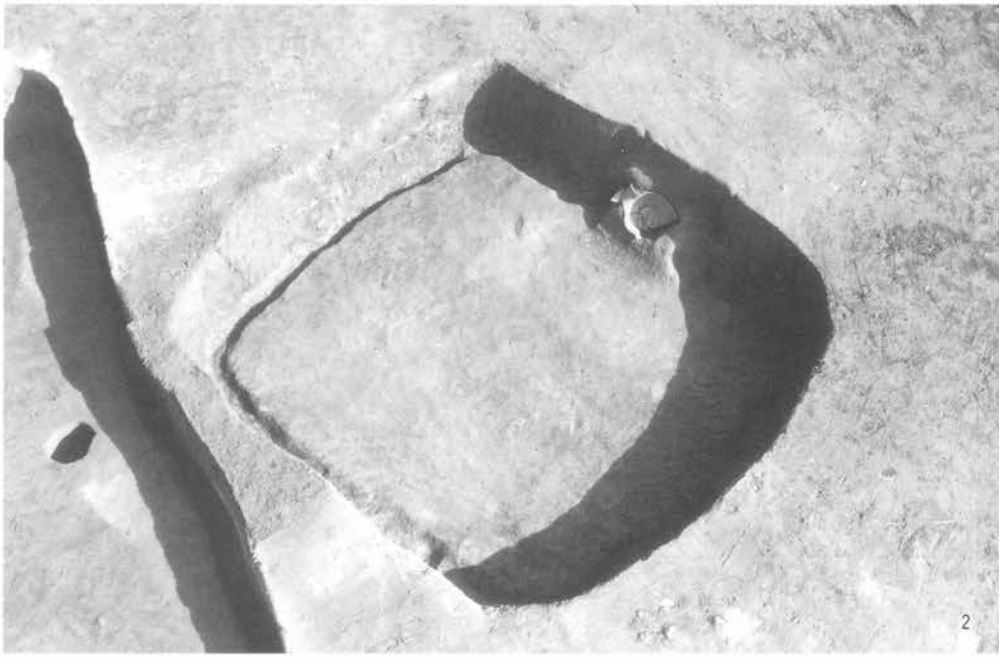
竪穴住居跡031B遺物出土状況



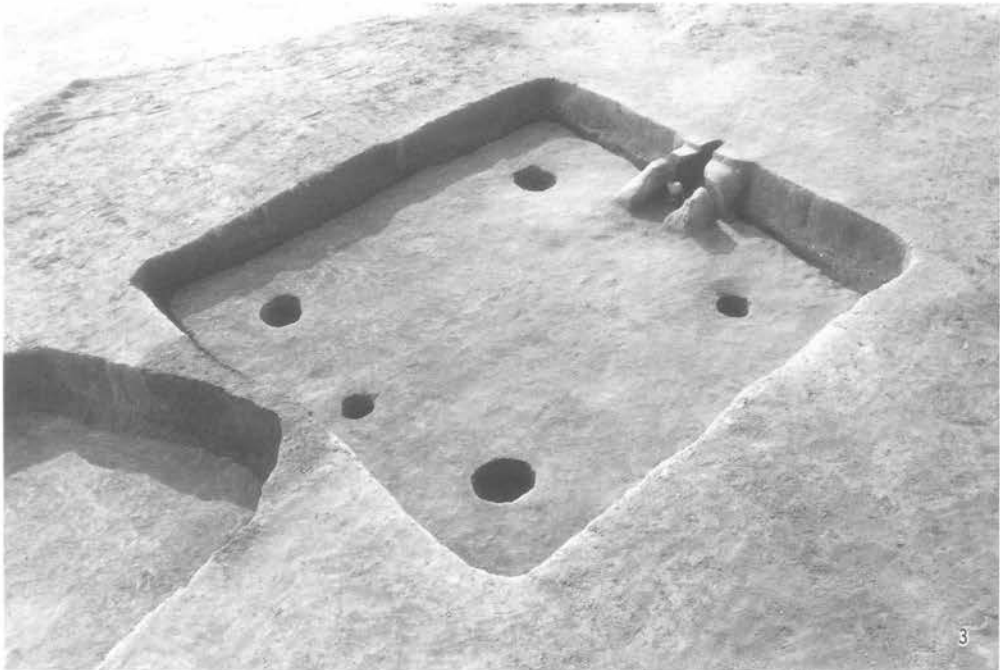
竪穴住居跡032

竪穴住居跡036

竪穴住居跡037

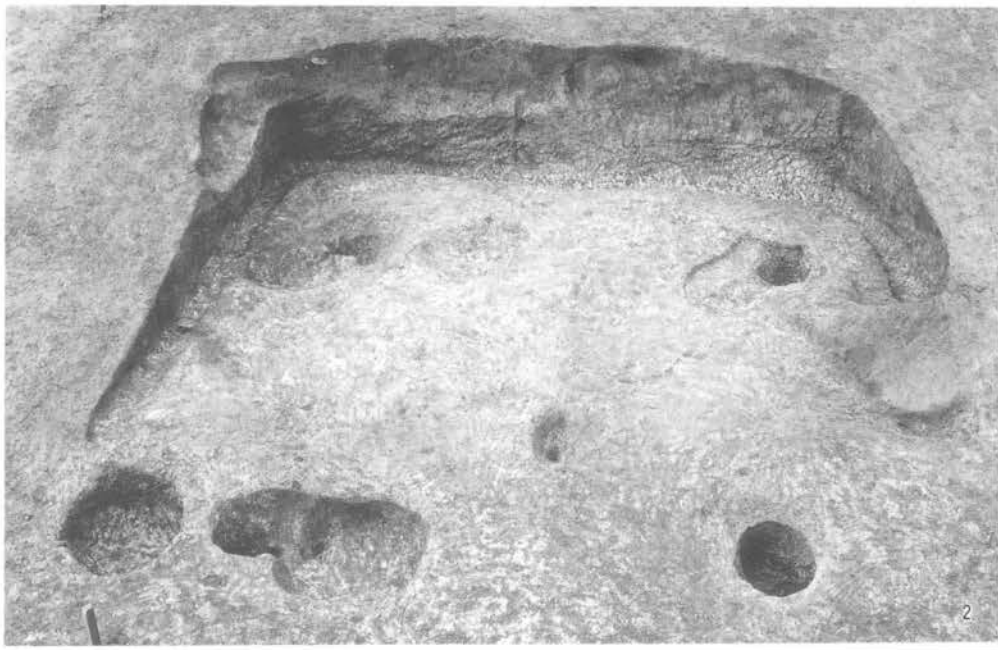


竪穴住居跡038



竪穴住居跡039

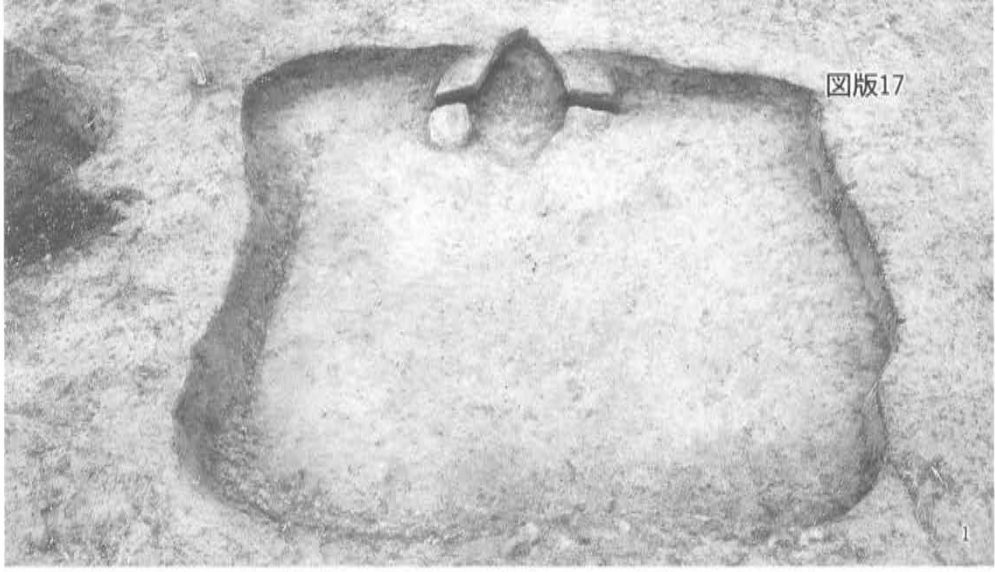
竪穴住居跡040



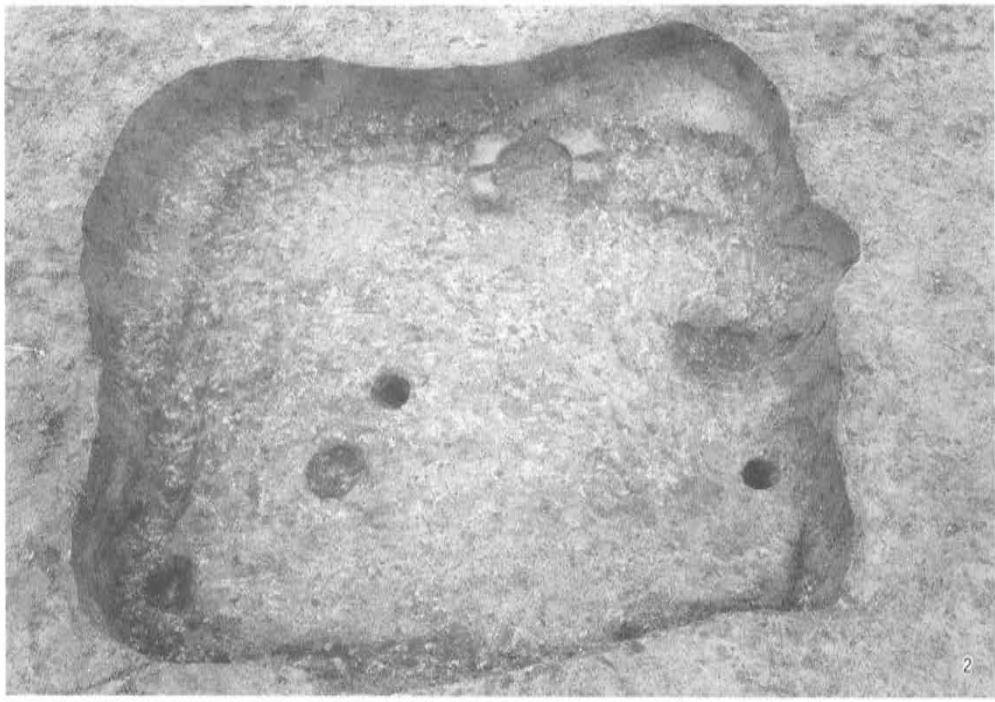
竪穴住居跡041

竪穴住居跡045

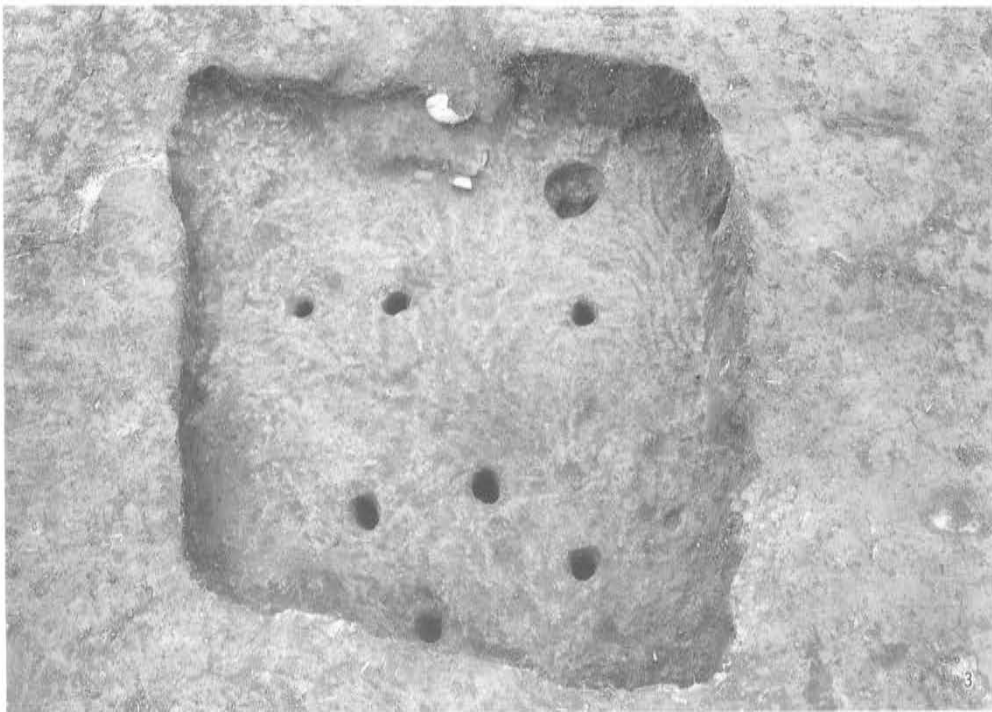
図版17



竪穴住居跡048A

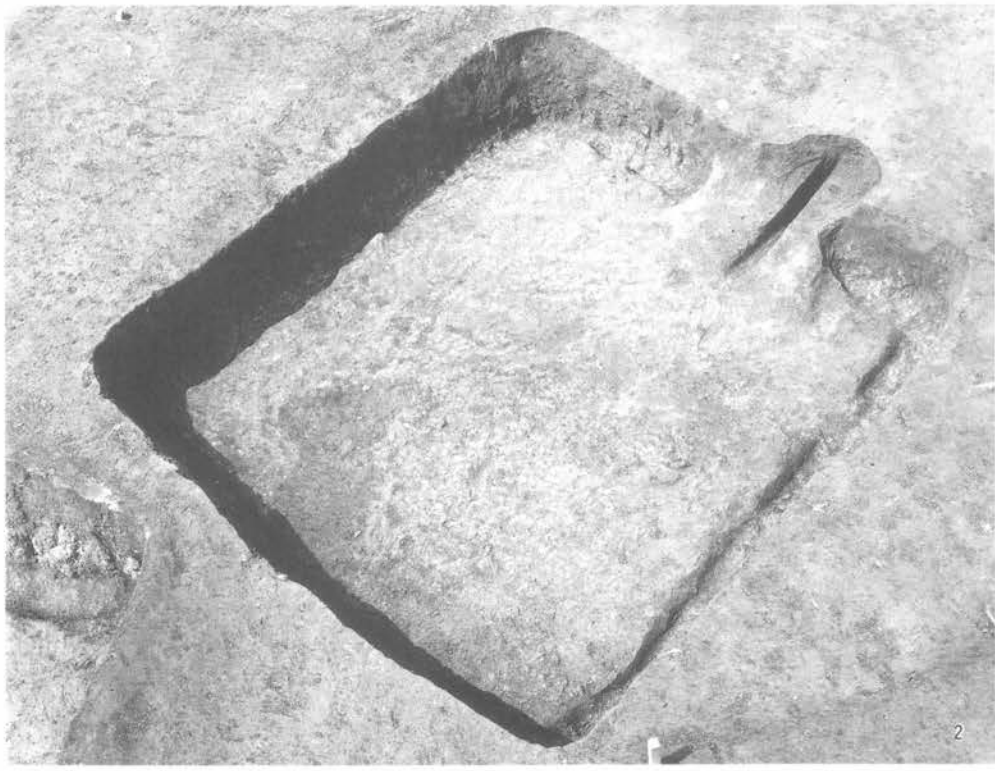


竪穴住居跡048B

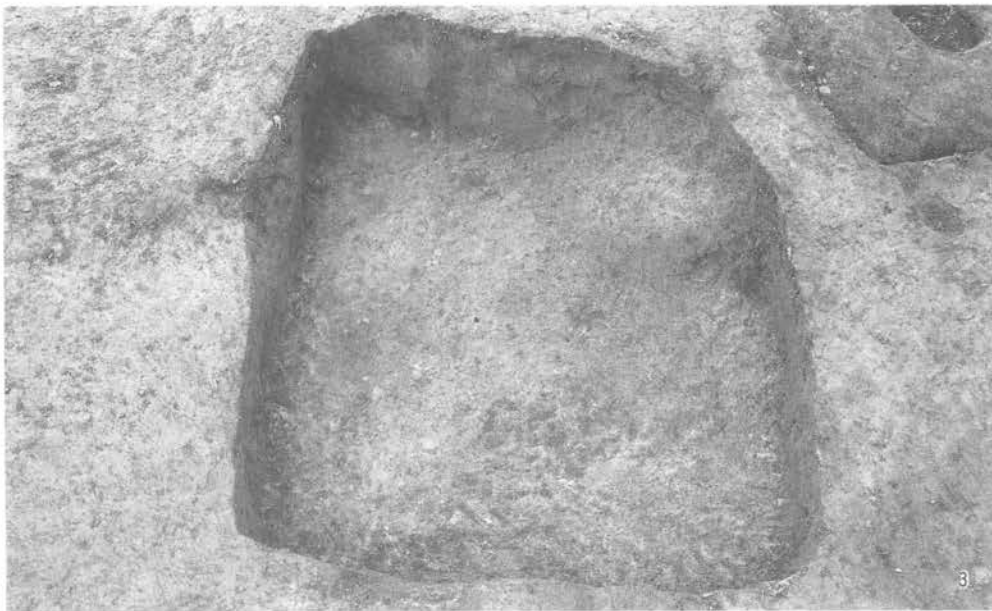


竪穴住居跡049

竪穴住居跡057



竪穴住居跡062



竪穴住居跡064

図版19

竪穴住居跡065

竪穴住居跡069

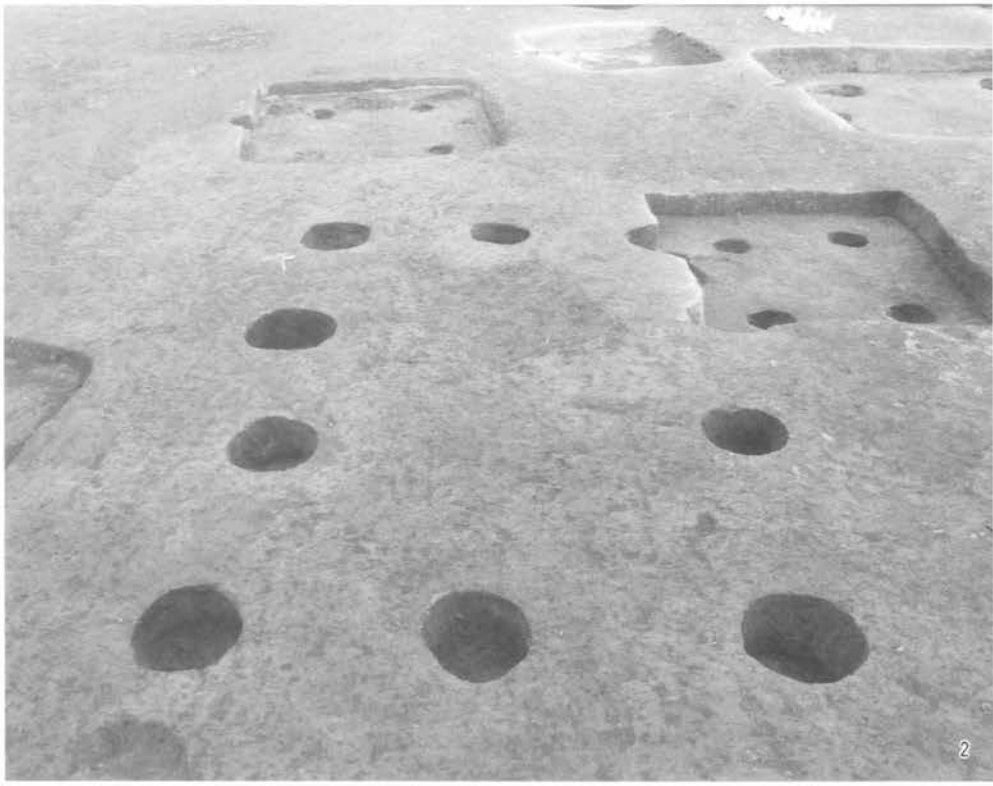
竪穴住居跡070・072

竪穴住居跡071

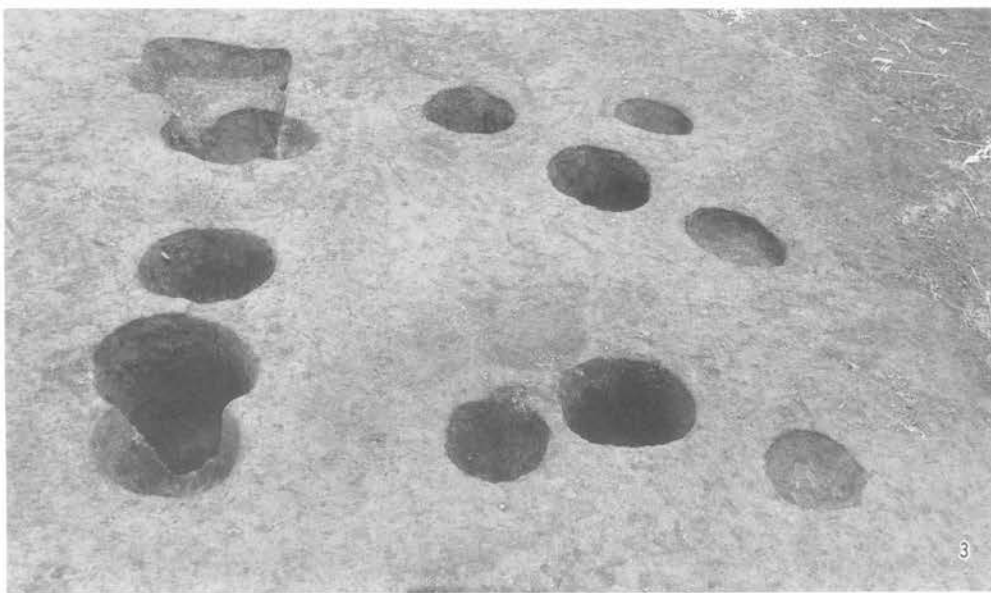
竪穴住居跡073

竪穴住居跡099A・B

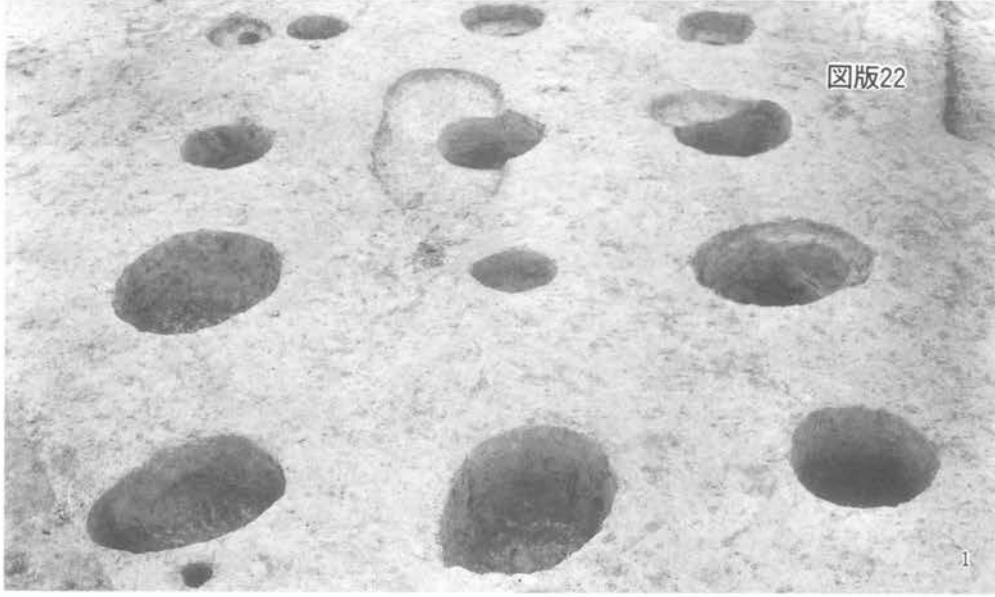
掘立柱建物跡042



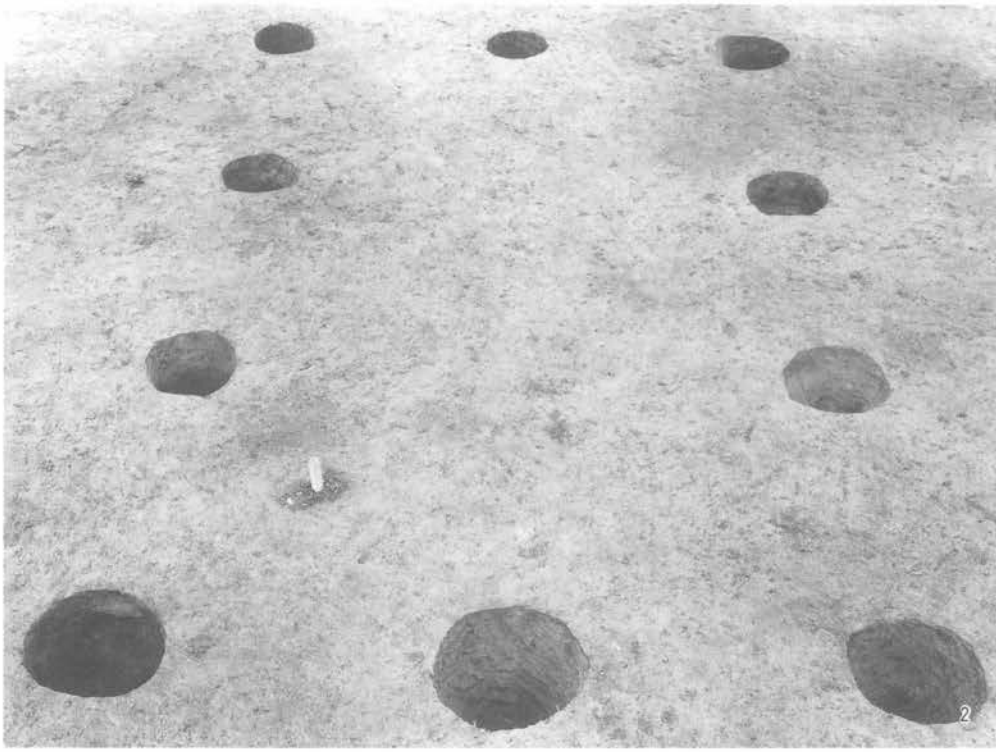
掘立柱建物跡043



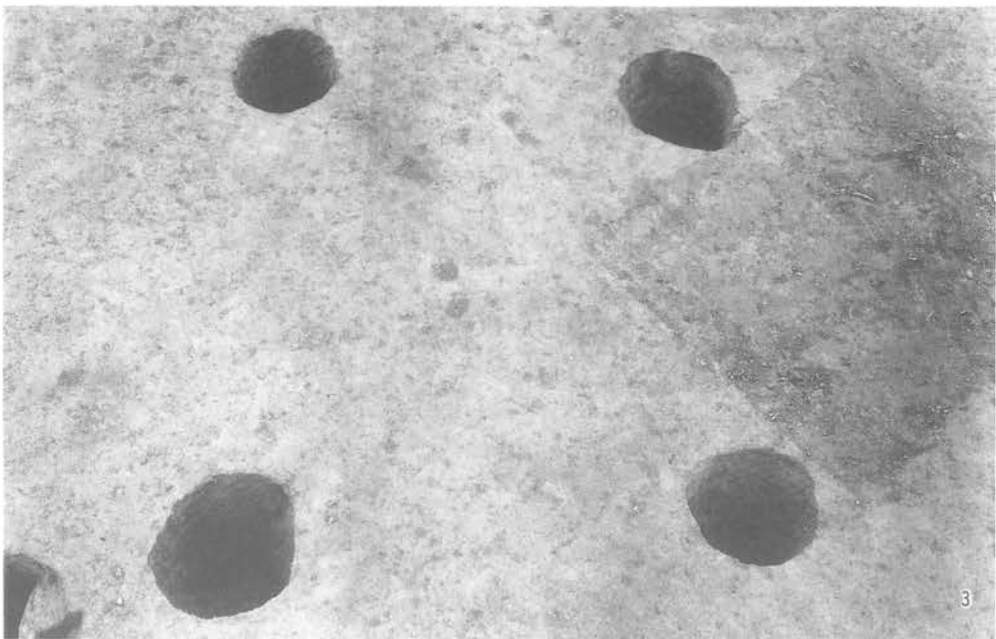
掘立柱建物跡050A・B



掘立柱建物跡051

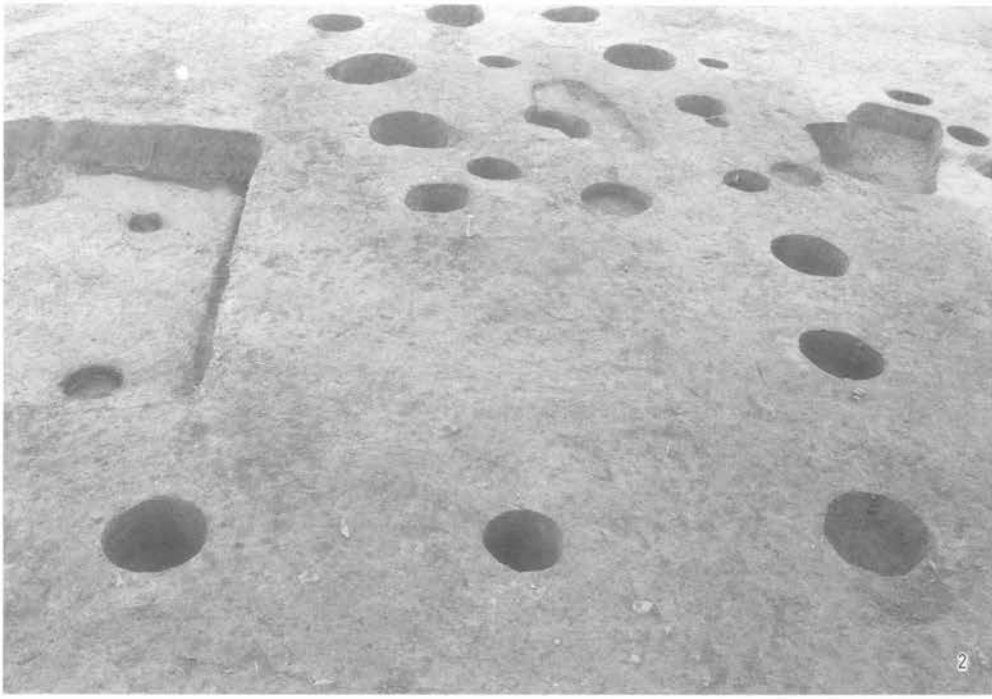


掘立柱建物跡052



掘立柱建物跡054

掘立柱建物跡056



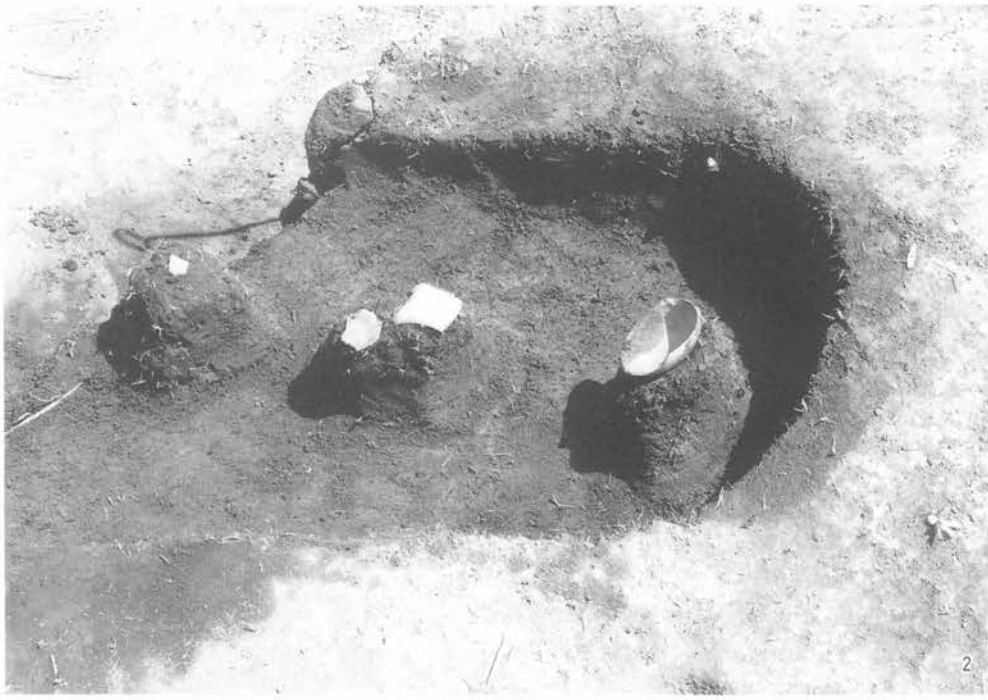
掘立柱建物跡060

掘立柱建物跡061

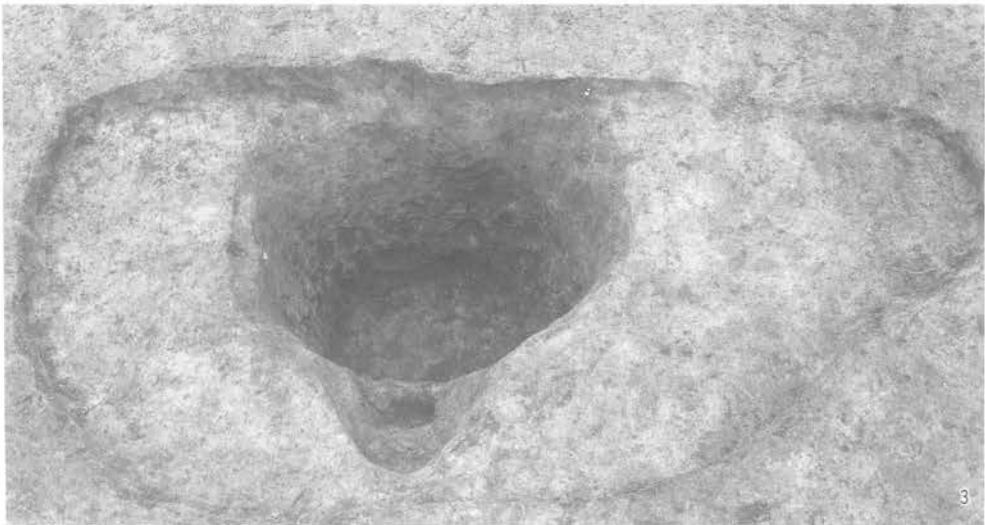
掘立柱建物跡068

土坑067

土坑067遺物出土状況



土坑074



土坑066

1．竪穴住居跡015出土遺物集合

2．竪穴住居跡019出土遺物集合

1．竪穴住居跡013出土遺物集合

2．竪穴住居跡027出土遺物集合

3．竪穴住居跡039出土遺物集合

4．竪穴住居跡031B出土遺物集合

1．竪穴住居跡032出土遺物集合

2．竪穴住居跡041出土遺物集合

3．竪穴住居跡048出土遺物集合

4．竪穴住居跡049出土遺物集合

002-4

002-1

002-5

002-2

003-2

003-1

004-6

004-2

004-5

004-1

005-1

005-2

005-1

005-4

006-3

006-2

009-1

009-3

009-2

009-4

竪穴住居跡004・005・006・009出土遺物

010-3

010-2

010-8

010-5

010-6

011-3

011-2

竪穴住居跡010・011出土遺物

013-13

013-14

013-13

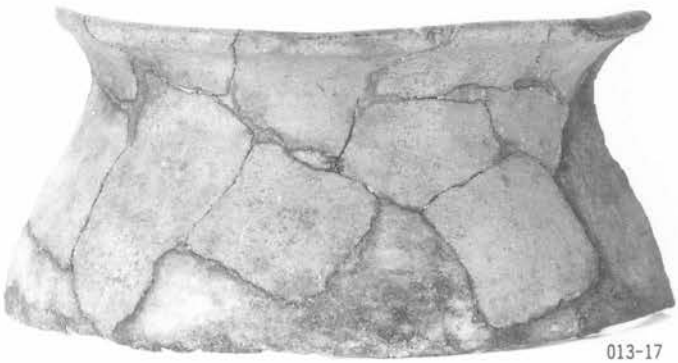
013-14

013-1

013-11

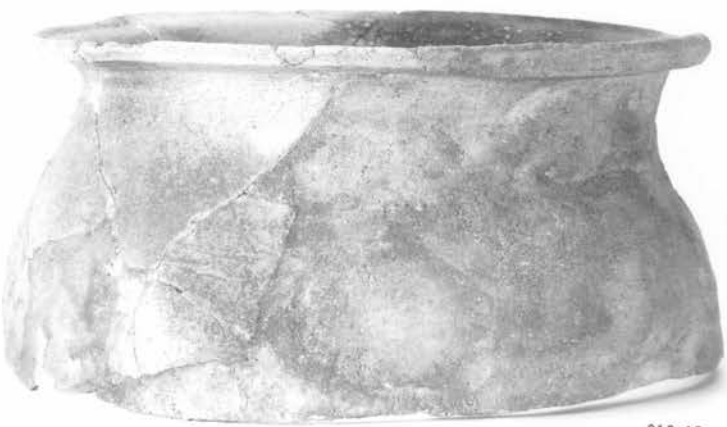
013-4

013-2


013-17

013-5

013-3


013-18

竪穴住居跡013出土遺物

014-1

014-2

014-3

014-6

014-7

015-4

015-1

015-4

015-2

015-7

015-3

015-11

015-14

015-12

016-1

017-2

017-1

018-1

018-2

018-4

018-5

019-7

019-2

019-1

019-3

019-11

019-5

019-4

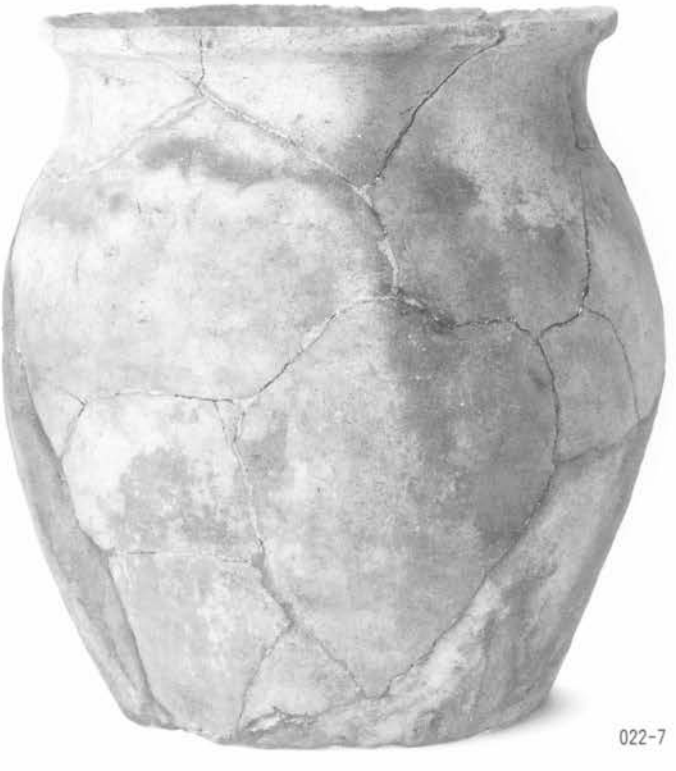
019-8

019-12

020-1

022-2

022-5



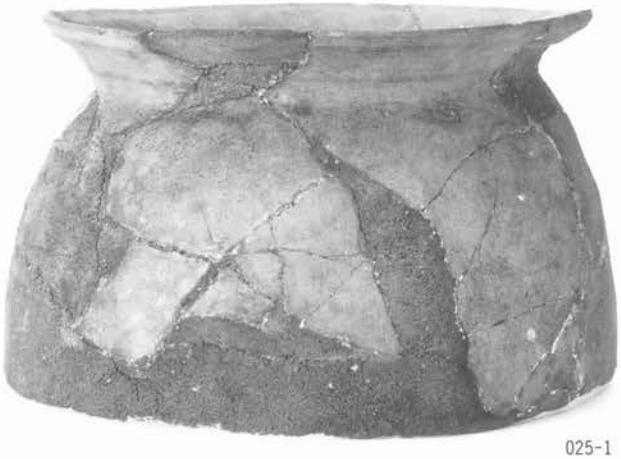
022-7

竪穴住居跡019・020・022出土遺物

023-3

024-1

024-1



025-1

026-2

026-5

026-6

026-4

027-1

027-3

027-4

027-10

027-2

027-6

027-6

027-5

029-3

027-7

029-4

028-1

029-5

028-2

029-6

030-2

030-3

030-1

030-4

竪穴住居跡027・028・029・030出土遺物

031A-2

031A-3

031B-50

031B-57

031B-47

031B-57

031B-53

031B-48

031B-51

031-B56

031B-52

031B-44

031B-56

031B-43

031B-45

031B-3

031B-2

031B-1

031B-11

031B-7

031B-12

031B-22

031B-5

031B-13

031B-8

031B-31

031B-26

031B-30

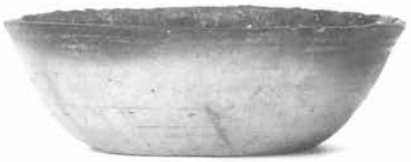
031B-28

031B-29

031B-27

竪穴住居跡031B出土遺物

031B-9


031B-6

031B-18

031B-15

031B-14

031B-4

031B-10

031B-17

031B-25

031B-16

031B-19

031B-23

031B-24

031B-35

031B-34

031B-33

竪穴住居跡031B出土遺物

031B-37

031B-32

031B-36

031B-58

031B-67

031B-60

031B-59

031B-61

031B-63

031B-64

竪穴住居跡031B出土遺物

032-6

032-7

032-1

032-9

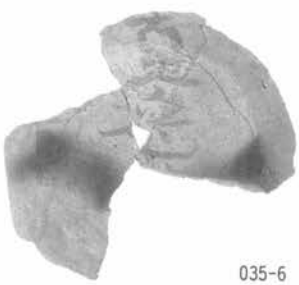
032-2

032-3

032-8

032-5

035-4


035-6

035-5

035-1

036-2

036-1

036-3

036-4

竪穴住居跡032・036・土器集中地点035出土遺物

037-1

037-2

037-3

037-1

038-12

038-6

038-12

038-3

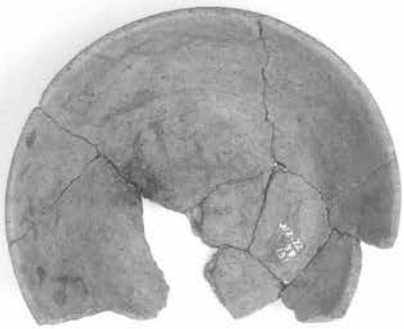
038-1

038-5

038-1

038-5

038-4


038-4

038-4

038-11

039-2

039-1

039-3

039-7

039-4

039-8

039-9

039-5

039-6

040-1

041-1

041-6

041-5

041-11

041-12

041-7

041-14

竪穴住居跡039・040・041出土遺物

048A-9

048A-10

048A-9

048A-10

048A-1

048A-3

048A-5

048A-7

048A-6

048A-12

048A-2

048A-13

048A-14

048A-15

048A-16

048A-17

049-3

049-4

049-3

049-4

049-2

049-5

049-1

049-6

049-8

049-9

053-1

062-1

049-10

049-12

064-1

064-1

竪穴住居跡049・062・064・土坑053出土遺物

064-2

064-5

064-6

064-3

064-7

064-4

065-2

065-1

067-2

070-2

070-5

070-4

070-1

070-8

竪穴住居跡065・070・土坑067出土遺物

071-1

074-1

074-1

073-3

099A-2

099A-1

遺構外-11

遺構外-12

遺構外-5

遺構外-11

遺構外-15

遺構外-14

遺構外-16

遺構外-17

遺構外-18

竪穴住居跡071・073・099A・土坑074・遺構外出土遺物

031B-77

031B-76

031B-75

031B-68

031B-71

031B-72

031B-74

031B-73

031B-70

031B-69

067-3

070-12

070-11

遺構外-24

遺構外-23

遺構外-25

遺構外-26

001-5

002-8

007-7

002-7

008-9

008-10

004-7

004-8

004-9

005-5

009-10

009-11

010-12

010-11

010-13

010-14

010-15

013-26

013-25

013-23

013-24

013-22

013-27

014-11

014-10

019-18

015-15

019-19

017-9

019-16

017-10

017-8

019-17

020-4

027-36

022-9

022-8

027-30

023-5

026-8

027-25

027-26

026-7

027-29

027-37

027-38

027-27

027-28

027-34

028-8

028-9

032-17

027-31

027-32

027-35

027-33

029-12

029-13

029-14

032-18

029-11

031A-5

031A-6

031A-7

032-19

032-16

032-15

037-4

037-5

039-11

036-6

035-8

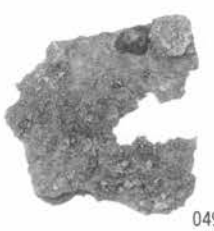
049-14

036-7

049-15

071-2

040-4


049-16

003-3

013-21

022-10

025-2

029-10

031A-4

032-14

040-3

010-9

010-10

011-5

020-3

027-24

035-7

039-10

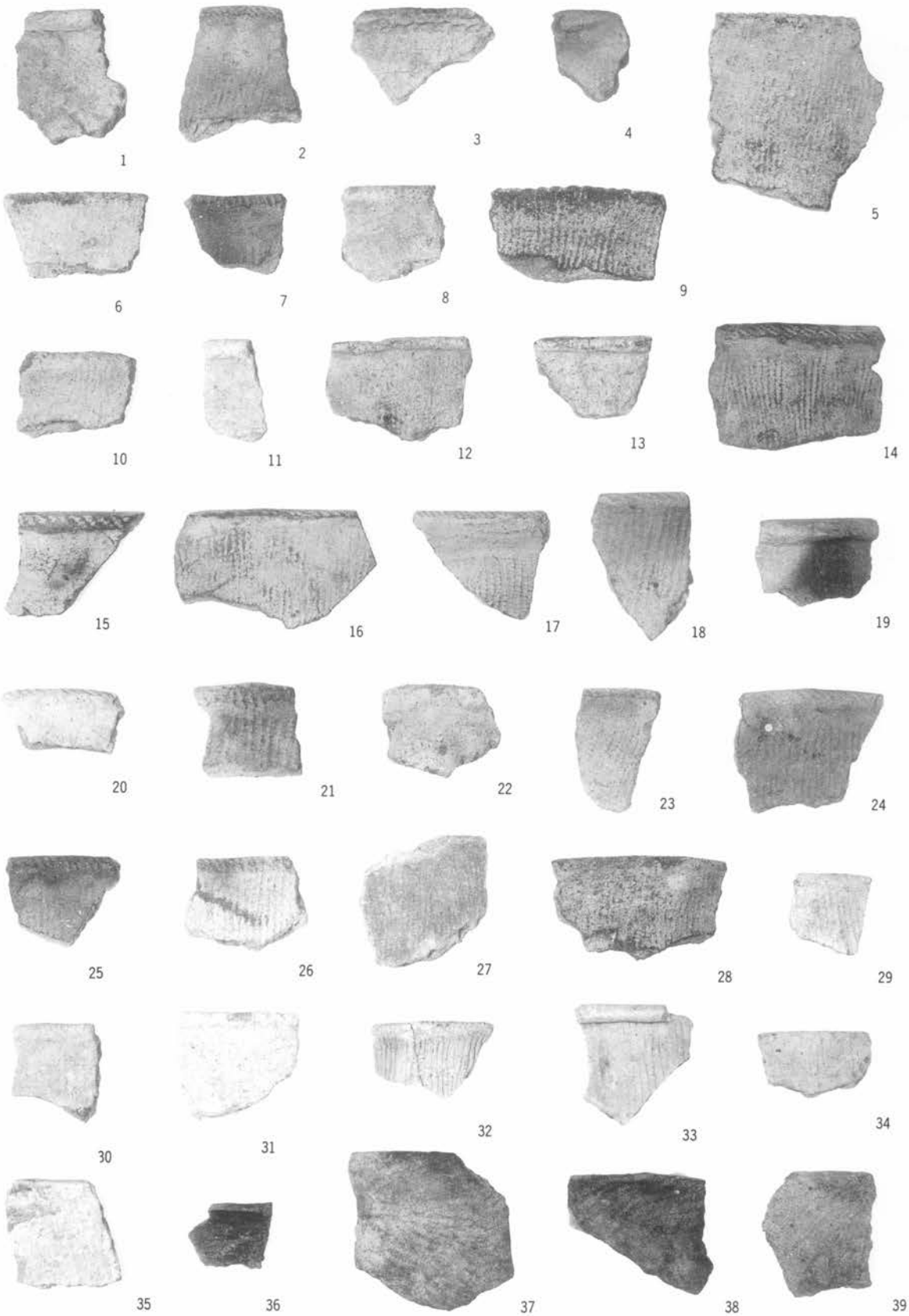
048A-18

062-2

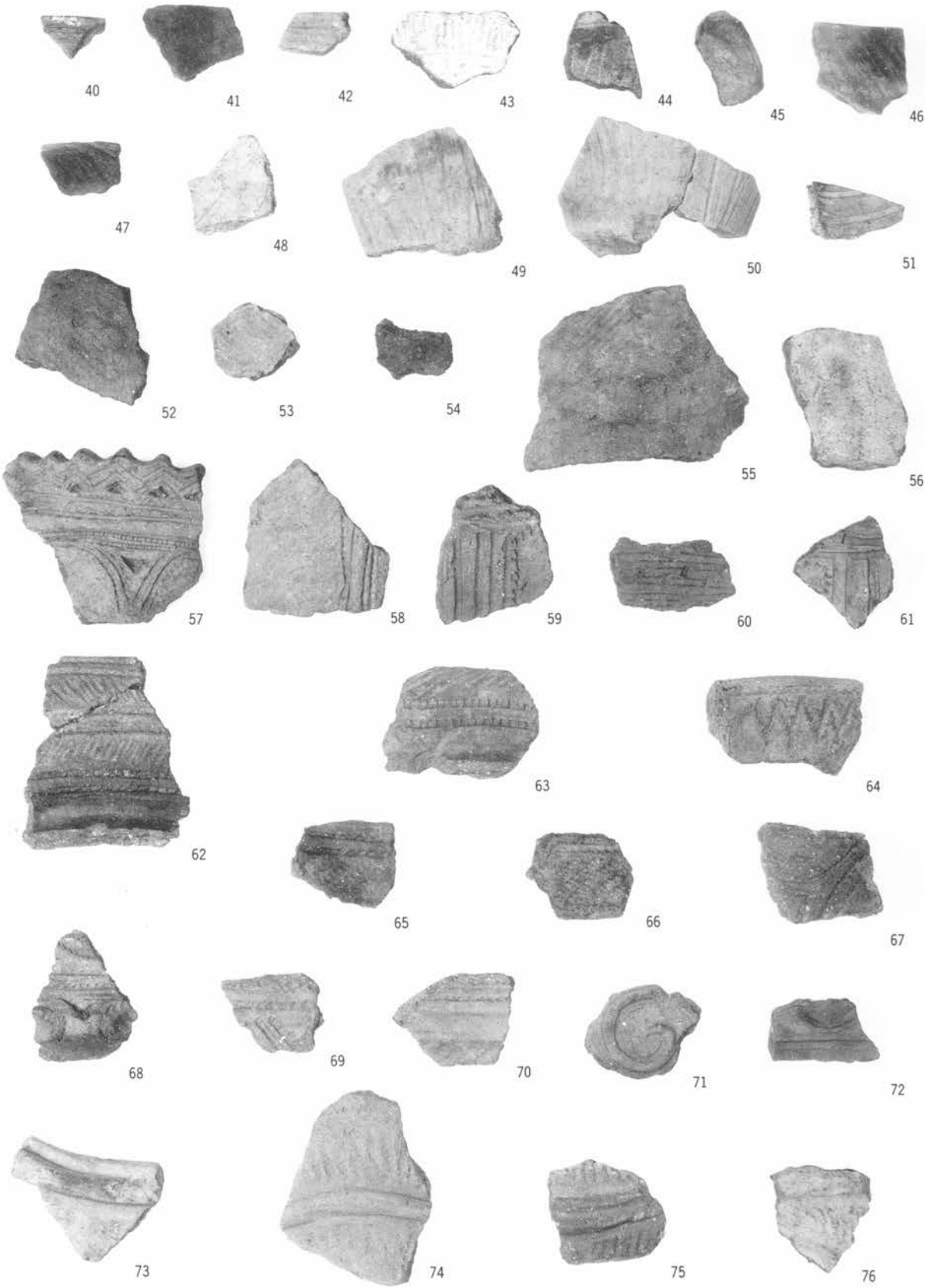
遺構外-27

遺構外-28

遺構外-29


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39

遺構外出土縄文土器(1)


40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76

77

78

79

80

81

82

83

84

85

86

87

88

89

90

91

92

93

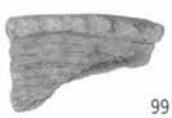
94

95

96

97

98


99

100

101

102

103

104

105

106

107

108

109

110

111

112

113

114

115

116

117

118

120

121

119

122

123

124

125

126

127

128

129

130

131

132

044-1

133

134

135

136

137

138

139

140

141

142

143

144

150

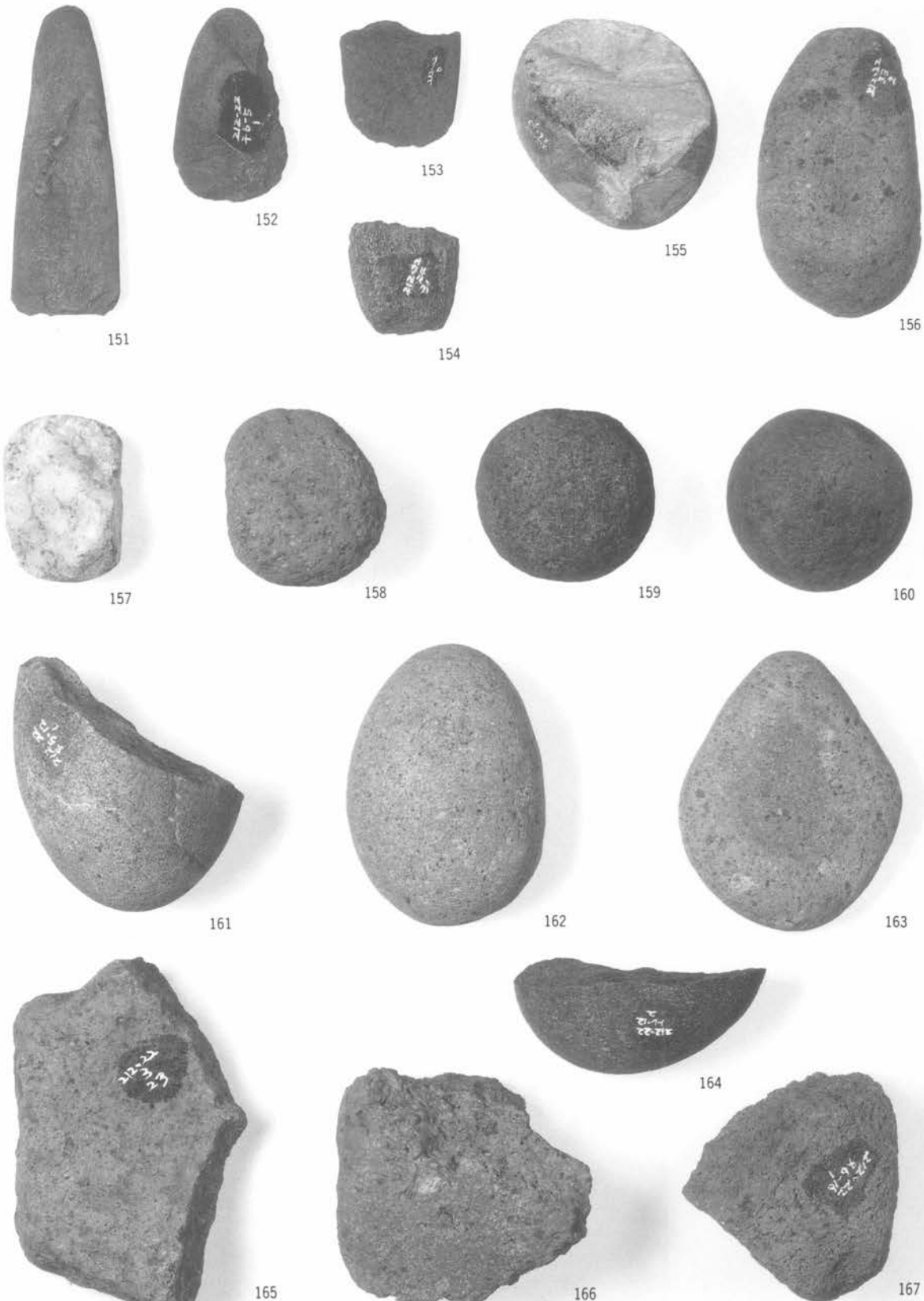
145

146

147

148

149


151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167

遺構外出土石器(2)

千葉県文化財センター調査報告第267集

佐倉市六拾部遺跡

ろくじゅうぶ

―― 佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XI ――

平成6年10月25日　印刷
平成6年10月31日　発行

発行　千葉県土地開発公社
千葉市中央区市場町7-9　☎043(222)9106

編集　財団法人　千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809－2　☎043(422)8811

印刷　株式会社　弘文社
市川市市川南2-7-2　☎0473(24)5977